
数奇な運命のポケモン達

TYPHLOSION

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

数奇な運命のポケモン達

【Nコード】

N5716J

【作者名】

TYPHLOSSION

【あらすじ】

平和と言われている時代に生を受けた数奇な運命を持ったポケモン達は何をするのか…

全ては自分達の知らないところで密接に関わり合ってバランスをとる。

ポケモン達は知らなかった。

世界が創造された後、バランスをとろうとして何が起こったのかを…

そして今は歴史上、大きな戦争や大虐殺等も無く、平和と言われている時代。

その時代に生を受けた数奇な運命を持ったポケモン達は何をするの
か…
それを書いていくつもりです。

第一話・教室にて（前書き）

グロデスクやR15とはどこまでのものかよく分からないので、多少出てくるかもしれないと申しません。

そんなの気にしないと云う方のみ読んでください。

第一話：教室にて

「ソニックブーム!!」

「おっと！剣の舞から電光石火!!」

ザングースはブイゼルのソニックブームをギリギリで避け、ブイゼルに向かっていく。

「やめなさい!!」

突然の大声に驚いたザングースはバランスを崩し、大声を出したポケモンの方へ転がって行った。

「…踏みつけ!」

大声を出したポケモンは、ザングースを全体重をかけた踏みつけで止めた。

「タ…タルミ先生…」

「ザングース君、ブイゼル君、バトルしてたわよね」

「全体重をかけた踏みつけをやめてくれ!重い!!」

ブチッ!…タルミ先生と呼ばれたミルトankはこれからの不幸を予感させる喜ばしくない音を立てた。

「…ザングース君…否、化け猫お!覚悟はいいわよねえ!」

「先生はもう40歳を過ぎた(アラフォー)」なんですからもっと大人とし…あ」

「イタチコンビ!!言い残すことは?」

「口が滑った…お父さん、お母さん、若くして死んでしまう僕を許してください…」

「俺は「化け猫には発言権なし!」

「ひでえ!」

「化け猫からね…ギガインパクトお!のしかかり!ギガインパクトお!のしかかり!ギガイン…」

ミルトankの攻撃を受けたザングースは床から7メートルもある天井に頭からめり込んでダランとしている。

「さて…ブイゼル君は…反省文500枚!」

「うああ…って…え?反省文?」

「化け猫退治したらスッキリしちゃったのよ」

ブイゼルとミルタンクが話していると意識を取り戻したらしいザングースが呟いた。

「温度差が激しすぎるだろ…鬼牛め…」

「化け猫。更なる罰がほしいようね…どんな罰にしようかしら」

「先生!こんなのはどうだ?」

声をあげたのはアリゲイツだ。

「まず、歓楽街等の風俗に売っぱらって使い物にならなくなるくらい使って」ゴン!

「いつてえ〜!」

何やら変な事を言い出したアリゲイツの後頭部に何者かのキックが炸裂した。

「誰だよ!俺の頭を…ア、アリゲイツ…」

「俺の姿で何言ってたためえは…このエロスライムが!」

キックを受けたアリゲイツがドロドロに溶け、あるポケモンが正体を現した。

「俺はエロスライムじゃねえ!メタモンだ!」

「エロスライムはエロスライムだ!未来永劫エロスライムだ!」

「だからエロスライムじゃ…」

メタモンとアリゲイツが言い争っていると、天井から抜け出そうともがいていたザングースを引き抜いたミルタンクが近づいてきた。

「アリゲイツ君続きは?」

「使い物にならなくなるくらい使って、その後…って何言わせようとしてんだあ!」

「…チツ」

そばで聞いていたサボネアが舌打ちをした。

「言ってたのは俺に変身したメタモンだろうが!」

キーンコーンカーンコーン…キーンコーンカーンコーン

「メタモン君はザングース君と校庭30周2セット!」

「え〜!!」

「増やそうか?」

「ごめんなさい!!」

(ハイパーボイスで...)【あのっ!!】

オタチの発したこの一声で教室が静まり返った。

「も...もうチャイムがな、鳴ったので...授業始まつ...てます!」

恥ずかしかつたのか舌をかみながら小声になっていく。

「あらら〜まあいいわ。みんな!授業始めるわよ。コラッタ!」

「規律、鬼を憑け、霊!」

「コラッタ君ふざけないで!」

「起立、気を付け、礼!着席!」

「それじゃあ、教科書254ページを開いて」

「誰かこの問題とける?」

ミルタンクは教科書とは関係ない問題を出していた。

「その問題どこから見つけてきた?」

ミルタンクに対する疑問を小声で言っているザングース。

「はい」

手を上げたのはサンダース。

「3以上の自然数 n について、 x の n 乗 + y の n 乗 =

z の n 乗 となる 0 でない自然数 (x, y, z) の

組み合わせがないことを証明せよ...この問題はこの公式で答えが
出ます。」

そう言いながら前に出てきて答えを書いていく。

「ちなみに、 $X4Y5Z6(XYZ)$ で X が4、 Y が5、 Z が6で
まずこの定理のほとんどを証明し、 $XYZ \equiv n15 \pmod{3}$ で自然数と
変数の関係を証明し、 $3 + 15 + xyz \pmod{18} \equiv \text{Possible}$
 $1e$ で可能であることを完璧に証明することができます。」

「正解!さすがサンダース君!みんなは解けた?ちなみにこの問題
受験にすら使うこと無いから」

生徒全員 『何で出題した〜!!』

「…気分」

気分でこんなことをよくやっているミルタンク。最近ダイエットに成功したのだとか。

キーンコーンカーンコーン…キーンコーンカーンコーン

「終わった〜!!」

「ザングース君終わってないわよ!まだ号令してないから。後で職員室に来なさい。コラツタ君!」

「起立、気を付け、礼!今までありがとうございました!」

生徒全員 『今までありがとうございました!』

「長かったようで短かったこの二年半…とうとうみんなともお別れなのね…」

「……」

「みんな…ありがとう!…明日の卒業式が最後の思い出よ!心に刻んで!しっかりと目に焼き付けておいて!!」

「それじゃまた明日!」

生徒全員 『また明日!』

放課後誰もいなくなった教室を掃除している二匹。アリゲイツとマグマラシだ。

何を隠そう、このマグマラシこそアリゲイツの親友だ。

そしてこの二匹がこの物語の主人公のはずである。

「ザングースってよくやるよな二年半の間ずっとあれだぜ」

「だな。…ザングースはタルミ先生と付き合ってるって噂はやっぱり嘘か」

「え、そんな噂あったのか？」

「アリゲイツしらなかったのか。ここ最近そういう噂があって、二年半の間たまに二人でどこかに消えてるらしい」

「なあ、その噂が本当かどうか確かめようぜ」

「どうやって？」

「尾行」

「ストーカーだよなそれ」

「気にしない！気にしない！よっしゃ掃除終わった〜！早速、GO
！」

そう言うのと同時にマグマラシをお姫様抱っこして、走っていった。「やめる！〜お〜ろ〜せ〜！〜！」

マグマラシは暴れたが、アリゲイツが放さず、職員室に着くまでそのままだったので、ポケモンとすれ違うたびにマグマラシの顔が真っ赤になって、口数も少なくなった。

すれ違ったポケモンの中にはマグマラシを と勘違いしてドキッとした者がいるのだとか。

「あのマグマラシ…か、かわいい。」

顔を赤く染めながら言う紫のドリルポケモン。マグマラシが だ という事に気付いていながらマグマラシに惚れてしまったようだ。

学校裏話

アリゲイツ「チャイムが鳴らされているけどあれは実はチリーンが全ての学校にいて、チャイムを担当してるらしいぜ」

マグマラシ「らしいってなんだよ」

アリゲイツ「実際見たわけじゃねえからよ…」

第一話・教室にて（後書き）

初投稿となります、TYPHLOSIONです。これはバクフーンの英名です。

始めて書くのでだめなところがありますが、よろしくお願いします。

第二話・噂を追って（前書き）

投稿はランダムになります。

一日も経ってなかったり、一ヶ月経っていたりといろいろなペースになります。

第二話：噂を追って

職員室に着いた二匹。メタモンはウィンディに変身し、神速を使ったよつでもう罰から開放され、マグマラシ達の横を通り過ぎて行った。

「…あ、ザングースは罰の真つ最中だった…」

「おろせ！」

「マグマラシ。わりい、忘れてた」

アリゲイツは抱き抱えていたマグマラシをおろし、職員室にタルミ先生がいるか確かめに行った。

「アリゲイツだけどタルミ先生は？」

「ん？タルミ先生は…いないよ」

のんびりとした口調で返事したニョロトノ。口調とは違い、テキパキと事務をこなしている。

「サンキュー！トノロ先生！」

「アリゲイツ、タルミ先生いたか？」

「いいや、職員室にはいねえぜ」

アリゲイツの言い方から何かを察したマグマラシ。

「探すのか…」

「…名答！」

そのとき、グラエナが四足歩行用のカメラをくわえてアリゲイツ達の横を通り過ぎて行った。

「あいつは…噂好きで有名な方のグラエナだよな」

「何かあるよな…カメラ持ってたしな」

「アリゲイツもそう思うか？」

「尾行するぞ！早速、GO！」

アリゲイツはまたマグマラシを抱えようとしたが、マグマラシに避けられてしまったので鼻から壁にぶつかってしまった。

「痛い！避けんな！」

そう言つて、赤くなつた鼻をさすっている。

「お姫様抱つこなんかされてたまるか！」

マグマラシはそういうや否やアリゲイツを放つてグラエナの後を追いかけていく。

「置いて行くな〜！待つてくれ〜！」

「無理。待つたら見失う！」

マグマラシ達がグラエナの後を追いかけていくとグラエナは屋上に出る扉の前で止まつた。

そして針金を取り出すと口で器用にくわえ、鍵穴に挿し込みくわえたまま首を傾け、鍵を開けてしまつた。

「グラエナつてぜつてー泥棒になれるぞ！」

「凄い！鍵を開けるのに30秒かからなかつたぞ！」

「マグマラシは出来……ないよなあ」

「なんだよ！その期待してたのに裏切られたとでも言いたげな言い方は！」

グラエナが貯水タンクのある部屋らしき場所に入っていく。

「それよりも！グラエナが貯水タンクのある部屋に入つて行つたぞ！」

「逸らしやがつた……」

グラエナが鍵を開けたまま行つたので、マグマラシ達は何の苦勞も無く追いかけることが出来た。そのころ、ザングースは罰を終え、休憩をしていた。

カチャ……パタ……ン。

この部屋の扉は建て付けが良いようで大きな音も無く閉まつた。まるでここまで来たら引き返せないという暗示のように。

部屋の中は薄暗く、さらに奥にある部屋から光が漏れている。

「……アリゲイツにマグマラシか……驚かせんなよ〜」

グラエナは後から入つてきたマグマラシたちに驚いて大声を出しそつになつたが、何とか堪える事が出来た。

「二匹ともこつち来て、扉に耳当ててみる」

「何が聞こえるんだ？」

「来てからのお楽しみだ」

二匹が扉に耳を当てると中から声が聞こえてきた。

「足りないのは………の血それも………血族の。それとアリゲイツの………の二つよね」

「この声は！タ…辰巳先生！」

「たつみじゃなくてタルミだから。グラエナ、こんな時にボケるな」

「な、なあ、ア…アリゲイツっておっ…俺のことか？」

「まだお前と決まってなんかいな「いいや」

マグマラシの声を遮ったのはグラエナ。

「この学校にはアリゲイツはお前だけだ。それに昨日、タルミ先生がここから出た後お前のことを探していたしな。」

「じゃ、じゃあ…俺は…「静かに…！」

グラエナが静かにするように言っているとミルタンクが部屋の中から出ようとドアノブをまわす音がした。

「隠れる…！」

グラエナが言うのと同時にマグマラシ達は物陰に隠れた。それと同時にミルタンクが部屋から出てきた。

「何か物音がしたような気がしたんだけど…何だったのかしら？まあいいわ」

ミルタンクは出てきた部屋の鍵を閉め、さらに三種類もの鍵を閉めた。マグマラシ達のいる部屋の鍵を閉め、屋上から出て行った。

ミルタンクの足音が遠ざかるのを確認したグラエナは物陰から出てきた。

「二匹とも出てきても良いぞ。タルミ先生は行ったぞ」

「グラエナ、ミルタンクはあの部屋で何をしてたんだ？」

「さあな。前はタルミ先生が早く帰ったから詳しいことはわからないが、あの部屋に入らなければどうとも…」

「あの鍵開けられないか？」

「いいぜ！ちよっと待ってな………」

マグマラシの提案で鍵を開けようと針金を探すグラエナ。

「えっと……………」

「どした？」

「マグマラシ、どーしよう。針金なくした」

「「え〜！〜！」」

針金をなくしてしまったグラエナ。二匹よりも慌てふためいている。

「どーしよう！どーすれば??？」

「グラエナ。とりあえず落ち着け！」

「マグマラシ、お前の炎で周り照らしてくれよ。針金探そうぜ！」

「あ、ああ」

マグマラシの頭と腰の炎で辺りが明るく照らされる。

「どこだ…あれがないとここから出られない……あ」

大変なことをさらっと呟いたグラエナ。自分で呟いてその事実気づいたようだ。

「あつたか？」

「いや。マグマラシもつとこっち照らしてくれ」

グラエナが呟いたことに気づかず、針金を探している二匹。

そのころザングースは職員室の前でミルタンクが来るのを待っていた。
そこに階段を下りてきたミルタンクが現れた。

「ザングースはどうする？」

「土下座」

「殺される」

「ちびる」

「こびる」

《「文句を言う」

(ほかの選択肢良いのねえだろ！！)

「タルミ先生、遅い!!」

「化け猫が文句言うんじゃない!!...それよりもあそこに行くわよ

...

「.....ああ」

「ねえな...」

「グラエナ、外に落としてきたのか?」

「多分そうだと思う...」

グラエナはしょんぼりして探す気力もないようだ。

その時、マグマラシが何かに気がついたようで扉に耳を当てている。

「ちよつと、グラエナ。誰か近づいてきてない?」

「え?...ほんとだ。誰かが近づいてくる...二匹分の足音だ」

「とりあえず隠れようぜ」

カチャ.....パタ.....

入ってきたのはミルタンクとザングース。マグマラシたちは物陰にうまく隠れている。

「なあ、タルミ先生。いつもより暑くねえか?」

「...確かに暑くなってる...それに物の配置が変わっているわね」

ザングースがグラエナの隠れているところへ近づいていく。

「ぎゃああああ...!!!...!!!」

突如、グラエナが大声で悲鳴を上げた。

「...うわっ!!!」...「きゃああ...!!」

グラエナの大声に驚いてマグマラシとアリゲイツは声を上げてしまった。そしてワントンポ遅れてミルタンクの叫び声。

「いつてえ!!!ザングース!俺の尾を踏むな!」

グラエナは近づいてきたザングースに尻尾を踏まれたようだ。

「グラエナか!!!大声出すな!!!心臓が飛び出そうになったじゃね

えか」

「マグマラシ君！アリゲイツ君！グラエナ君！何故ここにいるの！」

ミルタンクの気迫に押されるマグマラシとアリゲイツ。

「俺達はグラエナの後を追って……」

「えっと……それは……その……」

ミルタンクの質問に言葉を濁すグラエナ。

「グラエナ！そのカメラは何なんだ？」

しばらくたつてから口を開いたグラエナ。

「……俺は……本当かどうか確かめたかったから……」

「何を確かめるのよ」

「……噂を……タルミ先生とザンゲースが付き合っているという噂の真相を確かめたかったからだ」

「で、ここに潜んでいたわけね。グラエナ、いつから調べてたの？」

「昨日から……」

「……はあ……いいわ。アリゲイツ君はどうせ来てもらうことになっていたから」

ミルタンクが扉の鍵を次々と開けていく。

「入れ」

ザンゲースが三匹に部屋の中へ入るように言う。

部屋の中には模様が書かれた円の上に浮かぶ一匹のポケモンがいた。

第二話：噂を追って（後書き）

マグマラシ「あの円陣の中のポケモンは…」

アリゲイツ「じつはザングースの…もごもご」

…いくなよ？続きなんだから。…言ったらこの小説から存在を消すぞ？

アリゲイツ「すまん！消さないでくれ〜！…まあ、消したら作者が困るけどな！」

う、僕の心でも読んだのか！まあいつか。

次話ではザングースの過去でも書こうかなあ？

マグマラシ「良いのかそんなことここで言っても」

いいって！決まったわけじゃないし。

アリゲイツ&マグマラシ「次もよろしくな〜！！」

第三話：噂の真相（前書き）

はたして今回は…

マグマラシ「今回は何？」

言ってみただけ。

アリゲイツ「何だよそれ」

あ、今回出てくる何かにはつつこまないでください。

三匹（作者を含む）『それではどうぞ』

第三話：噂の真相

模様が書かれた円の上に浮かぶ一匹のポケモン。

「あそこに浮いているのは… のザンゲース？」

「ザンゲースにそっくりだな」

「あの子は…ザンゲースの妹よ」

「…妹！？どういうこと!?!?!」

ザンゲースに妹がいたことに驚いているマグマラシ達。

ザンゲースからは家族がいないと聞かされていたから無理もない。

「どうして俺の妹…サンが宙に浮いて眠っているのか知りたいんだろ?」

しばらくの静寂の後、ザンゲースが語り始めた。

「あれは二年半前の出来事にさかのぼる……」

暑い陽射しが射す夏が終わりを告げ、秋が始まるうとしていた。緑豊かな山の上の草原に涼しげな風が時折吹き抜け、草木を揺らしていた。

「お兄ちゃん!こっちこっち!」

「待てよ。急ぎすぎると転ぶぞ!」

「大丈夫だつて!きゃあ!」

「どうした!?!」

ザンゲースの前を走っていたサンが突然姿を消し、慌てるザンゲース。

「お兄ちゃん。助けて……」

涙声で助けを求めるサン。

「どこだ!?!」

「お兄ちゃん!」

ザングースが声のするほうに向かうとそこには狭い地割れが。その奥に小さな赤と白の模様が見える。

「大丈夫か!!」

「助けて!!」

「今行くからな!待ってる!!」

「お兄ちゃん!気をつけて!」

ザングースは狭い地割れの中に入って行った。

「ブレイククロー!!」

ザングースはブレイククローで作った穴をうまく使い、少しづつ降りていった。

ザングースが次の足場に足をかけたとき足場が崩れ、ザングースは頭から落ちていった。

「お兄ちゃん!!」

「お兄ちゃん…お兄ちゃん…しっかりして!」

「痛っ!」

落ちたときに頭を打って暫く気絶していたようだ。

ザングースが上を見上げると遠くに日の光が見える。

「お兄ちゃん。大丈夫?」

サンが涙を流しながら話している。

「お兄ちゃんが起きないから死んじゃったのかと思った…よかった」

ザングースはサンの頭をなでながら言った。

「サン…心配かけてごめん」

「お兄ちゃん…」

ザングースが辺りを見回すとそこには横へと続く薄暗い洞窟が。

「サン見てみる。あの奥から光が漏れてないか?」

「え?…ほんとだ。気づかなかった…」

「あそこから出られるかもしれない。行ってみようぜ!」

「うん!」

ザングースはうまく動かせない体を引きずりながら向かって行った。
「お兄ちゃん身体…」

「大丈夫。これは一時的だから」

ザングースを気にしながら進んでいくサン。

「お兄ちゃん！！見て！！」

「何だ？」

「えっと！えっと！！とにかく見て！！」

ザングースがサンに追いつくと信じられないようなものを目にした。

「水晶が…光ってる…」

「綺麗だね…」

「そうだな」

洞窟の中に部屋みたいな空間があり、その中心で水晶が光り輝いている。

その水晶を中心に模様のかかれた円がある。その横に黒い石碑がある。

「お兄ちゃん。これ持って帰ろ！」

「ああ。いいぜ」

このときサンもザングースも水晶を中心に模様のかかれた円がある事にも石碑にも気づいてなかった。

サンが水晶に触れたとたん水晶が強烈な光を放った。

「うわっ！！！」

ザングースはその光が眩しくて目を瞑った。

そして目を開けると水晶は消えてしまっていた。

そしてサンが倒れていた。

「サン！？」

「お兄ちゃん…身体が動か…ない…助…け…て…て…」
サンはそう言うつと目を閉じた。

「サン！サン！！」

ザングースはサンの身体を揺するが、サンは目を瞑ったまま起きない。

ザングースが辺りを見回すとさつきまで気づかなかった石碑が。ザングースはサンを抱きかかえながら、石碑の前に立つ。

「なんだよ！この石碑は！何が書いてあるんだよ…畜生！！」

そこに刻まれていたものは今はもう文献にすら残っていないほど昔使われていた文字が書かれている。

「ここに入りて魔力の水晶を得ようとする者、我が呪^{シユ}によって五日の内に滅ばん。」

「誰だ！！」

「私はこの番をかれこれ数万年しているミルタンクのタルミ。さつき言ったのはその石碑に書かれている内容よ」

「お前がこの呪^{シユ}をかけたのか！！」

「いいえ。私ではない“何か”よ」

「…妹の命はあと五日なのか？」

「ええ……」

「そんな！どうして！…あなたは番ポケなのになぜ見張^{シユ}っていないかった！」

「…言い訳になるかもしれないけれど、私だって常に見張りたかった。けど、命はあなた達と同じ長さしかない。それなのに私がなぜ数万年間番を出来たのかわかる？私はこのそばに部屋を作り、その場所の時間の流れを遅くする魔法をかけた。その部屋の中にいたからよ。もちろん声を聞いてその部屋を出ようと走ってもその部屋にいるうちは時の流れが遅いままだから出られるのは暫く時間がたつた後になるわけ。だからなのよ」

ミルタンクの話聞いたザングースはただ涙を流していた。

「…その子にかかった呪^{シユ}は解けないことはないわ」

「…！！！本当か！」

「嘘を言ってもしょうがないじゃない。私もその子の呪^{シユ}を解いてあげたいし。でもそのためには最低一年半は時間があるわ…」

「ならあんたがさつき言つてた魔法でそのための時間を稼げないか？」

ザングースの考えたアイディアは頭に思い浮かばなかったというように嬉しがっていた。

「それなら出来ない事はないわ！でも…魔法を二重にかけるということはそれだけその子へダメージがいくことになるわ。私も癒しの鈴とミルクのみで助けてあげるけど…その子が持つかどうか。それに…二重魔法は後からかけた魔法は効果が薄くなるわ」

「それでも、しなければサンは必ず死ぬんだろ？なら、少しでも可能性のあるほうへ！」

「…わかったわ。あなたがこれから二年半の間必ず行く場所で、近くに誰も入らないような場所は？」

「……あるにはある。俺の通っている学校の屋上にある貯水タンクのある部屋のさらに奥の部屋だ…」

「なら、早速行くわよ！道案内よろしくね！かれこれ数万年外に出てないことになるし、私の知っている時とは違うだろうから。出口はこっちよ！」

ミルタンクはそう言いながら出口へ向かって行った。その後をサンを抱えたザングースが追いかける。

「…身体は…ちゃんと動く！！…待ってる、サン。お兄ちゃんが必ずその呪^{シユ}を解いてやるからな」

そう言っただけでザングースは学校の屋上目指して走っていった。

屋上に着いたタルミは魔法で時を遅らせ、宙に浮かせることで呪^{シユ}の進行を少しでも遅らせようとした。

「この呪^{シユ}は大地から来る魔法だからね…大地に触れていると呪^{シユ}が早く進行するのよ…」

「…そして今に至るとい事だ…」

驚愕の真実を告げられ、開いた口がふさがらないマグマラシ達。

「…えっと、そのためにザングースはタルミ先生と一緒に消えた。

それが目撃されて二匹が付き合っているという噂になったのか…」

グラエナが頭の中を整理しようとして思ったことを口に出している。

「タルミ先生…一体何歳？そして一体何者？」

アリゲイツが疑問を口に出す。

「私の感覚からすれば四十数歳、この世界からすれば数万歳ね。そして私は水晶の番ポケ。まあ、水晶は消えちゃったから番ポケじゃないわね…」

「タルミ先生魔法使えるんだ！……あれ？サンの命って後どれくらい持つんだ？」

「この魔方阵から出なくても後三日よ」

「俺達もその呪を解くのに協力しようぜ！アリゲイツ、グラエナ、いいだろ？」

「もちろん！！友達なら当然だろ？」

「…ありがとう」

妹想いの兄はその眼に水を溜めていた。

第三話：噂の真相（後書き）

ザングースの過去でした。

グラエナ「俺の台詞：「もちろん！友達なら当然だろ？」と「妹！？どういうこと！？」…：しかないんだけど」

うん。空気にする事で今回はこの小説を読んでもくれている皆の頭の中から消してしまおうと思ったから

グラエナ「酷くね！？」

まあ、六話目にはグラエナの彼女が出てくるから心配しなくてもここでは今回の何倍も目立って！

グラエナ「あ、あいつが…ムフフ…」

おーいグラエナー頭が逝っちまったか？…：グラエナはほっという
また次回！

第四話：呪解の準備とブイゼルの心（前書き）

ミルタンクのタルミ…恐るべし。

アリゲイツ「何なんだ？」

読めば分かる。…台本いる？

アリゲイツ「今渡しても良いのか？」

いいよ。今までのやつしか綴って無いやつだから。

アリゲイツ「今回の載ってねえじゃん」

マグマラシ「ま、抑えて抑えて。タルミ先生の二十歳台に見える美貌に免じて」

そうそう。

マグマラシ「そんな事よりもブイゼルが…」

わー！それ以上言っちゃだめ！…ってなんで知ってるの？

マグマラシ「俺にかかれば作者の考える事は簡単に読めるからな！」

…マグマラシ、その手に持つてる台本返しなさい。まったくいつ盗ったんだか。

マグマラシ「盗ってないぞ。作者が床に放り投げてたからそれを拾っただけ」

あ、そうなんだ…マグマラシ、疑ってごめんね。一件落着？したところで…

三匹『びびんぞ〜』

第四話：呪解の準備とブイゼルの心

「この呪を解くにはある程度の材料が必要な。その材料はほとんどそろったわ。あと必要なのは二つ……」

「その材料って何なんだ？俺が取ってきてやるからよ」

ミルタンクは笑顔を見せながらアリゲイツに近づく。

「それじゃ早速。アリゲイツ君……」

アリゲイツは自分の名前を呼ばれ、恐怖で目を瞑っている。

それもそのはず。ミルタンクにイタチコンビが攻撃を受けているのを間近で見してきたし、ミルタンクが『……………の血それも……………血族のそれとアリゲイツの……………』と言っていたのを思い出したのだ。

「牙、五つ頂戴」

「…き、牙？」

よほど恐ろしいことをイメージしていたのだろう。そのイメージとはかけ離れた事を言われたために啞然としている。

「そうよ。牙よ」

ミルタンクがどこから手に入れてきたのか「抜歯鉗子」を持ってアリゲイツに近づいて行く。

「ま、待てよ。自然に抜けるのを待ってくれ！！抜かれると痛いんだって！！」

自分で抜いたことがあるのかその痛みを知っているようで、少しずつ後ずさりしていく。

「大丈夫だって」

アリゲイツが振り向くとそこにいたのはグラエナとザングース。ザングースの眼にはもう水は溜まっていなかった。

「ごめん。アリゲイツ……」

前にはマグマラシとミルタンクが迫ってきている。

「マ、マグマラシまで……！！」

「……サンの命がかかっているんだ。それに協力するって言ったろ？」

「」

「三匹とも！アリゲイツを押さえ込んで！」

マグマラシ達がアリゲイツを押さえにかかると。三匹がかりでも押さええるのはやっとなので、今にも振り解かれそうになっている。

「アリゲイツ君。すぐに済むわ」

「うああ〜！」

『ぎゃああああ〜〜〜〜〜！！！！』というアリゲイツの悲鳴が学校中に五回響き渡った。このときサボネアが足を滑らせて階段から転落し、反省文を書き終えたブイゼルに勢い良く刺さったのでブイゼルの悲鳴も混じっていたとか。

「これでアリゲイツの牙は手に入ったし、これを粉々に碎かなきゃね」

「俺がやる！！」

「グラエナ君やってくれるの？…食べちゃだめよ？身体に悪いから」

「た、食べませんって！！」

「俺の牙って毒か？それとグラエナ。明らかに食べようとしてたろ」

「俺はこれを食べて…じゃなくて、砕いてくるわ」

アリゲイツの牙を四足歩行用すり鉢に入れて急いで部屋を出て行くグラエナ。

「さて、ザングース君。今まで集めてきたものをすべて混ぜ合わせて、マグマラシ君の炎で焼いてもらって」

「おう！」

ザングースはマグマラシを連れて部屋の奥で材料を混ぜ合わせている。

その場にいるのはミルタンクとアリゲイツ。

「俺は？何をすればいい？」

「何もしなくていいわ」

「何かないのか？何か？」

「あるにはあるけど…ここでサンちゃんの様子を見て。サンちゃ

んが少しでも動いたら私に知らせて。これはサンちゃんの命にかかわる事だから」

「おう！タルミ先生はどうするんだ？」

「ブイゼル君の反省文が書き終わってる頃だと思うから、職員室にいるわ」

「…こういう時も仕事の事は忘れないんだな…」

ミルタンクが部屋を出て行く。…途中でグラエナがまた尻尾を踏まれたようで、ザングースに踏まれた時よりも悲痛な叫び声を上げた。「うわっ！！…グラエナまた尾を踏まれたか…」

勘が冴えたマグマラシ。的中している。

「タルミ先生いますか？」

「タルミ先生は…いないよ」

いつもの口調で対応するニヨロトノ。

「どこへ行かれたか分かりますか？」

「さあ？分からないよ」

「ありがとうございます。それでは失礼しました」

そう言つて職員室の戸を閉めるブイゼル。その手には反省文500枚が握られている。

「はあ…タルミ先生どこに行ったんだろ？」

下を向いて職員室を離れていくブイゼル。少し歩くと柔らかく、弾力のあるものにぶつかってしまった。

「あ、ブイゼル君いた！」

そこにはちょうど階段を下りてきたミルタンクが。ミルタンクは他のミルタンクよりも大きく、ブイゼルは他のブイゼルより背が低い。ためブイゼルはミルタンクのあの部分に顔をうずめる形になってしまったのだ。

「…っ！！」

偶然とはいえブイゼルは女性のあの部分に触れてしまったのだ。い

くら年が離れていようと相手は女性。しかも二十歳台に見えるタルミ先生である。ブイゼルがもともと年上の女性が好きだったのも手伝い、意識しないように心がけていても意識してしまうブイゼル。

「反省文500枚書けたのね。」

「……そ、それでは失礼し、します……！」

そう言っただけで走っていくブイゼル。その顔は真っ赤になっていた。

【ブイゼル視点】

「……僕は、タルミ先生のこと……好きなのかな？」

今まで意識したことはないけれどいつもタルミ先生に会うだけで幸せになったりする……。

さっきだって、あの事がなくてもタルミ先生に会うと思うだけでドキドキしていたし、いつもタルミ先生の事考えてる……。

頭を整理しよう。立ち止まって、深呼吸して……

……やっぱり僕はタルミ先生の事が……好き……なんだ。

「……タルミ先生。僕は先生の事が好きだという事に気づきました……」

【通常視点】

ミルタンクがマグマラシ達の所に戻ると、準備が済んだマグマラシ達が待っていた。

「準備できたぜ！」

「焼き加減これくらいでいいの？」

「この牙の磨り潰したものでーするんだ？」

「サンは動かなかったぜ」

「えーと、焼き加減は、ちょうどいいわ。グラエナが磨り潰した牙と混ぜてね！」

「それから？」

「一晩、月の光に当てるのよ。今日、ちょうど月が出るはずよ。」

ザングースはグラエナからすり鉢ごと受け取り、二つをよく混ぜ合
わせた。

「これはそこら辺に置いていても良いのか？」

「いいわよ。風に飛ばされないようにしてね」

ザングースがすり鉢を風で飛ばないように固定している。

「今日の作業、これで終わりか？」

「ええそうよ」

「なんかあっけねえ。魔法だからもっと凄い事すると思ってた」

「ふふっ。魔法はそういうイメージがあるみたいだけど、凄いのは
ほんのごく一部なのよ。サンの呪も明日解く事が出来るけどそれだ
って地味な作業の積み重ねよ」

「サンの呪も明日解ける…長かった…二年半…」

「……？」

「マグマラシどした？」

「グラエナ。サンの呪って二年半前だよ…そしてタルミ先生がこ
こに教師としてきたのが二年半前」

「そうだけど、それがどうしたって言うんだ？」

「マグマラシが思っていたことを口に出す。」

「タルミ先生はどうやって教師になったんだ？」

「…あ！…！」

「え？何でザングースまで？」

「俺はサンの事で一杯で、疑問に思った事なかったから」

「…馬鹿？」

アリゲイツがザングースに聞こえないように非難した。

「…えくと、気付かれちゃったわね。私がこの教員になれたのは
魔法を使ったからよ。もう使い方忘れちゃったけど」

「俺も魔法使いてえ！！」

「グラエナ君、私の話を聞いてから言っつてね。魔法は諸刃の剣なの
よ」

「魔法を使えば自分に何らかのリスクがあるって事か？」

「そう。魔法の使用者にも、魔法の対象がポケモンの場合はそのポケモンにもね」

第四話：呪解の準備とブイゼルの心（後書き）

マグマラシ「ブイゼル…教師と生徒の危ない恋愛でも始める気か？」
大丈夫。その点は卒業式が終わったらブイゼルは生徒じゃなくなるから。

アリゲイツ「いいな…魔法…」

ブイゼルの恋愛が？…って魔法かよ！

マグマラシ「作者のツッコミって下手なような気がする」

グラエナ「いいや違う。作者は下手ではなくて馬鹿だ！」

グラエナ、消去決定。デリートボタン、ポチツとな。

グラ・・「身体が！名前が消えて……………！！！」

マグマラシ「許してあげてくれよ」

マグマラシがそう言うなら…キャンセル…

グラエナ「何か不思議な感じがした。二度と味わいたくないけど」

あ、そうそう。アリゲイツ、魔法はそのうち使えるようにしようかな…って思ってるところだから。もしかしたら使えるようになるかもね。

アリゲイツ「よっしゃあ！！！」

あ、でも教えてくれる師匠がいるか…どうしよう。タルミは教えられるほど熟達した使い手じゃないから…ま、今度でいいか。

タルミ「呼んだ？」

いや呼んでない。

タルミ「あ、そうそう。アリゲイツに言いつけたサンちゃんの見張り…実は要らないのよ」

まじですか。そこら辺はアドリブに任せていたから分からなかった。

第五話・ミルトンクの世界について（前書き）

今回は短いです。

マグマラシ「箇条書きかゝそんなに面倒くさかったか？」

そりゃあね。たるみの口調でずっと書いていたら訳分からなくなっ
てしまったからこういう風に箇条書きにしたんだ。

アリゲイツ「サボりだな」

そんな事言わないでよ。

三匹「ストーリーリスタート！」

第五話：ミルタンクの世界について

「魔法にはリスクがある。まず、魔法の元になるエネルギーは主に体力や寿命。場合によっては命そのものを使うときもあるわ」

：ここから魔法について箇条書きで記していきます。ミルタンクが言った事として読んでください by 作者

・魔法一（呪）は使用者、対象者双方からエネルギーを奪って発動する。

・ポケモンは使える技が限られているように魔法も使うポケモンによって限られる。

・魔法はこの世界の法則を変えることは出来ない。（例：死んだポケモンを完全に蘇らせる等。）

・魔法には使う者によって威力が変わり、鍛錬で強くなる。

・才能によって習得できる数が違う。

・呪はその呪をかけた相手、もしくは呪をかけた物にどれだけ憎悪や執着があるかによって効力が変わる。

・時間が経てば経つほど魔法の効果は薄れるが、呪や、命を使った魔法は効果を発揮するまで効果が薄れず、消せない。

・魔法を使うとき、何を代償にするかで魔法の威力は跳ね上がる。

・魔法には属性が【26】種類ある。

基本的にタイプと同じだが、その他にも「時間・空間・宇宙・闇・光・変化・回復・無・全」がある。

・三大魔法の「時間・空間・宇宙」魔法は契約を結ぶことによって使える。

時間はディアルガと、空間はパルキアと、宇宙はギラティナと契約する。

契約の内容によって使える三大魔法のそれぞれの数、威力、効果が変わる。

・三大魔法はそれぞれの歪みから出るエネルギーを使って、魔法を維持しようとする。

「…こんな感じよ。魔法の全てを知ってるわけじゃないからここまですしか説明できないわ」

「タルミ先生ってディアルガに会った事があるんだ!！」

「すげ〜!!ディアルガってどんな感じだった?何されたの?」

「されたって…記憶を読まれたくらいよ。ディアルガ様は…短い間だったからよくわからないけど、パルキア様とギラティナ様の事で悩んでたみたいね」

「記憶を!?なんで?」

「契約するときにそのポケモンが悪いポケモンだったりしたらいけないからそのためよ」

「タルミ先生の住んでた時代ってどんな感じ?」

「えっと、今より戦争や殺戮、争いが絶えなかったわね」

…ここからミルタンクの産まれた時代について箇条書きにします。

by 作者

- ・緑の木々は今より少なく、荒れ果て、絶滅した種族もいた。
- ・古代ポケモンは魔法を使い、技は使えなかった。
- ・古代ポケモンは属性をその身に一時的に宿し、戦っていた。
- ・皆が争い、死が絶えなかった。
- ・身体が今よりも弱く、すぐに怪我をしていた。

・皆が憎しみ、恐れ、怒り等を抱いている。

「こんな世界ではいけないと立ち上がったポケモンの下にその考えに心を動かされたポケモン達が集まり、未来のためにその命を使うと誓いをたて、ディアルガ様、パルキア様、ギラティナ様と契約した。そして皆の体力、寿命、命を使い、新たな次元を作ったの。」

この世界から感情のエネルギーを変換して、属性エネルギー（アトリビュートエネルギー）として保管し、技を使うときはそのエネルギーをこの世界に召喚して自分の使いたい属性に変えて使える。そんな循環機構のある次元をね」

「え〜と…あれがこーなつてこれが…う〜ん…？」

あまりよくわかっていないザングース。その様子を見たミルタンクはため息をついて言った。

「簡単に言うとポケモンの精神エネルギーを技の元になるエネルギーに変えて、違う次元で保管し、必要なときだけこの世界に呼び出してつかうの」

「その次元のことをエレメンタルディメンションって言うんだぜ」

「マグマラシ君、何で知ってるの？」

「だってこの前タルミ先生がこっそりクラスの皆に教えてくれただけだろ？」

「…教えたっけ？」

「教えた！！じゃなきゃ俺達知らねえし」

「忘れたわ。私のいた時代はこんな感じよ…」

「今も魔法が使えるやついるのか？」

「私のように番をする者を除いたらいないでしょうね。魔法を伝えるものや伝える手段を後の世に残さない、封印すると皆が言ってたしね。あ、そうそう。感情エネルギーがポケモンの中から出て行くことでポケモンは性格が穏やかに、平和を好むようになったわ」

キーンコーンカーンコーン・・・キーンコーンカーンコーン

「あらら、話してる間にもう最終下校時刻よ。バイバイ。また明日ね」

「タルミ先生、さようなら」

マグマラシ達が帰っていく後ろで、学校の門が閉まる。

第五話・ミルタンクの世界について（後書き）

短くてごめんなさい。

後々タルミの世界は説明が出ると思うので今はこれくらいで勘弁してください…。

タルミ「作者君。魔法かけてあげようか？」

…どんな？君つけたら変だけど。

タルミ「そうね〜この小説の主人公を私にするように催眠魔法とか？」

やめてくれ。そしたらこの小説が訳分からない事になりそうだから。タルミ「次話もよろしくね」

第六話：ダンスカップル（前書き）

注意！！マグマラシは凄く っぽい顔、体つきでその上声も中性的である。そしてかっこいい？

マグマラシ「作者あ！！ばらすな！！」

マ、マグマラシ…ぎゃあああ！！火あぶり止めて！！アリゲイツ助けて！！

アリゲイツ「自業自得でよくね？」

グラエナ「ムフフ…」

タルミ・ブイゼル『どつぞ〜』

サボネア「……」

第六話：ダンスカッブル

生徒全員 『タルミ先生おはようございます！』

「皆おはよう。これから皆が目指す先はばらばらだけどいつまでもあなた達は友であり、私の生徒よ！！皆、卒業式会場へ行くわよ！！」

「なあマグマラシ、タルミ先生張り切ってるよな。昨日なんか学校から帰るとき肌のつやが良くなる木の実買ってたし」

「グラエナ、お前っていつつも何してんだよ」

「情報収集。…マグマラシ、アリゲイツ、ザングース。今日の卒業式後半、タルミ先生の後をつけてみる。驚く事が起きるぞ！」

「何なんだ？」

「アリゲイツ、それは後をつけてのお楽しみだ！！」

卒業生を送り出す為の盛大な卒業式も後半に差し掛かり、この学校特有の告白タイムが来た。卒業生、在校生、職員入り乱れて一斉に告ってしまおうという時間だ。

「三匹とも。タルミ先生の事を見失わないようにな！俺は念願のマツスグマちゃんに一直線！！」

そう言つてグラエナはどこかに行つてしまった。

「何があるんだよ？タルミ先生が誰かに告白するのか？」

「流石にそれは無いだろ」

三匹はミルトankを見つけ、こっそり近づいていく。

「あ、あの！タルミ先生！」

「え？ブイゼル君。何か用？」

「ザングース見てみる、タルミ先生に話しかけてるの…ブイゼルだぜ…」

「えっと…タルミ先生！僕はあなたの事が好きです！僕と付き合ってください！」

「…ええ〜！！ブイゼルってタルミ先生の事好きだったのか！？」

「」

「うーん…どうしよっかな〜迷うわねえ」

「迷う必要なんか無いぜ！ブイゼルなんて切り捨てちま…も〜も〜」

「ちよつと！ザングース！」

告白しているブイゼルが振られるように言うザングース。マグマラシがあわてて口をふさぐ。

「今のは声大きいぜ！もっと小声で言うべきだ！！」

「いや、そつちじゃないから」

アリゲイツの外れた言動に突っ込みを入れまくりのマグマラシ。さっきの以外にも、7回は突っ込みを入れている。

「ブイゼル君。あなたの気持ちはわかったわ…」

振られるのだと思いい気を落とすブイゼル。するとミルタンクが近寄り、ブイゼルの頬にキスをした。

「これからはブイゼルって呼ばしてもらわね！こんな年上の私でもいいのなら喜んで付き合うわ！」

「…良かったなブイゼル！！」

「良かったな。…ブイゼルに言ったんじゃなくてタルミ先生に言ったんだからな！」

「ザングースは素直に祝ってあげられないのか、ツンツンしている！！」

「グラエナ！てめえへんな事言ってんじゃねえよ！」

「あはは。皆、ありがとう。」

「ど〜いたしまして年の差カップルさん！！」

「この次のダンスパーティー一緒に踊るのか？」

「……………」

黙ってしまうブイゼル。

「あー！！ごーごめん！ブイゼル、俺は悪気があった訳じゃ…」

「いやいいよ。気にしてないし！こうして付き合う事になれたんだし」

さっきのようすから気にしているのは一目瞭然である。

空気が重くなる。その時アリゲイツを後ろから呼ぶ声が。

「なんだ？」

「…わ、私、隣のクラスのカメールって言います。も、もしよかったら、ダンス、私と踊ってくれませんか？」

「…！……お、俺でいいなら、よろしく」

「あ！ありがとうございます！！」

カメールは思わずアリゲイツに抱きついた。

「おお〜！ここにもカップル誕生か？」

はやし立てるグラエナ。アリゲイツもカメールも恥ずかしくなって離れてしまった。互いの顔が赤っぽくなっている。

「彼女いないのザングースと俺だけ？グラエナは告白うまくいった？」

「もちろん！ぬかりは無いぜ！」

「…マグマラシはモテるのに何でさっきから誰も告白してこないんだ？」

「ザングース、俺ってモテてたのか？一度も告られたこと無いけど…」

「…いたぞ、マグマラシ。お前に告ろうとしてる団体が争ってるぞ。お前が一言「乱暴な人は嫌い」と言えばすぐに治まると思うぞ」

「アリゲイツ。俺はそんな…」

三組のカップル 『じゃあな！』

「ええ〜！」

「…ザングース、私はハブネーク。わ、私と踊ってくれ！」

「いいぜ。乱暴なダンスになるぜ？」

「望むところだ！！」

「マグマラシ、じゃあな！」

「俺一人？…とりあえず喧嘩止めるか」

マグマラシは喧嘩をしているポケモン達に向かって行った。

「あんななんかマグマラシ様の足元に及ばないのよ！」

「なんですって〜！あんななんか×　　！」

「マグマラシは俺を選ぶ！」

「男が何言ってるのよ！ばかキング！」

「ばかじゃねえ！二ドだ！」

「選ばれるのはあたしよ！」

「マグマラシ様は私の物！」

「マグマラシ様はあんたの物じゃないのよ！！！」

「私の婿、マグマラシ様！」

「あんですって〜！」

「…痛っ！！よくもやったわね！ハイドロポンプ！」

「種爆弾！」「オーバーヒート！」「十万ボルト！」「馬鹿力！」

「クロスチョップ！」

「シグナルビーム！」「サイコキネシス！」「…大爆発！」……！

……！！！！

高威力の技が一斉にぶつかり、大きな爆発を引き起こす。…ひとつ爆発混じってたけど…。

その爆発で喧嘩していたポケモン達は吹き飛び、喧嘩を止めようと口を開きかけたマグマラシも吹き飛ばす。先生達は止められないらしく、巻き込まれないよう避難している。

「ぐあ………」

宙を飛んだマグマラシは壁に頭をぶつけ、気絶した。

そして卒業式進行役のドゴームが大声で叫ぶ。

「今、技を使ったポケモン達！！あなた達の告白権を無効に……」

ドゴームが全てを言い終わらない内に一斉攻撃を受け、どこかへ吹き飛んでいった。

このポケモン達、地面をえぐる程の爆発を食らったにもかかわらず、ピンピンしている。

…感情の力は偉大である。

「なんなのよ！さっきの爆発は！」

爆発を目撃し、戻ってきたミルタンク達。

「！！マグマラシ！おい！すっかりしろ！」

「アリゲイツ君、そこちよつとどいててね！癒しの鈴！ミルク飲み！そして…目覚ましビンタ！」

「いてえ！ビンタするな！」

「それよりもマグマラシ…あの爆発は何があつたんだよ」
アリゲイツ達に説明するマグマラシ。

「そんで地面にあんな大きな穴が開いてたわけか！」

「マグマラシ〜。早く〜喧嘩を〜止めなさい？」

「トノロ先生、なぜ最後疑問なんだ？」

そう言いつつ、マイクを貸して貰い、喧嘩をしているポケモン達に言い放った。

「皆！今日はこの学校で一緒に過ごせる最後の日なんだぞ！そんな日に喧嘩なんかするな！」

マグマラシの発言で喧嘩していたポケモン達が押し黙る。好きな相手に怒られたのだから効果は抜群だ。

マグマラシはマイクを返し、アリゲイツ達の元へ戻る。

「マグマラシ、今のは大胆だったな！」

「そうでもない」と喧嘩やめないだろ。…顔から火炎放射が打てるかと思つた」

叱られたポケモン達がマグマラシに近づいていく。

「すまん。俺は自分の事しか考えずに…許してくれ…」

『私達も…。ごめんなさい』

ニドキングを始めに一齐に謝るポケモン達。謝られたマグマラシはどうすればいいか迷って動揺している。

「……………まあ、分かってくれたんならそれでいいんだ。楽しもうぜ」
「！」

『はい！』『おう！』

『私（俺）達、あなたの事が好きです！私（俺）とダンスを踊って

ください!~!」

「ありがとな!でも…俺は一匹を選ぶなんて出来ねえし、皆で楽しみたんだ。だから皆一緒にダンス踊ろうぜ!」

その時、吹き飛んだ筈のドゴームが帰って来るなり言った。

「喧嘩は収まったようですが、地面の穴を埋めるまでダンスパーティーは出来ません。よってダンスパーティーは今夜に延期します!それまで各自好きなことをして過ごすように!」

「この地面の穴を作ったあなた方はもちろん…この穴を埋めるまで自由は無しとします!」

告白タイムは終わり、ミルタンクの招集でマグマラシ達は集まった。

「今からダンスまでには時間があるわ。皆、今のうちにサンの呪を解くわよ!」

『おお~!~!』

第六話：ダンスカップル（後書き）

プシュッ

ザングース「敵対同士のカップル。ありえないことは無いぜ？」

カメール「はい！ザングースさんとハブネークさんとってもお似合いですし！！」

ハブネーク「そ、そうか？」

マツグマ「カメールって空気読めないほうか？」

ニドキング「そうなのか？」

作者を含む全員 『あ、ホモ馬鹿キング！！』

ニドキング「そこまで合わせて言わなくてもいいじゃねえか…」

作者復活！！作者は不死身なのだ！！マグマラシは一匹を選ばないって欲深いね！

マグマラシ「もう一度灰になってる！俺はそんなつもりは無い！！」
ぎゃあああ！！

第七話：呪解（前書き）

なんか連日で書いて置くっていうのは予想以上に疲れる。

第七話：呪解

貯水タンクの奥の部屋に集まったマグマラシ達。それぞれのダンスパートナーは役員の用事があつたりしたのでブイゼル一匹を除いて来ていない。

「これ、どういうこと？」

「え〜と、実はかくかくしかじかで…」

マグマラシとアリゲイツが説明している間にミルタンクは作業を進める。グラエナは録画の準備をしている。

「皆、今から呪を解くわね。ザングース君、あなたの血がいるわ。」

サンの血族であるあなたの血がね。それじゃあ、血が出る程度に腕を斬って！」

「…切り裂く！」

ザングースは切り裂くを使い、自分の腕を斬った。切った場所から血が滴り落ちる。

「魔方陣の中のこと、そこと、あそこと、ここと、そっちをつなぐような五角形を書いて。それから、月光に当てておいたその中にも血を混ぜてね」

「わかった。サン…もうすぐだぞ」

ザングースはミルタンクに言われたとおりに動き、その後包帯を巻いて止血をした。グラエナは録画し始めた。

「グラエナ君、そのすり鉢を渡して。皆、私に触れて。そして私が良いと言つまで決して離れないでね！」

「あいよ」

グラエナがミルタンクにすり鉢を渡すとミルタンクは古代魔法言語を言い出した。

「\$%\$&

+%#

? …」

サンの下にある魔方陣が輝き、その後にザングースの血が赤く輝く。

それに共鳴するかのようになり、すり鉢の中の血も赤く輝き、中に入っていたものに黒い線が浮かび上がる。部屋の中が、日本晴れを使った時のように明るくなり、すり鉢の中身は徐々に形を変え、紅いサンドのようになる。

「皆、ここからは目を閉じていて。開けてたらあなた達が呪の対象になるわよ」

ミルタンクに言われ、全員が目を閉じる。

「大地を広げし赤き者の分身よ、我等の体力と引き換えに大地の呪とこの者を引き離し、その呪を打ち砕きたまえ」

ミルタンクがそう言っていると、部屋が紅い光に包まれ、マグマラシ達の体力が一気に奪われる。

「赤き者の分身よ、汝の本体に伝えよ。《我等が必要になればいつでも呼びたまえ。我等はこの恩を必ず返す。》と。」

紅いサンドは崩れ、部屋の中に満ちていた紅い光や、日本晴れを使った時のような明るさは弱くなり、消えていった。

「…もういいわよ…」

ミルタンクがとても疲れた様子で言った。

「つ、疲れたぜ。20連続バトルした時よりも…疲れた…」

「アリゲイツ、そんなのいつしたんだ？」

「入学のときに上級生といざこざで…」

ザングースが地に手をつけて息を荒げている。

「ザングース？大丈夫か？」

「ああ…なんとか…な…。ちょっと目眩がただけだ。それよりもサンは？」

「大丈夫のはずよ。呪も解いたし、後はこの時魔法と宙に浮かせている…魔法さえ解けば…」

そう言っつてミルタンクは倒れる。

「タルミ先生！大丈夫ですか！？」

「ブイゼル…ちょっと疲れ過ぎたみたい。今から時の魔法と宙浮遊魔法の解き方を言うわね。マグマラシ君達と一緒に解いてね」

「はい」

「まず、サンちゃんの下の魔方阵を消して。そうすれば時の魔法は消えるはずよ。次に、壁に書いてある文字を水で消して。水以外で消すと大変なことになるから…。あと、ブイゼル…私の事呼び捨てでいいわ。敬語も…ね」

「…わかった！タルミ。任せといて！」

そう言つてミルタンクは寝てしまう。ザングースは出血した後急激に体力を奪われたせいかあまり上手く動けていない。

「マグマラシとグラエナはサンちゃんの下の魔方阵を消して！アリゲイツは僕と水鉄砲で壁の文字を消すよ！」

「…おう！」「」

マグマラシとグラエナは魔方阵を爪で引つ掻いて消している。アリゲイツはブイゼルと水鉄砲を放つ。壁に書かれていた文字は瞬く間に消え、サンの身体がゆつくりと降りていく。

「何でゆつくり落ちてんだ？」

「グラエナ、まだ時魔法が続いてるからじゃない？」

「まだか…もう四分の一も剥がしたのに…」

「グラエナ、文句よりさつさと剥がす！愛しのマツスグマちゃんが待ってるぞ！」

「…!!待っててね…マツスグマちゃん!!」

マグマラシの“マツスグマちゃんが待ってるぞ”の一言で、急にペースが十倍に跳ね上がったグラエナ。

マグマラシ達はただあんぐりと口を空けている。次の瞬間サンが魔方阵を剥がしていたグラエナの頭上に落ちる。

「ぎゃー！」

グラエナ、尻尾を踏まれたり、頭の上にサンが落ちてきたりと不運である。

サンはまだ意識が無いままで、ピクリとも動かない。

「サン…しっかりしろ…お兄ちゃんだぞ…」

「…なあ、マグマラシ、ザングースってやっぱシスコンだよな？」

「ザングースはそれを気にしてるかも知れないから言わないほうが…」

「グラエナ。全身の毛を徐々に抜かれるのがいいか？それともお前の恥ずかしい写真でもばら撒こうか？どっちか選べ」

「すまんザングース！どっちもヤダ！まだ今日という日に別れを告げたくない！！」

「じゃ、明日だな！」

「アリゲイツ！それもやめろ！」

「サンちゃんは、ものすごく体力と精神力を消耗してるからそこに寝かせてあげなさい。あと4時間は起きないと思うから。その間にダンスを楽しむわよ！」

ミルタンクは眠りから覚めたようで、元気一杯である。

「タルミ先生なんでそんなに元気一杯なんだ？」

「マグマラシ君：そんなにも知りたいの？…もう、しょうがないんだから…」

「タルミ先生、ブイゼルが恐ろしい眼で睨んできてるからやめろ！」

「あら、ブイゼルって意外と独占欲強いよね。眠るを使ったのよ」

「眠る…使えたんだ」

「さて、ザングース君の体力回復してあげないとね。2連続ミルク飲み…！」

「サンキュー、タルミ先生！サン、しっかり休めよ…」

「マグマラシ君達もそこに並んで！」

「タルミが言ってるんだからさっさと並ぶ！」

ブイゼルの豹変ぶりに驚くマグマラシ達。そしてすぐに並ぶ。

「ブイゼルって、俺らにも敬語使ってたのに…すげえ豹変ぶり」

「だな…」

「ミルク飲み連発！！…そして眠る…」

ミルタンクは消耗した体力を回復するため、眠るを使った。

「サンキュータルミ先生！」

「…サンの体力をミルク飲みで回復しないのか？」

「…ザングース、お前はダンスの時サンの面倒見ながら踊るのか？」
「あ…」

「それにな、サンにとって今は二年半後の世界にタイムスリップしたようなもんなんだ。ザングース、お前がサンの知ってる時より成長しているからサンにとってはお前はお兄ちゃんじゃないかもしれないんだぞ？」

「マグマラシの言うとおりだ。お前がお兄ちゃんであることを証明するために時間が必要だろ？今起きたらダンスまでに証明できるか？タルミ先生はそれも考えてたんだと思うぜ？」

「…そうだな。明日起きたときには時間がたつぷりあるからその時に少しずつ分かって貰うか…。はあ…サンは俺の事ちゃんとお兄ちゃんだつて分かってくれるのか？」

「今そんなこと考えてもどうしようもないだろ？」

「…だな。そういつた事は明日から考えればいいか！」

「うゝん！！あく寝た！！えっと後はブイゼルとサンちゃんね」

「…え？」

ミルタンクの言った事で驚いたマグマラシ達。

「どうしたの？」

「サンの体力は回復しないで！！」

「え？何故？」

「それは…」

マグマラシ達はさつきザングースに言った事をミルタンクに説明する。

「それもそうね。じゃあ、ブイゼルだけね。ミルク飲み！」

「ありがと。タルミ」

ブイゼルの笑顔を見たタルミの顔が赤くなる。

「タルミ先生顔が赤いぜ！！」

「グラエナ君！！…私、ブイゼルの事好きになってきてるみたい…」
「じゃあ、後は結婚と子作りだけだな」

ミルタンクとブイゼルの顔が一瞬にして真っ赤になる。

「こらっ！！待ちなさい！」

ミルタンクがおしおきをしようと思いかけていく。

ピンポンパンポン「地面の穴を塞ぎ終えたのでもうすぐダンスパーティーを開催します！」

「アリゲイツ行こうぜ！」

「ああ！マグマラシ、大人数ダンス頑張れ！」

「おう！頑張るぜ！」

マグマラシ達はダンスパーティー会場に駆け出した。いつのまに時間が経ったのか外はもう暗くなっている。

第七話：呪解（後書き）

アリゲイツ「お！ホットケーキ！！」

あ！それは僕のだ！… ああ、僕の…僕の20枚ホットケーキが…

マグマラシ「アリゲイツ…さすがに全部食べるのは酷い」

マグマラシ…お前は分かってくれんなだな！！

マグマラシ「俺達にも残してくれなきゃ」

…裏切られた気持ちで一杯だ…そして皆…何で！ホットケーキを食べたアリゲイツじゃなくて僕に怒りの矛先が向いてるの！？

作者、ここに死す…訳ない！僕は不死…うべあ！

紅きサンドは分かりますよね！姿が似ていたものでつい…ちなみにグラエナは録画に失敗しました！魔法に電気エネルギーを吸い取られたらしい。

第八話：ダンス（前書き）

マグマラシ「作者はパソコンをやりすぎて親にコードとかいろいろ捨てられたとかいう情報があるんだけど本当か？」

… 本当だよ。今は親の目を盗んでパソコンとかのコードを他の物で代用して執筆してる。

タルミ「やっぱりね。パソコンを十時間も続けてるからよ」

ブイゼル「今回は僕に変化が!!」

ザンゲース「ほんのちよつとな!!」

全員「それでは、スタート!!」

第八話：ダンス

ダンスパーティー会場についたマグマラシ達。

「お！マグマラシ！待ってたぜ！」

『マグマラシ様〜！』

「皆、よろしくな！」

「アリゲイツさん！」

「カメール！さんは要らないぜ！！！」

「やっときたかグラエナ！」

「マツスグマちゃん！！遅くなってごめんね〜！」

「ザングース、逃げずに来たか」

「もちろんだ！」

「ザ、ザングース！？その腕は！？」

ザングースの腕の包帯を見て慌てるハブネーク。

「さっきそこで切れたんだ。タルミ先生に処置してもらったけど大げさなんだぜ」

「そうなのか。私に言えば私が処置してやるのに……」

とても残念そうに言うハブネーク。どうやって包帯巻くのが疑問だが。

どこからかドゴームの音がする。

「え〜これから、我が校の名物、ダンスを開催します！」

その声が聞こえた瞬間音楽が流れ出す。

「マグマラシ踊ろうぜ！まずは俺からだ！」

「行くぞカメール！」

「はい！！！」

「マツスグマちゃん！踊ろ〜！！！」

「その喋り方うっとうしいから止めるワン公！」

「ハブネーク！俺のダンスについてこれるか？」

「もちろんだ！！！」

ブイゼルはミルタンクと背の高さが違いすぎるため、踊れない事を嘆いている。

「…ブイゼル、昨日はすまなかった。これやる」

そう言つてブイゼルに何かを渡して去つていくサボネア。

「…これは不思議な飴！…サボネア、ありがと〜！」

ブイゼルはサボネアに礼を言い、早速使う。

するとブイゼルの身体が光り輝き始め、形が変わつていく。

光が収まった時そこにいたのはフローゼル。

「ブイゼル！いいえ、フローゼル。踊るわよ！」

「はい！」

それぞれがそれぞれの想いをダンスに乗せて踊る。

マグマラシは大きさが違いすぎてダンスと言うより、抱きかかえられている。

アリゲイツとカメールは得意の水技を使ったダンスもといパフォーマンスをしている。

近くに炎タイプ等水を苦手とするポケモンはほとんど見当たらない。グラエナはマツスグマと上手く踊つて…いる？一瞬だけ見たらとても上手いように見えるが、良く見たら全然上手くない。

ハブネークは、その長い身体をしならせ、ザングースと共に流れるように踊っている。

ミルタンクとフローゼルはどこか違うところにいるようなそんなダンスをしている。

それぞれが、それぞれのダンスを踊る。

マグマラシは次々と踊る相手を変えている。

最初の曲が終わり、次の曲がかかってきた。

ポケモンならついつい踊つてしまう、「ポルカ・オドルカ」。

「ノルカ ソルカ ポルカ オドルカ…」

マグマラシを含めほぼ全員が踊る。サンも手だけ踊っている。

この曲だけは皆の動きが同じなので、とても統一感のある動きになる。

また曲が変わらない。
スピーカーから不快な金属音のような音が流れてきて、皆耳をふさぐ。

「うるさい！どうしたんだ」

ドゴームの声が聞こえてくる。

「えー、流す筈だったCDが不慮の事故により使えなくなってしまったので、グラエナさんピアノの演奏をお願いしますか？もう一度繰り返します。………」

「グラエナ？あいつピアノ弾けたのか？」

「アリゲイツ！もう一匹の方のグラエナだからな！！このワン公と一緒にするなよ！！」

「ああ、そっちのグラエナか。その犬にピアノが弾けるわけ無いよな！」

ポーン…ポーン

そしてグラエナがピアノを引き出した。この学校一の腕前で、全国大会で入賞した経験の持ち主だ。

「こ、この曲は…！なんだろな？」

「言っときながら分からないのか！！ワン公！」

「じゃあ、マツスグマちゃんは分かるのか？」

「ちゃん付けするな！分からないが…」

「マツスグマちゃんは踊らないんですか？たのしいですよ」

「カメール、踊るって！ほら踊るよワン公！お手！」

「ワン！」

グラエナがお手をする。

「本物の犬に成り下がったか冗談も通じないとは！すまないな。私は犬とは付き合う気は無い」

「ごめ〜ん。マツスグマちゃ〜ん許して〜！」

マツスグマはグラエナに振り回されているようだ。

「………」

「ザングース？」

ザングースはさつきから黙ったままだ。ハブネークの呼びかけにも答えない。

腕の包帯からは血で染まっており、顔色が悪い。

「…ザングース…とりあえず保健室に行くぞ」

ハブネークがザングースを保健室に連れて行こうとして体を押すとザングースは倒れた。

「ザングース！？ザングース！？ザングー……………」

そして意識を失った。ザングースが倒れてもお構いなく続くダンス。

【マグマラシ視点】

「マグマラシ様…」

ルクシオが俺に触れた瞬間一切動かなくなった。なぜだ？

「大丈夫か？ルクシオ」

「…ごめんなさい。もう自分を抑えられません…」

自分を抑えられない？も、もしかして…

ルクシオが俺を押し倒し、襲ってくる！

『マグマラシ様！抜け駆けなんて卑怯よ！』

ルクシオはマグマラシを信愛するポケモン達によって取り押さえられた。

『マグマラシ様大丈夫ですか？押し倒されただけですよね？』

「あ、ああ」

ルクシオには押し倒されただけで済んだが、あいつらが言った「抜け駆けなんて卑怯よ」という言葉が気になる。

あいつらもその気があるって事だよな………注意しないと。

気を許しているとルクシオみたいに襲ってくる奴がいるだろうからな…。

【通常視点】

ダンスも終わりに近づき、ゆったりとした曲に変わる。

「タルミ…」

「フローゼル…」

二匹は踊りながら互いを見つめあい、口付け交わそうとする。

そこに吹っ飛んでくるズバット。ダンス中に相手を怒らせたようだ。「ヤミカラスさん…」

そう言っつて気絶する。ズバットがしていたのは求愛のダンスだとか。いいところを邪魔された二匹。腹いせにズバットを踏みつけていく。…このダンスパーティー、毎年気絶するものが後を絶たないとか。

ダンスパーティーも終わり、ミルタンクの号令で解散することになった。

「皆！あなた達はあなた達の幸せを、私は私の幸せを、それぞれ掴み取るわよ！」

生徒全員 『おおー！』

「それじゃ皆元気でね！！さようなら！」

生徒全員 『さようなら！！』

生徒の中には涙を流している者も。もちろんザングースとハブネークはいない。

生徒のほとんどが学校を去り、残っている者は僅かだ。

「ザングースどこ行った？」

「ハブネークさんどこでしょうか？」

「さがすのか？」

「ああ、探したほうがいいだろ」

マグマラシ達はいろいろなところを探し、保健室で二匹を見つけた。

「ザングース大丈夫！？」

「…頭がくらくらする」

「出血したうえ、踊って血圧が上がって貧血になったのよ…暫くは誰かが面倒見ないとね」

「私が見る！」

「ハブネークが？」

「私は家族がいないし、ザングースもサンという行方不明の妹がいるだけだ。特に問題は無い」

「どこでその情報を聞いた？サンは行方不明なんかじゃないぞ……」

「え？どういうことだ？」

「それはな……」

ザングースはハブネークに今までの事を包み隠さず話し、これからの予定も話した。

「……そういうことだったのか。タルミは不思議な奴だったからな……」

あの噂も嘘か……」

「そういうことだ」

「なら、私がサンの事もザングースのことも世話してやる……この気持ちを変える気は無い」

「そうか……じゃあ、よろしく頼むぜ……！皆、じゃあな……」

「俺らも解散しようぜ。ザングース、皆じゃあな……」

ザングースはサンを持ち、ハブネークと一緒に去って行った。

マグマラシ達も別れ、それぞれの道へ歩んでいった。

第八話：ダンス（後書き）

…次はいつ投稿するのか分からない…

マグマラシ「え〜！投稿無し!?」

うん…まあ、いつか投稿するって。

アリゲイツ「ひそひそ…マグマラシ…あれをやれ。そしたら作者は…」

マグマラシ「やらないと…いけないのか？」

アリゲイツ「投稿無しでも？」

マグマラシ「分かったよ…作者さん 私に免じて次の投稿早くして〜」

グハア！ つばいマグマラシの甘える攻撃は効く…分かった！次の投稿は木曜日か来週の土曜日だ！

マグマラシ「作者さんありがと〜！でももうちょっと早くならない？」

あんまり度が過ぎると逆に可愛く無くなるね。でも気がのったら投稿するよ。

3 / 29 修正。

ルクシオは俺を信愛するポケモン達によって取り押さえられた。

から、ルクシオはマグマラシを信愛するポケモン達によって取り押さえられた。

に修正しました。

第九話：旅立ち・バトル大会開始（前書き）

気分です投稿！

マグマラシ「作者！木曜日に三話から四話同時投稿って本当か！？」

……………うん。

アリゲイツ「何なんだよその間は！」

えーと、主人公の君達の設定が僕の中で『ごちゃごちゃになってきている』というのと、君達の力とか全く考えてなかったからどうしようかと思つて。

マグマラシ「作者！しっかりしてくれよ！俺、アリゲイツになんかなりたくない！」

…ちよつとアリゲイツ外出でて。…マグマラシ、君はアリゲイツのことが馬鹿だと思つてるんだね。

マグマラシ「……………」

図星？ま、アリゲイツはバトル以外は基本馬鹿にしようかと思つてたからいいけど。アリゲイツ、もういいよ入ってきて。

『数奇な運命のポケモン達、開始！！』

第九話：旅立ち・バトル大会開始

卒業後、アリゲイツの家に遊びに行ったマグマラシ。

「なあ、アリゲイツ」

「なんだ？」

「これから…どうする？」

「…おれは強くなりたいかな。マグマラシは？」

「神と呼ばれるポケモンに会ってみたい…かな」

「じゃあさ、旅に出ようぜ！どっちもこの場所に留まっていたら叶わない事なんだからさ！」

「いいな！それ！ジムに挑戦したり、各地の遺跡を巡ったり！」

「そうと決まれば早速！！」

「ちよつと待て！」

家を飛び出そうとしたアリゲイツを呼び止める。

「何の準備も無しか？それに親にもそのこと知らせたほうがいいだろう？」

「忘れてた！」

わくわくしすぎてそういつた事を一切思わなかったようだ。

「…じゃあ、旅の用意とか出来たらここに来るから！」

「わかった！」

マグマラシはアリゲイツの家を出て急いで家に帰る。

「アリゲイツ、旅に出るんだって？」

「か、母ちゃん…」

「…行って来なさい！私はいつでもあんたの味方だから」

「サンキュ！父さんは？」

「父さんには私が言ってあげるから心配しないで！」

「おう！」

アリゲイツは荷物の準備を始めた。

「え〜と、貝殻の鈴に…神秘のしずく…元気の塊に木の実とか…」

一方マグマラシは…

「ただいま!」

「おかえり。早かったわね」

「母さん。俺アリゲイツと一緒に旅に出ようと思う!ジムや遺跡とか色々巡ったりする旅!」

「あなたもお父さんと同じように旅に出るのね。応援するからね!それでいつ旅に出るの?」

「今日中には出発する」

「今日?ちよつと探し物があるから用意が出来たら言ってね」

「わかった!」

マグマラシは自分の部屋で荷物を詰めていく。

「木炭に食べ残し、煙玉に達人の帯……後は木の実だな」
荷物を詰め終えたマグマラシ。

「母さん。用意出来たぜ!」

「こつちもちよつど見つかったわ」

どこからか小さな袋を見つけてきてそれをマグマラシに手渡した。

「これはお守りよ。命が危機にさらされた時に使いなさい」

「中身は何だ?」

「使うときまでの秘密。それじゃあ、行ってらっしゃい!」

「行ってくる!」

マグマラシは耐炎製のバックを背負い、アリゲイツの家を目指す。

マグマラシがアリゲイツの家に着いた時アリゲイツも丁度準備が出来、家を出ようとしていた。

二匹が同時に扉を開ける。

マグマラシはアリゲイツが押し開けた扉に顔を強打し、飛ばされる。

「!!!」

声にならないマグマラシの叫び。アリゲイツの後ろでオーダイルが腹を抱えて大爆笑している。

「わ、わりい」

「痛え〜…」

「…母さん行ってくるわ」

オーダイルの笑い声はアリゲイツ達が去った後もしばらく続いていた。

ここはアリゲイツの家からちょっと行ったところ。

「なあ、どのジムから行くか？」

「ジムの前に仲間集め！ジムは四匹以上のチームじゃないと挑戦権が与えられないだろ？それにジムには順番があるんだ！」

「じゃあどうすんだよ！」

マグマラシはマップを取り出して言った。

「まず、俺達がいるのはここ、アトリユートタウンだ。一番目のジムのある町はウィードタウン。そこに行きながら遺跡やジムとかの情報を集め、仲間も探そうと思う」

「じゃあ、さつさとウィードタウンに行こうぜ」

「ここからウィードタウンまで離れているから途中の町に寄りながら行く」

「じゃあ、まずは…エレクトタウンだな！出発〜！」

アリゲイツは意気揚々と歩いていく。

「アリゲイツ！来た道に戻ってどうする〜！」

「んが？こつちだと思っただがな〜」

マグマラシたちはエレクトタウンに向かって行った。

何事も無くエレクトタウンに着いたマグマラシ達。これはこれで退屈と思われるが。

「よっしや〜！！着いた〜！！」

エレクトタウンの開けた場所にポケモン達が集まっている。

「アリゲイツ、何かやってるみたいだぞ！行ってみようぜ！」

「おう！！」

アリゲイツ達が行くとそこにいたのは今日開催されるバトル大会のチラシを配っているペリッパ。

ペリッパが配っていたポスターを

『今日開催されるバトル大会の参加者募集中！！年齢・タイプ・種族問わず！！自分の腕に自身のある者達よ集え！詳細は大会受付へ』

「マグマラシ！！バトルだぜバトル！！申し込みに行こうぜ！！」

「さすがアリゲイツ。バトルには目が無いな」

「受付は…ポケモンセンター！さてと…」

マグマラシを怪しい目で見えるアリゲイツ。

「な、何だよ…」

アリゲイツが笑みを浮かべた瞬間、マグマラシを抱きかかえ、そのままポケモンセンターに向かって走っていく。

「またか！放せ！おゝろゝせ〜！」

ポケモンセンターの手前でアリゲイツが転んだのでマグマラシは抱きかかえられたままポケモンセンターに入っていくのを避けることが出来た。

マグマラシ達がポケモンセンターに入るとナスキャップをかぶったライチュウとデンリュウが大会受付の手続きや説明をしていた。

「なあ、バトル大会の参加条件とルールは？」

「参加条件は自分の腕に自信があるか否かです。ルールはシングル戦、道具の使用と反則行為は禁止です。技の制限はなし。また、六試合同時予選で本戦に残るポケモンを十六匹にまで絞り、本戦では残り四匹になるまで四試合同時進行のトーナメントになります。そして上位の成績をおさめた方は賞金としてポケを贈与いたします。参加登録しますか？」

アリゲイツの質問に早口で答えるライチュウ。

「よろしく！アリゲイツとマグマラシだ」

「少々お待ちください。そちらのマグマラシさんは でいいですね？」

その言葉を聞いたとたんアリゲイツが笑い転げた。そしてマグマラシは動きを止める。

「マグマラシはあれでも だぜ!!」

アリゲイツがそういうとポケモンセンターにいた 達が暗くなった。ポケモン達からは敵意が無くなり、少しとろんとした目でマグマラシを見つめている。

「す、すみません!! 訂正します! …… 参加登録できました。」

「サンキュー!! いつ始まるんだ?」

「あと2時間後になります」

アリゲイツのため口にも敬語で対応するライチュウ。他の質問にもすらすらと答えていった。

「それでは、大会開始までポケモンセンター内にてお待ちください」

「俺、大会出る気は無かったのに!」

「そうだったのか? もう遅い! 存分に楽しもうぜ!」

マグマラシ達は大会開始時刻まで休憩を取り、大会開始時刻になった。

「それでは選手の皆さん会場まで案内いたします。ついて来て下さい」

大会参加者達はデンリユウの案内の下、たくさんの観客がいる大会会場に入ってしまった。

「この大会の実況を務めさせていただきます、サンダースです。それでは、大会開始前にルールの確認をしたいと思います…」

司会のサンダースが大会のルールや説明をし終わり、選手達がバトルフィールドへ導かれる。

扉を開けて入場すると観客から歓声があがった。

観客への顔見せが終わり、大会が始まった。

「さあ始まったエレクトタウンバトル大会! 選手達! 悔いの残らないよう全力で正々堂々戦ってくれ! 観客の皆様! この大会を盛り上げて楽しんでいこう!!」

サンダースの喋り方が変わり、観客が盛り上がる。

「まずは予選だあ！予選を勝ち残り、本戦に現れるのは誰なのか？そして今回は初出場者が去年の倍だ！！この大会のルーキーが本戦を占めるというミラクルは起きるのか？おおっと！ここで予選の準備が出来たようだ！予選一回戦目の選手達はバトルフィールドへ！選手がバトルフィールドへ入り、戦闘体勢をとる。」

「準備はいいか？バトルスタート！！」

予選が始まり、次々とバトルが行われていく。

予選は六試合同時進行なので次々と試合が終わっていく。

「今大会最速のスピードで相手を倒したルーキー、レントラー選手！開始わずか十秒も経っていない！君には期待してるよ！」

「お前には期待されたくねえ！ロリコンサンダーズ！」

「んなっ！！どうしてそれを！！」

観客からは笑い声が聞こえる。

「…速いな。俺が相手だったら相性が悪くても負けたくねえ」

「アリゲイツ頑張れよ！」

「ああ、お互いにな！」

「モココ選手、マグニチュードの威力の前に倒れたあ！勝者ドンファン選手！またしてもルーキーが勝利を掴んだあ！！はたして今大会ミラクルは起きるのか！？」

マグマラシとアリゲイツの前の選手が同時に倒された。

「次は俺等だな」

「よし！行くか！」

マグマラシはドクケイルと戦い、光の壁と月の光に苦戦したが勝つことが出来た。

アリゲイツは、シャワーズの貯水とアクアリングにてこずったがじたばたを使い逆転勝利することが出来た。

予選は続き、バトルは全ての組み合わせが対戦し終わり、最終的に本戦にまで勝ち残ったのはアリゲイツ達を含め十六匹。

「ここからは残り四匹になるまで四試合ずつのバトルだ！バトル開始と言いたい所だが、50分間の休憩だあ！観客の皆は今のうちに

用事を済ませておいてくれ！選手達は身体を休めていてくれ！休憩中は今大会スタッフによるシヨ―だ！楽しんでくれ！」

第九話：旅立ち・バトル大会開始（後書き）

数奇な運命のポケモン達って言う題は、その時代に産まれたポケモン達が今までに無いことを経験することになると思っただけだ。よな？

レントラー「何故疑問系なんだよ。俺は消えていくキャラじゃないよな？」

僕も分かってないから疑問形。あと君はすぐ消えるキャラじゃないから！絶対！

サンダース「俺は？」

出た！ロリコンサンダース！君はもうすぐ消えるよ。普通にね。

サンダース「嫌だ！まだこの世には俺のロリ心をもんもんとさせるロコンちゃんやピンプクちゃんやイーブイちゃんがいるんだあ！」

ライチュウ「はいはい。それはどうでもいいから大会の実況兼審判を抜け出さないでね」

サンダース「いやだ！まだ俺はロリのすばらしさを伝えてなくふっ！」

サンダースの腹に気合パンチが決まったね！じゃまなそれどうにかしてくれてありがとうライチュウ！

レントラー「あれはほつといて、次もよろしくな！」

… 木曜日の午後5時以降の投稿になると思う。

第十話：バトル大会 前編（前書き）

四話連続投稿実施！！

第十話：バトル大会 前編

「まもなく休憩が終わります。選手の皆さんはバトルフィールドへ戻ってきてください。」

「もう休憩終わりかあ」

「残ってるのは強い奴ばっかだよな！わくわくするぜ！」

マグマラシ達がバトルフィールドに出てくると観客が一気に盛り上がる。

「皆！予選を勝ち残り、本戦へ残った強者達を紹介するぜ！レントラー！ドンファン！マグマラシ！プラスル！マイナン！ベロベルト！ヘラクロス！アリゲイツ！ドクロッグ！ブニヤット！プテラ！ウインディ！チャーレム！ハリテヤマ！ピジョット！イーブイ！選手だ！」

「レントラー選手とベロベルト選手！ドンファン選手とヘラクロス選手！ブニヤット選手とプテラ選手！アリゲイツ選手とウインディ選手！バトルフィールドへ！」

アリゲイツがバトルフィールドへ入る。

「アリゲイツ頑張れよ！」

「それではバトルスタート！！」

アリゲイツのバトルが始まった。

「先手必勝！火炎放射！」

「うわ！水鉄砲！そして竜の舞！」

アリゲイツは技を相殺させ、素早さを上げてウインディに迫って行く。

「竜の舞か、ならこちらも高速移動から雷の牙！」

ウインディはアリゲイツに雷の牙で攻撃する。

「そんなの食らってたまるか！竜の舞！」

アリゲイツは竜の舞で自分のステータスを上げながら雷の牙をかわす。

「なら遠吠え！神速！そしてフレアドライブ！」

ウインディが火の玉と化してアリゲイツに技を決めた。

アリゲイツは壁まで吹っ飛び、倒れる。

「いつてえ！さすが本戦だな！」

炎技だったおかげで大ダメージを受けずに起き上がるアリゲイツ。

「もらった！雷の牙！」

「泥遊びから噛み砕く！」

二匹は互いに技を決める。アリゲイツは技が決まった後も噛み付いたままだ。

「やるな。だが甘い！雷の牙！」

「ぐわあああ！！…甘いのはそっちの方だけ？俺が噛み付いたまま技を受けてるのはなぜだと思う？」

「ま、まさか！」

ウインディは急いでアリゲイツを振り解こうとする。

「そ！噛み付いていれば素早さなんて関係ないし、技は絶対あたるからな！じたばた！そして水鉄砲！」

アリゲイツの作戦に引っかかったウインディ。今度はウインディが壁まで吹き飛ばされる。

「ぐ！まだだ、まだ私は倒れていないぞ！次の技が最後だ！」

ウインディがふらふらと立ち上がる。そして技を使う体制になる。

「俺も後一撃でも受けたら体力が持たねえ。俺も次が最後だ！」
アリゲイツも技を使う体制になる。

「高速移動！そして起死回生！！！」

「竜の舞からアクアテール！」

二匹の技がぶつかり、爆発を起こす。

「両選手、激しい技のぶつかり合いだったけど立っているのはどっちだあ！？」

煙が晴れ、立っていたのはウインディ。

「さすがだ……」

「勝者、ウイン……」

その時ウインディが倒れる。そしてアリゲイツが手を突いて立ち上がる。

「泥遊びで威力を弱めてなかったら負けてたな……」

「しょ、勝者アリゲイツ選手！アリゲイツ選手いいバトルを見せてくれたぜ！敗退したウインディ選手も相性が悪いのによく健闘した！二匹に拍手を！」

アリゲイツの勝利が伝えられたとたん、アリゲイツが倒れる。観客は拍手と歓声に沸く。

「アリゲイツ、休めよ」

「次はお前だな……頑張れよ」

他の三試合は、ドンファンとヘラクロス戦はドンファンの炎の牙が見事に決まりドンファンが勝利。

レントラーとベロベルト戦はレントラーが充電からのチャージビームが決まってレントラーが勝利。

ブニヤットとプテラ戦はブニヤットが催眠術をかけ、十万ボルトを放ったことでブニヤットの勝利。

「さすが本戦に残った選手達！いい試合を魅せてくれたぞ！次の試合も期待が高まる……！」

「次の試合はマグマラシ選手とピジヨット選手！イーブイ選手とプラスル選手！チャーレム選手とマイナン選手！ドクログ選手とハリテヤマ選手！バトルフィールドへ！」

マグマラシがバトルフィールドへ入る。

「バトルスタート……！」

マグマラシのバトルが始まる。

「先手必勝……エアスラッシュ……！」

「ピジヨット！敗退したウインディと同じ事言ってるぞ！負け文句か？遠吠え！」

攻撃をくらいながら挑発するマグマラシ。

技ではないので攻撃技しか出せなくする効果は無いが、怒った相手は隙を作ることになる。

「うっ！！痛いところを〜！」

そう言うピジヨットを無視して攻撃するマグマラシ。

「遠吠え！火炎放射！」

ピジヨットは空を飛んで回避する。

「高速移動！フェザーストーム！」

フェザーダンスと竜巻を合わせた攻撃がマグマラシにあたる。

マグマラシの攻撃力が元に戻り、ひるんでしまう。

「もらった！鋼翼打！」

鋼の翼と翼で打つのコンボ技が迫る。

「なら…二度蹴り！」

マグマラシはピジヨットの鋼のようになった翼をけり、避ける。

「もう回復したのか！運のいい奴め！騙し討ち！」

ピジヨットの騙し討ちが決まる。

「どうした。本戦に残ったお前の力はそんなものか」

「いいや。これはわざとだ。遠吠え！フレイムボール！」

丸になると転がる、そして火炎車の組み合わせ技だ。

「そんなもの地上にいなければあたらなぞ！」

「その技が空中まで届くとしたら？二度蹴り！」

マグマラシは地面を蹴り、その反作用でピジヨットに向かって行く。

ピジヨットは急に方向を変えて自分に向かってきたマグマラシに対

応できずに攻撃を受ける。

「これでどうだ！俺をなめるな！遠吠え！」

「羽休め！確かに今のは効いたが私を倒すにはまだだな」

体力を回復し、空へ飛び立つピジヨット。

「やっぱり羽休め使えたか！なら俺が受けてきたダメージも無駄じ

やないな！遠吠え！」

「何分からん事を言っている！」

もう既にぼろぼろと言っても過言ではないマグマラシ。

「遠吠え！それに煙幕！」

マグマラシの口から煙が出てフィールド一杯に広がる。

「そんな物！フェザーストーム！！」

フェザーストームを使って煙幕を取り除いたピジヨット。しかしそこにマグマラシの姿は無い。

「どこへ行った！？」

「ここだ！」

ピジヨットの上からマグマラシの声が聞こえてきた。

「何！？」

「フレイムボール！！」

ピジヨットは回避する暇もなく攻撃をくらう。

「ぐあっ！！」

「これでどうだ！」

「まだまだ！羽休め！」

ピジヨットは地上に降り立ち、体力の回復を謀る。

火炎放射を使い着地したマグマラシ。

「もらった！！起死回生！！」

飛行タイプがなくなったピジヨットに起死回生が決まり、戦闘不能になる。

「勝者マグマラシ選手！！体力を全回復したピジヨット選手の上を取ってからはわずか数秒で倒したあ！！」

「ど、どうやって私よりも上に……」

「煙幕を使ったらお前がフェザーストームを使うと踏んでいたからな。その気流に乗りながら火炎放射の反作用で上に行った」

「そうだったのか。なら何故…私がフェザーストームを使うと分かった……」

「俺が遠吠えを連発してたから攻撃の能力を下げ、煙幕を払おうとするだろ。だったらフェザーストームを使うと思ってな。遠吠えはフェザーストームを使うように仕向けるための布石だったって訳だ……」

「そうだったのか……」

そう言っただけピジヨットはナースライチュウ達に運ばれていく。

イーブイとプラスル戦はイーブイの適応力をフルに使った電光石火からの突進が決まりイーブイの勝利。

チャーレムとマイナン戦はマイナンのアンコールと充電からの雷によってマイナンの勝利。

ドクログとハリテヤマ戦はハリテヤマの地球投げでドクログは倒れ、ハリテヤマの勝利。

「本戦第一試合が終わったあ！第二試合の組み合わせはドンファン選手とマイナン選手！レントラー選手とブニャット選手！アリゲイツ選手とハリテヤマ選手！マグマラシ選手とイーブイ選手だ！！」
第二試合の組み合わせが発表され、選手達は休憩に入る。ライチュウ達が選手の体力や怪我を回復させていく。

第十話：バトル大会 前編（後書き）

大会予選まで書いてたら長くなりそうなのでそこからへんは大まかにさせていただきます。

第十一話：バトル大会 中編（前書き）

なんか中編になってしまいました。

マグマラシ「物凄くサンダー스가うざく感じる…」

マグマラシ、ごめんね？サンダースをいろいろ変に考えてたらあんな感じに…

ゆるしてね？ということで、

『スタート！』

第十一話：バトル大会 中編

「ドンファン選手とマイナン選手！レントラー選手とブニヤット選手！アリゲイツ選手とハリテヤマ選手！マグマラシ選手とイーブイ選手！休憩は終わったぞ！バトルフィールドへ！」

「イーブイ選手！」

「は〜い！サンダースさん、なんですか〜？」

「イーブイちゃんと呼ばせてもらっても？」

「うん！いいよ！」

「じゃあ、イーブイちゃん応援してるから頑張って〜！」

「サンダースさんなんかよりマグマラシさんに応援してもらいたいな〜」

イーブイの言葉でもものすごく落ち込むサンダース。

「なんか…なんか呼ばわり…って…俺よりマグマラシの方がいい…」
観客からは笑い声や同情する声。

選手一同『落ち込んでるところ悪いが始めてくれ』

「俺なんか…俺なんて…」

まだ落ち込むサンダース。聞こえていないようだ。

「サンダースさ〜ん。始めて〜！」

「イーブイちゃん！！分かった！！イーブイちゃんのためにもこの試合を…」

「長いよ〜。早く始めてくれないサンダースさん嫌い！！だから早く〜！！」

「イーブイちゃんのために！バトルスタートオ！！！」

イーブイの言葉で急いで試合を始めるサンダース。
マグマラシの試合は…

「火炎放射！」

「電光石火〜！くすぐる！」

イーブイはマグマラシに近づいてマグマラシをくすぐる。
「やめる〜！」

笑いながら言うマグマラシ。イーブイはそれでもやめない。
「やめる。睨みつける！」

イーブイは睨みに怯えたのか泣いてしまう。

「マグマラシ選手！イーブイちゃんを泣かすなんて！」
観客からもブーイング。

「電光石火から突進！」

「うおお！泣いてたんじゃ？」

「嘘泣きだよ〜！切り札！」

イーブイの攻撃を避けていくマグマラシ。

「切り札！」

「また！？二度蹴り！」

「きゃ！痛い！ふえ〜ん」

「マグマラシ選手！またイーブイちゃんを〜！」
観客もまたブーイングをする。

「電光石火から突進！」

イーブイの奇襲を次々避けていくマグマラシ。

「ものすごく戦いづらい……」

「電光石火から切り札！」

「ぐわあ！」

マグマラシに大ダメージ。

「やっとあたったあ！ど〜お？ブイちゃんのアタックは！」

「最高だよ〜ブイちゃん！」

「適応力を使ったタイプ一致の攻撃って強いな……」

「最後！のろい！のろい！のろい！のろい！のろい！のろい！」

「ちょ！のろいしすぎ！」

「電光石火から切り札！」

イーブイが迫る。

「こうなったら……！……！……！避ける。身代わり」

「え？」

イーブイはマグマラシの作り出した身代わりと一緒に壁に激突した。マグマラシの身代わりは消え、イーブイは気絶する。

「イーブイちゃんをよくも！！勝者！イーブイ選…アチィ！」

「いい加減にしる！ロリコンサンダース！」

マグマラシの火炎放射で焼かれるサンダース。

「分かったから火炎放射やめろ！」

マグマラシは火炎放射をやめる。そこにアリゲイツがアクアテールをお見舞いする。

「不本意ながら勝者…マグマラシ…選手……………」

サンダースはダメージが大きかったようで気絶した。

観客からはブーイングが…なかった。

観客のほとんどが団結してサンダースの言葉に悪ノリしていたようだ。

アリゲイツのバトルは…

「…猫だましてごわす」

「うお！びっくりした！」

猫だましてひるむアリゲイツにハリテヤマはさらに攻撃しようとする。

「腹太鼓！はっけいでごわす」

「危なすぎる！竜の舞！」

アリゲイツはかわしてから竜の舞で能力を上げる。

「吹き飛ばしでごわす！」

「何故語尾がごわすだ！」

吹き飛ばしで空中に飛ばされながら言うアリゲイツ。

「昔、彼女のゴーリキーがつける事を薦めたんでごわす。地球投げでごわす」

「ゴーリキーが彼女！？じたばた！暴れる！」

アリゲイツは投げられる前にハリテヤマの手から逃れ、着地する。

「竜の舞から噛み砕く！」

「突っ張り防御でこわす」

「ぶ！」

ハリテヤマは突っ張りでアリゲイツの噛み砕くを防御する。

「アクアテール！」

「もう一度突っ張り防御でこわす」

「ぶえ！あゝもうその防御の仕方嫌だ！水鉄砲！」

「吹き飛ばしでこわす」

アリゲイツの水鉄砲は吹き飛ばされ、再びアリゲイツは宙に浮く。

「地球投げでこわす！」

「またかよ！その攻撃はくらいたくねえ！泥遊び！水鉄砲！」

「どこを狙っているでこわすか」

アリゲイツの放った技は地面にあたる。

そしてアリゲイツは地球投げをくらう。バチャ！という音と共にア

リゲイツが地面にぶつかる。

「うえゝ！泥が口の中に入った！」

「なぜそんなに元気なんでこわす？」

「自分で作った泥をクッションにしただけだろ」

「そうだったんでこわすか」

「……！」

何かを思いついたアリゲイツ。

「お前、ちよつと聞くけど氷に炎技をあてたらどうなるか三文字以内で答えてみる」

「……うゝゝゝうゝゝんゝゝ」

「馬鹿だ。絶対馬鹿だと思っ」

「うゝん」

「今のうちに…水鉄砲連発！」

アリゲイツは地面に水鉄砲を撃つ。

「氷の牙より威力が落ちるけど…いつか。アイスクロー！」

氷の牙を爪に応用したアイスクローによって地面が見る見るうちに

凍っていく。ハリテヤマの足元も凍っていく。

「うーん」

「竜の舞連発！」

アリゲイツは能力を最大まで上げた。まだハリテヤマは考えている？

「アクアテール！！」

ハリテヤマは目を開けて、口を開く。

「わかったでござす！答えは……」

高速、高威力になったアクアテールがハリテヤマにクリーンヒットする。

「溶ける……って不意打ちとは卑怯でござす……！」

「な！あれをくらって倒れないなんて！どれだけ耐久力あるんだよ……！」

「考えてるふりして途中眠るを使っただけでござすが？」

「寝ていたのか！うーん……っていうのはいびきか！」

「よくわかったでござすな。おいどんはいびきがうーんなんでござす」

アリゲイツの思い付きを見事に利用したハリテヤマ。

「じゃあもういちどアクアテール！」

「くらわないでござす！突っ張り！でぶあ……！」

ハリテヤマは突っ張りで防御しようとしたが足が凍り付いていてこけてしまった。

「チャーンズ！」

そこにアリゲイツのアクアテールが決まる。

「でぶあ……って変な……」

「あ、勝者！アリゲイツ選手……イーブイちゃんをよくも……！勝者！イーブイ選……アヂイ！」

「いい加減にしる！ロリコンサンダース！」

マグマラシの火炎放射で焼かれるサンダース。

「分かったから火炎放射やめろ！」

「サンダース……お前は……！アクアテール！」

アリゲイツもサンダースに怒りアクアテールをお見舞いする。
それによってマグマラシの火炎放射によってついた火は消えたが、
サンダースは大ダメージを負った。
ドンファンとマイナンの試合はもちろんドンファンの勝ち。
レントラーとブニヤット戦はブニヤットの催眠術やメモメモに精神力で打ち勝ったレントラーの勝利。
サンダースはダメージが大きかったので実況が換わる事になった。

第十一話：バトル大会 中編（後書き）

アリゲイツ「フィニッシュ！」

おいおい終わってどうするよ！

中編なのに終わるとかありえないから！

マグマラッシュ「イーブイ戦いづらかった。アリゲイツは何度も宙に浮いてたみたいけどな」

アリゲイツ「ハリテヤマの彼女がゴーリキーだったんだぜ！？しかも昔って言うてるし、今も続いているか別れたか」

ハリテヤマ「ゴーリキーとはい…今も続いているでござす…！」

その話はもういいから次の投稿させてくれ…！！

第十二話：バトル大会 後編（前書き）

やっとバトル最後…

第十二話：バトル大会 後編

「えー実況を務めていたサンダースが気絶し、実況が続けられないのでサンダースに代わりロトムが務めさせていただきま〜す？」

最後にクエスチョンマークを付けたロトム。

「今大会ベストフォーに入ったのは全員がルーキーだあー!!」

「まず、その転がりて相手を弾く！ドンファン選手！」

「雷の如き速さで相手を翻弄するレントラー選手！」

「その根性で逆転劇を見せてくれたアリゲイツ選手！」

「その容姿は赤き炎の姫、マグマラシ選手だ！」

四匹の名前が呼ばれる度に、観客が歓声をあげる。

「選手の紹介が終わったところでバトル開始するぜ！皆盛り上がってくれよ！！それではマグマラシ選手、ドンファン選手、バトルフイールドへ！」

「戦う前から結果は見えておる。この勝負お主の負けでござろう。無駄な怪我をせぬうちに降参せられい」

「ドンファン選手がマグマラシ選手に対して勝利宣言！よっぽど自信があるようだー!!」

「そう言われると意地でも勝ちたくなるんだよな」

「それではバトルスタート!!」

「マグニチュード!!」

マグニチュード4がマグマラシに向かう。空はいつの間にか暗雲が立ち込めている。

「くらっか!!」

マグマラシはジャンプしてかわす。

「主のその隙、もらった！雷牙転！」

雷の牙、丸くなる、転がるの合わせ技にさらに高速スピンドで速さを上げた技だ。

「それくらったら死ぬって！火炎放射！」

マグマラシは迫ってきたドンファンをかわすために火炎放射を放って滞空時間を稼ぐ。

ドンファンの攻撃ははずれ、ドンファンは壁に激突する。

「すげえ破壊力…壁が…」

壁は半径5メートルくらいに穴が開いている。

「わしの特性が頑丈なればこそこの技」

「関係あるのか？遠吠え三連発！」

「わしの突進の威力、とくと見よ！突進！」

「危ねえ！身代わり！」

マグマラシは横に逃げ、分身を作り出す。

「ぬ、身代わりとはこしやくな。突進！」

「煙幕！」

マグマラシ達は煙幕をして姿を隠す。

「何も見えぬ…高速スピン！そしてマグニチュード！」

煙幕が高速スピンの作り出された気流で無くなっていき、マグニチュード6が発生する。

「火炎放射！」

マグマラシ達はジャンプの後火炎放射で再び滞空時間を稼ぎ、安全に着地する。

暗雲から雨が降ってきた。

「ダブルフレイムボール！」

マグマラシ達は煙幕を払い除けている気流の中心へ向かって技を放つ。

ドンファンはマグマラシ達の攻撃を受け、吹き飛ばされる。

「ぐっ！おのれ！雷牙転！」

「ダブルフレイムボール！」

「その技はくらわぬ！マグニチュード！」

ドンファンは技を解除し、マグニチュードを使う。マグニチュード10が発生し、マグマラシ達にあたる。身代わりは消えてしまった。

「ぐわあああ！」

効果は抜群で、マグマラシはもつふらふらだ。

「辛かるう。そろそろ負けを認めぬか」

「いやだ…」

「ならば負けるがいい！雷牙転！」

ドンファンが迫ってくる。マグマラシはダメージが大きいようでもく動けない。

「動け…動け！」

マグマラシの目の前まで来たドンファンが急に方向を変え、壁に向かって行った。

「！泥のせいで滑ったのか！今しかない！」

マグマラシはドンファンに近づいていく。ドンファンは瓦礫の上でひっくり返っている。

「お、起き上がれぬ！」

「くらえ！起死回生！！」

起死回生が決まり、ドンファンが気絶する。

「勝者！マグマラシ選手！！アリゲイツ選手、レントラー選手！バトルフィールドへ！」

マグマラシは体力の限界が来たのか倒れ、ライチュウ達に搬送される。

アリゲイツとレントラーがバトルフィールドへ入る。

「それでは、バトルスタート！！」

「充電！」

「竜の舞五連続！！」

アリゲイツは能力を上げ、とてつもない速さで移動している。相手が電気タイプということもあり、短期決戦にするようだ。

「速いな…。しかし雨が降っているのを忘れてはいないだろうな！」

「それがどうした！アクアテール！」

レントラーはアクアテールをくらって吹っ飛び、壁にぶつかる。

「ぐあ…！…放電！」

「ぎゃあああ！」

アリゲイツの身体をハリーセンやノクタスの針が刺さったようなものの数倍の痛みが駆け巡り、アリゲイツは倒れる。

「終わったな。審判兼実況のロトム、宣言を」

「はい。勝者：？ア、アリゲイツ選手はまだ戦えるようだ！！」

「何！？」

「竜の舞！じたばた！」

レントラーは吹き飛ばされ、再び壁にぶつかる。

「まだそんな体力が残ってたのか…」

「俺をなめんなよ？」

「次で最後だ。充電、そして雷！」

「俺も最後だ！じたばた！」

レントラーの放った雷のほうが多く、アリゲイツは気絶してしまっ

た。「勝者レントラー選手！アリゲイツ選手、惜しかったぞ！！ポワル

ンさん、天気を晴れにしてください。レントラー選手、休憩です」

「ほえ〜い」

よく分からない返事をしながらポワルンは姿を変え、天気を晴れにする。

晴れになってから数分後：

「マグマラシ選手とレントラー選手の体力を回復できたでしょうか？」

その声に、デンリユウとライチュウがOKのサインをする。

「それでは、二匹ともバトルフィールドへ！」

「俺はレントラー。決勝に残った者同士、仲良くしようぜ！」

「俺はマグマラシ。よろしくな！」

「用意は良いか？バトルスタート！！」

「充電！」

「遠吠え！電光石火！」

マグマラシの電光石火が決まる。

「チャージビーム！」

レントラーのチャージビームがマグマラシに迫る。

「身代わり！」

マグマラシはチャージビームを避け、身代わりを作り出す。

「なあ、俺の分身。もっとたくさん身代わりしてくれ」

「何でお前はしないんだよ！」

「何を話している！チャージビーム！」

「俺がすると体力が減るからな。お前は蓄積できるダメージが少なくなるだけだろ？煙幕！」

「分かったよ！身代わり！身代わり！身代わり！身代わり！身代わり！身代わり！身代わり！身代わり！身代わり！」

マグマラシの分身は二匹、四匹、八匹と倍になっていく。そして六十四匹になる。

「煙幕か！どこから攻撃が来るか分からないな！なら、充電四連続！」

レントラーは充電を始める。

『遠吠え！』

一斉に遠吠えをするマグマラシ。

「うお！一体何匹いるんだ？」

「分身の俺達！全員で次々にフレイムボールだ！」

『フレイムボール！！』

「ぐあ！！ぐふっ！！」

マグマラシの分身は次々とレントラーに攻撃をしていく。自分の攻撃による小さな反動も耐え切れずに次々と消えていく。

「これ以上は…やばい！放電！」

一斉に消えていくマグマラシの分身たち。

「火炎放射！」

マグマラシ本体は火炎放射で放電を打ち消したようだ。

「マグマ…ラシ！…ハア…ハア…お前は…分身を使わなければ…俺にすら勝てない臆病…者だったのか？」

「何だと！？」

「俺が“威張る”のが…気に入らな…いのか？かかって…こいよ！」

「火炎放射！転がる！電光石火！」

マグマラシの放った技は全てあらぬ方向へ飛び、マグマラシは壁に自分をぶつけて痛めつけている。

「威張る成功…」

レントラーは威張るをしてマグマラシを混乱させたのだ。

「連続充電…」

レントラーは充電し始める。

マグマラシはまだ混乱している。

「充電…完了！雷！」

「ぎゃあ！」

マグマラシは雷にあたり、その場に崩れ落ちる。マグマラシからは煙が出ている。

「これで…どうだ！」

「…ハア…ハア…威張るしてたのか…ただ挑発してきたのかと思っ
てた」

「ハア、ハア…マグマラシ、俺は次の攻撃が最後だ。全力で打つか
らな」

「俺も…さっきの雷のダメージが…大きいからたぶん次が…最後だ
…」

「最大充電！」

「連続遠吠え！」

「いくぞ！雷！」

「起死回生！」

二匹の技はぶつかり、爆発が発生し、煙が視界を遮る。

「両者激しい技のぶつかり合いだったぞ！最後に立っているのはど
っちだ！？」

煙がうすれていく。

「立っているのはレントラー選手かマグマラシ選手か？」

「マグマラシ…俺が負けたそいつにお前まで負けないでくれよ！！」

煙が消える。

「なんと両者とも立っていた!!」

「さすがだな……」

「お前もな……」

そう言つて二匹は同時に倒れる。

「決勝戦!まさかまさかの引き分けだあ!!……よつて両者とも優勝とします!!」

その声を聞いてマグマラシの意識は途切れる。

第十二話：バトル大会 後編（後書き）

ポワルンの登場が遅くなった理由は何か知らないが、ポワルンがそこらへんにある店とかに寄っていて、見つけるのが難しかったらしい。

マグマラシ「要は、抜け出したか何かして見つけれなかっただけだろ？」

ポワルン「ふ、ふえ〜なんでわかったの〜？」

マグマラシ「作者の話し振りと、さっきそこを通ったロトムのおバカな、そうなんだ…ロトムって意外と苦労ポケモンなのかな？」

第十三話：レントラー（前書き）

題から推測できるようにレントラーです。

レントラー「俺はレントラー。よろしくな！」

おお。素早い挨拶だね。

『どっこい！』

第十三話：レントラー

大会が終わり、意識の無いマグマラシの代わりにアリゲイツが賞金を受け取った。

アリゲイツ自身も表彰台上り、表彰された。

そしてここはポケモンセンター…

「おーい！マグマラシ〜！」

「レントラー〜！」

レントラーがマグマラシ達のところへほどほどの速さで走ってくる。あまり速く走るとライチュウ達に怒られるからだ。

「マグマラシ、いいバトルだったな！」

「そうだな！レントラーって強いんだな！」

「お前も俺と引き分けになっただろ。十分強いぜ！！」

「レントラー！あそこで雨が降っていなかったら俺は勝っていたからな〜！」

「アリゲイツ、負けは負けだろ。それとももう一度バトルして俺の雷をくらうか？」

「望むと…も〜…」

アリゲイツの口をふさいでいるマグマラシ。

「なあ、レントラーはこの町に住んでいるのか？」

「ああ！すぐそこだし、何なら寄って行くか？」

「いいの〜？」

口をふさいでいたマグマラシを払い除けて言うアリゲイツ。

「いいぜ〜！」

マグマラシ達はレントラーの家に行く事になった。

しばらく歩くとレントラーが立ち止まる。

「ここが俺の家だ」
「こ、これは！すげえ…小っせ…」
アリゲイツがそう言うのも無理は無い。
アリゲイツも目の前にあるのはせいぜい一辺三メートル位の立方体をした建物。

「やっぱそう思つか！実際はもつと広いぜ！」

「中が外よりも広いのか？」

「…まあ、そんなところかな？」

「異次元にでも繋がってんのか！？」

「いいや。まあ、中に入れよ。分かるから」

「邪魔するぜ！」

「御邪魔します」

「狭！！」

「そこにじつとしてるよ…」

レントラーは尻尾を鍵穴のようになってる所にいれ、電気を流す。
そして扉が閉まる。

「何してるんだ？」

そうマグマラシが聞いたとたん、部屋が揺れ、落下していく。

「部屋が！？」

部屋の動きが止まり、扉が開く。

「え！？どういうこと？」

目の前にあるのは広い部屋。

「何でだ！？」

「なんだかんだと聞かれたら、答えてあげるが世の情け…という事でここが俺の家だ。さっきのはエレベーター式の入り口だ」

「すっげー！！」

ものすごくはしゃいでいるアリゲイツ。

「お前等はどうしてこの町に？」

「ジムや、遺跡とかを巡って行く旅の途中でこの町に寄ったんだ」

「したら、バトル大会が開催されてたからそれに参加したって訳だ」

「そうか。なら、その旅俺も連れて行ってくれないか？」

「「良いぜ！」」

「サンキュー！今日は泊まってくれ！」

「なあ、いくつか聞いていいか？」

「何だ？」

「あのバトル大会って今日急に開催されたのか？」

「よくわかったな。あの大会は一年間でランダムな日に急遽開催されるからエレクトタウンの周囲一キロメートルの範囲のポケモンを集めて開催される。だから出場選手は主にエレクトタウンに住んでいるポケモンとそこらをたまたま通りかかったポケモンだ」

「そうなのか。だから相手が強すぎる事が無かったのか！」

「そういうこと！」

「じゃあ次の質問だ。エレクトタウンは主に地下に作られてるのか？」

「そうだ。エレクトタウンは他の町よりもハイテクだが、環境を破壊しすぎるのは良くないという事から、主に地下に住居などを建てるんだ。建てるとは言えないかもな」

「そうか」

「なあ、レントラー。腹減ったから何かあさつてもいいか？」

「アリゲイツ。俺が料理作ってやるよ」

「俺も手伝う！」

「マグマラシ、こっちでこれを煮てくれないか？」

「おう！」

「マグマラシ、レントラー俺は何してればいい？」

「レントラーどのくらいだ？」

「沸騰してから三分。その後器に盛り付けてくれ」

「おうい。俺は〜？」

「よし、このくらいの味付けで良いな！」

ほっとかかっているアリゲイツ。結局、料理が出来あがるまでほっとかれた。

「マグマラシ、これを運んでくれ」

「それなら俺が！」

「アリゲイツはこれを」

「うまそうだな〜！」

「当たり前だ！俺らが腕によりをかけて作ったんだぞ！」

三匹は料理を運び終えた。

『頂きま〜す！！』

アリゲイツが料理にかぶりつく。

「なあ、味はどうなんだ？」

「……………」

レントラーが味を聞くがアリゲイツはだまる。

「どうなんだよ？」

「うまい」

「それだけか！？」

「ああ、それ以上言うとも長くなるけどいいのか？」

「いいから言ってくれ！」

「じゃあ…このスープはこのフィラの実を使ったたる？そしてこのフィラの実の辛さと甘苦い味の…。そうだな…これはナナの実だな。それらが他に使われている木の実の味とうまく混ざって争わず、フィラの実とナナの実を引き立たせ、それでいてそれらの木の実が消えているわけでは無い…。滑らかな舌触りだが程よい辛さが後味を残さずにつきりとしている。そしてこっちの木の実リゾットは…」

一匹喋っているアリゲイツ。ベロリンガ並みの舌を持っているのかと思うほどの確に使っている木の実を当てる。

「凄いな…」

「だろ？アリゲイツは料理の事は結構敏感で、俺等の町の学校では味の判定人みたいな存在になってたんだ。それにプロの味の批評家と全く同じ答えを何度も出して、実力も結構あるんだ。料理の天童とも呼ばれてるしな！だからアリゲイツを唸らせる事が出来た

「その料理はとてつもなくうまいって事だ」

「そういえばお前達の町ってどこだ？」

「アトリユートタウンだ」

「あの！？お前らってアトリユートタウンのポケ校出身！？」

「あのって？」

「なんか今年物凄いかわいい が卒業したって聞いたぞ」

「そんなのいたっけ？アリゲイツは知ってるか？」

「俺に話させるだけ話させて聞いてなかったんだな…しらないけどよ…」

「言ってくれと言われて言ったのに無視されてしょんぼりするアリゲイツ。」

「そうか…第一進化を終えた炎タイプのポケモンで、腹側に黄色い毛を持つって聞いたんだが」

「そうレントラーが言ったとたんアリゲイツが笑い転げ、マグマラシは黙り込む。」

「ど、どうした？俺何か可笑しい事言ったか！？」

「ああ、十分可笑いぜ！！その物凄いかわいい っていうのはマグマラシの事だからな！！」

「え！？マグマラシって大会では で登録してたけど だったのか？」

「アリゲイツは余計笑い転げる。」

「 であってる！それによく に見間違えられるだけだ！！」

「という事は…お前がポケ校の炎タイプの物凄いかわいい ！？」

「レントラーもアリゲイツと一緒に笑い転げた。しばらく経って笑い終えたレントラーにアリゲイツは背を叩きながら言う。」

「マグマラシが噂の元で残念だったな！」

「残念じゃないけどな。とりあえず食べ」

「料理を食べ終えた三匹はその後寝るまで話をしたり何故か勃発し」

たバトルをして楽しんだ。

第十三話：レントラー（後書き）

なんか、他の人の作品をパクって書き換えただろっていう目で見られてるかもしれないな」と思ったら結構落ち込めた。実際ある程度はくったから…

マグマラシ「俺等はパクリ存在！？」

うーん、まあバクフーンさんのバクフーンの冒険の主人公であるバクフーンを好きになったからこうしてマグマラシが主人公の一匹に存在はパクリではないけど存在概念が影響されたから、完全には否定できない…。

第十四話：図書館（前書き）

背景描写が少ない（全く無いといっても過言ではない）という指摘があつたので、多少増やしてみました。

縦書きで読んでいる方には！！が違和感があるらしいのですが、変えるつもりはありません。

音符「《 》」は使わないほうがいいのでしょうか？返事があつた場合、多数決で決めさせていただきます。返事が全く無かつた場合、使ってもいいと判断させていただきます。期限は二月二十日になります。次話も二十日です。

第十四話：図書館

【レントラー視点】

俺達は俺の家を出て図書館に来た。

「でっけ〜!!」

アリゲイツ、お前の町にはこれと同じくらいの大きさの図書館があるはずだぞ。

お前は図書館に一度も行った事が無いのか？

「この図書館は調べたい物についてのキーワードさえ分かっていたら全部の本が見つかるんだ」

「なぜに？」

「コンピューターで制御されてるからな」

俺達は入り口にネイティオの銅像がある図書館に入る。

この銅像はカメラがついている。その映像を一度でも捕まったことのある犯罪者の写真と照合する事ができ、そして犯罪者だと認識された場合は図書館が武装モードになる…らしい。噂だが。

「何について調べるんだ？」

「俺は各地のジムとかバトル大会!!」

…やっぱりアリゲイツはバトル好きなのか。それともバトル馬鹿なのか…

「俺は…やっぱり伝説や遺跡とか。あと幻・伝説・神のポケモンについて」

「じゃあ俺も役立ちそうなこと調べとくぜ!!」

「ありがとうレントラー!!」

マグマラシが満面の笑みで俺に感謝の気持ちを伝えてくる。

やばい。マグマラシが だと知らなかったら絶対付き合ってくれと言ってるな…。

のように丸みを帯びた輪郭。柔らかで明るい笑顔。その笑顔で言われると だと分かってはいるが、ドキドキしてしまうくらい可愛

い。

……アリゲイツはこんなに可愛いマグマラシがいつもそばにいるのに平然としているな…アリゲイツが変なのかそれとも…俺がホモになっちゃったのか!?

もしホモだったら俺のポケ生終わったかもな…。

「なあアリゲイツ。レントラーが図書館に入るなり落ち込んだぞ。

なにかこの図書館で嫌なことがあったのかな？」

「俺に聞くなよ！レントラーの過去を知ってるわけ者無いんだから！レントラーに聞けよ！」

「そうだよな。…レントラーこの図書館で嫌なことでも思い出したのか？何なら外で待つか？」

「いいや！そんなんじゃない。考え事してただけだ！ほらさっさと調べるぞ！」

マグマラシ。お前が関係してる事で悩んでんだよ！ちよつと声が変になってしまったな…気付かれなければいいが…

【マグマラシ視点】

アリゲイツと一瞬落ち込んでたレントラーはそれぞれ分かれて目的の本を探しに行った。

はつきり言つてこの図書館はとてつもなくでかい。城と比べても引けを取らないくらい。

端から端まで走つても三十分かかるそうだ。受付らしきところにいたネイティに聞いたんだが。

俺の探してる本にたどり着くまでに相当な量の本の背表紙を見た。

それだけで気分が悪くなるくらい。

匂いは…古い本と新しいインク…それにスカタンクの臭い!?臭い！鼻が！鼻が！

逃げなきゃ鼻がだめになる! ……あ、探してた種類の本みつけ。臭いは無いな。

「神話…伝説…遺跡…幻…神…これでいいか」

俺の前足?の中には何冊もの本が。俺はふらつきつつも四足歩行ポ

ケ用の読書テーブルにつく。

「何々…タルミ先生の話で出てきたのもあるな。…これは神話？」

「始まりにあったのは混沌のうねりだけだった。全てが混ざり合い、中心に卵が現れた」

「こぼれ落ちた卵より最初の者が生まれ出た」

「最初の者は二つの分身を作った。時間が廻り始めた。空間が広がり始めた」

「さらに自分の体から三つの命を生み出した」

「二つの者が禱るとものと言うものが生まれた」

「三つの者が禱ると心というものが生まれた」

「世界が創り出されたので最初の者は眠りについた」

「最初の者って誰だろう？」

この神話を読んでから何か変だ…

《…………》

今、何か聞こえたような…

…気のせいかな。さて、続き続き。

「3匹のポケモンがいた」

「息を止めたまま湖を深く深く潜り、苦しいのに深く深く潜り」

「湖の底から大事な物を取ってくる。それが大地を作るための力になっっているという」

「ふー。これも誰なんだ？」

《…………》

なんだ？また何か聞こえたような……………まあいいか。

えっと、次の本は…伝説のポケモンの本か。

あとでアリゲイツ達にも教えなきゃな。

【通称視点】

アリゲイツが心配で様子を見ようとアリゲイツを探しているレントラー。

アリゲイツは読書スペースとして設けられた場所にある机に向かつて読書…ではなく机に突っ伏して寝ている。涎は垂らしていないが。

アリゲイツがかじりついたと思われるアンティークの机の頑丈さには恐れ入る。

アリゲイツを見つけ、近寄るレントラー。

「アリゲイツ寝てるし！」

やはりレントラーの心配は当たっていたようである。

「仕方がない…俺が調べるか…」

そう言っただけでどこかへ行くレントラー。

しばらく経って、調べ物を終えたマグマラシはアリゲイツの所に来た。

マグマラシはアリゲイツの読んでいたと思われる本を片付けてから、何も言わずに図書館の外へ引きずっていく。それだけで十分はかかる。

「…火炎放射」

マグマラシは炎が燃え移りやすい物が周りに無いことを確かめてからアリゲイツに向かって炎を吐き出す。

「……熱っ！あちい！！」

炎で焼かれて起き、あたりを叫びながら走り回るアリゲイツ。

「マグマラシ！何すんだ！」

「俺が調べ物をしているときにおまえはぐっすり寝ていたから起こしたただけだろ」

「だからって焼くことは無いだろ！」

「図書館に戻るぞ」

図書館の中へ再び入ったマグマラシ達。

「お！二匹ともいたな！何をしたのかは知らないが、アリゲイツが寝ていた所に行ってもいなかったから探したんだぞ！」

「ごめんな。どこかのワニを懲らしめてたから外に行ってたんだ」

「アリゲイツ。お前の言っただけでジムとバトル大会のことについて調べておいたぞ」

「サンキュー！」

「じゃあ調べたことについて言うか。俺はこんなのを見つけた」
マグマラシが読んだ本の内容をかいつまんで説明する。

「次は俺だな」

レントラーも同じようにかいつまんで説明する。

アリゲイツは：もちろん何も言えない。

その時、外で大きな爆発音がする。

「何だ！？」

「行ってみようぜ！」

アリゲイツを先頭に走って図書館を出るマグマラシ達。

「数年前、紅くて暖かい石を拾った奴！出て来い！！そしてその石を渡せ！」

町の中心付近の少し開けた場所で暴れているマタドガス、カモネギ、パッチールの三匹組。

「やめる！」

アリゲイツが正義のヒーローの如く三匹組に言う。

「あゝあ、アリゲイツの奴、面倒なのに巻き込んでくれたな……」

「止めると言われて」

「止める奴が」

「どこにいる……！」

お決まりの台詞のように三分割して言う三匹。

「それもそうか」

三匹の言葉に納得してしまうアリゲイツ。

「でもやっぱ止めてくれねえか？」

「……うるさい……！」

「ヘドロ爆弾！」

マタドガスの奇襲のヘドロ爆弾を避けるアリゲイツ。

「エアカッター……！」

「まねっこ……！」

カモネギのエアカッターを真似てエアカッターを出すパッチール。
「先に手を出したのはお前だからな！」

そう言いながらエアカッターを避ける。

「連続竜の舞！」

「え、ちょ！ちょっと！何そのわてらが確実に負けるような流れ！止めて！止めて！」

「止めると言われて止める奴がどこにいる？」

三匹の言葉をそっくりそのまま返すアリゲイツ。

「あ！でも！ちょっと！危ないって！吹っ飛ぶって！」

「アクアテール！！！」

三匹はアクアテールで吹っ飛んで、空の星になった。

「あ、一匹で片付けてくれた」

「なあ、アリゲイツ。吹っ飛ばすよりも警察に突き出したほうが良かったんじゃないか？」

「あ！…わりいレントラー。それは思いつかなくて…」

「まあ、一件落着いたし、今日はレントラーの家に泊まって明日出発しようぜ」

「そうだな。アリゲイツ、置いてくぞ〜！」

三匹は再びレントラーの家に泊まった。紅くて暖かい石という物に興味を抱きながら。

第十四話：図書館（後書き）

紅くて暖かい石というのはポケダンをやった人には分かると思いますが名前公表！

その名も…日照り石！

マグマラシ「ふ〜ん」ぱちぱち……

何そのどうでもいいと言わんばかりの反応！

マグマラシ「見られるかどうかさえ分からない物なんだから」

よし！マグマラシの日照り石に関する記憶を消しちゃえ！メモリー

コントロール！

あ、ミスった。メモリーデリートだったっけ？あれ？何だったっけ？

第十五話：別れの森（前書き）

前書きはポケモン達に任せることにするよ。

タルミ「そ、そんなあ。心の準備が……」

タルミ。フローゼルが怖いから止めて。

マグマラシ「今回は三匹組が出てきます。と……へへ新たな奴等が出てくるんだな」

アリゲイツ「ふつとばそーぜ！」

レントラー「悪者と決まったわけでもないのに吹っ飛ばそうとするな！」

アリゲイツ「俺の心読んだ!？」

三匹』とつぞ』

第十五話：別れの森

レントラーの家を出発したマグマラシ達。

今は木がうつそうと茂って、薄暗い迷宮を織り成している別れの森の中にいる。地形の関係から霧が出やすいらしい。

この森の名前の由来は一齐に入ったポケモンが全く同じ道を通っても出てくる場所がばらばらという事が多いからこの名がついた。カップルで入って分かれずに出てこれる者は未永く結ばれるというそんな噂があるらしい。

「なあ、別れの森ってこんなに長いものなのか？」

「いいや。何度も通ったことがあるがここまで長くはないはずだが

…」

「俺達、この森で迷ったってことか」

「冷静に言うなマグマラシ！！迷ったんだぞ！！一生この森の呪縛から…放れる事が出来なくなるかもしれないんだぞ！！」

「呪縛ってそんなものあるわけ無いだろ」

「レントラー…呪は本当にあるぞ。アリゲイツ、もし呪があったとしたら過去にその呪にかかったポケがいるだろ！」

「そうか」

アリゲイツは騒ぐのを止める。辺りにうつすらと霧が出てくる。

「呪があるってどういうことだ？」

マグマラシは今まで起きたことをとところどころ隠しながら説明した。サンやタルミ達の事だ。

「…そういうことがあったのか。世界には隠された歴史があったんだな…」

「この事は広めないでくれ」

「分かった。任せておけ」

マグマラシ達が歩いていくと、なにやら話し声が。

「ま〜だ〜？」

「ナマケロ、さっさと歩いて！」

「これ〜以上〜早く〜歩〜いたらら〜倒〜れ〜る？」

「何故、疑問なんですか！あなたの身体の事はあなたが良く知っているでしょう！」

話しているのはエネコロロ、ナマケロ、メタモンの三匹組だ。

「アリゲイツ、あのメタモンって俺等の知ってるメタモンじゃないよな」

「…よく似てるが、メタモンは敬語使わなかっただろ」

「なら、他ポケの空似か…」

「友達にでも似てたのか？」

「ああ。多分違うけどな」

マグマラシ達の声を聞いて近づいてきた三匹。霧が濃くなってくる。「すみませ〜ん！私達道に迷ってしまっただんですけど一緒に行きませんか？」

一緒に行こうと誘うエネコロロ。

「マグ〜マ〜ラシ？かわい〜いな〜」

その横でマグマラシを だと思っっているとされるナマケロ。

「お前達も迷ったのか…」

レントラーがそう言っても微動だにしない三匹。

「ええ。迷ってしまったので心細くて…」

「じゃあさ、俺らと一緒に行こうぜ！」

「あ、私はエネコロロといます。よろしく！」

「お〜いらは〜ナマ〜ケロ〜」

「僕は見ての通りメタモンです。…よろしく…」

なぜか歌いながら自己紹介したナマケロ。

「俺はマグマラシ」

「俺はアリゲイツ。そしてこっちはレントラーだ」

「俺だけ自分で自己紹介させてくれないのか!？」

「気にしない、気にしない！」

エネコロロ達と一緒に行動することになったマグマラシ達。

三匹は何故か少しそわそわしている。

「マグマラシ、俺等の知ってるメタモンじゃなかったな」

「ああ。でもあいつら何か変だな」

「そうか？別に気にならないぞ」

歩く。歩く。一言も話さず歩く。薄暗い森の中を出口を求めてひたすら歩く。

「まだか〜！」

「やっぱり適当に進んでいたらだめか…」

そのとき一陣の風が吹き、霧が一瞬晴れる。

「レントラー！アリゲイツ！あつちに何かあったぞ〜！」

「ほんとか〜！？」

「うお〜！やつとこの森を抜けられる〜！！！」

マグマラシ達はマグマラシの示した方へ走っていく。

そして森が開け、出口にたどり着いた。さわやかな風が吹き抜け、霧もなく、青々とした草が茂る草原だ。だが全員離れ離れになっていた。

「お〜い！レントラーどこだ〜？」

「こつちだ〜！！！」

別れの森を出た後、数百メートルほど離れたところからレントラーが返事をする。

「「マグマラシ〜！！！」」

レントラーもアリゲイツもマグマラシからあまり離れておらず、すぐに合流することが出来た。

「お〜い〜」

ナマケロがマグマラシのやや斜め後ろから現れる。

…このナマケロ、マグマラシ達が走ったというのにもう追いついている。本当にナマケロなのかと思うほどの速さだ。

「エネコロロ、どこですか〜？」

「メタモン！ナマケロ！ど〜こ〜」

「こ〜こ〜こ〜？」

エネコロロたちも無事に合流出来た。

「皆そろったな！別れの森も抜けたし、ウイードタウンへレッツゴ
ー！！！」

「ちよつと待つて下さい！」

メタモンの大声で走り出したアリゲイツがすっころぶ。

「何なんだよ！」

「その言葉を待つていたのよ！何だどうだと聞かれたら！」

「答えてあげましょう！」

「我々等は！」

「『盗賊！セルシーフ！』」

ただ口をあんどくり空けるしかないマグマラシ達。

「え〜と…悪者？」

「そうよ！フラッシュ！ほしがる！」

「うわ！眩し！」

エネコロロは目晦ましをした後、ほしがるでレントラーの荷物を盗つて逃げていく。

「ナマケロ！メタモン！」

「あいよ〜。マグマ〜ラシちゃん〜ごめんね〜。ほし〜がる！」

「変身！ボーマンダ！」

ナマケロはマグマラシの荷物を盗って、変身したメタモンに掴まれる。

「エネコロロ！乗ってください！」

「えい！」

エネコロロはボーマンダの上に跳び乗る。

「じゃあね〜。これ、ありがと〜！！！」

エネコロロ達はマグマラシ達にお礼を言つて飛び去るうとする。

「待て！荷物返せ泥棒！」

アリゲイツが水鉄砲を放つが届かない。

「逃げるのか？それなら荷物返してからにしてくれよ」

レントラーが焦らずに言う。

「レントラー！荷物盗られたんだぞ！」

「大丈夫。雷！」

レントラーの放った雷がエネコロコ達にあたる。

『うびやびびびいびゆびえびびよ！！』

三匹は訳の分からないことを言いながらやや遠く離れた一本の木のそばに落ちていく。

「な！大丈夫だったろ？荷物取りに行くぞ！」

「ああ…」

レントラーは当たり前の如く遠く離れた相手に雷をあて、墜落した所に向かっていく。

「レントラーって電気のコントロール上手いな」

「そ、そうか？」

マグマラシに褒められ、てれているレントラー。

「痛い…」

「たる〜い」

「うっ…痺れる」

レントラーに雷を撃たれて麻痺している三匹。木の枝に引っかかり、木の枝ごと落ちていたりする。

「いたぞ！！」

「お前ら！盗った物を返せ！」

「充電…」

レントラーは脅すように充電を始める。

「か、返すから雷は撃たないで！…それにしてもあなた達凄いわ！」

「何が？」

「私達から荷物を取り返したのあなた達が初めてよ。よし！私は泥棒しない事にする！」

『ボス！？』

「今度会ったときはバトルを挑むからね！」

結局何も盗らずに走り去っていくエネコロコ。残された二匹はその後を追う。

「あいつらって何だったんだ？」

「何も盗られなかったし良いじゃないか！アリゲイツ、あれがウィードタウンだぞ！」

目の前には緑の大樹が連なって、そこに草タイプをはじめとするポケモンが住んでいるのが見える。

「あれがウィードタウンか！あそこには時の祠って言うセレビィを祀った祠があるんだ！早く見に行きたいぜ！」

第十五話：別れの森（後書き）

エネコロロ「やつほ〜！」

メタモン「失礼します」

ナマケロ「ん〜だな〜」

さっそくでたね。セルシーフ！ちなみにセルフとシーフを合わせました。

ウィードタウンの時の祠どうしようか？

エネコロロ「セレビイの大群！セレビイの断末魔！」

うおい！断末魔って！何でそんなのが出て来るんだ！恐っ！

今回は二月二十一日午後六時以降になると。

第十六話・ウィードタウン（前書き）

マグマラシ「今回はウィードタウンでの出来事だ！」

アリゲイツ「レントラーが今回の見所？」

レントラー「デジャヴ再び！」

『どー！うーぞー！』

第十六話：ウィードタウン

何本もの大木の枝や根が複雑に絡み合っただけで出来た空間に家などを建てたり、木の穴の中に住み着いていたりと上下に広がる立体的な造りの町であるウィードタウンに着いたマグマラシ達。

「早速ジム戦だ！」

「待った！まだチームの四匹目が集まってない！」

「さつさとジム戦してえ！」

「アリゲイツ、がまんしろ。とりあえず今日の宿を決めなきゃな。」

話とかはそれからだ」

レントラーは町の中腹に位置する場所に建てられたポケモンセンターに情報を聞きに行く。

ドカーン！やや上のほうで爆発音がする。

「行くぞ！」

「またか！昨日と今日と続き過ぎ！！」

文句を言いながら爆発地点に走って行く三匹。上から木片などが降り注いでいる。

「数年前、紅くて暖かい石を拾った奴！出て来い！！そしてその石を渡せ！」

また暴れているマタダガス、カモネギ、パッチールの三匹組。

「止めてよ！皆が迷惑してるじゃないか！」

三匹をとめようとするフシギダネ。

「だからどうした！俺等は石さえ見つかれば良いんだよ！」

「それって…これ？」

亀のような体つきで移動する緑の身体を持つポケモン、ハヤシガメが紅い石を持っている。それに気付いた三匹は攻撃を止める。

「それだ！それを俺達に寄せ！」

ハヤシガメから乱暴に紅い石を奪い取る三匹。にたにたとした変な笑みが表れている。

「これさえあればボスの野望も……」

「君達が言うボスの野望は何か知らないけれど悪しき野望の為になんか渡さない！それは僕のだ！返せ！」

「返せと言われて誰が返すか！」

ハヤシガメと言い争うカモネギ。レントラーは途中足を滑らせて下に落ちたが大丈夫と言っていたのでほっとかかっている。言い争っていたパッチールが痺れを切らした。

「サイケ光線！サイコカッター！」

パッチールの技をまともに受けるハヤシガメ。

「シャドーボール！ヘドロ攻撃！」

「毒乱れ突き！」

追い討ちをかけるようにマタドガスが攻撃し、カモネギが毒突きと乱れ突きをする。

ハヤシガメはフシギダネを巻き込んで吹っ飛び、気絶した。

「おい！お前ら！また暴れてんのか！」

「また？という事はお前らだな！俺達の弟をぶっ飛ばしてくれたのは！」

「どういたしまして」

「『感謝してるわけじゃねえ！！』『』」

アリゲイツに対し三匹で突っ込みを入れる。

「あゝもうお前ら全員お互いに傷つけあってる！！ふらふらダンス！！」

パッチールが踊り始める。

「やばい！火炎……」

技を出そうとしたが、ふらふらダンスにつられて踊ってしまっマゲマラシ。

「何やってんだよ！竜の舞！」

竜の舞をするアリゲイツ。しかし竜の舞が途中からふらふらダンス

に変わる。

そしてその場にいたポケモンが全員ふらふらダンスを踊ってしまった。ハヤシガメも意識が戻り、ふらふらダンスを踊っている。ただ一匹、レントラーを除いて。

「…充電…」

その間に周りの者は混乱してしまった。

「火炎放射！」

「アクアテール！」

「種マシンガン！」

「エナジーボール！」

標的の定まっていないうさまさまな技が繰り出され、不運なポケモンは木から落ちていく中、レントラーはふらふらダンスに耐えながら充電していた。

「エアカッター！毒突き！」

「駄目押し！」

「毒乱れ突き！」

カモネギ、マタドガス、カモネギの順番で技がレントラーにあたるが、一向に充電を止めない。

「何故、何故お前は俺のふらふらダンスが効かない！」

ふらふらダンスを踊り続けているパッチールがあせって言う。

「俺は…俺は！二度とそういった技をくらわないと…決めただんた！
！放電！」

パッチールは放電をくらってふらふらダンスを止め、その場に倒れる。

放電は周りにいた全てのポケモンにあたり、全員正気に戻る。

「あれ？何してんだ？」

「何か俺、種マシンガン食らってるんだけど……」

「皆正気に戻ったか。疲れたから後…頼む」

「分かった！くらえ！フレイムボール！！」

「竜の舞からアクアテール！！」

「エナジーボール！」

三匹の技が一斉にぶつかり、パッチール達は吹き飛んでいく。大木の表面に大きな傷が残っているが、大木がこのくらいの傷で死なないことを祈る住民。紅い石は三匹の手から放れ、落ちてくる。

「よっしゃあー！」

レントラーがふらふらと倒れる。

「レントラー……！」

「毒突きされたときに……毒になった……みたいだ」

「待ってる！ポケモンセンターに連れて行くからな！」

「それなら僕が運ぶよー！」

「いいのか？えっと……！」

「僕はハヤシガメ。早くそのポケモンを僕の上に」

「ありがとうハヤシガメ！」

マグマラシ達は急いでポケモンセンターに戻る。

「レントラーさんは無理をしなければ大丈夫ですよ。ハヤシガメさんは今日一日は絶対安静です……！」

ウィードタウンポケモンセンターのナース、キマワリに言われるハヤシガメ。

ダメージが大きかったのにレントラーを背中に乗せて運んだからだ。

「そんなあ……！」

「あまり動かないと約束できるなら、家に帰っても良いですよ」

「わかりました！」

「お大事に……！」

ハヤシガメはレントラーの所に行く。

「レントラーさん……でいいですか？」

「ああ。いいぞ」

「レントラーさん。助けて頂き、ありがとうございました」

「いいってそんなの」

「是非ともお礼がしたいのでうちに泊まって行って下さい」

そしてここはハヤシガメの家。大木の下付近にある、広めの空間に家を建てて一匹で暮らしているらしい。

ハヤシガメは質素な暮らしが好きなのか、あまり家具が置かれていない。

「レントラー！さっきはありがとう」

「どうって事無いって！」

早くも仲良くなったハヤシガメ。

「なあ、レントラーって何で催眠術とか混乱とかが効かないんだ？」

「あゝそれが……」

マグマラシの疑問に話にくそうにするレントラー。

「話しくいな……」

「あつ！話し辛いんだつたらいいよー！」

「いや、この際話しておこうと思う……」

催眠術などを耐えられる理由をレントラーが話し始める。

「まず、俺は効かないんじゃないやなくて耐えてるんだ。だから眠くもなるし、混乱してしまいそうになる。でも俺は二度とそういった状態にならないと誓っているんだ……スイに

第十六話：ウィードタウン（後書き）

アリゲイツ「スイはレントラーの元か…ムギユ…」

マグマラシ「次回の事を喋ろうとしない！」

レントラー「ハヤシガメが仲間になったぞ！…（木から落ちたときは死ぬかと思った）」

ハヤシガメ「よろしくね！！」

なんだか君達の性格がいまいちつかめない。作者としてどうなんだろう？

ハヤシガメ「駄目な作者でもいいんじゃない？」

励ましてなくて馬鹿にしてる？

四匹「次回もよろしく！」

第十七話：レントラーの過去（前書き）

謝ります。

マグマラシ「うわぁ！だめ作者がでた！！」

ひどい。それはさて置き、今回はレントラーの過去ですが、その過去の間に過去回想があるので、よく分からなくなってるかもしれない。

アリゲイツ「……どゆこと？」

…僕がだめだって言うこと。

アリゲイツ「いつもの事じゃん」

アリゲイツはたまに良いこと言う（知的発言をする）けど、やっぱり…

り…

マグマラシ「どうぞー！」

アリゲイツ「俺をほっとくな！」

第十七話：レントラーの過去

エレクトタウンとウィードタウンの間の別れの森から少し離れたところにある薄暗い森に囲まれた少し開けた場所にある野原。

そのそばにある洞窟を二匹のポケモンが住処として使っていた。

「レンくん！」

「スイ！レンくんって呼ぶな！くすぐったいだろ！」

スイと呼ばれたこのリーファイアはレントラーの恋人であり、昔からの幼馴染でもあった。

スイの名前の由来は翡翠^{ヒスイ}からだそうだ。

「え〜！でも私はやっぱりレンくんって呼びたい」

「あのな〜」

そこへ何かはげざるような音と焦げ臭い臭い^{くまきにお}。

「！！」

スイは洞窟を一目散に飛び出していく。

「あ、あああ……」

住処を飛び出したスイが見た物は住み慣れ、愛着の湧いた森が紅蓮の炎で焼かれている光景だった。その森を焼く紅い炎は悪魔の如く森を焼き、数多のポケモンを苦しめている。

「何が…何が起こったんだ」

只々目の前の光景に立ち尽くしている二匹。

「よお…遅かったじゃねえか」

そう言うのはダークポケモンのヘルガー。

このヘルガーは他のヘルガーとは違って青い色……色違いだった。

「ヘルガー！お前がこの森に火を放ったのか！」

「なに当たり前のこと言っただよ」

「あなたは…許さない！草笛！」

スイは何も警戒していないヘルガーに草笛を使い、眠らせる。

「早く炎を消さなきゃ！！」

熱気のせいでどんどん体力を削られていくスイ。

「スイ！ここは俺に任せてお前は逃げる！」

「でも森が！」

「近くの町に行つて水タイプのポケモンを呼んできてくれ！俺はここでこれ以上炎が燃え移らないように食い止める！」

「分かった！」

スイはそう言うのと走つて行こうとした。

「火炎放射！」

「きゃああー！！」

火炎放射に身を焼かれ、頭の葉が焼き切れてしまう。

その部分は植物ということもあり、スイをとてつもない激痛が襲う。

「スイ！」

「フへへへエ……逃げるなよ……今まで俺から逃げてくれた分楽しむんだからなあ……」

「ヘルガー！スイに何てことをするんだ！チャージビーム！」

「つてえな！お前なんかに教える必要はねえが……言つてやるよ。スイが逃げられなくするためだ」

「何でこんな……森に火を放つことをした！それにスイを逃がさないつて！」

「あ？そんなこと決まつてるじゃねえか。スイを手に入れる為だよ！何をしようとな！」

「わ……私はんたなんかの物なんかには……ならない！！草笛……」

「スイ！」

炎に身体の一部であるに葉っぱの部分を焼かれ、衰弱しているスイに駆け寄るレントラー。スイは草笛を吹くが、ヘルガーは眠らなかつた。

「そんなこととつくに分かつてる。俺が欲しいのはスイの心じゃねえ！軀だ！てめえは邪魔だそこで寝てる！物真似！」

ヘルガーの物真似で繰り出された草笛をまともに受けてしまうレントラー。

「さて、スイ……俺を楽しませてもらおうか……」

「くそ……」

そしてレントラーは寝てしまった。

そして目が覚めたとき、目の前には鎮火した森と一番見たくないものが……

「……………スイ……………」

スイは嫌いな相手に穢けがされ、息絶えていた。目はレントラーに向けられ、涙を流していた。

「スイ……！！！！」

レントラーはもう呼んでも返事を返してくれないスイの魂に向かって叫んだ。大声で呼べば返事が返ってくるかもしれないと思ってい
るかのように。

そこにレントラーとスイの友、ベイリーフが走ってくる。

「おい！！大丈夫……」

スイを見たたんシヨックに打ちのめされ、黙るベイリーフ。

元気で明るく、優しくていつも笑顔のスイがこの世を去った事が嘘
であつて欲しいと願う。

「スイ……嘘だよ……スイが死ぬ訳無い……誰が！誰がこんなことを……」

「スイをこうしたのはヘルガーだ……」

「何で！何であんたが居ながらこうなったの！なんでスイを守らな
かったのよ！あんたが守つていればこうはならなかった！！何で……
何でスイが……」

「……………」

レントラーは何も言い返せなかった。そしてすぐにどこかに向かっ
て走り出した。

そしてレントラーは何者かと死闘を数十分の間、繰り広げていた。

「……………ヘルガー！よくもスイを！」

「今更何言つてんだ。草木の姫君を守れなかったためえがよお！！
でも、あいつは良かったぜえ！」

「うるさい！充電充電充電充電充電！」

「馬鹿が！隙だらけだ！俺に楯突こうとすんじゃねえよ！火炎放射！」

レントラーは火炎放射を受けても只ひたすらに充電をする。

「死ね！雷！」

ヘルガーに雷があたる。あたり所が悪かったのかヘルガーの意識が飛び、身体が倒れる。

意識も無く、だらんとしているヘルガー。もう一度くれば死んでしまうだろう。

「てめえには死がお似合いなんだよ！六連続充電……」

レントラーはまた充電をする。

「これで最後だ！地獄に落ちろ！かみな「待つて……！」」

レントラーが止めを刺そうと雷を撃とうとしたとき、それをとめる声。

「レントラー！！復讐なんかして気が晴れる！？」

「ベイリーフ！！お前には関係ない！」

「私には関係なくてもあんたとスイに関係がある……！！」
しばしの沈黙が流れる。

「……スイに？」

「あんたはスイと約束したんでしょ！互いに何があっても決して復讐しないって……！」

【過去の時点での過去回想】

「レン君！私達お互いに何があっても復讐とか他のポケモンを殺したりしないようにしようね！約束！」

「ああ。約束だ」

【通常】

「……そうだ……俺はスイと約束したんだっただな……なのに俺は……」

「まだあんたは相手を殺してなんかいない！まだスイにも許してもらえるよ」

「そうか……だが、どうすれば良い？この抑えようの無い感情は……」

「スイとの約束のために、あの世でのスイの幸せのために憎しみを忘れようよ……」

「スイのために……スイ、俺はお前との約束を破るところだった……」

「ヘルガーを警察に引き渡して、スイのためにお墓を作りましょう……」

「ああ」

ヘルガーを警察に引き渡し、スイの墓を作ったレントラー達。

「スイ……俺は今、お前が好きだった俺のままにいられているだろうか……」

レントラーの言葉が風にかき消されていく。

「スイ。大好きだよ」

《レン君、私もだよ……約束守ってくれてありがとう……》

「スイ？スイなのか？」

レントラーに返事が帰ってくることは無かった。

「スイ、ありがとう。スイに会えてよかった」

そういうことがあって、俺は自分が寝てる間に愛するスイを殺されたんだ……。俺が混乱したり、眠らせている時に二度と仲間を殺させない。そう誓ったんだ」

「……………」
レントラーの過去を聞いた一同は沈黙する。

「お、おい。そんなに黙り込むなよ！」

「……………zzz……」
「人が話しをしたのに寝てたのか……！」

「冗談は置いといて、「冗談でも止める……！顎ワニ！」レントラーにそんな過去があったのか……」

「アリゲイツ、悪口さえスルーか？」

「レントラーが混乱や催眠等などを耐えられるのはそんな過去があったからなんだ……」

「こついつた暗い話は止めだ止め!!」

暗いムードに耐えられなくなったのかアリゲイツのことが面倒くさくなったのかレントラーは大声で叫ぶ。

「……ところで、アリゲイツ達は旅をしてるようだけど、どんな旅？」

マグマラシ達はハヤシガメにレントラーにしたものと同じ説明をする。

「へー良いなー！ねえ、僕も仲間に入れてよ！まだチームを作るのには一匹足りないんでしょ？」

「よっしゃあ！！これでジムに挑戦できる！！」

「よろしくなハヤシガメ！」

「仲良くしていこうぜ!!」

ハヤシガメが仲間に加わって、ジムへの挑戦権が与えられた。

「明日はジム戦をするだろ？今のうちに身体を休めとけ」

「お休み……」

そう言っつて四匹は夢の世界へと誘う眠りに意識を任せた。

第十七話：レントラーの過去（後書き）

レントラー「暗くなるなよ？」

アリゲイツ「レントラーって殺ポケ未遂……」

ハヤシガメ「リーフィア……ポケモンセンターにも居たような……」

マグマラシ、これよろしく。

マグマラシ「作者からの要望で別れの森について……別れの森の霧が出ていた時はレントラーの目でもラグラージのリーダーでもエーフィーの風読みでも出口が全く分からない。って霧凄っ！」

アリゲイツ「作者が入った場合は死んで幽霊になって出てくる」

うおい！僕は生きて出られないのか！！

メガニウム「幽霊になっても出られなかったりしてね」

メガニウム！出番はまだでしょ！？勝手に出てこないで！！

僕はキャラに弄ばれていい存在なのか！『いい！』ってひどい！！

あ、これからは基本的に休日の午後の投稿になります。

第十八話：初のジム戦・前編（前書き）

初のジム戦です。

アリゲイツ「やっとジム戦が出来る〜！」

マグマラシ「ジム戦の後に時の祠に行く事を忘れないでくれよ」

『それではどうぞ〜！』

第十八話：初のジム戦・前編

「起きろ〜!! ジム行くぞ〜!!」

右手にオタマ、左手にフライパンを持ったアリゲイツがそれをぶつけて耳障りな不快な音を立てる。

「うわああ〜うるさ〜い〜やめてくれ〜!」

「起きる! 起きるから止めて!」

「アリゲイツ! うるさいからやめろ! 昔からそれをするなって言ってるだろ!!」

それぞれが違った反応をする三匹。順にレントラー、ハヤシガメ、マグマラシだ。

「さっさとジムに行こうぜ! 飯は作ったから早く食べるよ!」

「ア、アリゲイツが料理〜!?!」

「そんな事は後! 料理が冷めるぞ!」

三匹は起きると、アリゲイツがハヤシガメに許可を取らずに作った料理をみて啞然とする。

「な、なあ、これって料理だよな?」

「凄い! 芸術品みたい!」

「アリゲイツの料理久々に見たな〜」

「さっさと食べるよ! 俺が秘密の調味料で味付けしたからな! 栄養の面も完璧だぞ!」

『いただきまーす!!』

四匹はアリゲイツの作った料理に舌鼓を打ちながら、何かに取り憑かれたかの如く貪《むさぼ》り食った。

『ご馳走様でした!』

「こんなうまい料理を食ったのは初めてだ。俺好みの味付けだった」

「僕も! あの味好きだよ!」

「さすがアリゲイツ。料理の天童と呼ばれただけはあるよな」

「マグマラシ、だけって何だよ。だけって」

「そこは気にするな！それよりも今日はジムに挑戦するんだろ？」
「おう！」

「…チーム名何なんだ？」

「……………」

「まさか決めてなかったの!？」

「…今決めるから何か案ないか？」

「じゃあ、アクアブリード！」

「トライアルズサンダー！」

「チームタテイクスはどうか？戦略的っていう意味だよ」

「ボルケーノ！」

「……………!」

何個も案を出す四匹。

「なかなか決まらないね。これは？エレメント！」

「エレメント？」

「エレメントは要素っていう意味で、僕達が世界の要素、平和の要素とかを少しでも守るという意味を込めようと思ってるんだ！」

「いいなそれ！」

「俺も賛成！」

「俺も！これでチーム名はエレメントに決定だ！」

チーム名はエレメントに決まり、ジムまで来た四匹。

「ここがジムか〜！」

上を向いて歩きながら言うアリゲイツ。

「アリゲイツ〜前見る。前！」

忠告もむなしく、自動ドアにぶつかるアリゲイツ。

「つて〜、何で開いてねえんだよ！」

「すいませーん!! チャレンジャーの方ですか？自動ドア故障中で動かないんですよ」

「マジで!？」

「なので裏から入ってくださいーい！」

裏からジムに入る四匹。

「あつ！ジムリーダー、挑戦者みたいですよ！」

「ジムリーダーって呼ばないで！！」

マグマラシ達に気付いたキノガツサがメガニウムに言う。

「えーと、挑戦者でいいの？」

メガニウムにレントラーが答える。

「はい。挑戦者として来ました。チーム名は“エレメント”です」

「エレメント…了解！登録しとくね」

メガニウムは奥の部屋に走って行った。そしてルンパツパが近づいてきて言う。

「えっと、このジムは耐久力を鍛えるのを中心としたルールで、相手の技は絶対に防《ふせ》いではいけないけど避けるのはいい。そして相手を全員倒したほうの勝ち。ジム員全員と挑戦者チーム全員の団体戦。数の制限は十匹まで。このジムは道具の使用禁止。他は相手を殺すか障害ポケにしなければ特に制限は無し」

「登録できたよ〜！」

そう言って走ってきたメガニウムが転ぶ。ちなみに である。

「リーダーやっぱドンくさいよ〜」

「リーダー言うな！」

「ドンくさいって言われたほうも否定しろよ！！」

メガニウムが否定したが、そこにキノガツサの突っ込みを兼ねたマツハパンチ。

「いたいよ〜そう何度も攻撃しないでよ。あ、そうそう。ルール聞いた？」

メガニウムはマグマラシ達に確認を取る。

「じゃあ、バトルフィールドに案内するね。キノガツサ、皆を呼んでて」

メガニウムに連れられてバトルフィールドへ。

「じゃーん！ここがこのジムのバトルフィールドだよ」

そこにあつたのは何本もの燃えにくい木が生えた林のようなフィールド。

「すげ〜!! って、ここ外だろ!!」

「うん? 何かだめなことでも?」

「いや、ないけど…」

突っ込みをいれた後、しどろもどろに答えるアリゲイツ。

「お! 隊長! 挑戦者すか」

「そうだよ。紹介するね右からユキノオー、ワタツコ、ルンパツパ、キノガツサ、ジユカインだよそして僕がジムリーダーのメガニウム」

「うわ…俺達よりも多いし! 俺はマグマラシ、こっちからアリゲイツ、レントラー、ハヤシガメだ。…ちなみに俺は だぞ?」

「マグマラシって だったの!? まあいいかそんな美貌を持った者がいても。それじゃ始めるね。おーい判定者〜!!」

「はい…隊長…」

がつくりしながら出てきたテツカニン。集中すると動体視力や素早さが上がるその特性からジムの審判はテツカニンになることが多い。「元気がない! なにかあった?」

「隊長がそう呼ぶからでしょうが! いくら俺の名前がハンティだからって!! あなたの失態、言いふらしますよ!？」

「ハンティ〜さつさと審判してよ」

「呼び方が変わったのはいいけど、スルーされたし喜ぶべきか悲しむべきか……。それでは、チャレンジャーチームエレメント対ウィードジムなバトルを行います。両チームフィールドへ!」

両チームがフィールドへ行く。

「始めちゃっていいよ〜!」

「それではジム戦開始!!」

開始の合図で一斉に動くジムポケ達。

「僕から行くね〜 エナジーボール! 光の壁! リフレクター!」

発射された緑の弾がアリゲイツに向かっていく。

「僕に任せて!」

ハヤシガメがエナジーボールを飲み込む。

「ええ！？技を食べた！？」

驚いて一斉に動きを止めたポケ達。

「え？え？なに？普通じゃないの！？」

周りの反応に動揺するハヤシガメ。

「どう見たって相手の技を食べるとか普通じゃないだろ！チャージビーム！」

一番に落ち着きを取り戻したレントラーの技がルンパツパにあたったところで全員がバトル中だということを出す。

「どうやったのかは分からないがこれはどうだ！高速移動からリーフブレードクロス！」

リーフブレードとシザークロスの合わせ技で迫るジュカイン。

「火炎放射！」

迫ってきたジュカインを火炎放射で攻撃するマグマラシ。

「隙だらけだよ。マツハパンチ！宿木の種！」

マグマラシがキノガッサの攻撃で吹き飛ばす。

「ハヤシガメ！時間稼いでくれ！連続竜の舞！！」

「分かった！種爆弾！はっぱカッター！」

「させん！凍える粉雪の風！」

ハヤシガメの技は凍り付いて地面に落ちる。

「これでも食らいなさい！異常の胞子！」

ワタツコの毒・眠り・痺れ粉をたっぷりまぶした胞子があたりを漂う。

「バブル光線！」

ルンパツパのバブル光線がマグマラシに当たる。メガニウムは光を集めている。

「充電！そして放電！そして最大充電！」

レントラーの放電はジムポケ全員にダメージを与え、あたりを飛んでいた胞子は帯電し、周りの木にくっ付いていった。ルンパツパはもう倒れてしまった。

「審判！今のはいいのか？」

「全体技なので問題ありません！」

「マジカルリーフ！吹雪！」

ユキノオーははっぱを凍らせて操り、アリゲイツを狙う。

「アリゲイツ危ない！」

「よっしゃ！準備完了！アクアテール！」

飛んできた凍った葉を避け、一撃でワタツコを沈める。

「チャージ終了！あたれ！ソーラービーム！」

通常よりも極太のビームがアリゲイツを襲う。

「アリゲイツ！ぎゃあ！！！」

アリゲイツをかばったハヤシガメ。ダメージは少なかつたらしい。

「ハヤシガメサンキュー！氷の牙！」

アリゲイツは氷の牙の発動を続けながらジュカインを追い続ける。

「遠吠え！フレイムボール！！！」

マグマラシはマグマラシで逃げていくユキノオーを追う。

「充電！雷氷の牙！」

レントラーは雷の牙と氷の牙を同時に発動する。

「こい！種爆弾！」

キノガッサの技ははずれ、レントラーの技が決まる。

「いまだ！カウンター！」

キノガッサのカウンターがレントラーに決まる。

「この！噛み砕く！」

レントラーは大ダメージを受けつつもキノガッサを倒す。

「皆頑張ってるね！」

そうやって他のポケモン達のバトルを離れた場所でのほほんと見るハヤシガメとメガニウム。ハヤシガメは光合成で体力を回復している。

「そろそろ僕達もバトルしたほうがいいんじゃない？」

「そうだね！僕達ほとんどやられちゃってるし…おいユキノオー

！ジュカインー！全力出しているよ！」

「やっとですかい隊長！！！」

「アリゲイツ、そろそろ鬼ごっこは終わらせてもらおう!」
そう言うなり三匹の気迫が強くなり、動きも一気に変わる。

第十八話：初のジム戦・前編（後書き）

今日はポケモンレンジャーの発売日だ〜！

レントラー「俺にもやらしてくれ！」

ハヤシガメ「僕にも……いいよね？」

・・・なんでそんなにじりじりと僕との間合い詰めてるの？

ハヤシガメ「いいよね？」

レントラー「いいよね？」

分かったから技をぶつけようとしないで!!

第十九話：初のジム戦・後編（前書き）

ジユカインとユキノオーが全力出しているのか出していないのかよく
分からない内容に…

マグマラシ「レントラーは変な理由で戦闘不能に…」

アリゲイツ「だよな！尻尾が…」

『どっぞ〜…』

第十九話：初のジム戦・後編

ジユカイン・ユキノオー・メガニウムVSマグマラシ・アリゲイツ・ハヤシガメ・レントラー

「くらいやがれ！雪降らし！そして吹雪！！」

必中の吹雪がハヤシガメにあたり、ハヤシガメは特に何もしてないのに凍り付いてしまう。

「一匹戦闘不能になったようだな！高速移動！リーフブレードクロス！」

ジユカインはアリゲイツに切りかかる。

「あゝ！！もうめんどくせえよ！！お前木から木へほとんどん飛び移りやがって！！…あ、今は霰あられだから必中だよな…」

「何するつもりだ？」

「もちろん吹雪だ！」

アリゲイツは吹雪を発生させる。

「ぐっ！吹雪が使えたのか！！高速移動！見切りを使いながらリーフブレードクロス！」

ジユカインは見切りで動体視力を底上げし、アリゲイツの急所を狙って攻撃してくる。

アリゲイツはそんな攻撃を避けれるはずも無く撃沈してしまう。

「ハヤシガメ！アリゲイツ！こうなったら噴煙！！」

マグマラシの噴煙は効果四倍のユキノオーを一撃で沈める。

「充電完了！メガニウム！お前も食らえ！放電！」

放電で麻痺したジユカインが次の木に着地しようとしたとき足を滑らせ、頭から落ちてしまい気絶してしまった。

「僕は光の壁使ってるからそんな攻撃何とも無いよ！僕からも反撃させてもらう！身代わり！身代わり！身代わり！身代わり！光合成！光合成！身代わり！光合成！」

「うわ！メガニウムの群れか！厄介だな！今のうちに寝とこうか！

眠る」

「メガニウム食らえ！連続遠吠え！フレイムボール！」

「甘いよ！蔓つるの鞭むち！」

マグマラシの攻撃を何なく受け止めて弾き飛ばす。

「なら！噴煙！」

「何してるの？そつちには誰もいないよ？」

「さ、寒かった！ありがとうマグマラシ。光合成！砂地獄！」

ハヤシガメの砂地獄で動けなくなったメガニウム。天気は晴れに戻る。

「動けないなら動けないりの対応すればいいだけだ！原始の力！自然の力！」

メガニウムの周りに岩が浮き、マグマラシに向かって飛んでくる。

「やばい！あれは絶対に避けなきゃいけない気がする！」

マグマラシは本能的にメガニウムの攻撃を回避する。

マグマラシのいたところの地面にあたった岩は爆発を引き起こす。

「やっぱり！」

「避けられちゃったか！せっかく種爆弾入りだったのに」

「避けるだろ普通！フレイムボール！」

「ほい！マジカルリーフ！」

メガニウムはぱっぱを操り、地面とマグマラシとの間に入れることでマグマラシを滑らせてしまう。

「まだまだだね！光合成！」

そのころ、少し離れたところで起き上がる一匹の青いポケモン。

「うっやっやと身体が動くようになった…」

「スピードスター！火炎放射！フレイムボール！」

マグマラシは炎で包んだスピードスターを放った後、他の方向から挟み撃ち攻撃をしかける。

「無駄だつて！僕には光の壁とリフレクターがあるんだから！マジカルリーフ！」

「うおりゃああ！アクアテール！」

「つてうわぁ！」

アリゲイツの急襲に驚いたメガニウムはマジカルリーフをコントロール出来なくなってしまう。

アリゲイツの一撃はリフレクターで阻まれてしまう。

光の壁をすり抜けたスピードスターはメガニウムに当たる。

「まさかきみが戦闘出来るようになってるとはね…油断したよ」

そこにマグマラシのフレイムボールが当たる。

のんきに寝ていたポケモンも目を覚ます。

「ふあああ〜」

「エナジーボール！！」

光合成のエネルギーを全てつぎ込んだエナジーボールがメガニウムにあたる。

「痛いな〜僕のチームは全員やられちゃったのに君達のチームは一匹もやられてないなんてね…なんかこのジムが物凄く弱いように思われるからジムのイメージを保つ為に倒れてね？光合成からソーラービーム！！」

四匹のメガニウムが一斉に強力なソーラービームを放つ。

もちろんアリゲイツが持つはずも無く…レントラーは吹き飛ばされて尻尾が木に引っかかり、戦闘不能に。

ハヤシガメは足場を崩されてひっくり返って起き上がれなくなってしまう。

ソーラービームを一匹一匹撃つただけで一気に戦況を変えてしまったメガニウム。

「…これで戦闘が出来るのはマグマラシだけだね？」

マグマラシの身体から吹き出る炎の勢いが弱くなる。

「やばいっ！！煙幕！電光石火！フレイムボール！スピードスター！！」

煙幕で視界が悪くなる。マグマラシはフィールドの中を東奔西走《とうほんせいそう》している。ときどき、熱に耐え切れなかった木がはせる音がする。

「まいったな〜こつも速く移動されると捕まえにくいんだよな〜蔓の鞭!」

「はずれ!くらえ!」

マグマラシはフレイムボールを維持し続けながらメガニウムの体力を徐々に奪っていく。メガニウムの分身は消え去ってしまった。

「充電完了!チャージビーム!」

レントラーが離れた位置からチャージビームを命中させる。

「くっ!あいつは木の枝に引っかかってたはず!それに何でこんなに視界が悪くてどこにいるか分からないのに技が命中するんだ!?!」

「レントラーは俺がスピードスターで助けたんだ!」

「そういうこと!あと、俺等レントラーが眼光ポケモンって言われている理由の一つにたとえどんなに視界が悪くても俺等はそれに関係なく視る事が出来るって言うのがあるぜ!」

「そういうことか…僕の身代わりはマグマラシ達に倒されちゃったみたいだし、かといって僕はこれ以上回復技を使うつもりはないし、決着をつけようか」

煙幕が晴れて視界が良くなる。

「ソーラービームを打つ前に集めるエネルギーを技に上乗せさせた僕の最高の技を受けてみる!ソーラーハードプラント!」

「フレイムボール!」

「放電!」

「ひっくり返ったままで気持ち悪いけどエナジーボール!」

四匹の技がぶつかり、爆発を引き起こす。それでもメガニウムの攻撃は留まることを知らず、爆風がマグマラシ達を飲み込んでいく。

爆煙が晴れたとき、そこにいたのはひっくり返っていないハヤシガメ一匹。

「あれ?いつの間にか元に戻ってる???」

「勝者!チャレンジャーチーム!エレメント!…とりあえず救護班、応急処置をしてください」

救護班が目につえられない速さで治療し、去っていく。ジムリーダーでさえ実態は知らないとか。

「ありやくやっぱり回復したら勝ってたかな？まあ、勝利おめでとう。ウィードバッチだよ」

「メガニウム！お前はわざと負けたる！！ほんとともつと強いだろ！！」

「うん。でも本気出しちゃうと誰もこのジムを超えられなくなっちゃうから…」

「そんなに強いのに何故一番目のジムなんだよ！」

メガニウムに対してムキになるアリゲイツ。ジムは通常、弱いジムから順に挑戦するのが決まりで、数年に一度、ジムランク大会が開かれ、その強さを競う事になっている。

「…それは…ジムランク大会に寝坊して出場出来なかったからだよ。ごめんね。それに僕のジムは普通なら四番目か五番目のジムに匹敵する強さなんだよ？そんなのが一番最初だったらほとんどのチャレンジャーが潰れていくでしょ？」

「だからって…」

「気に入らなかつたらもう一度勝負しようよ。今度は君達がバッチを四つ手に入れてからね。それまで待つてるからね」

「ううう」

メガニウムがキノガッサに引き摺られて行ってしまったので唸るしかないアリゲイツ。

《メガニウムってそんな大事な大会に寝坊したんだ……》

そんなアリゲイツをよそに、衝撃を隠せない三匹。なんだかんだで勝利したマグマラシ達。

「次のジムは…悪タイプの多いナイトタウンだなアリゲイツ、メガニウム達とはまた戦えるんだからいいじゃないか！！」

「…だな。メガニウム！！待つてるよ！！」

そう言つてアリゲイツ達はジムを去って行った。その後姿を見ながらメガニウムが呟く。

「ふふつ。僕としたことが多少本気を出しちゃったよ。マグマラシとアリゲイツの体力や、パワー、スピードも全てにおいて驚かされたよ。同じレベルの他のマグマラシやアリゲイツとは比べ物にならないほど強いね。次に合った時に簡単に倒されないように僕等も頑張らないとね」

「アリゲイツ！ナイトタウンに行く前に俺の目的の時の祠！！」

第十九話：初のジム戦・後編（後書き）

タルミ

「ひさしぶりー（意味も無く）」

フローゼル

「タルミいる所俺はいる！」

アリゲイツ

「フローゼルの性格が変わってるっ！？」

第二十話：悪役達（前書き）

今回はチームエレメントが登場しない話です。

パッチール達『はあく帰りたくない…』』

パッチール達の謎の溜息は読んだら分かる…と思う。

マグマラシ「休息出番無しか…」

アリゲイツ「俺達名前しか出てない」

エレメント『どつぞ…』』

第二十話：悪役達

赤い光を放つライトに照らされた薄暗い金属質な通路を通る六匹のポケモン。

「俺等は紅くて暖かい石の情報一切見つけられなかった……兄貴達は？」

「俺等は見つけたのは良かったんだけど奪い損ねた……」

「結局どっちも失敗って事かあ……ポイズン様に何をされるか……六匹のポケモンは金属で出来た自動開閉式認証型シャッターの前で立ち止まる。」

シャッターの手前に備え付けられたスピーカーから機械的な音声が発せられる。

「音声パスワードを入力してください」

「恩を仇で返し、我等を虐^{しいた}げた者に残酷なる復讐を！我等幸福を絶望にせし者。我等が主の妨げを排除するものなり」

六匹がパスワードを口にする。

「ピーー パスワードを承認しました」

再び機械的な音声が聞こえてシャッターが開く。

六匹はシャッターをくぐり、奥へと歩を進める。

そこには幹部と呼ばれるポケモンが数匹。

「どうだった？うまく手にはいった？」

「ボルト。失敗してきたのは分かるでしょう。まあ、私はこうなると分かっています」

ボルトと呼ばれたピカチュウは六匹を見ながら言う。

「なあポイズン、俺がこいつらの処分していいか？」

「いいえ。ボスに今回の処分は私に任せられたでしょう。あなたにこの者達を処分する権限はありませんよ。私はあなたみたいに猟奇的な殺しをするよりもっと楽しい方法がありますよ」

「ポイズンが楽しいのは虐めて虐めて虐め抜く事だろ。俺が楽しい

と思うのは……殺しだ」

「せっかく私がサディストがどんなに楽しいものか教えてあげようと思ったのですがあなたには無縁のものようですね」

ポイズンは六匹を手招きしながら言う。

「あなた達はマゾヒストにするよりもそのままいたぶった方が楽しみがいがあるそうですね……さあ、こつちへ」

六匹は心底恐怖心に駆られているようである様子を見るだけでもポイズンにとって快感になる。

『ポ、ポイズン様……お、お許してください』

許しを乞いても許すはずがない。ポイズンが自分の楽しむための獲物をみすみす逃がすはずがない。

六匹はポイズンの後に続き、金属質の大広間と呼べるほどの大きさの部屋から自分の研究所じゆもんげやに入っていく。

「さうこれからポイズンも楽しむことだし、俺も楽しみに行きま
すか！」

ポルトは遠足が翌日に控えた子供のような足取りで外に出て行く。

『ぎゃ〜！ぐへあ！ひっ！ぎゃあ！ぎえあ！ひ〜！』

六匹のさまざまな叫びが研究所から洩れる。

【セルシーフ視点】

マグマラシ達に追い返されてから三日たった頃、三匹はこんなことを話していた。

「さてと……ボス、何故盗賊を……泥棒を止めるのですか？」

「えっと、なんかあの三匹に惹かれちゃった？」

「な〜ぜ〜？」

「あの三匹見てたらなんか心がざわめいて、泥棒しようとしたのがあほらしくなっちゃって。初めてだし？」

「ボス、なら私達はあなたについていけません。ここで決別しまし
よう」

「メタモン？何か勘違いしてるようだけど」

「え？何をですか？」

「私は泥棒をやめると言っただけでチームを抜けるとか、盗賊であることをやめたわけじゃないわよ」

「盗賊なのに泥棒をやめるということですか？」

「そうよ。私自身は盗まないけどあなた達は泥棒をやめるといったわけじゃないし、そのための手伝いとかならある程度までは手伝うわ」

「ボ〜ス〜のま〜ま〜？」

「一応はね。さて、あいつらから盗る為の作戦練るわよ！」

「了解ボス！」

チームエレメントがジムに挑戦している頃

セルシーフの三匹組はウィードジムのそばにある木がまばらに生えた林の中にいた。

ジムは安全の都合上で木の上ではなく、地面に直接建てられている。

「今はあいつらがジムに挑戦してる頃よ。あのハヤシガメとかいう奴が持っていた紅い石を狙うわよ」

「あまり知られていない宝石の一種でしょうか？変身！サンドパン！」

メタモンは話しながらサンドパンに変身する。

「私はそう思うわ。メタモン！じゃんじゃん穴を掘っちゃって〜！」

サンドパンはざくざくと穴を掘る。そしてジムの中のフィールドの端につながったトンネルが出来る。

「ボス。トンネル開通しました！」

「いくわよ！目標はジムの金庫よ！」

『ラジャー！！』

「これでも食らいなさい！異常の胞子！」

セルシーフがトンネルから出てきた時、丁度ハネッコの技が発動し

たときだった。

「え！？か、身体が痺れます」

「…すー…すー」

「何これ…気持ち悪い」

メタモンはサンドパンのままだったので麻痺に。ナマケロは眠りに。そしてエネコロロは毒になってしまった。

「これは駄目で…すね。動きづ…らいです」

「私も気持ち悪いわ」

「すーすーすーすーすーうーうすーすーさちうすー」

「…何か不吉なこと言ったわよね。ナマケロが」

「ええ。幸薄ちひさくと。寝言ねごでいいましたね」

「嫌な予感がするから逃げるわよ」

「こい！種爆弾！」

レントラーが避けたキノガツサの種爆弾はセルシーフに向かって飛んでいく。

ドドドカーン

「なんでよ〜！」

「嫌な予感が当たりましたね。しかし、空の星になるとはよく言ったものです」

種爆弾は見事に命中し、セルシーフは弧を描くように掘られたトンネルを通って空のかなたに吹っ飛んでいった。

ジム戦が終わったあとメガニウムたちがこのトンネルを見つけて首をか上げたのは言うまでもない。何も盗られずにただそこにトンネルがあるのだから。

【ウイードジム視点】

「なんでトンネルが？皆知みんなってる？」

『リーダーでもないんですか？』

「一体誰が？とりあえず埋めといてね〜」

「リーダーサボろうとしない！フィールドの整備もリーダーの仕事の一つでしょう〜！」

「え〜！」

チームエレメントを見送っている最中にトンネルへむかってキノガツサに引き摺られて行くメガニウム。リーダーとしての責任をよく放りだしているらしい。

引き摺られていくメガニウムはチームエレメントの後姿を見ながら
呟く。

「ふふつ。僕としたことが多少本気を出しちゃったよ。マグマラシとアリゲイツの体力や、パワー、スピードも全てにおいて驚かされたよ。同じレベルの他のマグマラシやアリゲイツとは比べ物にならないほど強いね。次に合った時に簡単に倒されないように僕等も頑張らないとね」

「リーダー！何呟いてるんですか！さっさと仕事してください！」

「鬼ガツサ！」

「はいはい。もうリーダーの悪口は慣れましたよ！」

第二十話：悪役達（後書き）

ポイズン達のいる組織はどういったものなのか？何十話も後になるかもしれないけれど覚えていてください。

メガニウム「やつほー。ジムランク大会に寝坊したメガニウムです！…基本はドジだけどまた出ると思うからよろしく！」

キノガツサ「リーダー！また事務の仕事をサボって！リーダーを引き摺るこっちの身にもなってくださいよ！」

メガニウム「じゃあ引き摺っていかなきゃ良いじゃん」

キノガツサ「リーダーが動く気がないんだから引き摺るしかないでしょうが！…！…！リーダー、帰りますよ！」

メガニウム「逃げる！！」

……メガニウムが入ってきたかと思うと逃げてった。

あ、そだ。二十一話は翌日の更新にします！

第二十一話：二つの電話（前書き）

誰が電話をしているのか分からないのは仕様です。

アリゲイツ「また俺等出れねー!!」

マグマラシ「あきらめろ」

マグマラシ、アリゲイツ、今回電話をしているのは君達に物凄く関係する者達だよ？あ、関係したと言ったほうがいいのか…？

レントラー「作者は何が言いたいんだ？」

君達の未来に関係してるけど、過去の時代にも関係した者達だから。アリゲイツ「ん？どーゆーこと？」

……放っておけばいいや。

『トークスタート!』 ……でも良いよね？電話だし。

第二十一話…二つの電話

【ポケモンA】
フェラル

「もしもし、フェラル？」

「ああ、「ザー」か。どうした？「ザザッ」」

「アリゲイツが旅に出たわ。ジムにも挑戦するみたいよ。もしかしたらあなた達とも戦うかもしれないからそのときは正体を明かさずに全力で戦ってね」

「もちろんだ。ただ「ザッ」去年のジムランク大会でいつもランク4のウイ「ザー」ジムが一番初めのジムだからな「ジジッ」あいつを乗り越えられるか…」

「大丈夫。あなたは長い間この世界を見てきたんでしょ。アリゲイツなら大丈夫だって分かるでしょう」

「…ああ、そうだな。元四天王のお前と長い間世界を見てきた俺の「ザザッ」の「ジジッ」からな」

「そうそう！…マグマラシも一緒に旅に出たわ。マグマラシが一緒だから死にそうになっても大丈夫よ。致命傷を受けてもあなたの施したものが発動するでしょう」

「…忘れてた。そういやアリゲイツに「ザーー」かけたんだっただな」

「こら！自分のかけたものくらい覚えときなさい！」

「そう怒るなっ！」

「ノイズが酷くて聞き取り辛いわね。ちょっとどうにかしてくれない？」

「「ザッ」を使えと？」

「そうよ。これくらいどうってことないでしょう。まあ、あなたの言ってることは分かるんだけど」

「ならいいじゃないか。「ザー」「…」やっぱり掛けておくよ」

「ところで今何しているの？」

「そつだな…昔のメンバーと連絡を取り合ってる。タルミがアリゲイツ達に魔法のことを教えたらしい。使い方などは教えなかったらしいが」

「アリゲイツ達が魔法を知ったの？なぜ？」

「タルミが番をしていた水晶がサンと言うザングースに取り込まれて呪^{シユ}が発動した。その呪^{シユ}を取り除くためにあれこれしていたうちにサンの兄のザングースの動きで二人の仲を恋愛だと勘ぐった奴がいて、後をつけている間にアリゲイツ達と合流し、そのまま行って行ったところでサンの事を知った。そこで下手に隠すよりも言って秘密にさせたい方が深く入り込まないだろうと考えたらしい」

「そう…知ってしまったものは仕方ないわ。水晶って百匹のポケモンの一生分のエネルギーを封じ込めたものでしょ？サンは大丈夫？」

「正確には二メートルくらいの体格のポケモン百匹が一生に消費するエネルギーと同じくらいのエネルギー量だ。サンについては水晶のエネルギーを消費しなければ普通のポケモンの百倍以上の寿命になる」

「それはそれで呪^{シユ}のように思えるけど」

「時間と空間と宇宙の魔法全部を同時に二回使っても普通のポケモンの四倍くらいの寿命だ」

「時間と空間と宇宙魔法の三つを同時に使つと四十八匹分のエネルギー？」

「ああ、それぞれ中威力でな」

「魔法を覚えたら凄いことになるわね。悪に染まらなければ良いけど…」

「もう少し時がたってからサンに魔法を教えようと思う。過去の時代の為に。今を生きるポケモン達の為に。未来のためにも…」

「そうね。あなたの話していたことが本当だったらアリゲイツ達にはサンの魔法が必要になる。サンには悪いけど頑張ってもらっかないわね」

「………未来の為に。古代の英雄^{リーダ}の為に………」

【ポケモンB】

「もしもし」

「カメールよ、カメールさんよ」

「切るわね」わくわく！「ごめん！切らないで！」

「マグマラシ達が旅に出たわ」

「……………」

「？」

「……………」

「もしもし」

「只今、留守にしております。ドカーンと言う爆発音の後に「もういいわ……………」ごめん！」

「私を何だと思ってるの!？」

「俺のくげあ!！」

「え!?!どうしたの!?!」

「さっきまでの俺じゃないぞ。さっきのは俺の声真似がとても上手いペラップだ。…………断じて俺じゃないぞ」

「…………そう。私はペラップにもてあそばれていたのね…………後で締めておいて」

「了解!！」ラジャー

「マグマラシ達が旅立ったわ」

「達?」

「アリゲイツよ」

「そうか。アリゲイツと一緒にならフェラルの施したものが発動するな!それならどちらも死ぬことはない。一度きりだが…………」

「フェラルと連絡取った?」

「ああ。誰かに連絡した直後らしかったがな。時間がないから簡単に伝えておくぞ。マグマラシ達が魔法を教わった。使い方は教わら

なかつたが」

「誰に？」

「ミルタンクのタルミだ。今はフローゼルの恋人が出来て惚気話を聞かされたがな」

「そう。意外と早い時期に魔法を知ることになってしまったのね」

「それが裏目に出なければいいがな……」

「そうね。マグマラシ達が安全であればいいけど……」

「詳しく聞きたい事があればフェラル達に聞くと良い。連絡を取り合ってるだろうから。アリゲイツのことが中心だと思っがな」

「ええ。わかつたわ。気をつけてね」

「もちろん。お前も気をつけるよ。じゃあな」

「……」

「……」

第二十一話：二つの電話（後書き）

サンの触れた水晶についての恐ろしき真実!!

ザングース「作者！サンに呪^{シユ}もどきをかけてんじゃねえ!!」

あ、来てた。…分かってるよね？ストーリーの中ではちゃんと、水晶について知らないという事を。

ザングース「んなことどうでもいい!!」

…ごめん。あなたをこんなことに使いたくなかったんだけど召喚用ボタン…ポチッ

?????「何だ？我をこのような所に召喚して。空間^{バルキア}の神とお茶してたのだが…」

それはごめん。あなたをここに呼んだ理由はこのザングースがストーリーに支障をきたしかねないから、あなたの御力でこの者をここに来る前の状態まで戻していただきたい。記憶消去では思い出す危険性があるので。

?????「わかった。三十一話までに我等を出せ。それが条件だ」
…努力する。短くても出たのは出たことになるから文句言わないで頂きたい。

?????「よし。それで手を打とう」

ザングース「え？ああああ…あれ？何で俺ここに？」

?????「なるべく長く出してくれ。ではな」

ありがとうございましてあ！これで良しっつと。

第二十二話：時の祠（前書き）

時の祠と言えばあのポケモン！と言っことで登場します。

ちなみに、ウィードタウンの大樹はとっても高い。東京タワー超えてしまうくらい。

それでは…

『どーぞー…！』

第二十二話：時の祠

マグマラシの希望で時の祠に向かうアリゲイツ達。

ここまで来るのにハヤシガメが隙間にはまってしまったりと、意外と時間がたっている。

「貴方達はここに観光で来ましたか？」

飛びながらそう聞いてくる一匹のポケモン。大きな四つの葉っぱを持ち、首にフルーツを付けた標準よりも大柄なトロピウスだ。

「はい。トロピウスさん。僕達を時の祠まで運んでくださいませんか？」

ハヤシガメがそう質問するとトロピウスは笑顔で太い木の枝の上に着地する。

「りょーかい！ハヤシガメの頼みなら料金は只だよ！私の背中に乗った乗った！」

「ありがとうございます」

マグマラシ達は飛び上がってトロピウスの背中に乗る。ハヤシガメは何とかが登ってきた。

「いくよ！あ、その前に、皆私の背中をしっかりと掴んでいて。葉っぱはやめてね。墜落しちゃうし」

「いいぜ！トロピウスのおばちゃん！」

「お、おばちゃん！？」

「アリゲイツ！」

「おばちゃんなんて始めて言われたあゝ！！嬉し〜！さて、行くよ！！！」

「何故に！？」

そんなマグマラシの疑問も聞こえた様子は微塵も無く、トロピウスは枝の上から宙へ身を投げ出す。

『え、ええええええええ！！落ちる！死ぬ〜！！』

トロピウスはぐんぐんとスピードを上げて落ちていく。

そして大木の丁度半分くらいの高さまで落ちると、トロピウスは葉っぱの羽を使い、そのスピードのまま水平飛行に移る。

「み、みんな大丈夫？」

「死ぬ〜」

「身体が宙に浮いてた……飛ぶ事ってこんなにも恐ろしいのか？」

「先に説明して欲しかった〜」

「トロピウスさん、今回はいつもより落下時間が長くありませんでした？」

「みんなが乗ってていつもハヤシガメだけ乗ってる時とは重量が違うから延ばしたの。ごめんね」

「みんな始めてだから大丈夫ではなさそうですけどね」

「あちゃ〜」

トロピウスは大木の頂上を目指して飛んでいく。

【時の祠周辺視点】

「うん？何か面白いことないかな〜」

周辺をすいすいと飛び回る、触角と薄い羽を持つ緑色のポケモン。

「……………あ！そくだ！確かここら辺に……………あつた！これこれ〜この木の实！」

そのポケモンは探していた木の实を見つけ、笑顔になる。

木の实は鮮やかな赤色をしており、見るからに美味しそうな香りを発している。

パクッ

「美味し〜い！」

そのポケモンはその木の实を美味しそうに頬張る。

「……………いい、いいよね……………もう一個くらい……………」

後ろめたさがあるのかどこか変である。しかし、自分を抑えられな

いのか、さらに木の実に手を伸ばす。そしてそのポケモンはその木の実を食べる。

パクリ

「やっぱりおいしい〜！」

そのポケモンは木の実の誘惑に負けてしまったのか、次々と食べる。パクパク…ペツ…パク。

「美味し〜い。おい……うわ、これまだ渋かった。あ、これは美味し〜い！」

【通常視点】

「着いたよ」

暫くの間飛んでいたトロピウスは大木の頂上に着地し、マグマラシ達に到着を告げる。

「帰りもこれに乗らないといけないのか……」

帰りの事を気にして気落ちするレントラー。

マグマラシ達はトロピウスの背中から飛び降りる。アリゲイツは転げ落ちたが。

「ここで待ってるから帰りのときは起こしてね」

「寝るのかよ」

「あ、マグマラシ待てー！」

アリゲイツ達をほっといて先に歩いて行くマグマラシ。

「みんな僕を置いて行かないで！ちょっと待ってよ！」

マグマラシ達は時の祠のある場所のすぐそこまで来た。

時の祠は全体的に深緑とも青とも取れるような色をした石で形かたちづく作られている。

嘘か本当か分からない情報だが、時の祠を形作っている石は、一ちよつとやそつとの攻撃《ウィードタウンの巨木をへし折る》では壊れない強度を誇っている。と、旅のガイドに書かれていた。なんと、も恐ろしい程の強度を持った石である。

「すげー、ここが時の祠…」

「何かうまく言えねえけど変だ」

「アリゲイツ、それって神々しいとでも言いたいのか？それとも純粹に変なのか？」

「そう！それぞれ！神々しい！」

「ハヤシガメ、見てみるよここ」

「何処？」

「この祠の丁度中心の所。なんかこの祠と似た色で光ってないか？」

「うーん……本当だ！レントラーもアリゲイツも見てみて！」

「どれだ？お！こんなとこに」

「あつたな何か深緑っぽい光が」

「何だと思う？旅のガイドには何も書いてないけど」

「トロピウスさんだったら知ってるかも！」

「じゃあ早速トロピウスさんのとこへ！」

「知らないわ。そんな光があつたとか初耳なんだけど。力になれなくてごめんね。もう帰る？」

「ありがとう。トロピウスさん。でもまだ帰らない。まだ気になる

ことがあるしな！」

「じゃーがんばってー！」

トロピウスの元へ走って戻って来たマグマラシ。しかし何も分からずに再び時の祠へと走っていく。

「マグマラシ、どうだった？何か分かったか？」

「全然。トロピウスさんも分からないって言った」

「結局あの光は謎の光か」

「マグマラシ！さっきの光もうないぞ！」

「えー!?」

アリゲイツの言葉に驚いて祠の中を見るマグマラシ。しかし、深緑の光は既に消えていた。

「マグマラシ、さっきの光は図書館で詳しく調べるとして、ここおかしくないか？」

レントラーの示した方向は何気ない木。大木の上に土があり、そこにさらに木が生えているといった状態だ。

「どこが？」

マグマラシは見間違えたのかと思ったがレントラーは何気ない木をさしていることは間違いない。

「此処ここ。この木の実みは猛毒で、誰も食べないはずなのに食べた奴がいる」

レントラーは何気ない木についている木の実がところどころ千切ったように無くなっている所を指しながら言う。

「無くなってるだけだろ。別に食べたわけじゃないだろ」

「じゃあ、これは？」

レントラーはさらに地面に落ちたかじりかけの赤い木の実を指す。

「誰か食べたのか？」

「そうだとしたらそれもほんの数十分前から数分前の間にな」

「アリゲイツ！そこらに倒れているポケモンがないか？ハヤシガメも！」

一斉に辺りを探すマグマラシ達。四方に散って誰かが倒れていないか探す。

「いいやいないぜ！」

「こつちも！」

「はう〜もうだめえ〜」

何かの声はマグマラシ達には聞こえず、そのポケモンは力尽きてぐ

つたりと倒れこむ。

「レントラーそっちは？」

「全然！マグマラシは？」

「誰もいない！あれ？」

ふと、時の祠のほうを向いたマグマラシ。祠の前にさっきまで無かった緑色の何かがある。

マグマラシはその緑色の何かに向かって走っていく。

「みんな！！こっちにいたぞ！」

マグマラシはその緑色の何かがポケモンだと分かるとすぐにアリゲイツ達を呼ぶ。

一番早く着いたマグマラシはそのポケモンが木の实を食べたポケモンかどうか確かめる。

「大丈夫か！しっかりしろ！…たぶん木の实食べたな。それも大量に」

視線を木の实が生なつていた木に移して大まかな量を割り出したが、それでも大量と呼べるだけの量を食べたようだ。

「マグマラシ！そのポケモンは？」

「分からない。でもこのポケモンが木の实を食べたポケモンみたいだ。口の周りが赤いし」

「アリゲイツ。ハヤシガメの上にこのポケモンを乗せるの手伝ってくれ！」

「おう！」

「せーのっ！」

マグマラシ達はそのポケモンをハヤシガメの背に乗せ、トロピウスの所へ急ぐ。

「トロピウスのおばちゃん！ポケモンセンターに超特急で頼む！！」

「何故なげ？あと、そのポケモンは誰？」

「このポケモンが誰かは知らないけど、毒の木の実を食べたみたいなんだ！」

マグマラシ達はそう答えながらトロピウスの背によじ登る。

「じゃあ、飛ばすよ！さつき以上にしつかりと掴^{つか}まって！」
そう言うや否やトロピウスは宙に身を躍らせる。

『ぎゃああああ！！落ちる！地獄に落ちる！！！！』

「そんな訳無いでしょうが」

トロピウスは自らが出せる最高速でポケモンセンターに向かって行^突く。

「ついたよ！」

時の祠に行くときの八分の一の間でポケモンセンターの側まで来る。そしてそのスピードを大して緩められないうちにセンターの前に着地したので、そのままポケモンセンターに向かって突っ込んでいく。

「ぶつかるとも知れないから跳び降りて！」

マグマラシ達は思いつきり跳び降り、何とか着地する。

トロピウスは転がる方向を変え、ポケモンセンターの前をそのまま通り過ぎ、枝の上から落ちていく。

「目がまわったあゝ！」

「トロピウスさん大丈夫ですか！！！」

「大丈夫だからそのポケモンを……うえ……気持ち悪い」

ハヤシガメ達はポケモンセンターの中に駆け込む。

「このポケモンが毒の木の実を食べたみたいなんです！助けてくださいー！」

「この木の実です！」

レントラーはいつの間にか採ってきた木の実を渡す。

「ハヤシガメさんはそのままそのポケモンを背に乗せたままこちらへ！」

ハヤシガメはウィードタウンの診察を受けたいナスノ・１に輝いたリーフィアに連れられてセンターの奥に行く。

「な！この木の実は猛毒の……手遅れじゃなければいいが！！！」

こんな声がセンターの奥から聞こえて来た。

第二十二話：時の祠（後書き）

出てきていきなり死にそうになっているという変な登場。

マグマラシ「あのポケモン助かるんだよな!？」

……？ナンノコトダツタカ…

アリゲイツ「カタコト…」

トロピウス「やほ〜トロピウスのおばちゃんだよ!!首の果物が欲しかったら言いな!」

アリゲイツ「あ、俺にくれ〜」

トロピウス「どれがいい?」

……のんきな……

第二十三話：毒の実を食べたポケモン（前書き）

毒の実を食べたポケモンに……

アリゲイツ「ポケモンに？」

鉄拳を！！

マグマラシ「は？」

『どっぞー！』

第二十三話：毒の実を食べたポケモン

「ハヤシガメ！あのポケモンは！？」

ポケモンをセンターの奥の処置室の運んだハヤシガメにマグマラシが聞く。

「……相当量食べたようだから危険な状態だつて。耐性の無いポケモンだったら何時死んでもおかしくなくて、運んで来る時に死ななかつたのが不思議な位の猛毒だつて……」

ハヤシガメは俯うつむいて淡々と事実を伝える。嘘うそについて変な希望を持たせるよりも、ちゃんと事実を伝えたほうがいいと考えたらしい。

「じゃあ、あのポケモンは死ぬのか!？」

レントラーは最悪の考えを言う。その可能性があるという事が分かっているが、それを否定して欲しくて。

ハヤシガメも言いづらそうにしていた。

「それも覚悟したほうがいいとリーフィアが……」

レントラーの望みはハヤシガメの一言で無残にも打ち砕かれる。

「……そんな……話した事すらないけど、出会ったばかりなのに死ぬとか胸糞悪い!!！」

「落ちて着けアリゲイツ!！」

アリゲイツを落ち着かせようとするマグマラシ。

アリゲイツが多少落ち着くと、全員が一言も話さなくなる。

嫌な沈黙。そこにキマワリがやってくる。

「あのポケモンを運んで来たのあなた達でしたよね？」

「はい！あのポケモンはどうなりましたか!？」

「残念ながら……あのポケモンは……」

そこで区切り、俯うつむきながら溜息を吐く。

「出会ったばかりなのに……」

「死んだのかよ……」

ハヤシガメは物凄い速さでポケモンセンターから飛び出していった。

アリゲイツは眼に涙を浮かべている。レントラーは眼を瞑って黙祷する。

マグマラシは涙が筋になるくらい流す。

「毒の処置が……間に合い、今は病室のベッドで安らかなる眠りについています」

キマワリはさも残念そうに言う。

「……え？もう一度……」

マグマラシは聞き間違えたのかと思い、聞きなおす。

「ですから、毒の処置が間に合い、ベッドに寝ています」

「……生きてるのか？」

「はい。そりやもうすぐにも退院できるくらいの元気な状態で」

「よっしゃーあー！」

アリゲイツは喜んで、ハヤシガメに伝えに行つた。

「じゃあ何で残念なことになって言ったんだ？」

「そりやあうちが検死するナースで、あのポケモンは毒の検死にはうってつけの材料ですから」

キマワリが言うとすぐにリーフィアの鉄拳が飛んでくる。

「何言うんですかあ！」

キマワリはリーフィアの鉄拳を背を反らす事でその場を動かずに避ける。

「キマちゃん！あなたは患者の命を何だと思つてんですか！草結び！反省しなさい！」

キマワリに何処からともなく生えてきた草が結びつき、動けなくなる。

「キヤー！やめてー！お嫁に行け……」ドゴォー！

リーフィアの鉄拳がクリーンヒットし、キマワリが気絶する。

「フー！まったく……」

「……………」

ポケモンセンターにいたポケモン全員が一言も発さない。

それに気付いたリーフィアは顔を赤くする。

「あ、あ……。えと、こつちです付いて来て下さい……」

リーフィアは走ってセンターの奥に消える。よっぽど恥ずかしかったのか葉っぱの部分まで赤くなってしまっていた。

「な、何があつたんだ!？」

そこにハヤシガメを連れて帰ってきたアリゲイツ。

「アリゲイツ、後でな……」

レントラーはリーフィアが行ったと思われる方へ行く。

「“後で”だ」

マグマラシもレントラーに続いてセンターの奥へ行く。

アリゲイツ達も良く分からないまま付いていく。

アリゲイツ達が奥に消えるとセンターにいたポケモン達は何事もなかったかのように動き出す。

アリゲイツ達が奥に行くときまだ顔が真っ赤のリーフィアが一つの病室の前で待っていた。

「こ、ここです……」

マグマラシ達は病室の戸を開き、中に入る。

「あ、今度は誰?？」

ベッドの上でのんきに言うポケモン。一切マグマラシ達を見ていない。

「……………（起きてるな……）」

「えっと、ちよつと待ってね〜当てるから!う〜ん……」

ポケモンは病室の中を飛び始める。上に行ったかと思うと左へ、右に行ったかと思うと下へ。

宙返りや背面飛行など、いろいろとアクロバティックな飛行をする。「分かった!神々しい僕の存在感に魅かれて僕の事を拝みに来たんでしょ!……………あれ?違うの?う〜ん……じゃあ、僕の力を奪おうとする暗殺者!?嫌だ!まだ死にたくない〜あの木の実だつて満足に食べてないのに〜!!!」

そのポケモンはベッドの下に潜り込む。未だにマグマラシ達のことを見ていない。

「……えつとあなたが赤い木の実を食べて倒れていたポケモンですよね？」

ハヤシガメはそのポケモンの回復力が信じられないようで、半信半疑で質問する。

「暗殺者くこないでえ〜！力なら僕からじゃなくて僕の親友から！お前がああ赤い木の実を食べて倒れたポケモンで、合ってるよな！

！……うん。そ〜だよ！」

アリゲイツがそのポケモンの言つてたことを遮おさえって聞く。そしてそのポケモンはベッドの下から出てきながら答える。

『よかつた〜！！』

「へ？」

そのポケモンはベッドの下に触覚を引つ掛けてしまい、出れないままマグマラシ達の言葉に疑問を抱く。

「どういうこと？何で暗殺者が僕に対して良かったって言うの？あ、取れた」

何かと誤解しているポケモン。助けしてくれたマグマラシ達を暗殺者と間違えている。

ベッドに引つ掛かっていた触覚が取れたらしく、ベッドの下から出てきて、マグマラシ達を見る。

「あ、チームエレメント。久しぶり〜だったかな？マグマラシにアリゲイツ、レントラーにハヤシガメ！暗殺者なんかじゃなかったよ〜勘違いしてごめんね〜！」

ポケモンは再び病室の中を飛び回る。何度注意しても部屋の中を飛び回るのでリーフィアは厭あきれてどこかへ行ってしまった。

そのポケモンはマグマラシ達は名乗っていないのにマグマラシ達のことを何故なぜか知っている。

『……………はっ？』

目の前のポケモンが自分達のことを知っているということに硬直す

るマグマラシ達。

「え、どうしたの固まっちゃって！まさかこんなにも早く借りを返してくれるとは思わなかったよ」

マグマラシ達はこのポケモンと初対面で、借りなど一切作った覚えはない。

「……誰かこのポケモンの事知ってる？」

『全く知らない』

アリゲイツ達は声をそろえて知らないと言う。

「何で俺等の事知ってんだ？そしてお前は誰だ？」

レントラーがそのポケモンに対して質問する。好奇心と不信感と不安を抱きながら怪しいポケモンを見る眼で。

「え？僕の事忘れたの！？友達になっただでしょ！時渡りポケモンのセレビイだって！」

さも当たり前前の如く名乗るセレビイ。

「……セレビイ？時渡り？時の祠と何か関係あるの？」

ハヤシガメが質問する。

「……僕の事忘れちゃったの？……の皆の事は？」

「何それ？」

『「……」』

お互い暫くの間沈黙する。居心地の悪い空気が流れる。

「……あ！そっか！君達はまだ時渡りをする前の過去の君達なんだね！」

何か独りで納得するセレビイ。

『は？』

「気にしないで！僕が間違えただけだから！初めまして！よろしくね！君達のこと知ってるから！」

「始めまして……よろしく」

『よろしくな！』

「答え忘れてたけど僕は時の祠に関係してるよ。時渡りって言うのは、時間を旅することの出来る能力を使って違う時間に行ったり来

たりすることだよ。僕が時渡りすると時の祠の中が緑色っぽく光るんだ！時渡りをし終わった後も暫くは光るけどね」

「じゃあ、あの光はセレビィが時渡りをした後の光だったのか！」
マグマラシはセレビィの説明を聞いて納得でき、嬉しそうにする。

「えっと、何で俺らの事知ってたんだ？」

「えゝその質問には答えられないよゝ時が壊れて君達が消えちゃうかも知れないし」

セレビィはのんきに言うが、実際にそうならたとんでもないことである。

「あ、君達が消えるだけじゃなくて今の時代を生きているポケモン達の八割から九割が一緒に消えるんじゃないかな？」

「分かったから絶対に話すなよ？」

レントラーが顔を悪くして言う。

「わかってるよゝ僕だって消えたくないし！」ポチツ！

「はゝい少しの間お待ちください」

セレビィがナースコールを押しナースを呼ぶ。数秒後、リーフィアの声が聞こえてくる。

「何かありましたか？」

「ううん。ただポケモンセンターにいるのが飽きちゃったから退院許可をもらえないかなゝって」

「…それでしたら数時間前に出したはずですよ？三度も聞かないでください。それとも私達ナースが全員ぼけてしまったのでしょうか？…セレビィさん、どっちだと思えます？」

リーフィアは敬語のまま殺気を出し、セレビィに一步、また一步と近づく。もちろん笑顔は欠かしていない。

「どっちだったけなゝ…（やめて！怖いって！殺される！僕の一生に幕を閉じるとか嫌だあ！！）」

「はあ、セレビィさん、忘れないでください。今度聞いてきたら…」

リーフィアは今度聞いてきたときどう対処するのか言わないことで

相手の恐怖を強くする。ナスには相手の精神状態を改善したりしなければならぬらしく、精神学等は勉強している。

「あ、あはは〜じゃ、じゃあ僕はこれで……さようなら〜」

セレビィはリーフィアに背を見せないようにそーっと飛び、出て行く。

「全く…毒の木の実って分かっけていて食べたと言っんですからどうしようもありません!〜!」

リーフィアの口から出た真実。マグマラシ達が心配したのが馬鹿らしくなる事実である。

第二十三話：毒の実を食べたポケモン（後書き）

セレビィ「あはは〜……僕より強いリーフィアがポケモンセンターに居た……」

キマワリ「うちの検死の材料……になつて〜！」

セレビィ「……ボタンキュ〜ってなつて、リーフィアが怖かったからもう二度とボタンキュ〜にはならないと思う」

キマワリ「そんなぁ……」

残念がるな！！それにセレビィ、地味に親友売ってる…

第二十四話・セレビィ（前書き）

ナルシストも登場！覚えていても覚えなくてもどっちでも！
『どっぞー！』

第二十四話：セレビィ

リーフィアが言った事が驚きを通り越して呆れそうになるほど衝撃を受けたマグマラシ達。

セレビィは病室から逃げていったので聞いていない。

「……………は？」

「ですからセレビィさんはあの赤い木の実が猛毒があると分かっているから食べたんです！マグマラシさんの情報では大量に食べたようですが……」

「セレビィが猛毒の木の実を分かっているからそれでも食べた？」

「死にたがっていたようには思えないけど……」

「なぜ食べたのかは知りませんが、あの木の実は猛毒を持っているけれどとても美味しいという木の実は。毒タイプの方しか食べてませんが……」

「マジで？」 ジュル……。

「アリゲイツよだれ！」

「あ。つい」

「どんな味だったか気になるのであればセレビィさんに聞いてくださいね。どうして食べたのかも」

リーフィアと別れ、時の祠へ向かうマグマラシ達。トロピウスの背に乗るのにも多少慣れ、落下中に騒がなくなった。

「へ〜！あのポケモンはセレビィって言って時の祠の光に関してたの？しつかし、何で猛毒の木の実なんか食べたのかね？」

「それをこれからセレビィに聞きに行こうと思ってる」

「後で教えてね。さあ、着いたよ」

トロピウスは時の祠近くに着地する。

「サンキュー！トロピウスのおばちゃん！」

アリゲイツが再びおばちゃんと言う。

「やっぱり嬉し〜！！！」

「なぜだ〜!!」

結局、トロピウスがおばちゃんと言われて嬉しがるのか分からない
まま時の祠に到着した。

「セレビィ〜!!どこだー!!」

「おい!!」

「セレビィ〜!!」

マグマラシ達は時の祠周辺でセレビィを探す。

「だ〜れだ?」

「セレビィ!驚かすなよ!」

アリゲイツの眼を隠すセレビィ。無邪気と言うか幼稚と言うか何と
言うか…。

「つまんないの〜!もっと驚いてくれたっていいじゃない」

セレビィは頬を膨らませて文句を言う。

「すげーな!セレビィ!どうやってたら頬を膨らませたまま喋れるん
だ!?」

「え?普通じゃないの?(アリゲイツに教えてもらったんだけどな
あ)」

「全然。出来るほうがすげえって!!」

「やったあ!え〜と、これをやるにはここをこうして頬の中に空気
を溜めるようにこんな感じで舌を…(教えてもらった君に教えるっ
て何か不思議だなあ)」

「なんて言うか…アリゲイツってずれてるよな?」

「そうか?ほとんど一緒にいるから分からなかった。…と言うより
も慣れてしまつて有耶無耶になったってところだな」

「分かる。分かるぞ…俺もアリゲイツと一緒にいると有耶無耶にさ
れてそれが当たり前前のようになってる気がする…」

レントラーはそう言いながらマグマラシの背に前足を乗せる。

「なあ、みんな見てくれよ!出来たぞ!」

アリゲイツが頬を膨らませてマグマラシ達に話しかけてくる。
プシュ〜。

「フツ。俺のかつこよさにあてられて固まっちまったか。S A・S U・G A俺！」

「俺のクールさは日々磨きがかかっているようだな！硬直時間新記録だぜ！俺という存在は罪だ！俺を求めて繰り広げられる乙女達のバトル、俺にはそれを止められない。俺を求める乙女達、俺のために散っていく者。俺は一体どうすればいいのか……」

「……………」

「ダーテングに対してとても哀れな者を見る目で見るマグマラシ達。……俺のかつこよさは男でさえも墮ちるようになってしまったのか。俺は一体何匹のポケモンを墮としたのか……俺ってS U G E E E E

E！」

スパコーン……ドサ。ズルズルズルズル。

「あ、すいません。俺のナルシストのくそ兄が迷惑かけました。後でこの馬鹿にはきつく説教しておきますんで。このアホの事は記憶から消しちゃってください。憶^{おぼ}えてたらろくな事ありませんのでじゃー！」

どこからかコノハナがやってきて手に持ったハリセンでダーテングの頭を叩き気絶させ、引き摺っていった。

「……………何だったんだ？」

「ダーテングはナイトタウン^{あくタイプの町}一番のナルシストで、どこかの組織に所属してるとか言ってたよ」

「悪の秘密結社とか？世界征服を目論む組織の幹部だったりして」

「まさかくなれても下っ端でしょ」

「ハハハハ……って最初の目的忘れてたし！」

「なに？」

「なあ、セレビィ。なんで猛毒のある木の実って分かっていたのに食べたんだ？」

「あゝそれは……美味しいって分かってたからね。つい我慢できな

くて」

「は？なぜ何回も食べたことがあるような言い方？」

「実際何回も食べてるし」

「はあ！？」

セレビイが言ったことで驚くハヤシガメ。

「毒食べても大丈夫なのか？」

「え〜と、癒しの鈴を使ったらね。でも今日はマグマラシ達が来ちゃったからばれないように隠れてたから癒しの鈴使えなくて」

「あ〜それで倒れたってことか」

マグマラシは納得したようですぐにセレビイに謝る。

「ごめんな、俺達が来たからこうなってしまったんだろ？」

「いいって！過ぎた事は！死んでないんだし！（死んでたら取り憑いてるけどねえ〜）」

「うお！」

「どした？」

「今ゾクツて！寒気が！」

「大丈夫〜？（アリゲイツって敏感なのかな？）」

「ああ。大丈夫だ」

「あ、もう夕方だ。これからどこに行くのか知らないけど旅、頑張つてね！」

『もちろん！！』

「またねー！！」

「おう！またなー！！」

マグマラシ達はセレビイと別れ、ハヤシガメの家に厄介になる。

アリゲイツが料理を作らされたのは言うまでもない。

第二十四話・セレビィ（後書き）

三話連続投稿二話目！

第二十五話：ナイトタウンに向かって（前書き）

次話で明かされる町長はあのポケモンですが、物凄くイメージが崩れ去ることを覚悟して御読みください。尚、そのポケモンのイメージが崩れたからと言って文句、苦情等は受け付けません。

第二十五話：ナイトタウンに向かって

「我々、チームエレメントがナイトタウンに向けて出発したのは良
いが、今は道に迷って高い崖に挟まれた森の中で彷徨っている。別
れの森も薄暗かったと思うが、ここはさらに暗い。と言うよりも真
つ暗闇に近いと言って方が正しいだろう。数百メートルごとに一セ
ンチの木漏れ日があれば良いほどだ。さらにここにはあまり日が当
たらなせいせいか、気温は氷点下に近い。」

幸いなことに、我々にはマグマラシと言う名の灯り&暖房もとい焚
火もどきがあるので少しは明るく、また、寒さを凌ぐにも役立つて
いる。この場所では彼のいない旅など考えられないほど重宝する道
具^具：げふつ^{ふつ}…存在だ。しかし、彼にも限界はある。いくら彼がここ
で貴重な精神維持装置^{灯りと温もりは心をあたたくする}…として有能でも彼には出来ないことがある。
それは食料の枯渇したときの食料の調達だ。今我々はそんな窮地に
立たされ、それを乗り越えんがためにさまざまな方法を模索してい
る。

これは神が与えた試練なのか、それとも悪魔が我々を殺そうとして
いるのか…我々はその危機を脱するために今日も歩を進めた。だが、
一向に出口が見つからない。光が射さないのだからもちろん食料も
確保できない。そんな日がもう二日続いている。我々はここで餓死
してしまうのか…否！我々は生きてここを出なければならぬ！

何故なら！我々には親に生きて合わなければならぬからである。
親より先に死ぬというのは親不孝者である。我々はそんな親不孝者
にならないために、（マグマラシに女装をさせ、コンテストで優
勝させるためにも）（我々の将来の伴侶のためにも）（この世界の
ために…なぜだ？）生きてこの森を出る必要がある。………こんな

もんか？」

「……後ろで聴かせて貰ってたけど何をしているんだろっな？」

長い事呟いていたアリゲイツの後ろでマグマラシが威圧的殺気を放ちながら聞いてくる。大した殺気ではないのだが、敏感な者でなくともその者が怒っていると分かるほどの殺気は放っている。

「さ、さあ〜なんだろな？」

「途中に出てきた（マグマラシに女装をさせ、コンテストで優勝させるためにも）っていう部分。小声だけど聞き逃すと思った？」

「そ、そんなこと一言も言っていないぜ……」

アリゲイツが少しづつ後ろへ下がって行く。

「じゃあ聞くけど俺に女装して欲しいのか？女装して上目使いの涙目で御主人様とか言っただけ欲しいという奴だったのかアリゲイツは」

「いいや！俺は女装したマグマラシをコンテストに出して優勝賞金を懐に、優勝したことをネタにお前を弄ろうとだな……」

「ふーん。そういうことか……」

マグマラシはアリゲイツににじり寄る。

「あつ……つい嘘が……」

「違うだろ。今の言葉はお前の本心と見た。と言っただけで、覚悟は出来ていて当然だよなあ？」

「ま、待て、マグマラシ。今度また料理作るから見逃してくれ！」

アリゲイツはマグマラシの怒りから逃れようと見逃す条件を言う。

「よし！それで手を打った！……で、何書いてたんだ？」

アリゲイツの出した条件で釣られたマグマラシ。

「嘘冒険記。かな？どちらかと言うと物語ー（探検記風）」

「またなぜそんなものを書く気になったんだ？」

「何となく。暇つぶし？ま、三日も持たないけどな！」

「自信持って言うか？」

実際はこの森で迷ってから数時間。食料はあと一食分ある。

「だけど、こっちは暗くて周りが見えないとなるとレントラーの目で

も見えないよね」

「ああ、何とか百メートル先が見えるくらいだ。もしかしたらアリのゲイツの書いてた物語？のようになっったりしてな」

「やめてよ！僕は太陽の光のある場所じゃなきゃ数日で動けなくなるんだから！マグマラシがいればもう少し伸びると思うけど」

「草タイプだからか」

「そうだよ。草タイプは太陽の光があつてこそ栄華を極めることができるんだから」

暗闇の中をマグマラシ達のほうへ息を潜めて、忍び足で後ろから近づくと立派な角を持ち、骨が体表に出ている真っ黒なポケモン。ヘルガー。

「……あんたら何処へお行きなさる。見たところ旅の者。ナイトタウンはこつちですよ……」

『うわあ！！』

「びっくりした〜」

「おどろかすなよ」

「ヘルガーか……」

レントラーは苦虫を噛み潰したように顔を顰める。

「レントラー……」

「あら？ナイトタウンへお行きなさるのでは？」

「あ、そうそう。案内よろしく」

「いえいえ。それが亡霊である私、ルガーの役目ですから
そう言いながらルガーは歩いて行く。

「亡霊！？連れて行かれるのはあの世！？」

「？何をお言いなさるので？旅のガイドにナイトタウンの案内役は亡霊と言う役職名最新版と書いてある筈ですが」

レントラーはすぐに旅のガイド最新版を取り出し、ナイトタウンの項目を読む。マグマラシが横でさりげなく炎で明るくしている。

「あ、小さな字で書いてある。気付きにくいぞこれ」

「ふふふふ。それはこの町の町長のせいですよ……亡霊と名乗ると

きに驚かせたいと……」

「気味の悪い笑い方だな……町長ってそんなんでも務まるのか？」

「気味悪いとは私も思いますよ……ですが町長はもう数年は続けておられます」

「よく町が持つな……」

「町長はアレでいてそういう方面はいい仕事をするので……家にいないとき大抵は警察署にいますか？」

「警察署？何か警察の重要なポストでも兼任しているんですか？」

「……痴漢の現行犯逮捕です。もうかれこれ千四百六十回は超えています」

「ある意味凄い……。でもなぜそんな半端な数字？」

「そこですか。数えるのが面倒になったかららしいです。警察のほうも町長の痴漢行為の書類や記録などを作るのを止めています。犯罪発生率第一位、痴漢。そのほとんどが町長によるものです。町の悪い部分としての名物になっています。町長の被害にあっていない女性は強者です」

『……町長って……』

「変態、幼女趣味、色男、魔性、女の敵、純潔心の破壊者、女殺し、馬鹿、無差別触女主義者、変態プレイ仙ポケ……等……言い方はいろいろとありますのでどれでもお好きなのをどうぞ」

『……（色男って一つだけ良いのがある……）』

「あ、そろそろナイトタウン入り口です。足元と頭上にご注意ください」

「は？頭上？」

「洞窟の近道を使いますので足元は滑ります。また、上から落ちてくる鍾乳石を避けてくださいね」

「あぶねえな」

「たま〜にその洞窟内で白骨化したポケモンの骨が見えると思いますが気にしないでください」

「気にするって……！」

「気にしていたらあなたが白骨化した方々の仲間になってしまっても知れませんかー！と言うわけで私についてこれなかったときは白骨化を覚悟してください！」「できるかぁ！！」「…冗談です。もしあったとしてもほとんどはガラガラの手を持っている骨ですよ。…ほとんどは。私も全てを知っているわけではないので」

「うわー……」

マグマラシー行はルガーに続いて森の中を進み、話をしているうちにルガーの言っていた洞窟まで進んできた。その話し声を鍾乳洞の中で一切動かずに聞いているポケモンがいた。

第二十五話：ナイトタウンに向かって（後書き）

????? 「一切動かずじゃなくて…もごもごもご」

ちよおい！何で此処に勝手に出て来てんの！？あんたはちゃんとあの場所にいなきゃ！

????? 「窮屈なんだよ……」

さいですか。代役用意するか……

????? 「戻るから！あの場所に戻るから出させてえ！」

あ、ルガーの口調が変わってきていますが、もともとは敬語です。

町長に言われてあの口調にしていたらしい。と言う情報も。

第二十六話：ナイトタウン（前書き）

マグマラシは……高値で売れます!!

マグマラシ「何言ってるの!？」

アリゲイツ「だよな!作者!」

そうそう……って睨まないでよ。さっきアリゲイツと話していた時のノリで言っただけなんだから。

『ぶっぞー!』

第二十六話：ナイトタウン

ヒュー…ガッ！パラパラパラ…

「うわっ！鍾乳石が落ちてきた！」

「本当に落ちてくるとは思わなかったな」

マグマラシ達はナイトタウンへ入るため、鍾乳洞の中を進んでいる。

「……んーん……」

「何か言ったか？」

マグマラシが皆に聞く。

「鍾乳石が本当に落ちてくるとは思わなかったって言ったぞ？」

「その後！」

レントラーはマグマラシに答えたが、否定されてしまった。

『何も？』

「んーん！んん！……んーん！！」

「ほら！また！」

「ほんとだな。一体どこから……」

「本物の幽霊？」

アリゲイツはふざけながら幽霊だと言う。

「そんなはずはありません。私はここをよく通りますが、今までに

そんなものは見た事も聞いた事ありません」

ルガーによって即座に否定されたアリゲイツのふざけ。

「んーん！んんんー！んーん！」

「おい！たすけてー！おい！か……」

レントラーが即座に言葉に翻訳する。

「分かるの！？」

「勘」

「んんんんんんんん！」

「勘じゃないだろ！だって」

「本当に勘か？」

それに即座に疑問を抱くアリゲイツ。

「んんんん、んんんんんん、んんんー!!」

「そんなこと、どうでもいいから、たすけるー!!」

今度はマグマラシが翻訳する。

「マグマラシも!？」

「俺はそこまで長いのは出来ない。マグマラシさすがだな!」

「んんんんん、んんんー!!」

「はなしてないで、たすけるー!!だつてさ」

「どこだー?」

「んんんん、んんん、んんんんん!」

「青色の、おまえの、十歩右!つて言つてる気がする」

「マグマラシ、それつて勘の領域越しているような気がするんだけ

ど」

「そうか?」

「俺もそう思う」

ハヤシガメに対し、マグマラシが聞くがアリゲイツが答える。

アリゲイツは十歩右に行つたが誰もいない。

「誰もいねえじゃん」

「んんんんんん、んん!んんんんんんんん、んん

んんん。んんんんんん!んんんんんんんん

!」

「青色のお前の、下!鍾乳石で出来た、お前の足元。その中に俺はいる!!言つておくが嘘じゃない!つて…鍾乳石の中つて事?」

「マジ!?石の中?」

「んんんー!!」

「そうだ!!か。なら早く助けなといけないな」

レントラーはそう言うや否やすぐにアリゲイツの足の下を攻撃し始める。

「ちよつとどいて。エナジーボール三連射!!」

「んんんん!んんんんんんん!」

「何て？」
「あぶねえ！俺は岩タイプだ！」
「大丈夫？」
「んん」
「まあだつてさ。俺の番！連続遠吠え！フレイムボール！！」
ピシッ！ブシュー…
「あ、水溜まりのせいで火炎車がただの回転に…」
「でもヒビ入ったぞ！俺の番！竜の舞から噛み砕く！」
ビキッ！ピキピキピキ！
「おっしやあ！これでどうだ！もう出てこれるか？」
「んん」
バキッ！ガラガラガラ。
「助かった…」
出てきたのは灰色と青色の身体のラムパルド。
「サンキュー！地面の中にかれこれ四日間埋まってたから死ぬかと思っただぜ」
「四日も何で埋まってたんだ？」
「ナイトタウン目指して行ってたらこの洞窟で迷っちゃまって、足を滑らせて窪みに溜まっていた泥の中に落っこちまったんで、そこから抜け出せないまま時間が経って泥が固まったんだよ。鼻先だけ出てたからなんとか息は出来たけどお前達を通らなかつたら俺は死んでたぜ」
「えつと…」
「あ、俺ラムパルド」…ラムパルドさん。ナイトタウンまで歩けますか？」
「なんとか！着いたら飯食わなきゃな！」
ラムパルドの返事を聞いて大丈夫と思っただルガーはナイトタウンへ歩を進める。
「四日も埋まっていたにしては元気だよな」
「やっぱそう思う？俺って体力馬鹿って言われてたくらい身体が丈夫なんだよ」

「すごいですね」

「だろ〜！」

「ナイトタウンはこっちですよ〜」

「待ってくれ〜！」

ルガーに置いて行かれそうになるラムパルド。

暫く歩いていくと明かりが見えてくる。

全体的に薄暗いが、町はある程度活気にあふれており、モノトーンな感じの町。町の名前から分かるように悪タイプのポケモンが多い。悪タイプのポケモンが多いが、犯罪は痴漢を除くならば他の町と同じくらいの発生率だ。旅のガイドさしほんから引用。

「ようこそナイトタウンへ。皆さんを歓迎します。私は他の仕事があるのでこれで失礼します」

ルガーはそう言う風のような速さで走って行った。

マグマラシ達がナイトタウンに着いた時からずっとマグマラシを見つめる視線。

「……あの子が次のターゲット〜」

その者は音も立てず素早い動きでマグマラシの後ろからマグマラシに向かって迫る。

「ポケモンセンター行こうぜ」

「ねえ皆、今日は休んで明日ジム戦に行こうよ」

「え〜……」

「アリゲイツ、我慢我慢」

「わっ!?!」

マグマラシは何者かに痴漢行為ちかんをなされて驚く。

「新記録達成〜!!これで連続三千二百八十五回!!」

痴漢行為をしたのは黒と赤の毛皮を持った狐のような顔をした二足歩行のポケモン。

「痴漢行為で有名な町長!?!」

「チツチツチ。ちよつと違う。俺は町長だが、ゾロアークって言う名がある!それに痴漢行為じゃなく、世界の美女達を愛でる行為と

言って欲しい。あと、俺が愛するのは女だけだ」

「変わらないでしょうが！！」（今までの痴漢行為回数、数えてた……）」

そう言つてルガーが走つてきて町長（ハシタ）を連れ去っていく。

「じゃーなーかわいい女の子よ！！」（名前聞き忘れたー！！）」

「……俺、男なんだけどな……そんなに俺つて女つばいのか……」（何千匹もの女を見てきた　もとい痴漢行為をしてきた町長（ハシタ）の目ですら俺を男と見抜けなかつた……）」

そんなマグマラシの言葉は町長（ハシタ）には届かなかつた。

マグマラシはとてつもないショックを受け、涙目になりながらどこかへ走り去つて行く。

「そういうところが女つばいのような気がするんだけどな」（女で通せば良いんじゃないかね？）

「アリゲイツ、追い討ちは止めようよ。心の傷を深くするだけだから……」（アリゲイツ、酷いよ）」

「マグマラシのことは暫くそつとしておいておこう……あれはあいつにしか分からない事だ」

「マグマラシつて男だつたのか……（見た目で判断したら大変だ……）」

「ラムパルド、落ち込むなよ？」

「落ち込んでねーよ！！驚いてるだけだ！！それとも何だ、俺がマグマラシに一目惚れしてたとも言いてえのか！！」

「……してないのか？マグマラシの事を見た　ポケモンのほとんどはドキドキするつていう事がアンケートの調査で分かつて「おい！……どしたレントラー」

「それは何時（いつ）のアンケートだ？」

「ちょうど……半年前だな。夏頃に学校で実施したはず……」

「……うわあ。マグマラシがそれを知つたら大変だね……」

「哀れと言つか何と言つか……マグマラシつて大変なんだな……（男として見られないつて……）」

アリゲイツはラムパルドをレントラー達から少し離れた所まで連れ

て行き、荷物の中から何かを取り出しながら話しかける。

「なあ、マグマラシの女装……もとい寝ていた所を女装させた写真
見てみるか？」

「ああ。……………何ポケだ？」

「一枚三百ポケでどうだ？」

「よし、これとこれとこれ。それにそれとこれ……………」

「十枚か？三千ポケだ。おまけとして微笑み寝顔写真も一枚つけと
く」

「買った」

「毎度あり！」

「あんた悪魔だな……………」

「買ったあんたに言われたくねえよ」

「アリゲイツ、ラムパルドさん？どうしたの？」

『なんでもない』

「そう……………」

「さっきのって……………（マグマラシの写真？アリゲイツって……………あと
でマグマラシに伝えてやろうか……………何枚かもらった後で）」

奇跡的にアリゲイツ達が何をしているのか見えたレントラー。悪い
考えが頭に浮かぶ。

第二十六話：ナイトタウン（後書き）

レントラー「俺……悪い考えって大抵失敗するんだよな」

ラムパルド「マグマラシ！アリゲイツがこんなの持ってたぞ！！
一枚のみ犠牲！」

マグマラシ「写真……アリゲイツ許せん！！こんな物！！（怒）ビ
リビリビリ！！」

レントラー「な？すぐに失敗したろ？」

本当だ！凄いね！言ってるそばからって！！

ラムパルド「じゃーな！仲間が心配して探してると思っから俺は此
処で別れるわ！」

ばいばい。マグマラシ、アリゲイツが町長にも写真売りに行つて
るかもよ？

マグマラシ「アリゲイツ！！この羞恥、どうやって仕返ししてくれ
ようか！！」ダッ！

ダッシュで行っちゃったよ。アリゲイツどんなめにあうのか…

第二十七話：不穩（前書き）

神の登場！！なんでもない話なので作るの地味に苦労した…
エレメント『また登場出来てない…』
ボス、どんなポケモンにしようかな…

第二十七話：不穩

【次元の狭間】

此処は何処でもない場所。だが、どこでもある場所。そして此処は何時でもない時代、だが何時でもある時代。

あえて此処に名をつけるとしたら次元の狭間、それが此処に相応しいだろう。

そこに居る二匹のポケモン。

ドン！！シユン！！グニャ…

次元の狭間の一角が爆発的に膨張したかと思うと次の瞬間、急速に収縮し、大きな歪みとなる。

「……」

「なっ！！」

その者達は驚いたあと、急いで歪みの修復をする。

「……さっきの歪みは……」

「……自然に出来たとしては巨大すぎる。何者かが……」

二匹が歪みについて話しているとき、そこに現れた一匹のポケモン。

「すまない…私のせいで次元の歪みを起こしてしまった」

「……どういうことだ？」

「いつも通り私の世界を管理してたんだが、余所見をしていて柱にぶつかってしまったんだ。それが引き金となって歪みが起きた」

「……………」

「すまない」

「……ミスは誰にでもあるだろ。大事にならなかつたんだからそこまですまなくて良いだろ」

「私のミスで歪みが出来てしまった。お前達がすぐに修復してくれなかつたら町が一つ消えていただろう」

「……反転世界の神、過ぎた事は過ぎた事。我等は世界を守る役目があるが、そんなに気負って守るものも守れなくなる。少しは

体の力を抜いて休め。世界の事は我等に任せて安心して眠れ……」

「……ありがとう空間の神、時間の神……」

反転世界の神は空間の神と時間の神に身体を預けすぐに眠りに着く。

「……反転世界の神はいつも気を張って……これでは精神も身体も持たないだろうに……」

反転世界の神の身体を支える時間の神は親が我が子を見るような目で反転世界の神を見る。

「まったくだ。反転世界の神は世界の事を思うあまり俺等みたいに神話にも載らず、俺等以外の知り合いも友達もないまま世界を守ってきた……」

「ただ己の身体を酷使し続け、もうぼろぼろのはずなのに世界の為と、無理をし続け……。反転世界の神が無理をしてまで守ってきたこの世界、今度は我等が守ろうではないか」

「ああ、反転世界の神に休んで貰う為にも、これ以上無理をさせないためにも」

「……フ……フフツ」

「なんだよ。急に笑って」

「いや、自分で言っておきながらさっきの言葉を思い返すと反転世界の神が無理をするくらい我等が世界の事を反転世界の神に任せ、世界の事をサボっていたというように思えてな」

「ああ、確かに。そういうようにも取れるな」

「さて、我等の役目を果たしに行こうか、なあ空間の神」

「もちろんだ時間の神」

【アジト：G】

ニユース

「昨夜、アイスタウンでポケモンが四十四匹も切り刻まれるという事件が起きました。被害にあったポケモンは全員、切り口が焼き切られるという共通点があり、ポケモン警察は同一殺ポケ犯として

逮捕する方針で捜査しています。犯罪者は炎タイプ、もしくは電気タイプであり、背丈は四十〜五十センチ程と推測される。とのこと、これに心当たりがある方は警察当局まで御連絡ください。また、犯人にはこの事件の他にも犯罪を犯している可能性が高く、そのことを考慮して三十万ポケも懸賞金が懸けられています」

「ボルト…また派手にやらかしましたね。」

「まあな。目撃者を次々と殺していったらあれだけの奴を殺さなきゃいけないかったんだよ。俺でもあれは殺しすぎたと思う」

「はあ、あなたのせいでこの場所がバレでもしたらどうする気なんですか」

「バレたら俺が全員殺してやるよ」

「……それは頼もしいですね」

タン。ヒューーースタツ！

ボルトとポイズンが話していると上から飛び降りてくる赤色の毛のポケモン。

「ボルト、ポイズン、ボスが呼んでる。そろそろ例の計画を始めるぞうだ…」

「とうとう…あの計画が…」

「ポイズン、先行つてるぞ！」

ボルトはすぐに階段を走って行った。

「ポイズン、紅くて暖かい石……日照り石はどうなってる？」

歩きながらポイズンと話すポケモン。

「部下達の失敗のせいで手に入りませんでした。しかし日照り石のありかは突き止めたようです」

「今は何処に？」

「教えるわけがないでしょう。手柄を独り占めにされては敵いませんから」

「…全てお前の手柄でいい。俺はそれ相応の金さえ貰えれば手柄などどうでもいい」

「……それなら教えましょう。今は何処にあるかではなく誰が持つ

「ているかです」

「……誰が持つて、何処にいる？」

「ウイードタウンのハヤシガメが手に入れ、今はナイトタウンに向かっているとのことです」

「…分かった」

ポイズン達の正面から走ってくるボルト。

「おーい！ポイズン！ボスの所のパスワードどうだったっけ？」

「……………本気で言ってるんですか？」

「もちろん！」

「私も行かなければならないので共に行きましょう」

ポイズン達はボスの所に行く。

「音声パスワードを入力してください」

『我等が主の妨げを排除する者として我等が主に求めるものは主の悲願が叶うことなり』

三匹がパスワードを口にする。

「ピーー パスワードを承認しました」

機械的な音声が聞こえてシャッターが開く。

「……………毎回思っただけどめんどくさくね？」

「ボルト！」

ポイズンに名を呼ばれ、ボルトは口を嚙む。

部屋の奥から響いてくる声。

「…ポイズン、日照り石の在り処は分かったか？」

「ウイードタウンのハヤシガメが手に入れ、今はナイトタウンに向かっているとのことです」

「そうか」

「ボス。その事で御願いが…」

「何だ？」

「日照り石を手に入れる任を与えて下さい。手に入れたときはそれ相応の金さボケえいただければ……………」

「よし。その任、お前に任せよう」

「はっ！早速その任を遂行致しましょう」

そう言つて足早に出て行くポケモン。

「ポイズン。お前は研究所であの薬の開発をしろ」

「はっ！今ある物の三倍の効果があるようにしましょう」

「ポイズンは下がってよい」

「はっ！」

ポイズンも出て行く。

「…ボルト。アイスタウンで四十四匹も殺したそうだな…」

「……………」

「そのことについては追及しないが……ボルト、お前には新たな任を言い渡す」

「……………」

「最近、我等の事を嗅ぎ回っている奴がいる。そいつの処分と、日照り石と対になる物があるのか調査することを言い渡す」

「はっ！主の為に！」

「ボルト、お前も下がってよい」

「……………」

ボルトも部屋を出て行き、部屋の中で独り呟くボス。

「我は何者だ？そして我は何を為そうとしている？我は……なぜ三年より前の記憶が思い出せない！？」

第二十七話：不穩（後書き）

バルキア空間の神「よろしくな！」

ディアルガ時間の神「我もよろしく頼む……」

ギラティナ反転世界の神「私もよろしく」

わお早い挨拶だね世界三神。精神三神のアムリット、ユクシー、ア
グノムは連れてこなかったの？

バルキア空間の神「エート……ワスレテタ」

……それはさておき、フワフワな赤色の毛のポケモン⇨炎タイプ・貰い火のあ
のポケモンです！

第二十八話：夢に始まり…再会？（前書き）

スランプ中…次回の更新が出来ないかもしれません。

第二十八話：夢に始まり…再会？

「さて…この町に来てから二日間がたった…マグマラシもといシヨツクを受けた女の子はどこだ？」

「言い換える単語逆だ！しかも女の子じゃないって！」

「そんな細かいこと気にしなくてもいいじゃねえか」

「ちゃんとマグマラシを探そうよ」

「二日間も帰ってこないマグマラシーどこーにー（でーもー）いるー」

「おーい」

「？マグマラシの声？」

「おーい」

「マグマラシはあつちだよ！」

ハヤシガメ達は声のする方向へ走っていく。

「マグマラシ何処ー！！」

「此処！誰かが悪戯で掘ったと思われる落とし穴の中！」

「…ダサ」

「アリゲイツ…ちょっとこっち来い」

「おー見事に落とし穴の底だなあ…馬鹿め」

「アリゲイツ…？本当にお前か？」

「俺以外の誰なんだよ？この雌豚が！」

「なっ！降りて来い！このくそアリゲイツ！」

「誰が降りるかってんだこの」ドンッ！「くそマギユ！マラシめ」

「凄っ。突き落とされ、地面に顎を打ちながらも台詞を言う役者根性。なあハヤシガメ」

「そーだねークソ同士が仲良く穴の中だね」

「アリゲイツ、ハヤシガメ、覚悟は？」

「誰がするか…」パチン

「は？」

アリゲイツが指を鳴らすとマグマラシの足元に暗い穴が出来、マグマラシはその中を落ちていく。

「マグ……シ！……マラシ！起きろ！今日はジム行くんだろ！」

「……………」

マグマラシは目覚めたばかりの頭で周りを見渡す。

「ああ、夢か…（アリゲイツとハヤシガメ、口が悪かったな…）」

「まだ寝惚けてるのか？雷の牙！」

「ぎゃー！！しびれる！」

マグマラシはレントラーの雷の牙を受け、びくびくと痙攣している。
ズルズルズルズル

「アリゲイツ引き摺るな！」

「なら…こうだ！」

アリゲイツはマグマラシを抱き上げる。

「な！御姫様抱っこも止める！！！」

「ハヤシガメ、どうする？」

「降ろせよ……………」

「どうするって…ジムに行くってマグマラシを起こす時に自分で言ったのに」

「…ソウダツタツケ」

「カタコトだ…て言うか降ろせ」

「ピンポンパンポーン」

ニュース

「昨夜、アイスタウンでポケモンが四十四匹も切り刻まれるという事件が起こりました。被害にあったポケモンは全員、切り口が焼き切られるという共通点があり、ポケモン警察は同一殺ポケ犯として逮捕する方針で捜査しています。犯罪者は炎タイプ、もしくは電気タイプであり、背丈は四十〜五十センチ程と推測される。とのこと

で、これに心当たりがある方は警察当局まで御連絡ください。また、犯人にはこの事件の他にも犯罪を犯している可能性が高く、そのことを考慮して三十万ポケも懸賞金が懸けられています」

「……なんで宿泊施設（こい）のスピーカーからニュースが……」

「それよりも四十四匹も殺した……殺ポケ犯、捕まってないんだね」

「……アイスタウンか……」

「……」

時は変わって此処はナイトジムの中。ナイトタウンに来るときに通った森並みに暗い。今はマグマラシの炎で辺りを照らしている。

「何と言うか……ナイトタウンのジムって……暗すぎる」

「外は明るい色だったけど中は黒一色って……」

「とりあえず……挑戦しに来ました!!」

「……ふああ……挑戦者ね……御頭（おかしら）!!我等に挑戦したいと言う者が来ました!!」

どこかから声が聞こえてくる。

「御前……寝ておったのか……」

「すみません御頭!」

御頭と呼ばれたポケモンは天井から飛び降りてきた。布を被っていて何のポケモンなのかは分からない。

「何故天井?」

レントラーの質問にきちんと答える御頭。

「忍びたる者、天井裏に居る事もあるう。……挑戦者か……此処は一度しか受けられない事を知って来たのか?」

「一度だけ!?!」

「左様（うしろ）。このジムへの挑戦権は一度きり。そのとき勝たなければ二度と挑戦出来ない」

「……勝つたら何度も挑戦してもいいって事?」

「勝つたらな」

「じゃあ今、挑戦する!!」

『アリゲイツ!』

「ほう……一度きりの挑戦権だと分かっている今挑戦するか…他の者達は引き返して己を鍛えてから挑戦してくるのだが……面白い奴だ」

「ちえっ」

「舌打ち!?!」

「御頭の心理戦を一発でクリアするなんて……」

「心理戦……」

「そうだ。心理戦だ。ここで引き返すものはいざという時、決心がつかない軟弱な精神の持ち主か、知恵の働く者のどちらかだ。御主達はここに入つてすぐに挑戦しに来ましたと言っただろう。その時にもう御主等の挑戦は始まっておつたのだ」

「うわー危なかった…ナイスアリゲイツ!」

「引き返していた場合、次のジム戦はとてつもなく苛酷かしくなものにしていた。挑戦権が一度きりというのは嘘だが」

「……今回の何倍?」

「四倍から六倍。相手によっては殺傷…もとい弱らせる」

「殺傷!?!」

「ハハハ、命は何時か終わる物…もちろんこの心理戦を他の者に広めようとした者にはその時に霊界と冥界の神に口を利いてやるつもりだ」

「絶対口封じだ!!」

「何を言う。そんなことするつもりは……」

『………(布の中から見える目が本気だった!!!)』

「なんで黙るんだ?」

『アリゲイツ……平和でいいな……』

「御頭、用意が出来ました」

「分かった。トラップは何時も通りですぞ」

「御意！」

「トラップ……なんか物凄いジムだな……」

「そうでもない。……わしの親父のスパルタに比べれば……」

「何かボソツと言った！」

「さて、このジムのルールを説明しよう。このジムは回避、気配察知に重点を置いている。挑戦者チーム一匹一匹に持ち点十点があり、トラップに引つかかる度に一点ずつ引いていき、持ち点が無くなった時点でその者はチームの仲間から持ち点を分けて貰うまで退場。もちろんほつともいいぞ。他には我々、ジム員の攻撃を受けても一点ずつ引いていく。ジム員を倒す度にその者には三点が加算される。挑戦者チーム全員の持ち点が無くなった時点で挑戦者の負け。挑戦者チームがわしを倒した時点で挑戦者チームの勝利。此処まではいいか？」

「なんとか。点数制のゲームみたいだな」

「ジム員は攻撃回数が決まっており、一匹十回まで。また、ジム員の数はわしを含め五匹だ。トラップの数は二十個。トラップには捕獲系は無く、全て攻撃系だ。特別ルールとして、挑戦者チーム全員がわし等が持っているこの鈴……と言っても鳴らないが。この鈴を全て集めても挑戦者チームの勝ちだ。わし等ジム員は鈴を盗られたら攻撃せずに鈴の奪還をする。この鈴は隠してはならぬ。これがこのジムのルールだ」

「大体はこんな感じか？……点数制で持ち点は一匹十点、トラップが攻撃を受ける度に一点ずつ減り、全員の点が無くなると負け。あんたを倒すかジム員が持っている鈴を集めたら俺達の勝利」

「そうだ。ただ、ジムの中は真つ暗だ。灯りを点けるのも道具を使うのも有りだ。アブソル、グラエナ、シザリガー、スカタンク、ダーテング、ドラピオン、ドンカラス、ノクタス、ブラッキー、ヘルガー、ミカルゲ、ヤミラミの中から四匹選んでくれ。選んだ奴が対戦相手になる」

「……バンギラスが無いけど？」

「よく気付いたな。バンギラスはわしだ」

「ふーん」

「軽っ!?!」

アリゲイツのそっけない反応でこけるバンギラス。

「グラエナとノクタス、ダーテングとヘルガー」

マグマラシ達が一匹ずつ指名していく。

「また個性的で大変な奴を選んだな……」

「マグマラシとアリゲイツ久しぶりー! っと、そっちの二人は初めてだな。よろしく! あ、おれはグラエナの双子の兄のオルトロスだから」

軽い挨拶をするグラエナの兄オルトロス。(第五話を除く二話、八話登場のグラエナの双子の兄。八話にてピアノ担当)

「……久しぶり」

一言だけ話したノクタス。(一話と八話に登場したサボネアが進化)

「美しき乙女のいるところ、たとえ何処でもやってくる! 神が授けた奇跡の美貌、悪魔が与えた魅惑のボイス。俺にかかればは堕ち、そこに存在するだけで全ての が頭を垂れる! 俺の名前を呟けば、大地は欣喜し、空は喜びし、海は歓喜する! 宇宙ですらも恐悦するナイスガイ! その名もダーテング様たあ、あ、俺のことでえい!」

「スパコーン……ドサ。ズルズルズルズル。」

再び同じことを言っているダーテング。再びコノハナに引き摺られている。(第二十四話登場)

「昨日、案内しましたね。よろしく御願います」

礼儀正しく挨拶をするルガー。(第二十五話、第二十六話登場)

「……何で全員知ってる奴なんだ……」

エレメントは全員意気消沈する。

第二十八話：夢に始まり…再会？（後書き）

…ドラピオンが悪タイプかどうか分からなくなってしまった…ま、いつか。

バンギラス「わしの親父のスパルタは…五歳のころにゴロツキ達に投げつけられ、六歳のころにヤクザ相手に…

七歳のころは地中六百メートルに埋められ、八歳のころは火山の中のマグマで囲まれた場所に…

九歳のころはカイリユーに頼んで上空から命綱なしのスカイダイビング…

十歳のころは海の沖にほつとかれて…十一歳のころは親父に殺されそうになり、

十二歳のころはありとあらゆる毒を致死量ギリギリまで…

十三歳のころは伝説のポケモン相手に技を使わない状態で挑戦させられたり…

…スパルタすぎ。それでよく今まで生きてたね。

バンギラス「…ほんとに…ちなみにジムランクが低い理由は技のパワーとかは強いけれどコントロールが下手だからだ。今は練習中だが」

第二十九話：ナイトジム（前書き）

グダグダのジム戦。

（簡易説明）

むかし、アリゲイツがオルトロスにマゲマラシの写真を売ったことがある。

第二十九話：ナイトジム

「さてと…審判!!」
バンギラス
御頭に呼ばれる審判。

「はいはい」

出てきたのはクロバット。

「……何故クロバット?」

「闇闇で誰も明かりを点けない時に超音波を使って判定を下すためだ」

「それでは、チャレンジャーチームVSナイトジムの点数制バトルを開始します!!」

「電光石火!」

「さて…俺は闇の中に消えさせてもらおうか……」

バンギラスはマグマラシの電光石火を避けながら闇の中に消えていく。

「レントラー!これ!」ブンッ!

ハヤシガメが投げたのは電球。

「……俺は電気スタンドじゃない……断じて電気スタンドではない

……」

レントラーは尻尾で電球を支えながら電気を流して明かりを灯す。

ハヤシガメとアリゲイツはとくに闇の中へ消えている。

マグマラシが大して進まないうちに現れたのはダーテング。

「さあさあそのマグマラシ!大地が欣喜し、空は喜びし、海は歓喜する!宇宙ですらも恐悦するナイスガイのダーテング様である俺と一緒に結婚式でも挙げないか?」

「……あんだホモ?」

「全然!俺は を愛する紳士だ!」

「……俺…男なんだけど……」

「……」トサッ

ダーテングは口をパクパクさせて気絶した。マグマラシはそんなダーテングから鈴を盗る。

「なんか俺が罪悪感に駆られる……」

審判「ダーテング、マグマラシとの会話で倒され、鈴を奪われまして……」

審判が宣言する。

「な！ダーテングが会話だけで倒されただど！！マグマラシ……話術で敵を倒すスペシャリストか!?」

バンギラスは審判の宣言を聞き、驚く。

アリゲイツは今はトラップの仕掛けをたくさん踏んでトラップから逃走中。ギリギリ避けられている。

「竜の舞竜の舞流の舞龍の舞竜の舞竜の舞……!!」

「アリゲイツ、漢字が間違っている……」

「ノクタスか。久しぶりって言ってたけど誰なんだ？」

「…サボネア。ミサイル針、種マシガン、ニードルアーム」

「ああ、サボネアか！って針が！種が！とげが!!」

そう言いながらもニードルアームだけ避ける。

審判「アリゲイツ残り八点！」

「このお！水鉄砲！アイスクロー！」

ノクタスはアリゲイツの攻撃を難なく避け、トラップの方へアリゲイツを誘き寄せる。

バシユツバシユツバシユツバシユツバシユツ

審判「アリゲイツ、残り三点！」

「アリゲイツ……いくら周りが暗いからって早すぎだろ……」

「よ……」

「オルトロスカ。俺はレントラーよろしくな」

「お！分かってるねー戦いの最初は挨拶からだろ。っと、シャドーボール連弾！」

「スパーク！」

レントラーはスパークを使ってシャドーボールを防ぐ。

「おろ？威力弱くしすぎた？これはどうだ？泥棒」

「あっ！」

グラエナはレントラーの電球を盗る。

「……暗い。電球返せ」

「普通返すか？不意打ち、悪のはどう」

「っ痛！チャージビーム！充電！」

悪のはどうは真上にジャンプしてかわす。

「うっひよおおお！痺れたあ！特性早足発動だあ！悪のはどう、不意打ち、アイアンテール！」

「ぐっ！放電！」

審判「レントラー残り五点！」

「暇だ。今回は誰もわしの所に来ない。暇だ……」

「ルガーさん、技はいらさないから鈴だけください」

「だめですよ。ハヤシガメさん。鈴だけ貰おうとしちゃ」

ルガーはにつこりと微笑みながら火炎放射を連発する。

それに対してハヤシガメはエナジーボールで迎撃する。

「……なあ、ハヤシガメ、助けいる？」

マグマラシの声がする。

「いる！」

「ストーンエッジ！」

マグマラシの声がした方からバンギラスが現れ、ハヤシガメに攻撃する。

「ええ！？」

「……暇だったからマグマラシの声色真似してみた」

「ややこしいって！宿木の種のマシンガン！」

「それは危ないって。一つでも当たったらめんどくさくなる…砂嵐！」

「火炎放射！」

「危ないって！エナジーボール！」

審判「ハヤシガメ残り九点！」

「…あつちがハヤシガメだと思う。ならアリゲイツの方へ！」
マグマラシはアリゲイツのいると思われる方向へ走っていく。

「永続ミサイル針！」

「ダブルアイスクロー！」

アリゲイツは両手に出来た氷の爪（ガブリアス並みの長さ）で針を
撃墜していく。

「ぐはっ！」

審判「マグマラシ、トラップで残り七点！」

「……マグマラシ来た！」

「マグマラシ助けてくれ！」

「了解！火炎放射！」

「熱！巻きびし。不意打ち。騙し討ち、ニードルアーム」

「あ！近づけねえ！」

「ガッ！げほげほ！アリゲイツ、穴を掘れ！」

「あ、そっか穴を掘る！」

審判「マグマラシ残り五点！アリゲイツ残り二点！ハヤシガメ残り
七点！レントラー残り四点！」

「スピードスター！火炎放射！噴煙！」

マグマラシの火炎放射はスピードスターに纏わり付き、炎星となっ
てノクタスに降り注ぐ。

噴煙で周りがあるトラップの糸を焼き切り、安全地帯を確保する。

「せっかくのトラップ……根を張る」

「あ、マグマラシ助けてくれ！根に絡まった！」

「噛み付いてれば？火炎放射！」

「ミサイル針！種マシンガン！」

マグマラシの火炎放射を防ぐノクタス。

「……氷の牙。アイスクロー！」

ノクタスは地面から徐々に凍っていき、すぐに凍り付いてしまった。

「マグマラシたすけてくれ！」

「ちよっとな熱いぞ。蒼火炎放射！」

「つて！わざとだ！熱い熱い熱い！手足が焼き切れるほどに熱い！」

アリゲイツが根の拘束から解き放たれたのを見てマグマラシは蒼火炎放射をやめる。

「わざとだろ！！！」

「人の写真を勝手に売り捌いているような奴にはちよつどいいだろ？」

「……サイナラ！」

アリゲイツは一瞬にしてマグマラシから逃げて行った。

審判「ノクタス、氷漬けにされて鈴を盗られました！アリゲイツトラップで残り一点！ハヤシガメ残り四点！レントラー残り三点！」

「レントラー助けに来たぞ！アクアテール！」

「サンキュー！アリゲイツ。…それよりもお前、残り一点って……チャージビーム！」

「おお！アリゲイツ！残り一点になるまでほとんどがトラップだよなあ！「うるせえ！」六点はトラップで」バシュッ！

「……ハハハハハハ！アリゲイツ！お前凄いや！言ってるそばからトラップに引つかかるとか！！俺笑い死にそう……」

審判「アリゲイツ、持ち点無し！退場！」

「審判！アリゲイツに俺の点を二点渡す！」

審判「アリゲイツ持ち点二点！レントラー持ち点一点！ハヤシガメ残り三点！マグマラシ残り五点！」

「レントラーサンキュー。…レントラーちよつと……」

「ハハハハハハハハ」

オルトロスは未だに笑い続けている。アリゲイツとレントラーは少し離れる。

「レントラー、これ……」

アリゲイツが取り出したのは鈴。

「あ……オルトロスのか？」

「もち」

「ならほつといてもいいな。マグマラシ!!」

「うるさいつて「うわあ!」真後ろまで近づいてたのに……」

アリゲイツは真後ろから聞こえた声に驚いて飛び上がる。

「マグマラシ明かり代わり頼む。あと、ハヤシガメの所へ急ごう」
審判「オルトロス、笑う前に鈴を盗られました。ハヤシガメ残り一点」

「ルガー疲れたか?」

「い、いえ、ま、まだまだ……」

「疲れてるよな」

「宿木の種!」

「あつ!」

ハヤシガメの放った宿木の種は疲れてふらふらのルガーに命中する。

「ハヤシガメ大丈夫か!」

「あ、皆…後よろしく……」

ハヤシガメは息を切らせて地に伏せる。

「暇だったんだぞ…ルガーとハヤシガメの戦いの観戦し続けるくらい」

「口調変わってる……」

「早く戦おうぜ地震!」

『うわっ!』

審判「マグマラシ残り四点、アリゲイツ残り一点!」

「審判!俺の点を全員に配分!」

審判「挑戦者全員一点」

「ありやーめんどくさくなくなったから纏めたな…マグマラシは一点なんだけどな……後で締めておくか……噛み砕く!」

「うお!噛み砕く!」

アリゲイツとバンギラスの噛み砕くがぶつかる。

「充電」

「連続遠吠え」

「…雷の「氷の…牙!」」

バンギラスは雷の牙に、アリゲイツは氷の牙で再びぶつかる。

「雷の牙！」

「砂嵐！」

レントラーの雷の牙を砂嵐で防ぐ。

「フレイムボール！」

「させない！シャドーボール乱れ撃ち！！」

「ナイス！オルトロス！」

「アリゲイツ！鈴！」

「させるか！泥棒！」

アリゲイツがバンギラスから鈴を奪うが、オルトロスがマグマラシから鈴を奪い返す。

「オルトロス……マグマラシ四千六百ポケ！」

「あ！それをこんなところで出すなんて卑怯だぞ！！」

「もうバレてるから！」

「え、まじ？」

「まじ。アクアテール！」

アリゲイツがオルトロスに技を当てようと仕掛けたときバンギラスが動き、オルトロスを持ち逃げする。

「地震！ストーンエッジ！」

マグマラシ達はバンギラスの攻撃を全員食らう。マグマラシにはストーンエッジも当たる。

審判「あ……どうしよう」

審判が小声でほそほそと何か言っている。

「あーあ。負けかあ……」

「結構頑張ったと思うんだけどなあ……」

「あと少しだった……か……」

「……………？……………あ！フレイムボール！」

マグマラシの攻撃は気を抜いたバンギラスに抱えられていたオルトロスに当たる。

「ツエギ」

変な所に当たったようでオルトロスは変な声を出して撃沈する。

「試合は終わったってのに何するんだ！」

そんなバンギラスの声を無視してオルトロスの落とした鈴を拾うマ
グマラシ。

「これで俺達、エレメントの勝利だ！」

マグマラシは五つの鈴を高らかに掲げ、そう叫ぶ。

「は？マグマラシ何言ってるんだよ。俺等負けたる？」

アリゲイツに賛同して首を縦に振るレントラーとハヤシガメ、バン
ギラスとルガーといつの間にか回復したダーテングとオルトロス。

「おい審判！俺達の勝ちだよな！」

マグマラシはそう審判に叫ぶ。

審判「……はい……チャレンジャーチーム……エレメントが勝者……で
す」

ところどころつつかえながらエレメントの勝利を言う審判。クロバット

「………どういうことだ」

審判「えっと……ジム員を倒す度にその者には三点が加算される。っ
ていうルール忘れてました」

「………御主は審判失格。よって
この場で死ぬがいい……ストーンエッジ。岩雪崩……」

バンギラスはクロバットを生き埋めにする。

明後日にエレメントとナイトジムは再び戦うことになった。ジム員
の戦闘メンバーは替えて貰ったらしい。

第三十話：ブースター（前書き）

うわぁ〜!!!

マグマラシ「何なんだよ…昼寝の妨害して…」

いやね、もうこの小説の続きが全く思い浮かばなくて…もう一ヶ月以上。

マグマラシ「…頑張れ!!としか言えない…」

うん、頑張ってみる。

第三十話：ブースター

「しっかし、ハヤシガメも不運な奴だな。俺達に狙われるなんて」
真つ暗に物凄く近い森の中（ナイトタウンへ行く道）で一匹フ眩く赤ワフワフ色の毛のポケモン、ブースター。

「そろそろナイトタウンか… “身代わり変化”^{へんげ}、身代わり」

ブースターが技名を言うとブースターの体の周りにグラエナの身代わりが出来る。

分かりやすく言うならば、ブースターが身代わりで作った着ぐるみを着ているようなイメージだ。ちゃんとしたグラエナの形だが。技はもちろんグラエナの技になる。

技“変身”の劣化版みたいなもので一定ダメージ以上で溶ける変身のようなものだ。

「身代わりを意思があるものと無いものに作り分けるの面倒くさいな……」

身代わりはイメージ次第で何でも作ることが出来る。ただし、普通は一種類だけである。

「いちいち“身代わり変化”^{へんげ}って言うのもかつこ悪い……何か名前……これ纏つてるときは本当の自分じゃないし、かといって自分だし……虚はファルス……実はトゥールス……」

「虚実の我！！これに決定！！」

このブースター、血反吐を吐いた特訓の成果で身代わりを此処まで使いこなせるようになったらしい。

「……あの……旅の方ですか？」

話しかけてきたのはルガー！

「…何時から聞いていた？」

「虚実トルフェルスの我！！これに決定！！って言う所から…」

なにか良く分からないことを言っているので亡霊の役目を忘れ、普段の口調で話すルガー。

「だったらいいや。で、俺達？は旅してるけど？」

「でしたらナイトタウンへご案内します（疑問系？）」

実際、この森はナイトタウンにしか繋がっていない。

「よろしく〜！」

ルガーに案内されてたどり着いたナイトタウン。

「案内ありがとー！」

そう言っただけでブースターは走ってジムの方へ行く。

「マグマラシ、ナイトタウンに遺跡ってあるのか？」

「絶対にある。旅たけのガイドたけに載せることの出来ない遺跡があるって現地のポケからの有力情報」

「今度はどんな遺跡なんだ？」

「説明出来ないって。分かっているのはその遺跡はどれだけ時間をかけても言い表せないほど変と言うこと。たまに痙攣したポケが運び出されるって」

「なんで痙攣してるの!？」

「だから言い表せないんだって!!」

「嫌な遺跡だな（マグマラシ、この町から出る時気を付ける。町長へんたいの餌食になりたくないなら……）」

今日はチームエレメントが二度目のナイトタウンのジム戦で勝ち、ポケモンセンターに泊まって夜を明かしてナイトタウンを旅立つ日。

ジムに隣接されたポケモンセンターから出てきたチームエレメントを見るブースター^{グラフィエナ版}。それと反対側にも何かの影が。
「あれが標的のマグマラシちゃん！」^{ターゲット}

「早速行くぞー！」

「あ、マグマラシ右！」

「え？…わっ！」

マグマラシは突然飛び出してきたエンテイに痴漢行為をされる。

「もう出て行くのか？俺と結婚でもしねえか？」

エンテイの体が揺らいで消え、ゾロアークがでてくる。マグマラシは身体をプルプルと震わせている。

「……あのなあ……」

「へ〜口調から察するに俺キャラ？」

「……俺は…俺は……男だー！！」

マグマラシの大声で叫ぶ。

「……え？」

「雄。。男」

「そんな…俺は…男を……男をターゲットに……」

そう言つて物凄く沈む町長^{ヘンタイ}。そこへ走つてくるルガー。

「町長！また仕事サボつて……！……つて町長？……町長ー！美少女が来ましたよ町長！……町長〜！」

ルガーの呼びかけにも応じない町長。この世の地獄を見たかのような顔をしている。

「……どうしたんですか町長は……！」

「……え〜と、マグマラシが男だと言つたこと言っただけだ」

「アリゲイツさん！それは本当ですか！？」

ルガーが凄い迫力でマグマラシに問い詰める。

「あ、ああ」

「え、あ、……うゝ……マグマラシさん、さっき言ったことは冗談だと言ってください！！町長の前では女と性別を偽ってください！私をどうしてもいいですからどうか御願います！！」

マグマラシに四足歩行ポケモン式土下座をするルガー。

「え、あ、うゝ……わかった。でもルガーのことはどうもしないって」

「ありがとうございます！！」

「えゝと、町長、さっきのは冗談です。私は…俺は女ですからそんな反応しないでください」

マグマラシの声にぴくりと反応する町長。

「何の事だ？あんたは女は元からだろ？何を言ってるんだ？」

『……………（町長、記憶を故意的に消した！！）』

「あ、そだ。あんた等町を出て行くところだろ？旅頑張れよ！じゃーな！」

「……………マグマラシさん、ありがとうございます！それでは頑張ってください！！」

町長とルガーは町の奥へと走って行った。

町の裏面では二匹は恋仲だとかさうでないとかいう賭けが続いているらしい。

エレメントはナイトタウンを出て遺跡へと歩を進めている。

ブラスターはハヤシガメを見つけたのでそのまま尾行中。

「遺跡までどれくらいだと思っ？」

「うゝん…五百メートル」

「それだったら俺が見てるって！後三千メートル」

「ブー！！残念！後六十歩！」

『え？』

「右六十度の方の地面見てみる」

アリゲイツ達は言われたとおりの方へ向く。

「…………アレ？」

「アレだよな？」

「アレだろ」

『フシギソウの背のつぼみがキノココに替わってる石像』

「プツ！ハハハハハハ！！…………ツボに…………！！…………！！…………！！」（小声：ブラエナ版スター）

「…………？みんな何か言ったか？」

『何も』

「気のせいかな…」

「この変な遺跡の中へレッツゴー！！」

エレメントは石像の足元に作られている遺跡の入り口から入って行く。

ブースターも笑いを堪えつつ後に付いて行く。

階段を下りるとそこにあったのは…………ゴローニヤの体の石が全てイシツブテの像。

ブースターの顔の部分がブイゼルになっている像、ヒマナツツの葉っぱが花になっている像等、

とてつもの無い数の変な石像が並んでいる。

それも気味の悪い組み合わせから面白い組み合わせなど様々だ。

『ブツ！ツハハハハハハツハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！…………！！』 「あはははははははははははははははは！！！！ゲホッ！！」

「ハハハ……………また…………誰かの声が聞こえたようにな……………」

『何が？』

「何でもない。奥行ってみようぜ？」

エレメントはさらに奥に行く。もちろんブースター達（？）も。

「おーマグマラシそっくりの像あったぞー！！」

アリゲイツが見つけたのは変ではないマグマラシの像。レントラーとハヤシガメは像とマグマラシを見比べている。

「似てる……………」

「瓜二つだ……………」

アリゲイツはマグマラシの石像に手を伸ばす。

…ガチッ！

『え？』

ゴゴゴゴゴ……

「な、何の音！？」

「遺跡が揺れてる！？」

「アリゲイツ！何した！？」

「何もしてねえよ！！それに触る寸前だ！」

「遺跡にはどういった仕掛けがあるのか分からないんだから触ろうとするな！！」

ドドドドドドドド……

『イヤー！！』

『？』

『助けて〜！！』

そういいながら奥から転がってきた大きな岩の前を物凄い勢いで走って来たのはセルシーフ。メタモンはなぜかヤルキモノの背に乗っている。

「何したんだ！！」

「何って面白そうなものがあったから引っこ抜いてみただけよ！！」
エレメントも物凄い勢いで逃げ始める。

「あ…岩！？」

ブースターもすぐに逃げ始める。

『ぎゃああああ〜！！助けて〜！！』

全員、物凄い勢いで出口に殺到する。するとすぐに岩は追って来て、入り口の部分にぴっちりとはまる。それはもう水一滴も入り込めなさそうなほどに。

『はあはあはあはあ………』

グラエナ版

ブースターは技“泥棒”を使って日照り石を盗み出す。そしてこっそりと逃げ始める。

「お前達は何でこんな所にいるんだ！」

「良くぞ訊いてくれました！」

「我等宝石盗む為！」

「我等現金盗む為！」

「風が如くに盗って行き」

「嵐の如く去っていく」

「「盗賊！セルシーフ！」」（微妙なズレ）

「……………」

「ちよつと！アレほど練習したでしょ！？なんでズレるのよ！」

「ですがボス……」

「……………いやそんなこと訊いてないんだけど……」

「あ、そうだったわね。あなた達の後をついて来てたら遺跡の話があったからお宝でもいただこうかな？って思ってた先回りしてたのよ。」

「……………ってそんなことより！行け！メタモン、ヤルキモノ！」

『了解ボス！』

ブラックカード入りケラエナ版

二匹はハヤシガメの荷物とブースターから日照り石を盗る。そしてすぐに逃走する。

『あ—————っ!!』

第三十話：プースター（後書き）

……ハヤシガメ、ブラックカード持ってたんだ。今まで出てこなかったけど。

ハヤシガメ「……………えーと」

金持ってるからって他の者達と違うように接しないでくれと言いたいんでしょ？

ハヤシガメ「心、読まないでくれる…？悲しくなるから自重します。」

第三十一話：ブースターと日照り石（前書き）

ブースター、トウルーフアルス使った意味あるのか！？
ブースター「さあ？」

第三十一話：プースターと日照り石

「僕の荷物!!」

「泥棒!! いやこそ泥!!」

『こそ泥じゃない! こそこそして無いし!!』

「エネコロロはこの前泥棒やめるって言ったよな!」

「泥棒をやめると言ったけれど盗賊の手伝いをやめるといった覚えは無いわ!!」

「返せ!! 龍の舞連続! 水鉄砲!」

「なら、変身! カイリユウ! 龍の舞!」

「電光石火! スピードスター!!」

「チャージビーム!」

「……… 火炎放射」

ビシャー! バリッ!! …… ドッカーン!

エレメントとプースターの技が決まり、吹き飛んで行く三匹。

『……… 覚えてろ!!』

「でた。ヤラレキャラの常^上等文句」

ハヤシガメは荷物と日照り石を拾う。

「え〜と、誰?」

「……… グラエナ」

「さっきはどうもありがとう」

「………」

「あ、そういえばセルシーフが盗む前に紅い石を持ってたのって…」

「………」

「……… (冷汗)」

『何故?』

「……… (どうしようか)」

『何故?』

「…その紅い石……日照り石を俺にくれ。俺にはその日照り石が必

要なんだ」

「え？何故必要なの？」

「それは言えない。（言ったらくれぬし）だけど俺にその日照り石をくれ」

「……だめだろ。理由も言えぬ奴になんか渡すなよ。只でさえあのパッチール達がなぜか狙っているしな。悪用されるかも知れねえぞ」

「うん……ごめんね。理由が言えなきゃ日照り石を渡すのは無理だよ」

「……なら！！力づくで奪うまでだ！！」

グラエナ版ブースターはハヤシガメとの距離を一気に縮め、日照り石を奪おうとする。

「させるか！放電！」

「邪魔だ。悪の波動、火炎放射」

「ぐあつ」

「連続竜の舞」

レントラーの攻撃を余裕で打ち破り、レントラーを焼くグラエナ版ブースター。

「この！火炎放射！スピードスター！フレイムボール！」

マグマラシの火炎放射を避けようともせず当たるグラエナ版ブースター。

「え？火炎放射が当たったのになんとも無い！？」

「オーバーヒート」

スピードスターは炎に負けて届かず、フレイムボールもあっさりと力負けして跳ね返される。

「オーバーヒート！？グラエナってオーバーヒート使えないよね！

？エナジーボール！」

「火炎放射。体当たり」

グラエナ版ブースターはレントラーをさらに焼き、マグマラシに体当たりをする。

「アクアテール！！」

「……オーバーヒート」

アリゲイツはブースターグラエナ版に攻撃するもこれまたあっさりと跳ね返されて炎がアリゲイツを焼く。

「このっ！火炎放射！スピードスター！」

ふたたび火炎放射に当たりに行くブースターグラエナ版。スピードスターは最小限のチョップで壊される。

「光合成……」

「充電……」

「遠吠え……」

「おまえは何なんだ！」

「なにつて、俺はイーブイの頃遊んだ仲なのに忘れたのか？マグマラシにアリゲイツ」

「イーブイ！？グラエナってイーブイから進化しないだろ！！」

グラエナ版ブースターはトゥルーファルスを解き、ブースターの姿に戻る。

「ちなみに今は我等のボスの望みを叶えんが為に動いている組織“グランド”の幹部の一匹だ。この前は下っ端：パッチール達が世話になったらしいが」

「あいつらの仲間なのかよ！！」

「……まあ、否定はしないなオーバーヒート」

「チャージビーム！」

「ソーラービーム！」

「穴を掘る！」

二匹のビームをオーバーヒートで難なく防ぎ、自分の周囲の土を焼き固めてマグマラシが下から出てこれないようにする。

「お遊びはここまでだ。噴煙」

地面から出てきたマグマラシは避けきれずに当たり、レントラーを巻き込んで木にぶつかる。

ハヤシガメはとっさに逃げていたので技の範囲には入っていない。アリゲイツも噴煙にあたり、吹き飛ばす。

「電光石火。白火炎放射」

ブースターはレントラーを追いかけて、マグマラシとレントラーに白火炎放射を決める。

「ガッ！」

「ゲエ……（このままじゃあ負けてしまうし……グランドに日照り石が悪用されるかもしれない……逃げるしか……）」

レントラーは気絶し、マグマラシも戦闘不能になってしまう。

「この！アクアテール！」

「何度も無駄なことよくやるね。そりゃ！」

ブースターは避けることをせず、向かってきたアリゲイツのシツポを銜え、投げ飛ばす。

マグマラシは荷物の中から何かを取り出す。

「みんな、逃げるぞ！“煙玉”……！」

マグマラシの投げたそれは地面に着くと同時に煙を発生させ、あたりを見えなくしてしまう。

ハヤシガメはレントラーを、アリゲイツは待つてましたと言わんばかりにマグマラシを御姫様抱っこし、走っていく。

「……やられた」

煙が晴れるとそこにいたのはブースター一匹。

ブースターはエレメントの後を追わずにどこかへ消え去っていく。

マグマラシ達はブースターから逃げてきた後、新たな町のポケモンセンターにきた。

「なあ、マグマラシやレントラーって大丈夫か？」

アリゲイツはポケモンセンターの医師と話かけている。

「あなたもマグマラシさんも比較的軽傷ですが、レントラーさんはやけどが酷く、一ヶ月は安静が必要でしょう」

「そんなに！？ボールの中に入れて機械にかけるだけで治るんじや

ねえのか？」

「そうそう。ポンプンポポポン！ってあつと驚くくらいの速さで回復……するかあ……！」

「しないのか……！」

「しねえよ！！それにこんなことやらせるんじゃねえ！ポンプンポポポン！って回復するのはゲームの中だけだ！！」

「……アリゲイツはレントラーの心配してないのか……？」

「……してると思うよ。多分。頑張つて早く直して欲しいね」

「いや、どう頑張つたら早く治るのか聞きたいんだが」

「あ、そうだね」

第三十一話：プースターと日照り石（後書き）

新たな町何処にしようかまだ決めてなかったので名前は出さない！
後悔はした気がするが反省はかけらも無い！

ハヤシガメ「それって結局何もしてないんですよ」

……さーで、続きでも考えるか（逃

第三十二話：ノーマルタウン（前書き）

時間稼ぎの為の苦肉の策Ⅱ 第三十二話

第三十二話：ノーマルタウン

組織、グランドの一員であるブースターに襲撃されてから早一ヶ月。レントラーの治療も終わりに近づき、マグマラシ達三匹は負けたことで自分達の弱さを知り、特訓した。

そして今日はレントラー退院の日

「……………アリゲイツ達どこ行った？」

アリゲイツ達はレントラーが退院したにもかかわらず、居場所も教えていないし、迎えにも来ていない。

「…レントラーさんですよ？今日退院の…」

「あ、ああ」

話しかけてきたのはピクシー。

「あなたの仲間であるハヤシガメさんからの伝言です。“退院おめでとう。この村の村長…って違う違う。この町の町長の家に来てね”と……………」

「わかった。ありがとな」

「…！？それでは失礼します！！！」

ピクシーは早口でそう言うところから逃げ出した。とその瞬間、そこに突っ込んできたプクリン。

「ピクシーちゃん…何てこうタイミングのいい……………」

ちよつと泣きそうな顔のプクリン。昔、倒れていたプクリンをピクシーが看病したのがきっかけで好きになり、ピクシーの事を想い続けている…もとい追いつ^{ストーカー}続けている。

レントラーはそんなプクリンを触らぬ妖精に祟り無しと言わんばかりに避け、町長の家に向かう。

「あゝ！もういやだ！安請負するんじゃないやねかった！！」

町長の家でアリゲイツが叫ぶ。

「アリゲイツ……これはなにをいれるんだ？」

マグマラシはアリゲイツを多少手伝っている。本当に多少。

しかし、マグマラシの格好は……今は言わないでおこう。

「後一分くらいでオレガノを入れてくれ」

アリゲイツはもうとてもぐったりしている。そしてそばには大量の同じものが。

「こっちは……何を……いれるの？」

ハヤシガメは息を切らしている。

「サフラン、それと……ブラックペッパーでも入れてみるか？」

アリゲイツ達が何をしているのか……もうわかるとは思うが料理である。

アリゲイツが頼まれて町長& a m p ;護衛達の食事を作っているのである。

どうしてこうなったのか……それはこの町に来てから二日目の事

【過去回想】

「レントラー意識戻ってよかったよね！」

「ほんとに。あのままスイの後を追っていくのかと思ったぜ」

「ちよ……アリゲイツ……」

「本人の前で死ぬと思ってたとかいう発言をするなよ……傷つく……」

「大丈夫だろ。一ヶ月で治るって医者言ってたんだから死なないだろ」

「ま、それもそうなんだけどな」

「レントラーまた明日」

「ああ、またな皆」

アリゲイツ達はレントラーの御見舞いの帰り道で話している。

「襲われてた ポケモンがいたからよ？そこに俺が助けに入ったらよ？その ポケモンが“何してんの？邪魔で気持ちの悪い顔見せ無いでくれる？”って言うんだぜ？酷くねーか？」

「それ何時だ？」

「えーと……三年前。桜が満開とは行かないまでも少しつぼみを残してほとんどが咲いていて、チェリムも花を開いていたシエイミの月の二十二日のスイクンの曜日。午後五時三十六分二十七秒」

「細かつ！」

「そんなに根に持ってるの！？」

「全然。単純にそのとき時計を見ていて、偶然覚えてしまったんだけど？」

「……やっぱり根に「違っって」…持つて「ない」…復讐を「何なんだよ……」。俺そんなに信用ねえか？」

「ある。機嫌直そうぜ！あ、レントラーの意識回復記念パーティーもといアリゲイツの手料理堪能食事会でもやろうぜ？」

「作るのめんどくさい」

「そう言わずにさ〜」

「アリゲイツ僕からも御願ひ。作ってよ」

「……レントラー主役がいねえのにそんなことする意味あるのか？」

「！？アリゲイツがまさかの正論！？」

「まあ、作るけどよ……材料調達よろしく」

そんなことを話していると横から話しかけてきたポケモン。

「のう。アリゲイツと言う者の料理の腕はどれ程のものなのか？」

「それは って誰？」

「ああ、すまん。名乗っておらんんだな。ワシはエテポース。もうすぐ七十を迎えようとしとるヨボヨボの腐るのが早くて耳が遠く、頭も悪いクソジジイであり、二つ名は「健爺」っと言ってもワシの家族に付けられた名だかの。そしてこの町の町長の友でもある」

『（自分の事を他人事のように結構悪く言った！？って何で町長の友って言った？）』

「え、と、俺はアリゲイツ。んでこっちがハヤシガメ、最後にマグマラシ」

「よろしくの」

『ああ（はい）（こちらこそ）』

「で、アリゲイツ殿はどれ程の料理の腕前をお持ちかな？」

「さあ〜？」

『プロ並！』

エテボースの質問にハヤシガメとマグマラシは口をそろえて答える。

「何じゃと！？そのような年齢でプロ並じゃと！？……………ハッ！
いかんいかん。アリゲイツ殿、悪いんじやが今日から二十七日後に開催される町長御食事会の料理を作って頂きたい！……………本当にそれだけの腕があればじゃけど……………」

「ハア！？町長御食事会？意味わからねー！！」

「町長御食事会は各町長と食事をする事によって町同士が仲良くなることを願って年に三度開催される特別な催し物じゃ。“同じ釜の飯を食べた友”とか言うじやろ？」

「なるほど……………（単純に美味い飯食って仲良くしたいだけ？）」

「アリゲイツ、この頼みごと受けるの？」

「う〜ん……………（マグマラシがメイドの格好して給仕するなら即座に受けるんだけどなあ……………）」

「手伝うからやるっぜ」

「何でも？」

「……………ああ、食事会の手伝いなら何でもだけど？」

「なら、やるー！！」

「おお！やってくれるか！とりあえず料理の腕がどれほどのものか知りたいのだが、腕を振るってはくれんかね？」

「今から材料調達するから待っててくれよ」

アリゲイツはノーマルタイプポケモン達であふれかえった道の中

へ消えていった。

「あ、僕達の泊まっている所は宿“リンクマ輪熊の宿”です」

もうかれこれ七十年は経営を続けており、今のオーナーは三代目だとか。

「リンクマ輪熊の宿”…了解じゃ。そちらにすぐに向かって待つとしようかの」

そういつてエテボースは歩いていく。

「あ、ハヤシガメ、アリゲイツって財布持ってたっけ？」

「……持ってないね。僕のカードで払うつもりだったし財布要らないつて言ったから」

「行くか」

マグマラシ達はアリゲイツが歩いていったかと思う方向へ歩いていった。

そして買い物も済み、リンクマ輪熊の宿の一室にいるエテボースの前にはアリゲイツが作った料理が並んでいる。

「さ、さすがじゃ。プロ並の腕前だけあって見た目や匂いからも食欲をそそられる……しかし味はどうかの………」

ムシャ…モグモグモグモグ……！ムシャムシャムシャムシャムシャ…！

「ハイ、ストープ！」

「ウアゴゴ…ウアゴゴ…ウアゴワスヲヒヨクジノゴマヲフル！（何故じゃ…何故じゃ…何故わしの食事の邪魔をする！！）」

「言ってることは分かるが、結論は？」

……モグモグモグモグ…ゴクン。

「もうワシ死んでもええ…死ぬ前にこんな料理を食べれたのじゃ…花畑を流れる川の渡し舟さんよ…ワシはどうすればええ？これ以上望んだら罰が当たるじゃろつて……今そっちに」

ベシッ！

涙を流すエテボースの頭を叩くアリゲイツ。エテボースもそんな事は気にしないだろう。

「ッハ！？今ワシは天国を垣間見た…そして川の向こうに渡してもらおうとしたりったわい！いや、まさかこれ程のものだったとは…このエテボース、感極まったぞ！君に決定じゃ！！絶対に町長御食事会の料理を作ってもらおうぞ！四百八十六匹前を！」

『え？』

「君に決定じゃと言ったる？」

『いや、その後』

「？……四百三十六匹前のことか？」

アリゲイツ達は思いつきり首を縦に振る。

「近くの町は十八つの町だけだろ？町長は十八匹、その護衛を三匹だとして合わせて七十二匹そして全員が三人前食べるとしても二百十六匹分だろ！？」

「それはこの町の町長が原因じゃよ。それとその護衛の一匹も」

「……ノーマルタイプの町長とその護衛って……」

「町長カビゴンとその護衛の一匹ベロベルトのせいじゃ。それとポイズンタウンの護衛のマルノーム。三匹ともよく食べるからの一匹最低でも六十人前はぺろりと」

「俺達以外にも調理するポケがいるんだろ？」

「は？町長ごとに違う料理人が作ったら味の差別が出来てしまうからいるわけ無いじゃろ？」

『地獄だ〜！！』

【普通視点】

お分かりいただけただろうか。そしてそこにレントラーが現れる。

「ブツ！！マグマラシ何着てんだ！！」

「訊くな……レントラー、ちょっとそつちへ行ってくれないか？」
物凄く暗い雰囲気のマグマラシは顔が紅くなっているレントラーを
厨房の方へ押しやる。

「！助け！！」

「へ？ちょ、ちょとどういうことだ！？」

レントラーは無理やり手伝わされる。

「説明は後ですから“手伝え”……」

「はいっ！！喜んで！」

ハヤシガメの脅迫のような有無を言わない雰囲気レントラーはす
ぐに手伝いに入る。

「皆がんばれ……」

「何でマグマラシは手伝わされてないんだ！！」

「マグマラシだけはこの後が大変だから今のうちに休んでもらわな
いと」

「そうなのか？」

『そつー！』

第三十二話：ノーマルタウン（後書き）

マグマラシは次の会で活躍！ 食事会で

しっかし、ハヤシガメ途中口調変わってたよね…

「説明は後でするから“手伝え”……」って。

いつもだったら「手伝って」とかだと思っのに。

ハヤシガメ「誰かを脅すときはあの口調の方が脅せるでしょ？」

……意外と……黒いのか？

第三十三話：ファイトタウン町長ルカリオを襲う恐怖（前書き）

アリゲイツ「町長達結構若い。そして個性的？」

レントラー「マグマラシの格好って反則だろ……………」

ハヤシガメ「……………マグマラシの写真集をお父さんの会社で出したら

……………爆発的に売れるね！」

『マグマラシがここに来る前にどうぞ！』

第三十三話：ファイトタウン町長ルカリオを襲う恐怖

「次！」

「了解！あ、モモンの実が足りねえ！マグマラシ、ちょっと倉庫から取って来い！」

「わかった」

「アリゲイツ、後二十品で終わるよ！」

「まじでか！」

未だに料理を作り続けているアリゲイツ達。

「これ、倉庫なのか？」

マグマラシが呟くのも無理は無い。

なにせこの暗い倉庫一杯にあった食料がほんの少しを残して無くなっているのだから。

「えーと、モモン、モモン……」

マグマラシはその少ない食料の中からモモンを探す。

「あつた！……つて石かよ！」

ヒュッ！…カーン！…ゴッソ…

マグマラシはモモンの形そっくりな石を投げ捨てる。その石は壁に当たって跳ね返り、マグマラシの頭部に命中する。

「いってゝ投げなきゃよかった」

マグマラシは少しばかり涙目になっている。別に泣き虫とかそういうわけではないが。

「今度こそ！モモン！」

マグマラシは目的の物を見つけ、それらを引き摺って倉庫から出て行く。

「後十品！」

「モモンは？」

「今マグマラシがとってきてるとこ！」

「もってきたぞ〜！」

マグマラシはモモンを持って帰る。

「マグマラシこの鍋にそれ全部入れてくれ！」

マグマラシは持って来たモモンを全部鍋の中に入れる。

「ハヤシガメ！それ盛り付け方違う！レントラー！もっと細かく切る！」

『あ』

ハヤシガメとレントラーは注意されてハツとする。

「後二品！」

「レントラー、ハヤシガメ、お疲れ……もういいぞ！」

アリゲイツはふらふらしながら言う。

「アリゲイツ大丈夫か？」

「さあ？」

「……」

アリゲイツはふらふらのまま料理を全部完成させる。

「終わった……」

「全部終わったのか？」

「とつとつ調理し終えたの？」

「ああ」

『よっしゃー！！（やったー！！）』

「マグマラシ、後は任せた。そのままの格好で……」

そう言つとアリゲイツはすぐに倒れる。肩でせいぜいと息をしている。

「動けねえ……」

「アリゲイツ、マグマラシの働きが見える場所まで引き摺ってくぞ

「？」

「ああ……」

レントラーはアリゲイツをどこかへ引き摺っていく。

「マグマラシ、その格好してるんだから女の子っぽくしてね？」

「うう……わかったよ……」

マグマラシは俯きながらハヤシガメに答える。

なぜなら、マグマラシが着ているのはメイド服。少し幼く見えるように設計されているそれはマグマラシが であるとしか思えないようになっている。

そんなことを言っているとエテボースが調理場に入ってくる。

「マグマラシ、そろそろ出番じゃ。その……いろいろと頑張れ……」
それだけ伝えるとエテボースは食事会の会場のほうへ戻っていく。

「マグマラシ、じゃあね。頑張って」

ハヤシガメもどこかへ行く。

「……うう……やだ……」

カチャ

調理場の扉が開き、外からマグマラシと同じ様にメイド服に身を包んだポケモン達が入ってくる。その数、二十数匹だ。

マグマラシ以外は全員、正真正銘の だ。

メイド服に身を包んだマグマラシはそのほかのメイド達にまぎれて仕事に取り掛かる。

【食事会の会場】

エテボース

「皆さん、そろそろおなががすいてきた頃でしょう。ここらで晚餐会といたしましょう。奇跡とも呼べる素晴らしき料理の数々を心ゆくまでご堪能あれ！」

カビゴン（ノーマルタウン町長）

「なに！お前がそこまで言うほどうまいのか！！」

ゾロアーク(ナイトタウン町長)
「カワイ子ちゃんいるといいな」
フシギバナ(ウィードタウン町長)
「奇跡か…」
リザードン(ヒートタウン町長)
「たのしみだな！」
ドラピオン(ポイズンタウン町長)
「……んあ？寝てた……」
ムウマージ(ソウルタウン町長)
「全く……」
エレキブル(エレクトタウン町長)
「わし今日何か発言したっけ？」
メタグロス(メタルタウン町長)
「……」
ミロカロス(アクアタウン町長)
「水が欲しいわ」
ルカリオ(ファイトタウン町長)
「……？波導が変な奴がいる？」
フーディン(ミラージュシティ町長)
「どこだ？」
ルカリオ(ファイトタウン町長)
「調理場……給仕の者の中に一匹……」
カイリユウ(ドラゴンタウン町長)
「大丈夫だって！」
アーマルド(バグタウン町長)
「毒入れられた時はドラピオンに食べてもらえばいい」
バンギラス(ストーンタウン町長)
「気にしなくてもいいだろうが……」
ドサイドン(ノームタウン町長)
「刺客だったら問答無用！」

トゲチック（スカイタウン町長）

「平和的に話し合おうよー！」

マニユーラ（アイスタウン町長）

「敵の時は容赦したら命取りだよ！」

何故かアトリユートタウンの町長になったポケは今までたった一匹もいない。

調理場からマグマラシ達、給仕メンバー……もといメイド達が一斉に会場に入る。アリゲイツ達の調理した料理を持って。

ゾロアーク

「！ヤッホー！また会ったねー！！」

ゾロアークがマグマラシに気付いて手を振ってくる。だが、マグマラシはそれを無視する。

ゾロアーク

「ははあ、俺を無視して気を引こうとしてるんだな？」
幸せな奴である。

ルカリオ

「……変な波導はあのマグマラシから発せられている……」
フーデイン

「ふむ……用心するに越したことは無いな……」

マグマラシは全町長に料理を一品配っていく。他の料理などは他のメイド達がやってくれる。

余談だが、である町長のほとんどはマグマラシを見てドキッとしていた。

マグマラシはゾロアークのところに料理を置く……置いた瞬間、マグマラシの身体はゾロアークに抱きかかえられる。

「やめてください……」

「いいじゃん俺と君の仲だよ？」

「やめてください！それと誤解されるような事言わないでください！」

マグマラシはゾロアークの手から逃れようと抵抗する。

「またまた嬉しんでしょ？」
「仕事なので失礼します！」ゴツツ！
マグマラシはゾロアークに頭突きをお見舞いしてゾロアークの手から逃れ、仕事を再開する。

「どうぞ」

マグマラシはルカリオにも料理を配る。そのまま次の所へ移動しようとしたときにルカリオに掴まれる。

「お前は……何者なんだ……？」

「は？」

マグマラシは質問の意味が分からずあっけにとられる。

「お前は……何者だ！」

「えっと……マグマラシ？」

「何故疑問系なのは知らないがお前……普通のポケモンではないな？」

フリーデン

「確かに……普通ではないな」

「え？どういうこと？……俺が物凄く っばい だから？」

マグマラシは敬語を使うことも忘れ、いつもの口調で喋っている。
ルカリオ

「 なのか!？」

フリーデン

「なんと……」

ルカリオ

「だからあんな変な波導だったのか？いや、しかし……」

「仕事を再開してもよろしいでしょうか？」

マグマラシが聞くとフリーデンは頷いてマグマラシを自由にする。
ルカリオの声が少し震えている。

フリーデイン

「変な波導と言つのはどこが変なんだ？」

ルカリオ

「近くで感じて始めて分かったが……あまりにも……不自然なんだ。まるで何者かが力づくであいつの……力と波導を封印している様な……。それに……波導は……と……で明確な差があるはずなんだが……あいつにはそれが……無い。」

普通と変わらない波導なんだが、さっきは一瞬だがその数十倍の波導のズレがあった……。

……あまりにも異様過ぎる……。波導はルカリオ一族とミュウ様以外、ほとんどの者は何も出来ぬはず……。たまたま波導を操る者がいる事はあるが……、我等でも他人の波導は絶対にどうこう出来る代物ではないはずなのに……。」

恐怖がルカリオを襲い、ルカリオは震えている。

フリーデイン

「……………」

フリーデインは顔をしかめ、何も言わなかった。

第三十三話：ファイトタウン町長ルカリオを襲う恐怖（後書き）

ルカリオ「作者！あのマグマラシは一体何者だ！！」

え？何か言った？

ルカリオ「あのマグマラシは」

何か？

ルカリオ「だから」

なにか？

ルカリオ「……話す気が無いなら始めから言え！」

ていうか何でミュウの事知ってるの？ていうかルカリオって？

ルカリオ「ここで言わなくても作者がいつか書く。それに私はだ」

現在人気投票募集中！

波導と、人気投票は詳しくは奇運のポケモン達【余談】へ！

第三十四話： 思いと想い（前書き）

ちよつと早めの投稿。

この場で一言、言わせていただきます。

次回投稿は都合により来週には出来ません。なので次回投稿は再来週以降となります。

第三十四話： 思いと 想い

【ルカリオ視点】

私は……ただ、恐ろしかった。

あのマグマラシの存在そのものに恐ろしさを抱いているのか……。それとも訳の解らないことが起こってしまったからそれが恐怖になっってしまったのか……。

波導から性別すらわからない……。

そして、さつき一瞬だけ発せられた物凄く強大でありそうな波導……。

いや、その一瞬だけだが、発せられたのは私をいくらか上回る程度のものだ。

恐怖がさつき感じたことを余計に増幅しているらしい……。

生まれたときから波導が強いものがいたが……アレはそういう類の者なのかよくわからない。

だが、修行して波導を強めた私をいくらか上回る程度。

生まれたときから波導が私を超えているという者がいてもおかしくないのかも知れない……。

そう考えたら私は悔しくなってしまった。

修行して波導を強めた私が、強いと思われる波導を生まれ持っただけの奴に何故負けなければならぬ！

“絶対にあいつを超えてやる！”

そう思うと私はいてもたってもいられなくなりそうだった。

私の中の恐怖はいつの間にかマグマラシに対する対抗心となっていた。いや、ただの意地か？

どちらにせよ、恐怖は消え、何でこんなことで恐怖を抱いていたのか……あほらしくなった。

いつそのことさっきの私を叱ってやりたい。
ああ……食事会もとい晚餐会を抜け出して修行をして一刻も早くあいつを抜かしたい！

【カイリユウ】

ルカリオが「……？波導が変な奴がいる？」と言ったときからいろいろな顔を見せてくれた。

最初はいぶかしげな感じの顔。

次は警戒心を内に秘めた顔。

その次はゾロアークとマグマラシのやり取りを見て微かに口の端が上がっていた。

次は無表情でマグマラシに話しかけている。うまく聞き取れなかったけど。

次はマグマラシが何か言った後、ほんの少しだけ目を見開いていた。

次は悩んでいる顔。

その次は何かを感じ取ったのか、恐怖一色で顔を染め上げている。

あれ？これってやばくない？

ファイトタウン町長であり、元ジムリーダーだったルカリオって滅多な事じゃ恐怖とか、怯んだりとかしないんだったよね……！？特性でそういうの軽減されるはずだよね！？不屈の心と精神力で！僕が混乱しているとルカリオは何か結論に達したのかだんだん顔が明るくなってきた。

え？何あの顔！復讐心で燃える心を持ったポケモンの顔！？

あれ？次の瞬間にはそんなのも消えて、何か目標を持ってそれに突き進もうと決意したときの顔かな？

……いつもはあんなにころころと顔変えてくれないのにあのマグマ
ラシのおかげで百面相が見れた。
結局の所、僕にはマグマラシが何者なのかはわからないけれど敵と
かじやないみたい。
隙だらけで、警戒心とかを抱いていなくて、顔は羞恥で紅くなって
いるあの娘にはそういう事出来なさそうだし。
あと、この部屋の上の方から見ている三匹……あれはレントラーと
アリゲイツとハヤシガメだね。あの三匹はマグマラシを見て笑って
る。友達なんだろうね。

【通常視点】

「うめえ！これ食ってみ！」

ドロピオンがそう言うのを皮切りに全員が食べ始める。

『美味しい！！』

『美味しい！！』

いろんな料理がどんどん無くなっていく。もちろん原因はあの三匹
…… だけでなく、全員。

カビゴン「美味しい！！」……スゴゴゴゴゴゴ！ 掃除機以上の吸
引力

ベロベルト「幸せ！（僕達ベロベルトの舌を持ってしても歓心する
しかない料理の出来栄え！はつきり言つてこの料理人、永久的に拘
束してしまおうか）」ベローン！ジュルルル…ゴクン！

マルノーム「うう……ベトベトン…どこ行った…（あまりの出来栄
えに幸せだった頃を思い出してしまった…）」ジュルツ！バクバク
ズルズル 食べながら涙を流す

【マルノーム視点】

幸せだった……幸せだった。

この料理はとてつもない美味さだ……だが、この料理は俺の幸せだった頃の記憶と、辛さを思い出させてくる……俺の彼女が居た頃を……。

二年前の出来事

【回想ではなく過去視点】

ポイズンタウンの町の外にある木々がまばらに生えている草原に、二匹のポケモンがいた。

「マルノーム、これからどうするつもりですか？」

ベトベトンはマルノームの隣で青空を見つめながら訊く。

「どうって……この平和な空の下、恵みを与えてくれる大地の上で皆と平穩に暮らしたい」

ベトベトンはマルノームの答えを聞くと顔を紅くしながら悩んだ後に紅いままだが真剣な顔になって言う。

「それには、私も……入ってますか？」

「え？」

マルノームは何を意味しているのか解らずに聞き返す。

「私もその中に入って、あなたと……あなたのおそばで共に暮らせていけますか？」

「え……」

ベトベトンの告白にマルノームは顔を紅く染めていく。

「もちろん。俺と共に暮らしていこう」

ベトベトンの顔に笑顔が浮かぶ。

「ベトベトン、結婚しよう」

マルノームが言うとベトベトンはすぐに答える。

「はい！一生あなたと共に生きていきます！絶対の約束ですよ！」

ベトベトンの答えを聞くとマルノームは顔を近づけていく。ベトベトンはマルノームが顔を近づけてきたのがわかるとそっと眼を瞑る。

マルノームがさらに顔を近づけ、口付けをする。

「ん……」

しばらくした後、互いに顔を離す。

「きゃああ〜!! 誰か! 助けて!!」

何者かの叫び声が聞こえるとマルノームとベトベトンの方向へ叫び声を上げたと思われるポケモンが飛び出してくる。

それに続くようにすぐにニドリーナを追っていると思われるポケモン達も出てくる。

「助けてください!」

ニドリーナはそう言ってマルノームの後ろに隠れる。

「その野郎。そいつを渡せ。俺らはそいつに用があるんだから」

そう言うのはニドキング。その後ろにアーボックとマタドガスがいる。

「この子が何をしたって言うんだ」

「なあに……俺等の慰み者になつてもらおうと思つてなッ!」

そう言うとニドキングはギガインパクトでマルノームを吹き飛ばす。

「よくもしましたね! 泥爆弾! ヘドロ攻撃 & amp; ヘドロ爆弾!」

ベトベトンは怒る。

「邪魔すんな! ヘドロ爆弾!」

「せつかくの楽しみを誰がみすみす逃がすかつて」

「つく!」

マルノームはすぐに戻ってきて攻撃する。

「ヘドロ爆弾! 蓄える!」

マタドガスは二人を無視してニドリーナへ詰め寄る。

「シャドーボール!」

マルノームの攻撃はマタドガスに命中する。

「巻きつく! 溶解液!」

アーボックはマルノームを締め付ける。

「あくび!」

マルノームは寝たアーボックから開放される。

「爆弾演舞いきますよ!」

ベトベトンの合図でマルノームとベトベトンは同時に技を繰り出す。
「爆弾演舞!!」

ベトベトンは泥爆弾とヘドロ爆弾を、マルノームは種爆弾とヘドロ爆弾を繰り出す。

あたりにたくさんの爆発の雨が降り、周囲が吹き飛んで、土煙で周りが見えなくなる。

煙はすぐに晴れ、そこから出てきたのはニドキングと起きたアーボック。マタドガスは倒れている。

「うぜえ！気合パンチ!……穴を掘る！」

ニドキングはベトベトンを殴り、すぐに地中へ行く。

「岩雪崩！悪のはどう！ギガインパクト！」

アーボックも技を繰り出す。

マルノーム達は急いで避けるが、種族的に足が遅いのと、多量の岩や広範囲攻撃を避けれずに当たってしまふ。そしてよけた所をアーボックのギガインパクトがマルノームに当たる。

「オラア!!」

マルノームが吹き飛ばされるとニドキングがそれに追撃をかける。

マルノームは木にぶつかって止まる。その木がミシツ……ドーン!という音を立てて倒れる。

ベトベトンはマルノームを追いかける。

「う……」

マルノームが呻き声を上げる。

「大丈夫ですか!？」

「なんとか……マタドガスに置き土産をされたみたいだ。……爆弾演舞と……ダストシュートのコンビネーション……やるう」

マルノームは苦しそうに顔を歪めながらふらふらと起き上がる。

「はい！」

「させるか！岩雪崩！」

ベトベトンはマルノームが起き上がるのを手伝うとすぐに技を繰り出す。

「爆弾乱舞シュート!!」

岩雪崩は爆発によって砕ける。アーボックはどこかへ吹き飛び、気絶する。

「くそがあ!ギガインパクト!」

ニドキングはギガインパクトである程度ダメージを軽減するも、ひざをついてしまう。

「もうあきらめて降参しなさい!」

「誰がするか!地震!ギガパワーパンチ!!」

マルノームとベトベトンが地震で動けない時に馬鹿力とギガインパクトを気合パンチの威力に上乘せさせた攻撃をベトベトンに向かって繰り返す。

「(あれは避けられませんね……あの威力では私も死んでしまうでしょう……マルノーム……共に生きていく事が出来そうにありません……いままで、ありがとうございました)」

ベトベトンはそう思っで一筋の涙を流し、目を瞑る。

……しかし、ベトベトンには微塵もダメージが無かった。目を瞑るベトベトンに暖かな液体がかかり、ベトベトンは眼をあける。

目の前にいたのはニドキングの腕が腹から突き出ているマルノーム。「ダ……ト……シュー……」

ニドキングはゼロ距離からのダストシュートに耐えられず気絶する。そのときにマルノームの身体に突き刺さっている腕も抜ける。

「う……!」

「マルノーム!!」

ベトベトンはマルノームを抱きかかえる。

「すま……ん……俺……死……かも……しれな……でも……」

「喋らないで!喋らないでください!」

ベトベトンは号泣する。

「でも……君……だけ……でも……生き……て……ほし……

約……束……守れ……な……い……と……思っ……す……

……ま……な……」

「マルノーム！マルノーム！うわああああああ……」
そしてマルノームは意識を失う。

マルノームの意識が戻ったのは病院のベットの上。

それからというものの、ベットトンはどこかへ行ってしまった……。ニドリーナに呼ばれて来たポケモン達の話によると、気絶させた三匹と、俺が腹に穴をあけて大量の血を流している以外誰もいなかった……。らしい。

それと、俺が今こうして生きているのが不思議だとポケモンセンターの医師が言っていた。大量出血&心肺停止状態だった……らしい。

らしいって言うてばっかりだ。ベットトンに会ったら呆れられるよな。もう二年も探しているのにベットトンは何処に……

第三十四話： 思いと想い（後書き）

レントラー「料理の食べ方がなりふりかまわずって感じだな。それよりも、マルノームの過去って……」

アリゲイツ「なんていうか…マルノームの体からニドキングの腕が突き出しているのって以外とグロい」

カイリユー「マグマラシ、ありがと〜！おかげでルカリオ百面相が見れたよ！

そうそう！言い忘れてたけど、作者さん僕にドサイドンのキスを仕向けるアレけっこうキツイからね！？」

第三十五話：心の奥に想いは在りて・組織・食事会・そして銀（前書き）

今回は多少長めです。

第三十五話：心の奥に想いは在りて・組織・食事会・そして銀

【ベトベトンのとある想い】

「マルノーム……」

ベトベトンはマルノームの写真を見ながら呟く。

「あなたは私の心を捕らえて放しませんでした。ですが、あなたは……約束をしたのに勝手に死んでしまつて……」

ベトベトンの顔に涙が一筋流れる。

とある事件の時、ベトベトンは死を覚悟した。

でもベトベトンは死ななかつた。

ベトベトンが生涯を共にすると誓った彼氏が命を懸けて守つたから。そのおかげでベトベトンは死なず、犯罪者達は捕まり、重罪になつた。

命を懸けてベトベトンを守つたマルノームが最後に言った言葉は……

「でも……君……だけ……でも……生き……て……ほし……

約……束……守れ……な……い……と……思う……す……

……ま……な……」

……謝罪だつた。そう言つとマルノームは意識を失つた。

「マルノーム！マルノーム！うわああああああ……」

ベトベトンは叫んだ。こんなに悲しい気持ちになつたのは初めてだつた。

ベトベトンは叫びながらもマルノームの心肺が動いているか確認した。

……そのときにはマルノームの心臓は停まっていた。

ベトベトン^{ボイズン}は、叫びに叫んだ。しかし、マルノームが返事をするこ
とも無く……ベトベトン^{ボイズン}は悲しみにくれた眼をして、その場か
ら立ち去った。

ベトベトン^{ボイズン}は心肺蘇生法など知らない。というよりもポケモンの種
類が多様過ぎてこれと言った方法が医師以外に余り浸透していない
のが現状だった。

ベトベトン^{ボイズン}はマルノームが死んだと思った。マルノームのいない世
界などに意味は無い。マルノームには生きて欲しいと言われたけれ
ど、生きる気になれなかった。

ベトベトン^{ボイズン}は自殺しようとした。でも出来なかった。マルノームと
の幸せな思い出が強すぎて自殺に踏み切れなかった。

そこに今のボスが来て言った。

「お前は自殺しようとしたが踏み切れないだろう。自殺できないの
なら、たとえ辛い過去があってもそんな事で命を捨てずに我に仕え
てみる気は無いか？」

ベトベトン^{ボイズン}は悲しみに曇ってしまった頭で何も考えずに頷いた。
たとえどんな事でも現実から眼を背けたかった。

そして仕え始めてからしばらく経つころ、ベトベトン^{ボイズン}は命を捨てず
によかったと思った。自殺したらマルノームの心に反してしまふ。
そんな事はしたくないと思えた。だから自殺をしようとしたときに
誘ってくれたボスに感謝し、自分の心の許す限り手伝おうと思った。
それが悪いことだとしても。

ベトベトン^{ボイズン}はいままで、薬品の研究はしてきたが、それ以外には何
もしていない。そう、組織には所属しているが、犯罪という犯罪に
は手を染めていない。

ベトベトンボイスンのサディストな性格も他人を傷つけることで心の平穏を取り戻そうという心の防衛反応の一つでしかなかった。しかし、他人を傷つけても、心の傷はちつとも癒える事が無かった。それどころか逆に心の傷が少しづつ、少しづつ、深くなっていくだけだった。

ベトベトンボイスンは心の傷を少しでも癒そうと、無意識にマルノームの写真を見るのだった……

【アジト：〇】

組織“グランド”と対を成す組織“オーシャン”。その目的はグランドと正反対だ。

しかし、グランドと争っているわけではなかった。何時の頃からか、グランドとオーシャンは互いのすることを黙認し合い、干渉しないという暗黙のルールがあった。

「ボス、グランドは日照り石を手に入れようとして失敗、今は日照り石の行方を探っている最中とのことです」

「わかったわ。下がって頂戴」

ボスに報告し終えたポケモン、カブトプスは部屋を出て行く。

「……グランドは日照り石の持ち主を追っているのに対して、私達オーシャンは……アレを見つけないことすら出来ないのか……!!」
バン!

そのとき、部屋の扉が勢いよく開かれた。

「ボス！」

「なんなのよ！騒々しい！」

「アレの情報が入りました！」

「何？」

「アクアタウンの海を祭る神殿の奥の海王の間にあった壁画の解読が終了いたしました！」

「!!!早速行くわ!アクアAはそのまま海王の間の調査、アクアBは藍色の玉の搜索を続行、アクアCはアジトの見張りをしよう伝えて!」

「了解!」
フジャー

「ふふふ、やっと……やっと、手がかりを見つけたわ!三年間の解読作業がやっと実ったわ……でも、私は何の為にこんなことを始めたの?……ああ……三年より前の記憶が思い出せない……」

【食事会視点】

食事会のはず……なのだが、酒を飲んだらしく酔っ払っている者達もはや宴会である。

メイド達は飲み始めた町長達に危機感を抱いたのか早々と逃げている。

町長の中で酒を飲んでいないのはミロカロスとトゲチック、フーデインとカイリユー、ルカリオの五名だけだ。

エレキブル(エレクトタウン町長)

「酒もってこんかい!!!」

カビゴン(ノーマルタウン町長)

「あ、ここにこんなに大きなケーキが!!!」

トゲチック(スカイタウン町長)

「わああ〜食べないで〜!!!」

ゾロアーク(ナイトタウン町長)

「カワイ子ちゃん、俺と天国を見てみる気は無い？」

ミロカロス（アクアタウン町長）

「え、遠慮するわ……………というより、下心丸出し……………」

フーデイン（ミラージュシティ町長）

「ゾロアーク……………」

リザードン（ヒートタウン町長）

「俺はどうせ色違いだよ！どうせ亜種だよ！世間にも恐れられてハ
ブラれる黒色リザードンだよ！！」

メタグロス（メタルタウン町長）

「ハハハハッハハハッハ……………ゲホッ！……………オエ……………気持ち悪……………」

ルカリオ（ファイトタウン町長）

「酒臭い……………」

ムウマージ（ソウルタウン町長）

「つつつつつつ……………」シクシクシクシク……………」

アーマルド（バグタウン町長）

「カイリユ―！キス魔のドサイドンのキスの餌食になれえ！！」ド
ンッ！

ドサイドン（ノームタウン町長）

「カイリユ―……………いいだろ？」抱きっ！ギユウ〜グイグイ

カイリユ―（ドラゴンタウン町長）

「ギャー！〜やめて！！」ベシ！バシ！ドカ！ドン！ボコッ！ガン

ツ！ドゴォ！

マニユーラ（アイスタウン町長）

「ムキュ……………うにゃ……………」

ドラピオン（ポイズンタウン町長）

「いいぞいいぞ！騒げ騒げ！！」

フシギバナ（ウイードタウン町長）

「五年前の事件関わってんだろ？オラ！吐け！」

バンギラス（ストーンタウン町長）

「五年前の事件は俺の所為じゃない……………違う…違う…違う…！」
散々な騒ぎようである。

アリゲイツ

「うわー…町長と思えねえ」

ハヤシガメ

「……………フシギバナ町長お酒を飲むと攻撃的になるんだ……………」

レントラー

「そこかよ。フシギバナとバンギラスの言ってる五年前の事件って……………確か…アトリユートポケ校立てこもり・殺ポケ事件の事か？」

ハヤシガメ

「そんなことあったっけ？今度その事件についてお父さんの会社のネットワーク使って詳しく調べようか？」

レントラー

「……ハヤシガメの親父の会社って何て言う会社なんだ？それと親父って何者なんだよ……」

アリゲイツ

「只者」

ハヤシガメ

「ただ者じゃないから。曾祖父の時代から続く会社を二代に渡って世界一の大会社にまで育て上げた天才の一匹。悪く言い換えれば化物の片割れ」

アリゲイツ

「世界一って……株式会社レントラー！」

レントラー

「違う！！……て言うかその会社絶対に俺の名前だろ！ハヤシガメの家関係ないだろ！」

アリゲイツ

「……じゃあ」

ハヤシガメ

「じゃあって……会社名勝手に変えようとししないでよ」

アリゲイツ

「ケツキングの口癖？」

ハヤシガメ

「それは“ウツホ”」

アリゲイツ

「じゃあ、湿る」

ハヤシガメ

「それは“ウエット”」

アリゲイツ

「なら祭りのおきに叩かれる太鼓のリズム」

ハヤシガメ

「それは“音頭”」

アリゲイツ

「草タイプポケモンが多く住む町」

ハヤシガメ

「それは“ウインド”」

アリゲイツ

「風の違う言い方」

ハヤシガメ

「それは“ウインド”」

アリゲイツ

「じゃあウツド」

ハヤシガメ

「それが会社名！……アリゲイツ何でさっきまで関係ない名前を…」

…」

レントラー

「そんな大会社の御曹子のハヤシガメが……よく今まで五体満足で生きてるな」

レントラーはアリゲイツの言っていたことをスルーしてハヤシガメに訊く。

ハヤシガメ

「それは、お父さんが僕達の事は会社員以外には隠してるから。たった二代で世界一まで上り詰めた会社なんて妬みや恨みや犯罪の対象になりやすいからね……お父さんなんか常にと言えるほど暗殺者に命を狙われてるから……僕等兄弟が生まれた事を知っているポケモンセンターのセンター長が僕等を人質にお金を要求したけどもの見事に失敗したよ」

レントラー

「そのセンター長は……どうしたんだ？」

ハヤシガメ

「……お父さんの手によって見るも無残な廃ポケになった」

レントラー& amp ;アリゲイツ

『……ハヤシガメの親父……いや、お父様は絶対に怒らせないようにしないと』

ハヤシガメ

「そこまで恐れなくても……」

食事は終わり、町長達は二日酔いになっている者がほとんどだった。そして一騒動があったのだが、その話はまた今度。

数日後

アリゲイツ「じゃーな！」

ベロベルト「あゝ！！行かないで〜！！」

カビゴン「……ベロベルト？」ギロリ

ベロベルト「ハイ！」ガタガタ…

マグマラシ「それでは失礼しましたっ！」

ハヤシガメ「ベロベルトさん、次はないですよ？」

カビゴン「その点は心配ない」

レントラー「失礼しました。わざわざ見送ってもらって…」

カビゴン「あんなうまい料理を作ってもらったんだ。これくらいで

は足りないくらいだ」

ゾロアーク「またね〜！マグマラシちゅわ〜ん！」

マグマラシは身の危険（ハシタの視線）を感じたのか全身の毛を逆立ててすぐに逃げ

る。

ゾロアーク「マグマラシちゃんたら恥ずかしがりやなんだから〜…」

全員「（いや、身体と精神の危険を感じてお前から逃げただけだ！）」

□

マグマラシが走っていったのでアリゲイツ達もマグマラシの後を追

う。

それを見たベロベルトが「ああ、神の料理が逃げていく………」と言

ったか言わなかったとか。

マグマラシ達は

「はあ、はあ、はあ……」

「マグマラシ長い距離走りすぎ！」

「ご、ごめん。アレから一刻も早く遠ざかりたかったから」

「わかるけど早いよ……」

マグマラシ達はノーマルタウンから遠く離れた森林の奥で足を止めている。

ポケモンは人間とは違い、体力が多く、力も強い為、何倍もの距離を走ることが出来る。

そのとき、ドンツ！と表すのが最適であると思える重圧が一瞬だけ押し掛かる。

そして強い光が放たれたあと、そこから在りえる筈の無い色、“銀”のオーロラが出来る。

アリゲイツ達はそのオーロラを見て動かなくなった。

そんな事はどうでもいと言うように動かないアリゲイツ達の方へ走ってくる三つの影。

「行けッ！」

立ち止まった影の一つが発した声と同時にアリゲイツ達に向かって跳びかかる二匹の影。

「オラッ！」

「ハッ！」

「うわっ！って……セルシーフかよ！」

「セルシーフかよ！って何よ！！かよ！って！！」

走ってきた二つの影　メタモンとヤルキモノはアリゲイツ達はエネコロコの掛け声で振り向いたので、荷物を掴みそこない、何も盗れていない。

「アリゲイツ！セルシーフよりもあのオーロラの発生源の方へ行こうぜ！！」

レントラーもハヤシガメもオーロラの事が気になっていたようでオーロラの発生源と思われる方向へ走っていく。少し遅れてアリゲイ

ツも走つていく。

それを見たセルシーフは一瞬だけ固まる。

「……何よ何よ！！今回は私達が気合を入れたのにそれを無視するなんて！」

「待ちやがれ！」

「何故オーロラが？」

そう言いながらエレメントを追いかけていくセルシーフ。

アリゲイツ達は銀のオーロラが発生したと思われるところまで来た。
「……？」

そんな感じに何か違和感を感じながらさらに走り、丁度、“銀”のオーロラの下を通り抜けようとする一瞬だけオーロラが下まで伸びてアリゲイツ達を包み込む。

オーロラに包まれたアリゲイツ達は光が視界を奪って眼が見えず、そのまま走り抜けようとした。

しかし、すぐに意識があやふやになり、どれくらい走ったのかも分からなくなつてそれまで保たれていた意識が途絶え、その場に倒れてしまった。

第三十五話：心の奥に想いは在りて・組織・食事会・そして銀（後書き）

続きは“運命に導かれしポケモンたち”にも載っています！

第三十六話・食事は終わりで マゲマラシ (前書き)

ノーマルタウンであった騒動を投稿します。

第三十六話：食事は終わりて マゲマラシ

『あら〜…………』「うわ〜…………」

そんな声を発しているのは一晩中騒いでいる町長達の事を放って、次の日の朝になってやってきたメイド達。

何故そんな声を発したのかと言うと……

町長のほとんどがここでだらしなく眠っており、昨日はここが食事が開かれていたなどと思えないような惨状が広がっていた。

エレキブル（エレクトタウン町長）

「うおえ…………ゲボツ」

カビゴン（ノーマルタウン町長）

「もう食べれない…………」（寝言）

トゲチック（スカイタウン町長）

「ねえ、どうすればいい？」

ゾロアーク（ナイトタウン町長）

「…………は俺の物だ〜！！」（寝言）

ミロカロス（アクアタウン町長）

「…………とりあえず、制裁を与えればいいんじゃないかしら？」

フーディン（ミラージュシティ町長）

「ふむ」

リザードン（ヒートタウン町長）

「…………無視しないでよ…………俺は何もしてないのに皆虐めるの？」（寝

言)

メタグロス(メタルタウン町長)

「……ZZZ」

ルカリオ(ファイトタウン町長)

「ZZZ……」

ムウマージ(ソウルタウン町長)

「スースー」

アーマルド(バグタウン町長)

「頭痛が……」

ドサイドン(ノームタウン町長)

「ぐうぐう……」

カイリユー(ドラゴンタウン町長)

「す〜す〜…ZZZ」

マニユーラ(アイスタウン町長)

「……うに〜…ZZZ」

ドラピオン(ポイズンタウン町長)

「頭が!頭が〜〜!」

フシギバナ(ウィードタウン町長)

「ぐ〜お〜ぐ〜お〜」

バンギラス(ストーンタウン町長)

「気持ちわえう……」（寢言）

トゲチックとミロカロスとフリーディンとマグマラシを含むメイド達

『……O・H A・N A・S H Iしようか……』

「波導弾！」

「ハイドロポンプ！」

「サイコウエーブ！」

「火炎放射！」

『十万ボルト／エナジーボール／オーロラビーム／悪の波導／風起
こし／龍の息吹／ロックブラスト／怪しい風！！（等々）』

ドドドドド…ドカーン！！

さまざまな技がぶつかり合い、酒が入って阿鼻叫喚の地獄絵図をや
らかした町長達を、酒に手を付けていない町長達も巻き込んで吹き
飛ばす。そして壁を突き破り、明るい外界へ飛び出す。

「ギャー！」ドラピオン& amp ;アーマルド

「僕は関係ないっ！」カイリユウ

「何故私迄、巻き込む！」ルカリオ

「やっぱり俺は異端で殲滅対象なんだ〜！」（寢ぼけ）リザードン

「ボヨンと跳ねて……着地！」カビゴン

ドスン、ドン、ゴキッ、ミシッ、バコン、ボコッ！

『ぎゃー！／ぐえっ！／ブフォー！／ヌオツ！／クツ！／ギニャー！！
／うげっ！／グヌツ！／ゴホッ！』

それぞれが地面に叩きつけられる。例外として、

カビゴンは地面をバウンドしてから着地。

ルカリオは爆発の瞬間、飛び退いて爆発のダメージを抑えつつ着地。
メタグロスは地面に着地…ではなく、足が埋まっている。

カイリユウは咄嗟に低空飛行、ムウマージは地面を通り過ぎていっ
た。

メイドの一匹「さて、ここで問題です。爆発の被害にあっていない町長は誰々でしょう?」

メイドリーダー「そんな事言っていないで掃除するわよ! 貴女あなただけは町長の相手ね!」

メイド達「イエス、ママ!」

そんなことを言いながらマグマラシを除くメイド達は掃除に取り掛かる。

掃除を含めて、町長達がぶつかって大きな穴が開いた壁も修復していく。

マグマラシ

「……え〜と……大丈夫…ですか…?」

バンギラス

「なんとか…」

エレキブル

「年寄りにはちとキツイわい」

ゾロアーク

「そんなにも……俺の事を!」バシッ! ミロカロスによる後頭部
攻撃

リザードン

「何がおきたんだ?」

メタグロス

「引き抜いてくれ」

ムウマージ

「あれ? 何で地中に?」

アーマルド

「これは夢?」

ドサイドン

「知らない天井……じゃなくて外だ……」

マニユーラ

「あゝ頭痛が…ところで何故外なんだい？」
ドラピオン

「頭がもげるかと思っただぜ」

フシギバナ

「……………」(当たり所が悪く気絶)

町長達は修復されつつある壁を見て何が起こったのかおおよその見当を付ける。

「……………」ハア……………またやってしまった……………」

爆発で吹き飛ばされて地面に激突した町長達は口をそろえて言った。そして立ち上がると建物の中へ入ろうとする。

メタグロス

「……………助けてくれ……………」

町長達

「あ……………忘れてた!」

ゾロアーク

「ワッショイ、ワッショイ、引っこ抜け〜!ワッショイ、ワッショイ、引っこ抜け〜!」

ゾロアークの掛け声(?)をリズムに町長達によって助け出される

ひっこぬかれる

メタグロス。

メタグロス

「助かった。ありがとう……………」

メタグロスはそれだけ言う^と他の町長達と共にフシギバナを運びながら建物の中に入って行った。

残っているのはゾロアークとそれに呼び止められたマグラマシだけだ。

そしてゾロアークはふざけた様子も見せず、半ば真剣な様子でマグラマシに言う。

ゾロアーク

「カワイ娘ちゃん、俺の世界で君を包んであげよう、俺は君を守る為にある…世界が君の敵になるうものなら君を守ってあげよう。俺は君の為に存在する、君が君であり続ける限り俺は君を愛し続けよう…俺と…新たな世界を見るつもりは無いか？」

マグマラシはそんなゾロアークの話の途中から全身の毛を逆立てて、心臓が早鐘を打って、瞳孔が開き、手足が震えている　　つまり、恐怖・恐れと言える危機感がマグマラシの中を支配する。

が　にこんなことを言っていたらほとんどの者が引くだろう。しかもマグマラシはゾロアークの副音声的な心の中まで予想がついてしまったのだから。

それを壊れた壁の穴から覗く二十数匹のメイド達（ゾロアークとドラピオンの希望）はマグマラシが雄とは知らない。しかも色恋沙汰が大好きな歳である。

そのメイド達がマグマラシとゾロアークの事を見ていた……どういうことになるかはお分かりいただけただろうか。

『キヤー！あの娘、ゾロアーク町長を落としたわよ！』

『いいな、私も彼から…』

『くそうっ！私よりも先に告白されるなんてっ！』

『私より綺麗なだけに……』

『告白よ！？告白！キヤー！！』

『これから二匹の甘いLOVEストーリーが！！』

『あんな事やこんな事が…』

『二匹の間は甘い蜜の……』

……どうやらメイド達の頭の中はピンク色になっているようだ。

「……………」

メイド達に見られていた事と、ゾロアークに対する恐怖　　もとい危機感が合わさって一言も発さずに、一目散に逃げていく。

『あらら？もしかしてあの娘こういうことに対して経験が無いの！』

？

『初心！？ならあの逃げ方も納得できるわね！！』

『ウフフフ！みんな！あの娘とゾロアーク町長との恋路を応援・支援していくわよ！！』

『はい！家政婦長！！』

勘違いのメイド達は団結し、“ゾロアーク&マガマラシ恋応援団（仮）”を結成する。実際、そんな名前であるわけではないが。

そのメイド達は応援をする前に……掃除、修復を続けなといけな
い食事会場だった大部屋を見て肩を落とす。

そんな頃ゾロアークはメイド達の言っていた事を聴き、とても軽い
足取りで建物の中に入って行った。

第三十六話・食事は終わりで マゲマラシ (後書き)

これ続きの投稿はなかなかできないかもしれません。今回二話投稿したので。

三十話ものストックが欲しいです。無理ですが。

第三十七話・食事は終わりて

アリゲイツ

(前書き)

今度はアリゲイツです。

アリゲイツ「もうベロベルトは嫌いだ……」ポン

マグマラシ「……」

マグマラシがアリゲイツを慰めるようにアリゲイツの肩に前足を置く。

アリゲイツ「ハア……」

『それではどうぞ』

第三十七話：食事は終わりて アリゲイツ

その頃のアリゲイツは
アリゲイツがいるのは町長のカビゴンが手配した宿 もとい高級ホテル。

何故こんなことになったのかと言うと……アリゲイツの料理が原因だ。

アリゲイツの料理の美味さに感動したカビゴンが、“こんな美味しい料理を作ったアリゲイツ達を安宿なんか泊められるか！”という、安宿を馬鹿にした発言で……馬鹿にしたつもりは無いらしいが、そんなこんなで高級ホテルに泊まることになった。

この世界での高級ホテルというのはそこまで高さがあるわけではなく、心の安らぎやすさと、使いやすさ、料理の美味さ、襲撃などに対する安全性、災害時などの誘導の早さ、従業員などの親しみやすさなどの実用面や、精神面での安心などを重視して、建てられたものである。

それらにももちろんランク付けがされており、アリゲイツ達がいるのはノーマルタウンでランク一位のホテルの一番いい部屋だ。

バンツ！

「アリゲイツ様居ますか!？」

そう言っつてホテルに入ってきたのはベロベルト。様を付けて敬語を使ってしまうくらいアリゲイツの料理に魅了されたらしい。

「うわ!」

ベロベルトが扉を開けたのはアリゲイツが丁度外に出ようとしたと

きだつたらしく、扉がアリゲイツにぶつかりそうになつたが運良くアリゲイツは避けることが出来た。

「！ここに居られましたか、アリゲイツ様、ちょっとそこまで着いて来て下さいませんか？」

「…？ああ。それよりもなんで昨日から急に敬語使うんだ？」

「！そんなことですか。それは……………」

ベロベルトは何故かをなかなか言わない。じれったさを抱いたアリゲイツは訊く。

「それは？」

「アリゲイツ様の料理が凄いからですよ！いや、凄いなんて言葉で括つてはいけない！凄いという言葉はあの料理の足元にも及ばない！ならどつという言葉で表せばいいのか：“至高！”“究極！”“料理の行き着く先までたどり着いた超絶の一品！”“神をも屈服させる絶対料理！”」

「……………」
自分の料理をここまで褒められたのは初めてのアリゲイツ。口をポカーンと開けてベロベルトを見ている。

なぜかと言つと、アリゲイツがマグマラシ達や親以外に自分の作った料理を食べさせないからだ。

一時間後

「~~~~~といつても減言でしか無いくらい素晴らしい料理！」

ベロベルトは息を切らして多少声が変わっている。

「…zzz…ハッ！」

アリゲイツは途中から寝ていたようで、ベロベルトの言っていた事を聞いていなかった。

ちなみに、ハヤシガメとレントラーはどこかに出かけている。アリゲイツが残っている理由は筋肉痛だ。

「ゼエ…ゼエ…」

「あ、そういえば何かの用事で来たんだよな」

自分が寝ていたことはスルーしてベロベルトに訊くアリゲイツ。

「そう…でした。つ…着いて…来…て…くだ…さい」

アリゲイツはホテルを出てベロベルトに着いて行く。

「大丈夫か？」

「はい。これしきの…事…これからの…事を…考えれば！」

「これから？」

「それは秘密です…（悪笑）」にやりと音が着きそうな笑みを浮かべるベロベルト。アリゲイツの前を歩いているのでアリゲイツは気付かない。

暫く歩いた後

「ここです」

「……………家？」

「はい！この家は僕の家です！」

「何で連れてきたの？」

「いいから、いいから、入っちゃってください！」

アリゲイツは訳の分からないままベロベルトに背中を押されてベロベルトの家に入っていく。

「そんで？」

「そこに見える階段の下にある隠し階段に入ってください！」

「……………」

アリゲイツはベロベルトの事を少しばかり変に思いつつ言われたとおりに行く。

アリゲイツが階段を下りると天井や壁の全面にスポンジが付けられている…そのほかにはキッチンが備え付けられているだけの部屋に足を踏み入れる。

“ベロベルトがニヤニヤと妖しく笑っている事に気付かずに。”

この部屋を疑問に思ったアリゲイツがベロベルトに質問しようと思
り返ると ガシャン

鋼鉄の鉄格子の向こう側に立って鉄格子のものと思われる
鍵を振り回しながら悪役が浮かべる笑みよりさらに悪そうな笑みを
浮かべるベロベルトの姿が目に入った。

アリゲイツは眼の錯覚かと思って目をこすってもう一度見るが、変
わらなかった。何度こすってみてもそう。頬をつねってみても変わ
らない。

そして周りをもう一度見回す。

右 キッチン。

左 窓の無い壁。

上 照明一つ。

下 おそらく床板の下にスポンジが詰まっていそうな床。

後 アリゲイツが通るにはとても狭い四角い穴。

前 鉄格子とその向こうに見えるベロベルト。

「えゝ！？」

アリゲイツは牢屋のような場所に閉じ込められたことを知る。

「これどういうことだよ！？」

「ん？もちろんアリゲイツ様の料理を一生の間食べる為に急遽作
った地下室！もちろん騒いでも音が漏れないように防音は完璧！出
入り口も此処しかないし、ちょっと見ただけじゃ簡単には見つから
ないという自分でも急いで作ったとは思えないほどの出来栄の牢
屋です！」

「牢屋！？俺一生このまま！？」

「もち ろん！」

「いらん。気味が悪い」

「さて…早速料理を作ってもらおうか…いえ、ください！まずは
三十匹前！」

そういうとベロベルトは何処に置いていたのか、部屋の片隅にある木の实などの入った袋を指差しながら言う。

「出来た料理は後ろの四角い穴からだしてね〜　　と、出して下さいー！」

ベロベルトは歌を口ずさみながらどこかへ行く。

牢屋の中、囚われの身のアリゲイツは

「……………」

絶句していた。

「がんばってね〜」

そんな声がどこからか聞こえて来て、我に返ったアリゲイツは部屋のあちこちを大雑把に調べてみて……………がつくりとうなだれた。

「にげられないし、作るしかないのか……………」

アリゲイツは逃げることを諦め、料理を作り始めた。

材料が無くなったらその材料を追加する為に鉄格子を開ける

そう考えて。

筋肉痛で痛みを伴う身体を動かし、昨日より手早く作れて、材料を大量に消費する料理を作る。

アリゲイツはフライパンを握る。

そして材料を炒める。そして材料は料理へと昇華する。

「はぁ……………湯気みたいに外に出て行ければ……………」

アリゲイツは換気扇に吸い込まれるようにして出て行く湯気を見ながら呟く。

そして出来上がった料理をベロベルトの待つであろう四角い穴の向こうへ押し込む。

「……………あ、そうだ！換気扇のそこ通れば！」

今まで思いつかなかったアリゲイツは馬鹿（？）である。

アリゲイツは技、籠の舞を使う。

そして籠の舞によって上がった身体能力を駆使して換気扇を壊して外に出る為の穴を作らんとさらに技を使う。

自分の一番多用して一番得意の技を。“アクアテール”を。
ドガシャーン！

そんな音を立てて外へ吹き飛んだ換気扇。

アリゲイツは換気扇の名残すらないただの穴になった場所から外に逃げる。

ドガシャーンという音を聞いたベロベルトはすぐにアリゲイツの牢屋に向かう。

だが、アリゲイツはすでに逃亡を開始していた。

「あゝ！！アリゲイツ様が！」

ベロベルトはアリゲイツを捕らえようと走り出すが、すぐに戻ってきて……料理を持って再び走り出す。

「待て〜！いや、待ってくださいアリゲイツ様！」

「絶対ヤダ！」

「パワーウィップ！」

「アイスクロー！あぶねえな！草タイプ技なんかぶつけようとすんな！」

アリゲイツはベロベルトの攻撃をアイスクローを使ってダメージを（自分の出来る範囲で）最小限にとどめながら、着かず離れずの逃亡と追走を繰り返している。

その場所は町の中。

アリゲイツは上手く歩行者を避けたりして誰にもぶつかったりせずに逃走しているのに対し、ベロベルトは歩行者等にぶつかったり、弾き飛ばしたりしてアリゲイツを追っている。

それに迷惑した住民が警察に連絡を入れていたとか。

アリゲイツは町の中を逃げ回り、気付かぬうちに食事会の会場であった建物の方へ走っていた。

第三十七話：食事は終わりて アリゲイツ （後書き）

ベロベルト、よく牢屋を作ったな……しかもキッチンだけしかないって……どうかと思う。

次話で騒動は終わりです。

今回で騒動は終了です。

マグマラシ「アリゲイツを久々に弄れた……いっつも俺が弄られる
ばかりだったから……」

アリゲイツ「もう料理作りたくない……」

ベロベルト「作れ！僕の為に！」

アリゲイツ「うるせえ！てめーの所為だろうが！アクアテール！」

ベロベルトが吹っ飛んで行っちゃった。

『それではどうぞ』

第三十八話：食事は終わりて

誤解されし者と追われし者

今はマグマラシとアリゲイツの騒動がおきてから二時間弱がたった頃。

『皆？準備は良い！？』

『はい！準備は出来てるのであります！家政婦長！』

『作戦名“初心つばなと町長をあんな関係に！”早速、計画実行開始！散れ！』

シユバツ！

なぜかこのお年頃のメイド達は色恋沙汰に関して恐ろしいほどの力を發揮する。

散って行ったときでさえ、そこらのジムリーダーなんかよりも素早い動きを見せていた。

普通は火事場の馬鹿力と言うような力が、色恋沙汰で出てくるといふのはどうかと思われる。

脳内ピンクの馬鹿とでも言った方が良いのではなからうか。

『コラー！！私達はそんなじゃないわよ！』

『キヤア！急に叫ばないでよ！それに誰に対していつてたのよ！』

『……さあ？言わなければ私達の印象が悪くなると思ったのよ』

『……電波……？』

『まさか！いくらライチュウだからって言っても電波はないですよ』

『そうよね！』

『そうそう』

『……！目標の存在を視認！目標に気付かれないよう、すぐに隠れて！』

この四匹、勘違いの恋をいつまで応援していくのだろうか……。

【アリゲイツ視点】

初めての俺視点だけどそんな事気にする暇もねえ！

ていうか、助けてくれー！！

……？誰に俺こんなこと言ってるんだろ？

「うふふふふふ〜待って〜！アリゲイツ様〜！許して〜！今度は空
気穴くらいしかないキッチンに閉じ込めるから〜！」

そう言っただけで追いかけてくるベロベルトから……

「助けてくれ〜！！！」

俺はベロベルトにとってどうい存在なんだろう……

【ハヤシガメ&レントラー周辺視点】

「ねえ、さっき叫びながら走っていったのアリゲイツだよ……」

「ああ。助けてくれって言ってたけど……追いかけてる？のってベ
ロベルトだよ……」

「うん。しかも閉じ込めるって……」

話しているハヤシガメ達のそばに近づいてきたカビゴン。

「おう！神の料理ポケ、アリゲイツの友達か！」

「いや、アリゲイツの側近みたいな感じに言わんでくれ〜！！！」

「なら、“食の理の調停者”アリゲイツとその仲間か！」

「と愉快的仲間達！みたいにも言わないでください」

レントラーとハヤシガメに嫌がられたカビゴンの認識。

「……あれ？“食の理の調停者”とは何ですか？」

「ああ、あれほどの料理を作れるのだから二つ名くらいあった方が
良いじゃないか」

「……………いい……のか……？」

「う〜ん……………」

「ところで、何してたんだ？」

「あー！そうそう！たしかアリゲイツがベロベルトに追いかけれ……

て……た……？」

「なに！またやったのかあいつは！」

「また？」

「そう、まただ。ベロベルトは自分が気に入った料理を作る者にとことん付きまとして料理を作らせる。料理を作るまでは決して諦めなかった……」

「……いままではそうだったの？でも、アリゲイツの料理って……」

「神の料理って言われてるほど美味いよな……」

「くそっ！ならあいつはアリゲイツを閉じ込めてもおかしくない！料理の事になつたらあいつは変わる！追いかけるぞ！」

「ああ！」

「はい！（なんでベロベルトを護衛に任命したんだろ？）」

【マグマラシ視点】

ゾワッ！

うわっ！何か寒気がっ！

……それよりも、ゾロアーク^{ヘンタイ}町長の告はk……いやだ！思いたくも無い！

ヘンタイ町長の言ってたこと……断ればよかったのか？

でも、断っても諦めてくれなさそうだし……

かといって男だと伝えても前のようなように固まって記憶を消すだけだろうし……

どうすれば……

「おい！マグマラシちゃん！」

そう声が聞こえた。多分、メイドの一員のピジョンだと思……！

つて！うわぁ！

獲物を狩るときと大差ないと思う動きで降りて来るな！

「あ、ごめん！そんなことよりもさあ、あなた、ゾロアーク町長の事どう思ってるの？」

「ぞ、ゾロ ヘンタイ町長の事！？」

「言い換えたしっ！それにしても……ヘンタイ？」

「絶対にヘンタイ！ナイトタウンから旅出たとき、痴漢行為してきたし、今までに連続三千二百八十七回は絶対にしてる！それが無ければ良いんだけど……」

「………そう、そう。なら私は狙われない内に逃げるようにするわ
そう言つて、冷や汗をかいているピジョンはすぐさま逃げ出した。

……何だっただらうか。

「……ヘンタイでなければゾロアーク町長のことは好き……っと。
これで裏づけを取れたわね」

マグマラシの上を飛び去っていくピジョンは多少ゾロアークの認識を変えたようだ。

俺の上を飛んで行ったピジョンが寒気がするようなことを言つたよ
うな気がする！

うっ！毛が逆立った……

【メイド達の報告】

『マグマラシは居た！？』

『いいえ！C地点にはいないわ！』

『A地点にもいないのですっ！』

『D地点で、ピジョン及びライチュウの班が発見したのであります
！』

『みんな聞いた！？マグマラシはD地点！』

『ゾロアーク町長は！？』

『今はB地点にいるのだ、何故か東？に爆走中』

『何で疑問系なの！？』

『そこは気にせずにごろありゃ？ゾロアーク町長があんまりにも入り組んだ所を爆走するから空から見てたのに見失っちゃたご』

『ちよつとお！見失わないでよ！！』

『あ！！木の実クレープ！おじさくん！！モモンクレープ！イバンホイップとミクルチップのトッピングで！』「あいよ！嬢ちゃん結構甘党だな！！」

『な……！？なに！！伝説のその組み合わせがあるだど！？こうしてはおれん！！行かねば！！』

『ちよ！ちよつと！途中で抜けないでよ！！』

『放せ！！放すんだ！あの伝説のクレープが私を呼んでいるんだ！あのクレープは私に食べられてこそ幸せだというものだ！！』

『うわ〜ん！！フライゴンちゃんが止まってくれない！！』

『こつちもだ！種族的に私ハラクロスよりも力が弱いはずなのにアブソルがクレープの事を聞いた瞬間、無言のまま物凄い力で私を引き摺りながらクレープ屋の所に〜！！』

『……邪魔だ！悪の波導！』

『ギヤア！た、隊長……私の力では……アブソルを……止めれ……ません……でし……た』

『へラクロス！』

『たいちよ〜！フライゴンちゃんが私を空中に放り出してクレープ屋に行っちゃった……ごめんね……みんな……地面が近づいてきたよ……フライゴンちゃんを止められなかった。さよなら……（ごめんね？私もクレープ食べたくなっちゃった）』

ヒュー……ガシャン！！

『グレイシア〜！！グレイシアが……へラクロスが……あなた達の犠牲は無駄にしないわ！皆で絶対にこの作戦を成し遂げて見せるから！！ねえ皆！！』

『あれ？皆？もしかしてクレープ食べに行っちゃってるの！？う〜』

「……し、仕方ないわね！皆がクレープ食べに行っちゃったら作戦が続行できないわ！皆が帰ってくるまで、わ、私もクレープ食べに行こ〜っと！」

結局ヘラクロス以外のメイド達はクレープを食べに行った。

ヘラクロスは食べなかつたのかつて？そりゃあヘラクロスの主食は樹液だよ？

クレープなんて普通は食べないよ？

クレープの味を知らないヘラクロスはアブソルを止めようとしたんだよ？

何故疑問系なのかは推して知るべし。なんて。

クレープ屋では……

隊員のほとんどが来ていた事からクレープ屋の前で順番争いという名の乱戦を始めて、その乱戦が収まった頃にはマグマラシ達をくっつけようとしてた事も忘れてクレープを食べていた。

メイド達はそのクレープの虜とりこになって、次の日には体重が激増したとだけ言っておこつた。

初心はつこころと町長をあんな関係に！という作戦が展開され、それがクレープによつて忘れ去られて助かつたマグマラシはこのことを知る由も無かつた。

【カビゴン達】

「アリゲイツ達どこ行つたんだ！」

「さあ……つてあれ？」

「どつした？」

「あそこにいるのつてマグマラシだよ！」

「本当だ！マグマラシも巻き込め！」

「お〜い！マグマラシ！」

「…ん？あつ！レントラーにハヤシガメ！それとカビゴン町長！」
マグマラシは走って来ながら言う。

「オマケみたいに言うな！」

カビゴン町長の有り難い突っ込み。

「それで何か用？」

「マグマラシ！アリゲイツがかくかくしかじかで！」

説明を受けたマグマラシはレントラー達と一緒に走っていった。

その途中、アリゲイツを弄ろうという話があったらしい……

【アリゲイツ視点】

「ハア…ハア…ハア……………」

アリゲイツはベロベルトを引き離し、食事会の会場となった町長邸
宅兼パーティーホールの一室に隠れていた。

「オラア！」ドゴーン！……バキッ！

「アリゲイツ様！！ここに居る事は分かっているんだ！さっさと出
てこい！そして僕の為に僕の奴隷となって僕の為の料理を僕の為だ
けに作れ！」

無茶苦茶なことを行っているベロベルト。

「う、嘘だろ……途中で撒まいたはず！なのに……なんでだ！？」

「フフフフフ……どこ〜だ〜……………」

「（どうする！？どうすれば！？どうしたら！？）」

「ウフフフフフ……ア〜リ〜ゲ〜イ〜ツ〜様〜フフフ！」

ドゴン！！バキッ！ガコッ！ミシッ！ガラガラ……バリーーン！パ
リ〜ン！グヴォ〜ン！

「一部屋〜」

「二部屋」

「三部屋！」

「四部屋ッ！」

「五部屋ッッ！」

「六部屋ツツ!!」

「……隙を見て逃げるか……」

着実に近づいてくるベロベルト。追い詰められつつあるアリゲイツから汗が垂れる。

ドゴーン!

「今だ!」そろり…そろり…そろり…そろり…ポタッ

アリゲイツから汗が落ちてしまった。

「!!見〜つ〜け〜た〜ぞ〜!!」ガコーン!ドゴーン!

「ヤベ!?!」

アリゲイツはすぐさま逃げ出す。それを視界に入れたベロベルトはアリゲイツを物凄く速さで追い詰めていく。

アリゲイツは外に飛び出ようとしてベロベルトが破壊した壁から飛び出る。

そのとき追いついてきたベロベルトがすぐさま舌で巻こうと自分も飛び出しながら舌を伸ばす。

「うおっ!!」

舌はアリゲイツの足を捕らえ、アリゲイツをその場に引き倒す。

「捕まえた〜グフフフフ……」

変な笑いをしながらうつ伏せに倒したアリゲイツを自慢の舌で逃げられないように足元から巻いていく。

「奴隷として僕に奉仕しろ!」

そこに走ってきた四つの影。マグマラシ達だ。

『アリゲイツ!!大丈夫………すまん(ごめん)邪魔した』(四匹の確信犯)

マグマラシ達はそう言って踵を返してその場から去ろうとする。

「いやいやいやいや!!俺はそんなじゃねえ!ていうか助ける!」

「アリゲイツ、俺等に見られたからって隠そうとしなくてもいいからな。性癖なんていろいろあるんだから……たとえアリゲイツが奴隷になるのが好きなMだったとしても、俺は友達のままにいるから

……」

「ベロベルト、お前はやっぱりSだったんだな……」

『違う！！絶対に違う！！俺一（僕）はそんな性癖じゃねえ（じゃない）！！』

「アリゲイツ、そんなに恥ずかしがらなくてもいいんじゃないの？」

「ベロベルトも自分の性癖を隠したい気持ちは分かるけどな、俺等に見られたんだ。認めるよ？」

「レントラーとハヤシガメまで!？」

『さっ、俺一（僕）等の事は気にせずにご勝手に！』

マグマラシ達はその場で後ろを向いて、来た道を歩いて帰る。

「まさかあんな性癖がアリゲイツにあったなんて……長年親友でいたけれど気付かなかった」

「ベロベルトの方もそうだ。俺とベロベルトは長い間友としての間だったんだが、まさかSだったとは気付かなかった……」

「僕等もそうだよ。レントラー」

「ああ、そうだな。まあ、ポケモンにはポケモンそれぞれなんだから……」ジトー（アリゲイツとベロベルトをとりあえず見てみた）

「助けるよ!!」

『なにを？なにから？どうやって？どうして？』

「俺を！ベロベルトから！どうやってでも良い！仲間を助けるといふ気持ちはねえのか!？」

『ふ〜ん……』

「わああ!!そのまま歩いていこうとするな!!料理作ってやるから助ける!!」

「違うでしょ!!アリゲイツ様は僕の為だけに料理を作り続けなければいいんだ!!」

『アリゲイツ、料理を作るって本当か!？』

「本当だから！助ける!!」

『了解!!義牙!!韻派駆斗!!』グシャ……ドサツ

ベロベルトは目にも留まらぬ速さで動いたカビゴンのギガインパク

トで意識を失って倒れる。

「えっ！？カビゴンの出せる速さの限界を超えてる！」

「ふっ、またつまらぬ者を…ブォッ！」

カビゴンの頭をとび蹴りするアリゲイツ。

「さっさと助けるよ！！それと、なんだよ！義牙韻派駆斗って！！
普通でいいじゃねえか！！」

「ノリだ！別に当て字でも良いんじゃない？格好良さげな当て字だし」

「……………グフツ！ハア、ハア、ハア、ま、まさか町長を味方にするとは……………僕がここで倒されても第二の刺客や第三の刺客が……………アリゲイツ様を襲うだろう……………」バタツ
意識を一度散り戻したベロベルトはそれだけ言つとまた意識を失つた。

「……………なんか悪役の手下的な事言ってるんですが……………」

「そついえばベロベルトは英雄物ヒーローが好きだったな……………悪を倒した時は正義の台詞を、誰かに倒されたときは悪役の台詞を言ってみたいと言ってたな」

「……………望みが叶って良かったねー（棒読み）」

二日後、アリゲイツが料理を作らされたのは言つまでも無い。

また、ベロベルトは建物の修理代請求と、カビゴンのキツイ説教を貰った。

メイド達はクレープを食べてすっかりご機嫌で作戦の事は誰一匹覚えていない者はいなかった。

これがマグマラシ達が異世界へと旅立つ日の数日前に起こった騒動である。

第三十九話・異世界で…？（前書き）

ガンバライダー様の『運命に導かれしポケモンたち』とコラボして
います！

どういう流れなのか知りたい方は『運命に導かれしポケモンたち』
へ！

今回は話が短くなっています。

第三十九話：異世界で…？

【セルシーフ視点】

「え！？あのマグマラシ達どこに行ったの!？」

銀のオーロラを通って行ったエレメントを追いかけて銀のオーロラの中を通ったセルシーフの目の前には物凄く広い草原。草の高さは大して高くなく、隠れる場所も無い。

「探してみます。変身！ラグラージ!！」

メタモンはラグラージに変身してレーダーのような機能を持つヒレで周りを調べる。

「……………このあたり三キロ以内には誰も居ません。こんな短時間でそれ以上を移動する以外に引つかからない方法などありませんし

……………」

メタモンが言うと、ヤルキモノが訊く。

「あのマグマラシ達どこ行ったんだ？」

「……………地中でも上空でもないようですし、消えたとしたか……………」

「……………ちよつと〜!! 一体どうなってんのよ〜!!」

どういふことが理解できないエネコロロは空に向かって叫んだ。

【エレメント視点】

銀のオーロラを通ったマグマラシ達は気絶していた。

『……………気分悪い……………』

「……………」

(……………何だ?……………というより……………何か?がいる……………)

マグマラシ達のそばから誰かの声が聞こえてくる。

「起きたか。レクト！戻ってこい！」

誰かが別の誰かを呼ぶと少し離れた所から近づいてきて、その別の誰かが答える。

「も、戻りました。」

(……誰？……レクト？……何と言つか…パシリっぽい？)

「うっつ…ここは？(気持ち悪……)」

マグマラシは状況をよく飲み込めず、近くにいる誰かに訊く。

「よお、目、覚めたか。」

マグマラシは誰か　　^{フレイ}バクフーンに声をかけられる。

「……？(俺の進化系のバクフーン?)」

マグマラシはバクフーンの存在を認識してからそのそばにいるピカチュウの存在に気付く。

「？あんた誰？(マグマラシの進化系だ！へ〜マグマラシもこんな感じになるのかな……)」

マグマラシと同じ様にバクフーンとピカチュウを認識したアリゲイツがバクフーンに訊く。

「俺はバクフーンのフレイ。あっちはルカリオのカイルとピカチュウ

ウのレクトだ。」

目の前にいるバクフーンはフレイと名乗り、ピカチュウとルカリオを紹介する。

「あ、こんにちは。」

レクトと言われたピカチュウがあいさつをする。そして何処どこにいたのか、いつの間にか現れたルカリオの存在も紹介されて初めて認識する。

「ところで、こんなところで男3匹でマグマラシになにしようとしてたんだ？」

「ブツ！ハハハハッハハハハハハハッ！ゲホッ！」（さすがマグマラシ！）

「くくっ！」（マグマラシいつまでたっても間違えられてる！）

「うっ……ブツ！」（また間違えられてるよ）

カイルと紹介されたルカリオがそう言った直後、アリゲイツは大声で笑い出し、マグマラシはうっむき、レントラーとハヤシガメは笑いをかみ殺した。

「ど、どうしたんだ？」

どういふ事が知らないバクフーンフレイが訊くとそれに答えるように、嫌な事を訂正したいマグマラシが叫んだ。

「俺は男だああっ！！！（また間違えられたっ！）」

マグマラシの否定の叫びを聞いたフレイ達は…

「『えええええっ！？』」

眼を大きく開き、とても驚いた。

これが異世界に住むフレイ達 ブレイブ と世界を渡ったマグマラシ達 エレメント の出会いであり、初の会話だった。

第四十話：異世界で…？

あれからお互いの事を話し合った。

それによってマグマラシ達はこの世界が自分たちのいた世界とは違う世界　異世界であることを知った。そのことを知ったとき、アリゲイツははしゃぎ、マグマラシは眼を輝かせた。ハヤシガメとレントラーはそんな二匹を見て溜息をついていたが。

「・・・そうになると、俺たちはどうやって元の世界に戻るんだ？」
レントラーが皆に訊く。

「やっぱりあの銀色のオーロラが出るのを待つしかないんじゃないのか」

マグマラシは目を輝かせたまま答える。

「僕たちの金使えるのかな・・・」
ハヤシガメは現在の心配をする。

マグマラシ達がそういったことを話している近くでフレイ達も話していた。

「なあ、あのマグマラシって本当に男だよな？」

フレイはカイルとレクトに相談する。

「本人が言ってるんだから、本当なんだろう。でもなあ・・・」

カイルは男だと肯定はするが、信じきれてはいないようだ。

「顔とか、体つきとか、そこらへんは女性みたいなんですよね」

レクトも男性、女性とはつきりは言わないが、マグマラシが女性っぽいと話す。

マグマラシに聞こえないように気をつけながらマグマラシの事を話しているようだ。

何かショックを受けたのか、明らかに気落ちしている様子のフレイ。

「どうすっかな。俺たち金が使えなかったら野宿しなきゃいけないよな」

レントラーの言葉にハヤシガメが答える。

「そうになると・・・食糧も今持つているだけで過ごさないといけなくなるね」

ハヤシガメの言葉を聞いて考え込むアリゲイツ。

「いざとなったら、マグマラシにメイド服でも着せて・・・」

「？アリゲイツ！それだけは止めてくれ！」

アリゲイツが言ったことを即座に拒否するマグマラシ。

フレイたちの話が終わったのに対してマグマラシ達の話は終わらない。

「いったいどうしたんだ？」

フレイはマグマラシに聞く。

「いや、俺たち元の世界に戻るようになるまでどうしようかって話してただけど・・・」

「ああ、だいたい分かった。寝るところとか食べ物を心配してたんだろ」

マグマラシが答えるが、カイルが途中から割り込む。

「なるほどな・・・」

フレイは考え込む。

「うし、そうなら家に来い」

「・・・え？」「・・・」

フレイの言ったことがあまり理解できていないマグマラシ達。

「だから、そんなことで考え込むなら、俺の家に来ればいい。部屋もあるし、金も心配しなくていい」

フレイはマグマラシ達を自分の家に誘っている。

「だったらよろしく頼むぜ！」
「ちよつと待てアリゲイツ！」
レントラーがアリゲイツを止める。
「そんな会ったばかりのポケモンにm「だあああつ！めんどくせー
！フレイが良いって言うてんだから、来いやあああつ！」ってちよ
つと！」

レントラーはカイルに首もとを掴まされると、そのまま引きずられて
行った。

「あ？あ、で、どうする？」

フレイがマグマラシに訊く。

「うーん、こうなつたんだし、行く」

「よし、決まりだな。あつと、レクトはどうするんだ？」

「えつと、行きます」

マグマラシ達はフレイの家にお邪魔することになった。

フレイ宅前

「さあ、着いたぜ！」

レントラーあのままカイルに引きずられてここまで来た。

「結構でかいな！」

アリゲイツは驚いているが、本来ならこの反応が当たり前である。
しかし、ハヤシガメは……。

「そう？」

「ん？ハヤシガメ、あんま驚いてないな」

「だって実家の敷地はもつと広いよ」

『ええつ！？』

ハヤシガメの親は大金持ちなので、町が一つ入るほど広大な私有地を持っている。

「・・・まあいい。行くぞ」

フレイは道場の正式な入り口とは別に付けられている家の戸を開けた。

「おふくろ？帰ったぜ」

『御邪魔しまーす』

マグマラシ達もフレイに続いてフレイの家に入る。

「おかえりー」

入ってすぐの所にある部屋から顔を出したフレイの親だと思われる一匹のバクフーン。

「あ、あなたがレクト君ね。ちょうどいいわ、フレイ、カイル、レクト君。こっちにきて」

「え？」

三匹はバクフーンに連れられて、部屋に入っていく。

「俺たちも入ってみようぜ！」

「あつ！アリゲイツ！待て！」

興味を持ったアリゲイツは止められたにも関わらずズカズカとフレイの家の奥へ入っていく。

それを追って、マグマラシ達も入っていく。

「ほら、テレビ見て」

バクフーンはマグマラシ達が入ってきた事を気付かず、フレイ達にテレビを見るように言う。

テレビには、フレイ達のジムバトルと思われる映像が移っていた。

「ええっ！？」

それを見てレクトが驚く。

「ああ、レクトは知らなかったのか。ジムでのバトルはこうやって番組で放送されるんだぜ」

それを見たマグマラシ達が

『へえー』

と感心する。

「あれ？あなた達、誰？」

バクフーンはマグマラシ達に気づいた。

「こいつらはチームエレメントっていつて、向こうで知り合ったんだ」

フレイの言葉に少しがっかりする　バクフーン。

「なんだ、入門希望者じゃないの……。みんな鍛えがいのある男の子ばつかだと思ったのに」

（（一発でマグマラシが男だっで見抜いた！））

「きちんと……。俺を……。男って……。もの凄く久々だ……。十年ぶりだっけ……）」

その場にいたポケモン達は、バクフーンがマグマラシを一度で男だと見抜いたことに驚き、マグマラシは嬉しさのあまり、少し涙目になっていた。

アリゲイツだけはわざとらしい驚き方だったが。

「なあ、入門ってなんだ？」

アリゲイツが訊く。

「家はおぶくろが道場を持っているんだ」

「道場ってなにしてんの」

「うーん、簡単に言うと、バトルの基本から技の応用まで、そういったものを教えているんだ」

「なに！バトル！？（うおっしゃ〜！！）」

アリゲイツがフレイの発したバトルという言葉に反応する。

「じゃあ、あんたら強えの？」

アリゲイツ、半ばフレイ達を馬鹿にしたような口調で訊く。

「まあ、それなりに……。」

「だったらやるうぜ！バトル！」

「あらあら、やる気満々ね。」
そこで バクフーンが提案する。
「フレイ、カイル、二人であの子達全員とバトルしたらどう?」
「まあ、いいけど」
「おっしやー、やってやるぜ」
それほどやる気でなさそうなフレイと、逆にやる気満々のカイル。
「え・・・俺たちも?」
「そうよ」
いつの間にか、バトルする気の無かったマグマラシ達もバトルすることになっていた。

「それじゃあ始めますか」
組み合わせを決めるためにしたくじ引きの結果、マグマラシとアリゲイツはフレイと、ハヤシガメとレントラーはカイルと戦うことになった。
「どうする?二人一気に来るか、一人ずつ来るか」
「じゃあ二人で」
「うーん、同じく」
フレイとカイルはどちらも二人を相手にすることになった。

「いくよ。始め!」
フレアの声に反応して動き出す。
「いくぞ!連続遠吠え!」
「連続竜の舞!」
マグマラシとアリゲイツは技で自分の能力を上げる。
それを身構えながら静観するフレイ。
「よし!火炎放射!」
「いくぜ!アクアテール!」
マグマラシは遠距離から火炎放射を使い、アリゲイツは高速で移動し、フレイに攻撃を当てに行く。

マグマラシが上昇させたのは攻撃の能力値のため、火炎放射には影響が無い。

マグマラシの火炎放射が横に飛んで避けられた時、フレイは片手を雷パンチのように帯電させていた。

「ふっ！」

アリゲイツは尻尾を思いつ切り振り下ろしたが、フレイに掴まれ、マグマラシの方に投げ飛ばされる。

「うわっ！」

マグマラシは急に投げられてきたアリゲイツを避ける。

「いてて。マグマラシ、受け止めてくれよ」

「無理！」

「こっちからもいくか。電光石火！」

フレイが電光石火で一箇所に固まっているマグマラシ達に迫る。

「うわっ？」

「いてっ！」

フレイは二匹に電光石火で攻撃を仕掛けた。

攻撃を受けたマグマラシとアリゲイツは互いに別の方向に転がる。

「くそっ、もう一度、火炎放射！」

「火炎放射！」

マグマラシは再びフレイに火炎放射を放つ。

フレイも火炎放射を放つ。

二匹の火炎放射は距離の中央でぶつかる。

しかし……

「なっ……」

マグマラシの火炎放射はフレイの火炎放射にあっさりと圧さられている。

そしてそのままマグマラシに命中する。

「ぐっっ……」

「うおおおりゃああ！アイスクロー！」

マグマラシが火炎放射でフレイに押し負けた直後、見せ場のいいところを搔つ攫って行くようなタイミングでフレイの背後にアイスクローを両手に発動させたアリゲイツが迫る。

「シャドークロー！」

アリゲイツのアイスクローはフレイの振り向きざまに発動してきたシャドークローに受け止められるが、片手しか受け止められず、一撃与える。

だが、フレイは大したこと無いと言わんばかりの顔をする。

「フレイムボール！」

マグマラシはフレイの背後から、火炎車に丸くなると転がるを組み合わせた技、フレイムボールを発動する。

「もっ！っちょ、噛み砕く！」

マグマラシとアリゲイツはフレイを挟んで攻撃する。

フレイがチラリと後ろを見たかと思うと、フレイはアリゲイツに向かって跳び上がり、アリゲイツの頭に跳び箱を跳ぶときのようについで、跳び越す。

「わつとと！うげっ！」

バランスを崩したアリゲイツは技の発動をやめてしまい、そこに迫っていたマグマラシのフレイムボールに激突する。

「わり！大丈夫か？」

「結構痛え」

「くそつ。こうなつたら身代わり！俺、身代わり頼む！」

「もちろんだ」

マグマラシは身代わりを一人作ると、身代わりにさらに何度も身代わりをさせる。

そしてフレイを包囲する。

『いくぜ！フレイムボール！』

マグマラシはレントラー戦と同じ戦法をとった。

タイミングをずらして突撃していくマグマラシ。

マグマラシの身代わりが突っ込んで行つて技のわずかな反動に耐えられず消えたりしていく中、フレイは途中で避けたり、マグマラシ同士を互いにぶつけ合つたりしてダメージを喰らわないようにしていた。だが、タイミングをずらしていたのがよかつたのか、フレイに何発か喰らわせる事が出来た。

「俺もいくぜ！アイスクロー！アクアテール！」

アリゲイツは氷の爪を生やし、尻尾に水を纏つてフレイに向かつていく。

アリゲイツの接近に気付き、火炎車を発動したフレイにアイスクローを無効化されたのを知るとアリゲイツはすぐに尻尾をぶつけ、アクアテールを決める。

「くっ！」

アリゲイツの技でフレイの動きが止まった瞬間、数多のフレイムボールが直撃する。

「ぐあっ」

フレイは弾き飛ばされて、マグマラシの包囲の外に出る。

フレイが立ち上がる………だが、ダメージは溜まってきたよ
うで疲労の色が僅かに見える。

何を思ったのか、フレイは両手にエネルギーを溜め始める。

それをチャンスと思ったアリゲイツ達はフレイに攻撃する。。

「いまのうちだ！アクアテール！」

「いくぞ！火炎放射！」

アリゲイツはアクアテールを発動すると、フレイに向かつて走つて行き、マグマラシは数多の身代わりと共に火炎放射を放つ！

アリゲイツが接近した瞬間、

「ブラストトルネード！」

大技を発動した。

渦巻く業火はアリゲイツに当たるが威力は下がらず、マグマラシの放った火炎放射を吸収してさらに威力を強めてマグマラシにも当た

る。

『うわあああつ!』

ブラストトルネードによって起こった砂煙が収まると、マグマラシとアリゲイツが倒れていた。

「もう・・・だめだ」

「きつちー」

「これで終わりっつと」

バトルで勝利したフレイはその場に座り込んだ。

一方、カイル達は

「いくぞ！充電！チャージビーム！」

レントラーはカイルに向かって威力を上げた電撃を一直線に放つ。

「当たらねーぜ！波動弾」

カイルはレントラーの攻撃を余裕で避け、波動弾を打ち出してきた。

「任せて。エナジーボール！」

カイルの波動弾をハヤシガメがエナジーボールで相殺する。

「サンキュー。充電！充電！そして放電！」

レントラーは周囲に強化した電撃を放つ。

「いてっ。結構やるな。いくぜ！神速！メタルクロー！」

レントラーの攻撃で大してダメージを受けてなさそうなカイルは素早く迫って来て、その速度のまま硬化させた爪で薙ぐ。

「いてて」

レントラーには避けられたが、ハヤシガメにはしっかりと当たっていた。

「大丈夫か？」

「たいしたことないよ。それに、アレも仕込めたし」

「？」

“アレ”の発言に疑問を持つレントラー

「まだまだいくぜ！悪の波動！」

カイルから放たれた黒い波動が迫って来る。

「チャージビーム！」

「エナジーボール！」

迫ってきたカイルの技に二匹は技をぶつけ、相殺する。

「もういつちよ、波動弾！」

再びカイルが波動弾を放つ。

「チャージビーム！」

レントラーは技の効果で威力が上がったチャージビームで相殺する。

「よし！そろそろだ」

「一体なんだよ！？」

「まあ見てなよ」

ハヤシガメがそう言った次の瞬間、カイルの体から芽のようなものが現れ、カイルがふらつく。

「これは・・・宿り木の種か！」

「まさか、メタルクロウの当たった一瞬に・・・」

「そういうこと。一気にいくよ！エナジーボール！」

「連続充電！雷！」

カイルに強力な技が降り注ぐ。

「・・・勝ったかな」

「さあな・・・」

レントラー達は砂煙で見えなくなっている部分を見つめる。

砂煙が収まってくると、そこには波動で大きなエネルギー弾を作ったカイルが立っていた。

「今のは相当きつかったが、こいつで終わりだ！」

カイルは跳び上がる。

「いっくぜ！クリティカルバースト！」

カイルが放ったエネルギー弾は通常の波動弾の大きさに別れ、レントラーたちに向かって飛んでいく。

「くそっ！放電！」

レントラーは放電で撃ち落とそうとするが、波動弾は電撃の間を抜けて迫る。

『うわあああっ！』

レントラーとハヤシガメはクリティカルバーストを受けて倒れた。

「俺も・・・もう無理」

宿り木の種によって体力が減っていたカイルも仰向けに倒れる。

「いや？」苦勞さん

体力が回復したマグマラシ達にフレアは声をかける。

「あ？、勝てると思ったのになあ」

マグマラシの言葉に賛同するようにアリゲイツが答える。

「くっそー。次は勝ってやる！」

しかし、レントラーとハヤシガメは賛同しない。

「俺は・・・できれば次はバトルしたくない」

「僕も・・・」

「そっいえば」

『ん？』

バクフーンが思い出したように言う。

「フレイに聞いたけど、泊まるどころ無いんだって？フレイの言う通り、家に泊まればいいよ」

「ありがとうございます」

バクフーンの言葉にハヤシガメが感謝の意を示す。

「で・・・ちよつと提案が有るんだけど」

「なんすか？」

「ここにいる間だけでもうちの道場で特訓してかない？」

アリゲイツが訊くとバクフーンはそう答えた。

バクフーンのこの言葉にマグマラシたちは考え込む。

「俺はやる」

マグマラシは普段はバトル等をする気は無いのだが、やる気を見せられている。ブースターとの一件を思い出したようだ。

「俺も」

マグマラシの言葉に当たり前の如く賛同するアリゲイツ。

「う？ん、俺もやるか」

レントラーも悩んだが、すぐに答える。

「ところでレクト君もどう？」

バクフーンがレクトに訊くと、レクトは言葉に詰まりながら答える。

「ええっと・・・します」

フレアはこの答えに満足そうな顔をする。

「じゃあ決まりね」

フレアはチームエレメントとレクトに何かが書かれた紙を渡す。

「この紙は？」

「その紙には私があなた達のバトルで気づいたことを書いておいたの。特訓の内容も書いてあるから見といてね。明日から始めるから体休めといてよ」

『はい（ああ）』

異世界の道場で特訓することになったマグマラシ達。これからどうなるのか……

第四十話：異世界で…？（後書き）

次の日曜投稿できません！ごめんなさい。

第四十一話・異世界からの帰界（前書き）

意外と長くて疲れました……。まあ、読んでください。

第四十一話：異世界からの帰界

ハヤシガメがフレイの家のリビングにいとフレイが声をかけてきた。

「よお。早いな」

「あ！おはよう」

ハヤシガメはフレイに声をかけられるまでフレイが来たことに気付いていなかった。

「他のやつらは？」

フレイはそう言いながら、コップを取り、水を注ぐ。

「まだ寝てたよ」

ハヤシガメはそう言うのとテレビをつける。

「そうか」

フレイはコップに入れた水を一気に飲み干す。

「あ？まだ眠い・・・ちよっと顔洗ってくる」

フレイがそう言うて廊下に出て行った。

レントラーはレクトと一緒に廊下に居た。そこに部屋からフレイが出てきた。

「お？おはよ」

フレイが一番始めに挨拶をする。

「おはよう」

レントラーが挨拶した後、レクトも挨拶をする。

「おはようございます」

まだ眠いのか少しボーっとしているようなフレイは目をこする。

そしてフレイは洗面所へと足を進めるが、途中よろけて壁に頭を打ち付ける。しかしフレイは何もなかったかのように洗面所へ行った。

「あれ？なんか様子変だったけど、あいつ大丈夫か？」

「まだ眠いだけみたいだし、大丈夫みたいだよ」

「ふーん（頭を打つても一切反応しないって……凄いなフレイは…）」

レントラー達がそんな話をしていると、玄関の方から音がした。

「おはよー！ってフレイは？」

レントラーの印象では“単純”なカイルが部屋に飛び込んできた。

「あいつなら顔洗いに行つたぜ」

「まじかよ。いつになってもシャキッと目覚ませるようにならねえのかよ」

「うるせー、仕方ねーだろ」

「あ、戻ってきた」

レントラー達と話していたカイルの言葉に、顔を洗ってきたフレイが文句を言う。

「眠いものは仕方ないだろ」

フレイはそう言つて椅子に座つた。

「おはよう」

「おっはよー！」

フレイとは違い、ちゃんと起きているマグマラシと、朝なのに妙にハイテンションなフレアが入ってくる。

「やつと起きたか」

フレイは気付かれないように溜息をついたようだが、レントラーはそれをしっかりと聞き取っていた。だが、どうすることも無くスルーする。

「あつ、そうだ。フレアさん」

マグマラシは のバクフーン いつの間にか名前を教えるも
らつたフレアに声をかける。

「なに？」

「もらつた紙に書いてあつたことで、分からないところがあるんだけど」

「あ、俺も」

「僕も」

マグマラシの問いに、レントラー達も同意する。

「ん？たぶんみんな同じ質問だろうからアリゲイツ君が起きてくるまで待つてて」

「え？」

「まあ、とりあえず朝ご飯食べましょう。フレイ、アリゲイツ君起こしてきて」

「へいへい」

フレイは部屋を出て行った。

そしてフレアはキッチンに立ち、料理を始める。

「そういえば、あなたたち、何か朝ご飯に希望はある？」

「俺は「カイル、あなたには聞いていないんだけど。」はい……すんません」

フレイの言葉に即座に反応したカイルは答えようとするが、フレアに強制中断させられた。

「作ってもらってるんだから、何でもいいです」
ハヤシガメはそう答えた。

そのとき、マグマラシ達が寝ていた部屋の中から何かの音がし、さらに電子音のような音まで聞こえてきた気がした。

「何かしら、あの音？まあいいわ。とりあえず朝ご飯できたわよ」

「……おおおおお！」

反応したのはカイルとレントラーと……誰か特定できなかったが、とにかく三匹。

「人数多いから作るの大変だったよ？」

「こっちも大変だったぞ」

アリゲイツがフレイに連れられて……半ば引き摺られる様な感じが入ってきた。

「いったいどうしたの？」

「なかなか起きなかつたから実力行使した。音でも揺さぶっても起きねえんだもの」

「ま、まだ痺れ、れてる……」

「大丈夫か？」

アリゲイツの言動から電撃か何かで麻痺しているのが分かって、少し心配するレントラー。

「加減はしておいた」

フレイはそう言っただけで席についた。

「まあいいわ。揃ったし食べましょう」

「……………よくねえよ……………」

アリゲイツは小声で文句を言った。

「……………いただきます……………」

カイルを除いた全員が朝食を食べ始める。

「……………ごちそうさま……………」

「さて、食べ終わったことだし、あなたたちの質問を片付けましょう」

フレアはマグマラシ達が質問しやすいようにきっかけを作る。

そして真っ先にマグマラシが口を開いた。

「昨日もらった紙に書いてある特訓メニューの中で分からないところがあるんだけど……………ここところ」

マグマラシは自分に渡された紙を出して指さす。

「俺も同じところだ」

「……………僕も……………」

レントラーが同じ様な紙を出す。それに続いてハヤシガメとレクトも出す。

「ほえ？そんなんもらったっけ？」

ズルツ！

アリゲイツの発言にほぼ全員ずっこける。マグマラシはこけると言

うより転がる？

「ま、まあいいわ。・・・やっぱりここね。フレイ、カイル」

フレアは示されたところを見ると言った。

「みんなあそこに連れて行っちゃって！」

「ええーっ！」

「あそこにか……………」

明らかに嫌という意思を隠そうともしないカイルと少しばかり顔をしかめるフレイ。

「おふくろはどうするんだよ」

「道場もあるから、昼ぐらいになるまで離れられないの。お弁当は作って持って行くからね」

「へいへい」

諦めたように返事をするフレイ。

「あそこって…………？」

最後の一言は誰が言ったのか、虚空へ消えていった。

「さあ、着いたぞ」

フレイたちは今、家の近くの森に来ていた。

「ここでなにを…………？」

「まあ、見ている。カイル、そっちの準備は頼んだぞ」

「俺が！？まじかよ」

フレイは少し離れたところに行き、地面の近くで何かをしていた。

一方、カイルは草が生えておらず、平らになっているある程度の広さを持った場所に立つ。

「カイル？そっちは準備いいか？」

「ふう、いいぜ」

「じゃあ始めるぞ」

フレイの声が聞こえたその直後、カイルの前方の草むらから何か

飛んでくる。

しかも、時間をおかずに周囲の草むらから次々と何かが飛び出してきた。

「あぶな…」

マグマラシが叫ぶ。しかし……

カイルは狭いと言える範囲の地面がむき出しになった場所の中だけで飛んでくるものを次々に掠る事すらせずにかわしていく。

「……すごい」

その場にいたマグマラシ達はそれ以上言葉を出すことが出来なかった。

ただし、飛んで行った何かが、木にぶつかって跳ね返ったものがアリゲイツの頭を直撃していたが。

「やっぱりさすがの一言しか出ないな」

いつの間にかフレイが戻ってきていた。

「ここは一体……?」

「ここはバトル時の身のこなしをよくするための特訓場だ」

レントラーの疑問にフレイが答える。

フレイはどこからか 明らかに周りに転がっていたテニスボールほどの大きさのボールを取り出す。

「このボールがいるんな方向から飛んでくる。これをよけ続けることで少ない動きで攻撃をよける術、^{すべ}攻撃を見極めるすべを体で覚えるためにここは作られたんだ」

フレイの説明はまだ続く。

「今は前方からしかやってないけど、後ろから飛んでくるようにすることもできる」

「こういう特訓は危なくない? 何回も当たると怪我しちゃうそうだし……」

「ハヤシガメ、そこは大丈夫だ」

フレイは近くに転がってきていたボールを二個拾うと、元から持っていた一個と合わせて三個を同時にボールを避け続けているカイル

に投げる。

カイルは前方からしかボールが来ない事で、周りに気を付けていなかったのか、フレイの投げたボールがあたる。

「いてっ！」

ボールがカイルに当たった瞬間、どうやって認識したのか、ボールが打ち出されなくなる。

「フレイ。邪魔するなよ」

「まあ、そう言うな」

「ところでさ、これ技で落としていいのか？」

「アリゲイツ、それじゃあ意味ないだろ！」

「ん？そうか？」

アリゲイツに少し突っ込むマグマラシ。

「これって、全方向からって難しくない？」

「俺も全方向からはまともにはできないから安心しろ」

「いや、フレイも三百度ぐらいならある程度対応できてるじゃねえか」

(なんか……比べちゃいけない気がする……)

ハヤシガメはそんなことを考えていた。

「あつ、と……とりあえず、やってみ」

「じゃあ俺からいくぜ！」

無謀なアリゲイツが立ち位置につく。

「じゃあ始めるぞ」

フレイはどこからかりモコンのような物を取り出す。

「始め！」

そう言ってフレイはリモコンのボタンを押した。

「うおおおおりゃあああ！」

アリゲイツは無駄になるであろう掛け声を発した。

マグマラシ達は全員これをした。

避け続けることができた時間はレントラーが最も長く、次にマグマラシとレクト、その次にハヤシガメ、一番短かったのはやはりアリゲイツだった。

「アリゲイツ、避けないといけないのになぜ突っ込む？」

「確かにフレイの言う通りだな」

「相当きつかったね」

「だな」

「あ？腹減った」

「そう言えばそろそろ昼だな」

「おふくろが持つてくるから待つてる」

フレイがそういった次の瞬間に……

昼食を持つて来たフレアが現れた！

「みんな？おまたせ」

「……きたああああ！」

再び反応したのはカイルとレントラーと……誰か特定できなかったが、また三匹。

「フレイ、この子たちにやらせた？」

「もちろん。んで……」

フレイはフレアに結果を伝えたらしい。

「やっぱりアリゲイツ君やらかしたか。ま、予想してたけど」

「んで、午後はどうすんの？」

「ああ、そうね。ちよつとみんな聞いて？」

「……ん？」

フレアはマグマラシ達によく聴くように言う。

「昼からは個別で特訓だけど、マグマラシ君のところにフレイが、アリゲイツ君のところにカイルがつくから、何かあったらこの二人に言っただけ？」

「俺ら、そんなこと聞いてないけど……」

フレイが言うが、それをスルーして続きを言うフレア。

「それから、レントラー君とハヤシガメ君には特訓の場所と道具を用意しておいたから。じゃ、そう言うことでよろしく」

フレアはそこまで言うのと、颯爽と戻っていった。だが、レクトの事は言っていない。意外とドジなのかもしれない。

「じゃあとりあえず…」

「僕たちも行くから」

「頑張ってくださいね」

そう言うってレントラー達も動き出す。

「特訓ね・・・マグマラシ、紙見せて」

「ああ、はい、これ」

フレイはマグマラシの紙を見る。

「マグマラシ、特訓のために場所を移すぞ」

「分かった」

マグマラシはフレイの後に続いて歩き出した。

「そんじゃ、俺たちもやるか」

「おう」

アリゲイツとカイルもマグマラシ達とは別の方向に歩いて行った。

「着いたぜ」

マグマラシとフレイは山の荒れ地に来た。

「ここならどれだけ炎を使っても大丈夫だから、お前の特訓にはうつてつけどぜ」

マグマラシの課題。それは『技の数の追加』そして、『特殊技の強化』だった。

「とりあえず、俺が教えられるのは、『フレアドライブ』『噴火』

『オーバーヒート』だけなんだが、いいか？」

「いいぜ」

「じゃあまず、手本を見せるから少し離れてくれ」

「分かった」

「よし、まずはフレアドライブ！」

マグマラシとフレイは課題特訓を開始した。

「ここらへんでいいかな？」

「俺はいいぜ」

「分かった分かった」

カイルたちは周りに何も無い丘で止まる。

アリゲイツはもらっていた紙をなくしていたようで、文字通り“なんとか”して紙を見つけた。

アリゲイツの課題、それは『命中率の向上』だった。

「とりあえず、お前に波動弾を放って行くから、今度は技で撃ち落とせよ」

「オツケー」

「いくぞ、波動弾！」

レントラーとハヤシガメはレクトと共にフレイの家の近くの空き地にいた。

フレイはこの広さは無駄だと思っているらしい。

レントラーの課題は『瞬発力の強化』（フレアからはまだ反応が遅いと見られているようだ）

ハヤシガメの課題は『攻撃の強化』

そのために、レントラーは十メートルをいかに速く駆け抜けるか、という特訓をする。

十メートルでは加速しきれない分、瞬発力だけの勝負となるから……らしい。

ハヤシガメは全身を使った物理技を強化するためにおもりを付けて

走る。脚力を鍛えるためである。

さらに、与えるダメージを増やすためにぶつかった時の体重移動のためにサンドバックにぶつかっていく。

「じゃ、始めようか」

「そうだな」

「これだけ広がったら、十分ですね」

その空き地にはトラックが描かれていた。

レクトの課題、それは『最高速の制御』

「このトラックを技を使ったまま走る・・・やっぱりきつそうですね」

レクトはトラックのスタート位置につく。

「それでも頑張ろう。高速移動！ボルテッカー！」

レクトは明日へと走って行った……そんなわけない！

それから数日、午前中はボール避け、午後は個別特訓という日が続いた。

ボール避けは日増しに続いた時間が長くなっていった。アリゲイツは一番短い、それでも前より格段に長くなっていった。

だが、それを本人が自覚しているかどうかは分からなかった。

「よし、オーバーヒート！」

マグマラシはフレイの見せる技のほとんどを数回の失敗をした後に習得している。

ただ、オリジナルの技やブラストバーンだけは習得できなかった。フレイが何かを考えていると…
マグマラシは技が上手く出来たことが嬉しくて満面の笑みでフレイの方へ振り返った。
マグマラシは自分が振り返った瞬間、ビクツと体が動いたフレイを見た。

「アリゲイツ！いくぞ！」

「オツケー！」

「波動弾！」

「おりゃあああ！」

元の世界で見たドラマにあった掛け声を真似た掛け声を発したアリゲイツはカイルの波動弾を全て落とす。

「じゃあ次はこれだ！クリティカルバースト！」

カイルは十数発の波動弾を放ち、それは全てアリゲイツに吸い込まれるように飛んでいく。

「おりゃあああ！」

再び、元の世界でm（略）アリゲイツは自分の持つ技を駆使して落としていくが、途中で外して顔面に喰らう。なぜかは知らないが、アリゲイツは頭に何かが当たることが多い。アリゲイツを哀れんだ世界がアリゲイツの頭をどうにかしようとしているようだった。

「いってえ」

「大丈夫か？」

「たぶん」

「それにしても、動きと技は前よりよくなってるぜ」

「まじで！？」

「ああ」

「よし、じゃあもう一丁やってくれ！」

「よしてきた」

アリゲイツも勉強等で残念な頭ではなく、体や、感覚でなんとなく当て方を覚えていった。

レントラーやハヤシガメは……

もちろん特訓をしていた。それは成功に向かっていった。

「もう、コンマー一秒！」

「まだまだ！」

コンマー一秒の壁を突き破らんと励むレントラーと、周りに感化されてやる気が出てきたハヤシガメは訓練に励んでいた。

ただ、近くを走り回っていたレクトがバランスを崩してレントラーや、ハヤシガメに技を発動したまま激突するといったことがあった。レクトが速さに慣れてくるとそれも起こらなくなっていった。

そんな日が続いていた。

350

マグマラシ達がフレイ達の世界に行ってから約三週間がたったある日……。

マグマラシ達の特訓は終わりに近づいていた。

そういった日に何の運命の悪戯か……

マグマラシ達がこの世界に現れた日と同様に……

なんの前触れも、兆しもなく“それ”は突然に現れた……

「「「うわあああ！」「」」

「ん？あと十分……」

アリゲイツ達（レクト含む）は慌てているフレイによって団子のようにもみくちやにされた。

「いつたいなんだ!？」

「いいから外見る！あとアリゲイツ起きろ！雷パンチ！」

レントラーはフレイに問うが、フレイは外を見ると言ってアリゲイツに雷パンチを叩き込む。

「ぎゃあああ！しび痺れるるるる！」

雷パンチを叩き込まれて起きたアリゲイツフレイに強制的に外を見させられる。

外にあつたのは……この世界に来るときに通ったあの“銀のオーロラ”。

「あつ！出てる！」

「あれを通れば、俺達の世界に戻る！」

少し嬉しそうなレントラーとハヤシガメ。

実際は少しどころか物凄く喜んでいたのだが、寝起きであまり感情が表に出ない。

「消える前に行かないと。すぐに準備しよう！」

「」「ああ！」「」

マグマラシの声に全員がバタバタと準備を始める。

そんなマグマラシ達をよそに、

「なんか……少し寂しくなりますね」

「そうだな」

少ししんみりするフレイとレクト。

「よお。ってどうした!？」

「いつたいどおしたの?」

そこに現れたカイルとフレア。フレイとレクトは二匹にこの事を説明し始めた。

マグマラシ達は荷物を纏め、家の外に出て、フレイ達のいる家のほうへ振り返る。

「今までお世話になりました」

「いやいや、そんなこと言わなくていいのに」

ハヤシガメの言葉にフレアが

「なんか、ここで過ごすのも楽しかったな」

「ああ、そうだな」

レントラーの言葉にマグマラシも同意を示す。

「向こうの世界でも頑張れよ」

「だからって無茶するなよ」

「きをつけて下さいね」

フレイやカイル、レクトがマグマラシ達に声をかける。

そしてほんの少しの間だが、皆が別れを惜しむように話す。

「それじゃあ、さようなら。たぶん、もう会えないと思うから」

「そんなこと言うなよ」

マグマラシはほとんど確信的な直感でそう思ったのか別れを告げる。だが、フレイはそんなマグマラシの考えを読んだかのように、そう言って右手を太陽に掲げる。

「あるポケモンが言っていた。『絆とは決して断ち切る事のできない深い繋がり。たとえ離れていても心と心が繋がっている。』ってな。『友達』も絆の形だろ」

『！……！……！……』

フレイのそんなセリフに皆が驚くが、すぐに笑い出す。

「はははっそうだな。じゃあ……」

マグマラシはそこで言葉を切ると……

「『またな』」

と言った。どのような形でも再び、フレイ達と会うという望みを込めて。

「ああ、またいつか、きつと」

マグマラシ達は銀のオーロラの中に歩みを進めていった。
そしてマグマラシ達がフレイ達の世界から消えていく時……………

『未来で……………』

と言った。

マグマラシ達、チームエレメントとフレイ達、チームブレイブは未来で再び会う事を約束をした。もしかしたらマグマラシ達がフレイ達の世界に行ったことは偶然ではなかったのかもしれない。

この言葉がマグマラシ達とフレイ達が別れ際に交わした言葉だった。フレイ達や、マグマラシは胸に暖かい感情を持って薄れゆく互いの姿を見送った。

そしてマグマラシ達は元々居た、“自分達の世界”に戻った。

第四十二話：異世界からの帰還後

「……………」
マグマラシ達は閉じていた目を開ける。

「……………帰ってきたんだな……………」

「……………ああ、俺たちの世界に……………」

「……………フレイ達とまた会えると良いな！」

「ねえ、ちよつと疑問なんだけど。もしかしたらここは僕等の世界じゃないかもしれないし、それにここ何処？」

「……………え？」「……………」

「……………どういうことだ？」

「……………あの銀のオーロラのようなものを通ったからといって僕等の世界のあの場所と繋がってるとは限らないし、僕等の世界じゃないかもしれない。……………現に目の前に高い山がそびえているしね」

マグマラシ達の目の前には頂上付近に少しの雪が積もっている高い山がそびえている。

「……………じゃあここ何処！？」

「ええ〜！！！」

「周りには……………ポケモンが見当たらない！？」

「ポケモンがない世界か！？」

「い、いや！！戻ってきた場所が少しずれただけかも！！！」

「だよな！！！」

「そ、そうだよな！！！」

「……………そうであって欲しいね」

何故かハヤシガメは落ち着いている。

「……………とりあえず……………この山、登ろーぜ！！！」

「……………何で！？？」

「……………あそこに町のようなものが見えるじゃん」
アリゲイツは山の中腹の辺りを指差す。

「本当だ！あの町でここが何処か確かめよう！！」
「そうと決まれば早速山登り開始だ！」
マグマラシ達は目の前にそびえる山を登っていく。

【次元の狭間】

マグマラシ達が銀のオーロラを見つけたとき

「！？んなっ！！何だ！？」

「どうかしたか？」

「空間が押された！？」

「何をあわてているのだ。そこらのサーナイトかエスパータイプのポケモンが何かしたのではないのか？」

「そんな比じゃねえ！これは俺と同じ質の力だ！」

「何！？」

「繋がった！？え？ポケモンが四匹向こうに行った！？何なんだ！？そいつ等が飲み込まれたかと思ったら空間の圧力が消えた！？」
「解らないことが起こって慌てているパルキア。だが、パルキアはその異変が起きた場所の半径数百メートルの範囲をポケモン達に中が見えないようにする結界空間を張っていた。」

「落ち着け！空間の神！！」
パルキア

それをディアルガが名を呼んで落ち着かせる。

「！！あ、ああ。もう大丈夫だ」

「……先程の異常はもう消えているのだな？」

「……ああ。何事もなかったかのようにな」

「その異常の原因は？」

「わからねえ。ただ言える事はこの世界の空間と他の空間が繋がったと言う事と、向こうに俺と同質の力を持つ奴がいたことだ」

「空間の神と同質の力が……力の強さは？」

「実際に会ってみないと詳しいことは解らないが……殆ど同じくら

いの強さだと思っ……」

「……何？神と同等……いや、空間バルキアの神が二匹いると考えた方がいいのか……？」

ギラティナが其処に現れる。

「わたしのせかい反転世界の一部分が他の場所と一時的に繋がったんだがあれは空間バルキアの神、貴方がしたのか？」

「……反転世界にも影響があつたんだな？」

「……？貴方がした事ではないのか？」

「いや。俺じゃねえ。多分だが……別世界に俺と同じ様な存在がいた。そいつが起こしたのかもしれない」

「だが、その者が起こしたのではないかもしれない」

「……解らない事があり過ぎるな……」

「ちよつとその空間捻じ曲げてたからそこに行つてくるわ」

バルキアは異変があつた後、空間を捻じ曲げてその場を隔離していたようだ。

マグマラシ達に向こうに行つた直後にその空間を隔離したようだ。

その約三週間後

「！……またか……空間隔離、世界視」

バルキアは銀のオーロラが再び現れたことを知るとすぐに対策をとる。今度は落ち着いて。

そして世界視で銀のオーロラを見つめる。

「……！？ポケモンが？とりあえず別空間に移しておくか……」

バルキアはそういつて現れ始めたばかりのマグマラシ達ポケモンを別空間に転移させる。

「空間掌握……！？こつちの世界の空間は掌握できるが向こつの世界は掌握できない！？」

バルキアが驚いているうちに銀のオーロラは消えてしまった。

「あ……くそっ！」
パルキアは悪態をつくが、すぐに考える。
「（……この世界と向こうの世界は干渉し合っていないのか？というより、互いに干渉しあわないはずだった世界なのか？干渉し合う世界だったらある程度掌握できるんだが……）っと！そうだ！別空間に送ったあいつ等とは……」
パルキアはスカイタウンの麓付近に一時的に作ったループ空間に送ったマグマラシ達との接触を試みる。ただし、身の安全の為に擬態して。

【マグマラシ達】

「何この場所…登ったかと思うと下りてるし、右に行っただかと思うと左に行ってるし……」

「エターナルラビリンスすげー！永遠の迷宮？」

「……もしそうだったら永遠に出られないぞ」

「ま、まあ、そんなことはないでしょ？」

「訊かれても……なあ？」

「振るなよ！」

「というか誰もいないのか？」

レントラーがそう言っていると、マグマラシ達の後ろから返事が返ってくる。

「ここにいるぞ」

「どわあ！」

返事が返ってくると思っていたいなかったレントラーは驚いて声をあげた。

「……誰？」

「俺はパル……！サンドだ」

ハヤシガメにサンドは言い直しながら答える。

「あーそのー、何だ。お前等あの銀のオーロラから出てきたんだよ

な

「?そうだけど?」

「あの銀のオーロラの向こうの世界はどんな世界だった?」

「!?!?」

サンドがマグマラシ達に訊いたらハヤシガメが戦闘態勢をとる。

『ハヤシガメ!?!?』

「皆!気をつけて!このサンドさん、敵かも知れない!」

『え!?!?』

驚きながらも警戒をするマグマラシ達。アリゲイツは少し離れた場所ので何故か木をかじっている。

「僕等が銀のオーロラを通って行った向こうに世界があることはこのサンドには知る術はないはずだよ!」

「そうなのか?」

「警戒するな」

「.....」

「.....向こうの世界はポケモンがいたのか?この世界との相違点は何処まであった?」

「そんなことを訊いてどうする.....」

「この世界の安定、安全の為だ」

「.....」

「おい、いい加減警戒するのをやめろ」

「警戒を解いた瞬間襲うんだろ!」

「マグマラシが言つと別の意味に取れるぞ?」

「?」

「プクク.....(確かに!美女のマグマラシが言つと.....!)(.....)」

「何か知らんけど笑うな!」

「で、俺の事はどうしたら信じてもらえる?」

「.....とりあえず、本名を名乗つたら?」

「.....本名はいえないが、種族名なら」

「種族も偽っているように思えるけど?」

「……知っていたのか？それとも気付いたのか？」
「気付いたよ。サンドなのに水溜り踏んでるんだから」
「あ、忘れてた……サンドは地面タイプだったか……」
「で？種族名は？メタモン？ゾロアーク？ゾロア？」
「どれでもない。ま、ヒントやるから当ててみな？ヒントは水、ドラゴンタイプだ」
「……？シードラ？キングドラ？でも、別のポケモンの姿になる能力はないし……」
「ま、いつかわかるって。向こうの世界は安全だったか？」
「（それくらいならいいか？）……安全だったぞ？」
「なら、この世界との相違点は？」
「……なかった！」
「アリゲイツ！！」
さっきまで話を聞いていなかったアリゲイツがサンドの質問を訊いて答えてしまう。
「あんたありがとな！名は？」
「アリゲイツだ！」
「俺はサンド……ってもう言ってたか。今度俺と会うことがあれば一緒に食事でもするか？俺が食べる量はカビゴン並みだな！」
「……？何処に入るんだ！？」
「腹」
「いや、そうじゃなくて！！」
「なら、胃」
「それでもなくて！！……もういいや……で、そんな量の食料何処から？」
「そんなん適当だ」
「……もしかして大金持ち！？」
「いいや？金なんて持ってないが？」
「……食料ドロボー……」
「待てや！何故そうなる！？」

「無一文 食料を買えない 食料入手方法 “泥棒”」

「……………だが俺はやっていない!!」

目の前の漫才を見たハヤシガメ達は警戒を解いてしまった。

サンドがそれを否定する。だが、そこに悪乗りするマグマラシ。

「食料泥棒をやった者のほとんどはやっていないと言っただ。安心しろよ?ちゃんと警察に引き渡してあげるから」

マグマラシはそう言ってサンドの肩に前足を置く

「いやいやいやいや!!俺は本当にやってないって!!」

「……………」

「……………」

「いや!お前等もそんな目で俺を見るなあ!!」

『……………』(四匹同時)

「やめるお!!」

「さて、警察行こうか?」

「いや、それよりも先にこの場所から出ないと……………」

「ソウダッタ……………」

「どうやって?」

「あ、そのことが」

「何か知ってるの?」

ハヤシガメは何かを知っているサンドに尋ねる。

「ん?この場所の事だろ?」

「そう。それにここは僕等の世界なの?」

「世界に関しては間違いない。お前等が銀のオーロラを通るのを知ってるからな」

『良かった……………』

マグマラシ達は安堵の言葉を発する。

「それと、ここはスカイタウンのある、山の麓だ」

「スカイタウン!目指してた町じゃねえか!!」

「……………此処はすぐに普通になる……………」(小声)

『?』

サンドの小声で言ったことはマグマラシ達に聞こえていなかったよ
うだ。

「スカイタウンの方に向かって行け。そうすれば此処から抜け出せ
るぞ?」

「俺等もそれやってみたけれど駄目だったぞ?」

「ちよつと、町の方見てみな?」

マグマラシ達は少し変に思いつつも言われるままスカイタウンの方
向へ向く。

「なんにもないぞ?.....どこ行つた?」

アリゲイツ達が、サンドの方へ向くと何処にもサンドの姿はなかつ
た。

【とあるトコロ】

「.....ふう。久々に弄られたな」

「空間バルキアの神、主は何をして居つたのだ?」

「この前の銀のオーロラが現れたときに異世界へ行つて帰つてきた
奴等に会つてきたんだ」

「.....帰つてこれたのか!」

「向こうに行つた奴等だ。間違いない。この空間オレの神が言うんだか
らな」

「.....サンドそのの姿で言われても説得力はないぞ?」

「あ.....」

「さつさと元に戻らんのか」
時間ディアルガの神に言われて自分の身体を見た空間バルキアの神は再び時間ディアルガの神に言
われて自分の姿を元に戻す。

「普通に忘れてた」

「普段の視界の違いで解らんのか」

「気付かなかったんだよ」

「……それはそうと、向こうの世界の事は何か解ったのか？」

「ああ。もちろん！向こうの世界とこっちの世界は大して変わらな
いらしい。それに、向こうから攻めてきた訳ではなさそうだ」

「そうか」

「偶然世界がぶつかったのかもな……」

第四十二話・異世界からの帰還後（後書き）

最近、執筆が思うように進まないです。続きが勝手に書かれてくれれば…

第四十三話：スカイタウン・欲深き者・復讐者・セルシーフ（前書き）

更新を忘れていました orz

現在の執筆状況から予測するに、次の投稿は日曜日に来れなさそうです。

第四十三話：スカイタウン・欲深き者・復讐者・セルシーフ

「……………あのサンド何処行っただ？」

「一瞬のうちに消えたよね？」

「どこに行ってもいいじゃん。また会えたらその時に訊けばいいんだし」

「まあ、そうなんだけど……………さっきの場所から抜け出せたことや、一体何者なのか知りたいし……………」

「サンドはサンドだろ？別に何者でもよくねえか？」

「それを言えばそうなんだけど……………気にならない？」

「気になるけど、そんなことよりも！今はスカイタウンにさっさと行こうぜ！」

「……………アリゲイツらしいや……………」

【欲深き者】

オーシャンとグランドが結成されてから一カ月後　　つまり二年十一ヶ月前。

「ハハッ！ハハハハハッ！フハハハハハハ！とうとう見つけたぞ！これで……………世界は私の物だ！」

その欲深き者は龍の遺跡の隠されし間に祭られている丸い珠を宙に浮かせ、自分の許へ引き寄せた。

「これがあれば……………あとはオーシャンとグランドがさっさとあの二匹を目覚めさせるまで……………」

その者は自分のそばにもえぎ色の珠を浮かばせながら遺跡を出て行った。

龍の遺跡の近くにいたポケモンと、龍の遺跡の守護者のポケモンは

皆、死んでいた。否。

ただ一匹を除いて殺されていた。

その一匹が助かったのは恐怖で体が動かず、物音を立てなかったことと、遺跡の柱の影に潜んでいたからだ。

「あ、あああああああ！」

その者は欲深き者がどこかへ行ってしまった後に声を出した。というより、どこかへ行つたから声が出せた。

極度の緊張から解き放たれたその者は今、初めて周りの惨状を認識できた。

「うあああああああああああ！」

そして叫んだ。

その者は少年だった。

少年は親しき者達の死を見た。少年は愕然とした。悲しんだ。嘆いた。悔やんだ。それらは全て憎しみとなった。

憎き者へ復讐する為に少年は力を欲した。

何よりも、破壊する力。切り刻む力。相手を逃がさない速さ。相手の攻撃に耐えられる肉体。

何よりも憎き者を殺せる力を望んだ。

そして望みは叶う。

欲深き者への復讐心は少年を進化させた。

少年は力を手に入れた。

少年は誓う。親しき者達を殺した奴を殺すことを

そして二年十一ヶ月の時が経ち、少年は成長した。親しき者達を殺された少年にも優しくしてくれる者がたくさん居た。

だが、復讐の炎は弱まるばかりか、逆にどんどん強くなっていった。

なんで殺したんだ。殺されていないければ俺にも家族がいたのに！平凡でも、温かい家族がいたはずなのに！殺されていないければ

！！

その思いが抑えきれなくなった時、その者は町を飛び出した。町に居た時は壊れるまで身体を鍛え、憎き者の情報を出来るだけ集めた。あの時から、胸の中にある感情はただ一つ　憎しみだけだ。その者は復讐の爪を研ぎ、今、奴を殺そうと旅立った。

【マグマラシ達】

マグマラシ達はスカイタウンに着いた。

「……………」

ヒュ〜

「……………」

……………だが、誰も居なかった。

「何で誰も居ないんだ！！」

「何かあった…」バサツ

何かあったのか！？と言おうとしていたレントラーの顔に飛んできた紙が張り付く。

“ ひこうタイプ絶対参加！！

ポケリンガー大会がアトリユートタウンにて開催！

毎日三十試合、一ヶ月にわたる白熱した試合！！

優勝者にはスカイタウンの全てがただになるパスポートを進呈！

【協賛：ウッドグループ】（一昨日の日付）”

「……………」

「……………これに行ったのか？」

「町の全員で！？」

「…というか、お父さんの会社が協賛してるんだけど……………」

「……………すごいな、ウッドグループ」

「うん」

「それはそうと……………どうする?」

「一ヶ月もここに居るなんて無理だし……………」

「……………」

アリゲイツは何故か遠くを眺めている。景色が綺麗だからだろうか。

「アリゲイツは何かいい案ある?」

「んあ?アクアタウンとかは?」

「いいな!それ!」

アリゲイツにマグマラシが賛成する。

「マグマラシ?あそこは殆ど水路だぞ?」

「大丈夫。溺れたらアリゲイツが助けてくれるし」

地味にアリゲイツを信頼しているマグマラシ。さすがほぼ産まれた時から一緒だっただけはある。

「千ポケでな?」

「金取るのかよ!」

アリゲイツの発言にマグマラシが突っ込む。

「取んねーよ。それよりさっさと行こうぜ?」

【セルシーフ解散】

「あいつらは何処行ったのよ……………」

「ボス、あいつ等にこだわらなくてもいいのでは?」

「そうだぜ!」

上から順にエネコロロ、メタモン、ヤルキモノだ。

いつの間にかナマケロはヤルキモノに進化していた。

「なら、あのまま訳の解らない内に逃げられたままでいいの?」

「それはだめだな」

「ですが、あいつ等に拘らない方が稼げると思っんです」

「ならそうしようぜ!」

『……………』

「なんだよ」

『どっちかはつきりしてなれください!』

「え〜と……」

「金を取るか……」

「一つに拘るのか……」

『決めなさい!』

「え〜……と」

「お金を取るのか」

「誇り高きプライドを取るのか」

「え〜と!?!え!?!?!?!と!?!?!えっ!?!?!と!?!?!」

ヤルキモノが悩んでいる間にエネコロコとメタモンの対立はどんどん強くなっていくばかり。

「ならいいわよ!好きにすればいいじゃない!」

「ええ。好きにさせていたいただきます。それではさようなら。元ボス。

ヤルキモノ!行きますよ!」

「え……あ……お、おう」

ヤルキモノはメタモンに言われるがまま、メタモンに着いていく。

だが、数歩歩いてヤルキモノはエネコロコの方を振り向いた。

「……ヤルキモノ。あなたはメタモンに着いて行ったら?今までと同じ様に盗賊を続けられるわよ?私の所へ来れば……特に何も無いわね。あえて言うなら、貧乏?」

「ボス……」

「ボス……」

「やめて。私はもうボスじゃないわ」

「……」

「メタモンの所にいったらどうなの?」

「……姉貴……」

「……姉貴って……」

「殆ど歳が近い姉貴に拾ってもらって、ここまで育ててもらった恩は忘れたことはねえ」

「……」

「だから……姉貴の為に俺も姉貴と一緒に行くことと思う」

「私の為じゃなくて自分の為に生きて……」

「なら俺の為に姉貴と一緒に行く」

「え!?!」

「別に俺の為だからいいだろ?俺は 姉貴の事が 好きで

一緒に行きたいんだからよ!」

ヤルキモノはエネコロロに顔を紅くしながら告白した。

「え、あ……………」

エネコロロはまさかの告白に顔を紅くしてどうしていいか思い浮かばずに口籠る。

「姉貴、俺は姉貴の事を愛してるから!姉貴と一緒に居たいんだよ!だから……メタモンには別れを言ってくる」

ヤルキモノはエネコロロの返事を聞かずにメタモンを追って行った。

「ヤルキモノ……………/ / ……まったく。進化したらせつかちになっちゃって……………」

エネコロロの答えは決まっていたようだ。

その後、メタモンに別れを言ったヤルキモノはエネコロロと伴ともにどこかへ歩いて行った。

第四十三話：スカイタウン・欲深き者・復讐者・セルシーフ（後書き）

まさかのセルシーフ解散。しかもヤルキモノはエネコロロの事が好きという……

なんとなく書いてしまった。後悔しそう……まあ、いいか。

1月7日午後2時42分、

ポケリンガー決勝戦がアトリユートタウンにて開催！

毎日三十試合、二ヶ月にわたる白熱した試合！！

の部分を大会と一ヶ月と直しました。

「二ヶ月もここに居るなんて無理だし……」

の部分を一ヶ月にしました。

第四十四話：アクアタウン（前書き）

ギンジさんが描いた絵を見せて貰いました。

```
http://www.pixiv.net/member_illust.php?mode=medium&app=illustration_id=12353781
```

Pixiv タグ検索「チームエレメント」でも出るらしいです。

第四十四話：アクアタウン

「着いた〜!!」

マグマラシ達はスカイタウンに滞在する予定だったが、スカイタウンの住ポケ全員がアトリユートタウンに行ってしまった為、急遽あわただしくアクアタウンに来たのだった。

【復讐者】 アウエンジャー

マグマラシ達がアクアタウンに着いたと時を同じくして、その者もアクアタウンに着いていた。

「……」ギリツ

その者は齒軋りをした。

「ここに手がかりが……」

その者は歩を進めた。

【オーシャン】

ここは海王の間。そしてそこで話しているのはカブトプスと、オーシャンのボス。

「……そういう事？」

「もしくは居場所を示しているのかも……」

「それはないわ。この壁画を描いた者達も馬鹿ではないのよ？」

「はっ。ならば珠の在り処でしょうか？」

「その可能性のほうが高いわ……ただ、この場所が何処なのか……」

「ボス！地図との照合が終わりました!!」

照合の終了を告げるヌオー。

「何処なの!？」

「地図上で似た形の島が三つほどありました。ただ、そのうち二つ

は……幹部以上の実力が無ければたどり着けないと思われませす」

「……そう……手下は使えないの……」

「ボス、この計画が成功したら……世界は本当に平和になるのでしょうか？」

「……疑うの？」

「いえ。何でもありません」

そう言つてヌオーは離れていった。

ボスは手を頭に当て、少し首を横に振つた。

「……………ボス？」

「！……………なんでもないわ」

【アリゲイツ達】

「だから最初に遺跡に行こうぜ！」

「それよりも浜辺で遊ぼうぜ！！」

「観光しようよ」

「いや、バトルしようぜ？」

アリゲイツ達が言い争っているのはアクアタウンの運河を泳ぐギャラドスの上。

「今度の客はうるさいな……ハア」

ポケモン達を運ぶことで収入を得ているギャラドスは溜息をついた。このギャラドス、静かな所が大好きなのだ。

それはともかく、アリゲイツ達は目的地の決まらないまま、ギャラドスに運んでもらっている。

「お客さん。何処に行くんですかい」

「任せる！」

誰かがそう言ったのを聞いたギャラドスは自分の好きな静かな遺跡へと進んで行った。

事件に巻き込まれることも知らずに……

「到着しやした」

「ありがとう！」

ギヤラドスはマグマラシ達を遺跡付近まで運び終わると、遺跡の近くにある湖まで泳いでいった。

ギヤラドスと別れたマグマラシ達は遺跡に入ろうとしたとき、後ろからマグマラシ達を呼ぶ声がした。

「もしかしくなくてもマグマラシにアリゲイツ？」

「え？」

マグマラシ達が後ろを見るとそこに居たのは……

「フローゼル？と元先生の……タルミ？」

フローゼルとタルミだった。

「どうしてここへ？」

「俺達は旅をしてる。フローゼル達は？」

「私達は私のいた時代の皆が何かメッセージを残したかもしれないと思つて、遺跡めぐりの旅よ」

「ねえ、僕等は空気なの？僕等にも紹介してよ」

「……チツ……」

「おい！今チツて言わなかつたか！？」

「？いいや？」

「……気のせいかな？」

舌打ちしたのはアリゲイツ、答えたのはマグマラシだ。

「それより、フローゼル、タルミ。この二匹が俺達と一緒に旅をしているレントラーとハヤシガメだ。ちなみに、マグマラシの写真を買ってない。レントラー、ハヤシガメ。こっちの二匹がフローゼルとミルタンクのタルミだ。フローゼルは同級生。タルミは元教師で担任だった」

「今、サラツと俺の写真をレントラーとハヤシガメに売ろうとした事を自白した！」

「それが俺だ！」

「威張るな！それと未だに売るな！！」

近いうちにマグマラシがハリセンを使うときが来るかもしれない。

マグマラシとアリゲイツが言い合ってる間にハヤシガメ達はハヤシガメ達で話していた。

「私はタルミ。そしてこっちは私の彼氏のフローゼル」

「よろしく！」

「俺はレントラーだ。よろしくな！」

「紹介があったハヤシガメです。私のいた時代とはどういふことですか？」

「……マグマラシ達から何も聞いてないの？」

「何の事ですか……？」

「……魔法の事か？」

レントラーはタルミに近づいてギリギリ聞き取れるほどの声で言う。

「そうよ。何処まで聞いたの？」

「ただ、魔法があるということと、誰かに教わらないと使えない。

という事だけ。それと、ハヤシガメはこのことも知りません」

「レントラー？どうしたの？」

ハヤシガメはヒソヒソ話をしている二匹に、自分が仲間はずれにされた気分になり、レントラーにちょっとした悪戯をする。

「もしかして……タルミさんに愛の言葉を囁いてるの？」

「……！」

「……！！」「ギロツ！」

「うふふふふ……」

「違う違う！そんなんじゃないって……！」

三匹がびっくりする。そして、フローゼルはレントラーを睨み、タルミは笑い、レントラーは誤解？を解こうとあせって否定する。

ハヤシガメの冗談だと分かり、フローゼルの睨みが消えた後、周りを確認したタルミが口を開く。

「今から話すことは誰にも言わないと誓える？」

「はい」

「……？はい。誓います」

ハヤシガメの返事に間があったが、誓うと返事をしたのでいいだろうと判断するタルミ。

そして、タルミは口を開いた。

「……………」

「……………」

ハヤシガメとレントラーはタルミが何を言うのか、さまざまな感情を寄せ、聞き逃さないようにする。

「……………ふあゝあ……………」

タルミは欠伸をした。

レントラーとハヤシガメはこけた！

「欠伸あくびかよー！！」

「あ、あはは……………」

こけたレントラーとハヤシガメはすぐに体勢を立て直すと、突っ込みと、苦笑いをした。

「私の時代というのは……………」

【タルミの話。内容は第五話参照。】

……………というわけよ」

マグマラシ達は言い合いを止め、途中から話を聞いていた。

「そんな事が…………だからタルミさんの時代の誰かがメッセージを残したかもしれない遺跡を巡るんですね……………」

「そうよ。ただ、この遺跡は何かの作業中で、海王の間の中に入れないのよ。でもミロカロス町長はそんな事はしていないって言ったからどういふことなのか聞こうと思って戻って来た時に貴方達とで

くわしたのよ」

「……………町以外で遺跡に何かをする権利は無かった筈。もしかして犯罪者!？」

「当たり前だ……………」

突然、後ろから誰かの声がした。

『!？誰!?!』

「俺が誰なんて事はどうでもいい。お前等は絶対に入るな……………」

「どうということだよ!」

「邪魔だからだ」

その者はそれだけ言うのと遺跡の中に入っていった。

「何なんだよあいつ!」

「……………悲しい眼……………そして憎しみに囚われてるわ……………」

「行くぞ!」

憎しみを持つていることを聞いたアリゲイツは遺跡の方へ走って行く。

それに続いてマグマラシ達も走っていく。

「さすがアリゲイツ。後先考えずに走って行って問題を解決していくんだよな」

アリゲイツ達や、タルミ達は遺跡に向かって走っていった。

第四十四話：アクアタウン（後書き）

フローゼルの台詞が少なかったか？……良いか。
来週の投稿は出来ないかもしれませんが。

第四十五話：復讐者・オーシャン

「ボスは何処にいる……」

「あ……が……ゴ……」

その者は鋭い爪を切り傷や打撲などがあり、口から血を吐いているポケモンに突き付ける。

「答える。ボスは何処だ」

「奥……海……王……間……」

そう言ったポケモン　又オーは気絶した。

「オーシャンが知っていない場合は……グランドか……」
復讐者は奥へ進んでいった。

【マグマラシ達】

「んなつ!?!」

「死体!?!……いや、生きてる……」

「タルミ!ポケモンセンターに連絡してくれ!」

フローゼルはタルミに言う。

「分かったわ!」

タルミは荷物の中から何かを取り出す。

「何それ?」

「持ち歩ける電話よ」

そう言ってポケモンセンターと連絡を取り始めた。

この世界には携帯電話というものはない。四足歩行ポケモンが使えないので昔発売されたものが有名にならず、広まらなかったのである。だが、タルミが持っているのはウツドグループが最近発売した、音声操作式携帯電話である。この携帯電話の欠点は画面が見えないことだ。なのでこれは電話くらいにしか使うことがない。だがそれ

でも四足歩行ポケモンが使えることで人気があり、販売台数は右肩上がりになっている。ちなみに、機能を限定しているおかげでポケギアよりもすごく小さい。腕時計とほぼ変わらない大きさ。

「うえっ！」

「また!？」

再び死体のようで生きているポケモンを見つける。

「……ぬゑあ〜」

意識のないはずのポケモン

ヌオーは声を出した。

「!?!?何それ!?!」

結局どうすることも出来ないのでヌオーを放って置いて、さらに奥に向かう。

【オーシャンのボスと復讐者】

「……あなたは何者なの？」

「貴様が知る必要はない。貴様のボスの居場所を吐け」

「何の事?私がボスよ」

「とぼける心算か。まあいい。貴様の身体に訊くとしよう」
そういつて復讐者は向かっていく。

「くっ!バブル光線！」

「ドラゴンクロー!アイアンテール！」

ボスの攻撃を切り裂き、アイアンテールで攻撃する。

「冷凍ビーム！」

「ストーンエッジ！」

「ドリルくちばし！」

「ドラゴンクロー！」

「鋼の翼！」

「アイアンテール！」

「アクアジェット！」

「影分身！」

ボスが冷凍ビームを放って、それを復讐者がストーンエッジで防ぎ、そこにドリルくちばしで攻めるが、ドラゴンクローで横に逸らされて、復讐者の横を通り過ぎる瞬間、鋼の翼で攻撃、それをアイアンテールで防ぐ。そしてアクアジェットを使って隙を少なくして攻撃、だが、影分身で避けられてしまう。

「……やるわね」

「貴様はこの程度か？」

「まさか。この程度じゃあボスなんか務まらないわ！……あなたは本当に何者なの？組織に欲しいわね」

「俺が何者かは俺の質問に答えたら答えてやる」

「知らない事を答えられるわけがないわ」

「まだとぼける心算か！っもり燕返し！」

「くっ！鋼の翼！」

「ドラゴンクロー！」

「剣の舞！」

「アイアンテール！」

「鋼の翼！」

「切り裂く！」

「水の波動！」

「龍の波動！」

「ドリルくちばし！」

「アイアンテール！」

「龍の波動！燕返し！」

「ゲホッ！アクアジェット！冷凍ビーム！」

「ぐあっ！」

復讐者が燕返しで攻撃するも鋼の翼で防がれ、次に飛び上がったドラゴンクローを振り下ろすも剣の舞で避けられる。着地する寸前、身体をひねってアイアンテールで攻撃、それを鋼の翼で防御。着地

してすぐに跳び、切り裂くを使う。だが、少し離れていたなので水の波動が迫ってきたので切り裂くを止め、龍の波動で相殺する。その隙をドリルクちばしで狙われるが、アイアンテールでそれを逸らし、距離をとる。そして龍の波動を命中させ、続いて燕返しを使う。だが、それはアクアジェットで避けられ、冷凍ビームを受けてしまう。この間わずか十数秒だ。

「本気を出してもほぼ互角なんて……」

「俺はこの程度でしかないのか？……」

「あなた本当に強いわね。今度はこっちからよ！バブル光線！」

「龍の波動！」

「旋鋼の翼！」

「燕返し！ドラゴンクロー！」

「バブル光線！冷凍ビーム！」

「龍の波動！燕返し！切り裂く！」

「鋼の翼！」

「アイアンテール！」

「剣の舞！アクアジェット！水の波動！」

「龍の波動！ストーンエッジ！」

「旋鋼の翼！」

「ドラゴンクロー！があっ！」

ボスのバブル光線を龍の波動で防ぎ、ドリルクちばしと鋼の翼の合体技、旋鋼の翼の威力が乗らないうちに燕返しを使って接近し、ドラゴンクローで抑えつつ、傷を負わせる。ボスはバックステップで下がり、バブル光線を冷凍ビームで凍らせて視界を悪くする。それを龍の波動で壊しつつ、燕返しと切り裂くを使って攻める。だが、鋼の翼で防がれるも、傷を負わせた。それに怯むことなく鋼の翼で攻めてくるボスをアイアンテールで攻撃するが、剣の舞で避けられる。そこに水の波動を纏ったアクアジェットが迫る。それを龍の波動で威力を弱め、ストーンエッジで突き上げる。突き上げられたボスは着地した後、旋鋼の翼を使う。復讐者は旋鋼の翼をドラゴンク

ローで防ごうとするが、爪を逸らされてしまい、直撃して復讐者は吹っ飛ぶ。

「ハア…ハア…ハア…」

「……………いつたい、何者なの？」

「しつこいぞ。お前の上に俺の家族を殺した奴がいるのは分かっているんだ」

「私はそんなもの知らないわ」

「……………惚けていないのか？」

「ええ。だからあなたの言う者が誰なのか知らないし、あなたが何をしたいのかも知らないわ」

「あいつは確かに言ったはずだ……………」

【マグマラシ達】

復讐者がボスと戦っている間のマグマラシ達。

「あいつどこ行った〜!!」

「……………!!こっちだ!戦闘してるみたいだ!」

「……………ゴクロー!があっ!」

マグマラシ達の目の前に復讐者が吹っ飛んでくる。

「……………」

「ハア…ハア…ハア…」

「……………いつたい、何者なの？」

復讐者と戦っている者と復讐者はマグマラシ達に気付いていない。

「しつこいぞ。お前の上に俺の家族を殺した奴がいるのは分かっているんだ」

「私はそんなもの知らないわ」

「……………惚けていないのか？」

「ええ。だからあなたの言う者が誰なのか知らないし、あなたが何をしたいのかも知らないわ」

「あいつは確かに言ったはずだ……………！！！」
復讐者はマグマラシ達に気付き、素早く距離をとる。
「お前等か。入ってくるなど言っただろ」
「憎しみに囚われたお前を放っておける訳がない！」
「！！あの一瞬で気付いて追って来たのか……………気付いたのはこのミルタンクだな？かなりの経験を持っているのか？」
「黙秘させてもらおう」
「……………その緑のあなた」
「ハヤシガメって言う種族だよ！！」
「種族名を覚えるのが面倒なのよ。で、ハヤシガメ、あなたが例の日照り石の所持者？」
「！！何処でそれを……………」
「求める力が反対の勢力の情報くらい集めるわよ」
「……………」
「で、復讐者さん？私はあなたの言っているのが誰か知らないけれど、グランドのボスにでも聞くつもり？」
「……………よくわかったな。勘か？」
「まあ、そんなところね。グランドの一員に会いたいならその子達と一緒にいたほうが確実よ」
「……………なぜ俺にそんなことを言う？」
「気が向いたら組織に入って欲しいからね。それと……………私は……………三年より前の記憶がないのよ……………アクアジェット！」
ボスは小声で三年より前の記憶がないことを伝えると、アクアジェットで素早くどこかへ逃げていく。
「待て！！！」
復讐者の叫びもむなしく、ボスはもう見当たらなかった。
後には復讐者の声が遺跡に響くだけだった。

第四十五話：復讐者・オーシャン（後書き）

ここでクイズ！

ボスと復讐者の種族は何でしょう？

正解しても景品はありませんので悪しからず。

第四十六話：復讐者とエレメント（前書き）

今回は続きが思いつかなくて短めです。

それと、タルミが魔法を使います！

第四十六話：復讐者とエレメント

「……………」
「無言は止めて欲しいんだけど」

「……………」
「ハヤシガメ、ほっとけば？」

「でも……………」
「……………」

復讐者は今、ハヤシガメ達と一緒に行動している。（再びギャラドスの上。ギャラドスは静かになったことは喜んでいるものの、重い空気から逃げたい一心だった）そしてハヤシガメ達の言葉は興味があるもの意外は全て無視している。

何故こうなったのか、それは

【過去回想】

オーシャンのボス、エンペルトが逃げ去った後。

「……………」ハヤシガメとか言ったな？お前が日照り石を持つ者か？」

「……………」うん。そうだよ」

「なら……………！奪うまで！ドラゴンクロー！！！」
「護る！」

復讐者のドラゴンクローをタルミが間一髪で防ぐ。

「邪魔をするな」

「させてもらうわ。友の友が攻撃されそうになってるのを見ているだけなんて嫌よ」

「ふっ……………」周りの足手纏いを護りながら俺と戦えるのか？」

「無理ね」

「足手纏い呼ばわりすんじゃないか！」

「ごめんね。アリゲイツ君。前より強くなっているみたいだけど、それだけよ。彼が相手では足手纏いの領域を出ないわ」

タルミが言ったことでしぶしぶ引き下がるアリゲイツ。
「足手纏いのくせに足手纏いと分らない馬鹿がいると余計に護りづらいだろっ」

「ええ。技しか使わなければね……」

「……浅知恵でも使うのか？大した自信だな……」

「古の時代に封じられし力よ」

「？まあいい。ただ倒すのみ！燕返し！ドラゴンクロー！」

「ジャイロボール！」

「龍の波動！燕返し！ドラゴンクロー！切り裂く！」

「護る！」

「！？」

復讐者は燕返しで接近し、ドラゴンクローで攻撃するも、タルミにジャイロボールで反撃されてしまう。

復讐者は龍の波動を撃ち、すぐに燕返しで接近、ドラゴンクローと切り裂くを同時に発動する。

復讐者の爪は鍛えている者でないところ？の力で切り裂かれるくらいの威力になっている。

（技の威力と耐久力についてはいつか説明を書きます。by 作者）

しかしタルミは自分に護るを発動し、マグマラシ達には魔法を使う。復讐者の爪がタルミに当たりそうになった時、護るで阻まれる。復讐者はそれが分かるとすぐに標的をマグマラシ達に変えて攻撃する。だが、爪が届きそうになった時、マグマラシ達の前にピンク色の輪環が現れ、爪を完全に防ぐ。

「ミルクのみ……ふう」

「貴様、さっきのは何なんだ」

「藍色の珠を知ってる？」

「……………ああ」

「それらを創った力よ。それ以上は言えないわ」

復讐者は少し納得いかなさそうにするが、それ以上は尋ねない。

「????????」

マグマラシ達は藍色の珠といわれても知らないのでチンプンカンプンだ。

復讐者は再び攻撃を仕掛けようと構えた時、タルミが言葉を発する。
「何度やっても無駄よ。それより提案があるんだけど、聞いてくれる?」

「言ってみる」

「別に奪わなくてもいいの。ハヤシガメ君が持っていたほうが、いい事がたくさんあるわよ?」

「……………」

「例えば、今、グランドはハヤシガメという種族で探していて、一度、その幹部と出会っているのよ?」

「それがどうした」

「解らないの?一度会っているから見つけやすいし、ハヤシガメの父親は“ウッドグループ”のトップよ。その情報網は世界中よ?」

「……………その程度か?」

「万が一、幹部が何匹も出てきたらあなたは勝てる?この子達でも困や時間稼ぎくらいには使えるわよ?うまい事倒せたらあなたには特でしょ?それに使えないと思ったらハヤシガメ君に日照り石を渡してもらって進めばいいでしょう?」

「……………」

「一緒にいる?それとも独りで進む?」

「……………いいだろう。俺はガバイトだ」

「私はミルタンクのタルミよ。あっちからマグマラシ、アリゲイツ、フローゼル、レントラー、ハヤシガメよ」

『よろしくな!』

「馴れ合うつもりは無い。俺に話しかけるな」

こうして復讐者^{ガバイト}はエレメントとタルミ達と一緒に行動することになった。

そしていろいろと質問をしながらギャラドスに乗った。

これが冒頭までの出来事である。

第四十六話：復讐者とエレメント（後書き）

タルミが言った呪文（？）は

！

！

これを読めるようにすると

彼の者への害を断て！守護の円盾！
となります。

第四十七話：ガバイトと一緒に来る事になった後

マグマラシ達は今、警察署に来ている。

「なあ、あの遺跡にあった血痕について知っていることを言ってくれ」

「いいわよ。まず、あの遺跡にいたのはオーシャンという組織で、海王の間を無断調査していたということね。私が町に調査をしているのかどうか確認した所、そんなことはしていないと言うからどういふ事なのか聞こうと思って遺跡に入った時はもう血を流していたわ。ちなみに私が通報者よ」

「オーシャン……？その組織の目的は？」

「知らないわ」

「………血を流した者がいなくなっている点については？」

「知らないわ」

「あなたとその組織の関係は？」

「ないわ」

「なら、………」

【質問&取調べ中】

「………ご協力ありがとうございました」

質問や取調べが終わり、清廉潔白の身になったエレメントとガバイトは警察署を後にした。

ガバイトの事はタルミの話術によって訊かれなかった。

「………タルミってすごいな」

「………」ギロツ！

「タルミサンツテスゴイナ〜」

「これくらいの尋問なんて拷問に比べたら赤子も同然よ」

「……一体いままでどういう暮らしを送って来たんだ……」

「私の事色々知りたいの？」

「フフフ……」

フローゼルは笑いながら物凄い眼力で睨む。

「イイエ」

「そうなの？」

「ハイ」

「……（フローゼルってやっぱり独占欲強いな）」

「何？」

「べ、別に……それよりもこれからどうするんだ？」

「私達は遺跡に行きたいんだけど警察がいるから遺跡には入れないのよね……近いうちに花火大会もあるみたいだし、暫くはこの町にいるわ」

「……本当の所はフローゼルとイチャイチャしたいんだろ？」

「正解！ということまでイチャイチャしてくるわ！」

「じゃあな！」

『じゃーなー！』

「あっ！」

タルミとフローゼルは別れの言葉を言うのが早いか、すぐさま走って行った。そのため、ハヤシガメとレントラーは別れの言葉を言えていない。

「俺等はどうする？」

「花火大会は見るとして……」

「海は？」

「いいな。でもマグマラシは？」

「ん？賛成だけど？」

「……炎タイプなの？」

「何か炎タイプに偏見みたいなのがあるっぽいけど、別に炎タイプが水に浸かったからって死ぬわけじゃないぞ？ただ身体が冷えて体

調を崩すことが殆どだし」

「そうなの？」

「リザードンやマグマツグとか、身体がマグマで出来ていたり、尻尾の炎が消えたら死ぬとかだったら無理だけど」

「へえ」

「マグマラシも賛成したし、海水浴といこうぜ！」

「そうだね。でも、まだ泊まる所決めてないけど？」

「あー！！忘れてた！旅のガイド（さしんぼん）に書いてある宿は……どれも高いなあ」

「金ならまだエレクトタウンで開催されたバトル大会の賞金が残ってるぞ？」

「なら、多少高くてもマグマラシが泊まり易い宿は……」

「どの宿でもよくな？」

「宿の中に水路があったり、常に冷えている水蒸気が出る宿もあるけど？」

「そういう宿はやめてくれ！！」

「なら、“陸の珊瑚”（サンゴ）でいいんじゃないかな」

「どんな宿？」

「こんな宿。日当たりもいいし、冷たさを感じることもないし、宿の中に水路が無いからマグマラシが落ちる心配もないし」

「良さそうな宿だな」

「じゃあ、この宿で決定だね！」

宿

「いらっしやいませ」

「いらしてみました」ベシッ！

アリゲイツを即座に「（前足で）蹴るマグマラシ。

「何名様でお泊りになられますか？」

「五名です」

「では、何日間のお泊りになられますか？」

「……十日間泊まります」

「では、お部屋はどれにいたしましょうか？」

ハヤシガメは差し出された写真を見る。

「このタイプの部屋で御願います」

「302号室と208号室が開いております。どちらになさいますか？」

「208号室で御願います」

「解りました。それでは確認させていただきます。五名様、208号室で十日間のお泊りですね」

「はい」

「85000ポケになります」

「これ……」

ハヤシガメは荷物の中から何かを取り出し渡す。

「……解りました。少々お待ちください」

そう言っただけかへ行ったかと思うとすぐに誰かを連れて帰ってくる。その誰かもハヤシガメの見せるものを見ると納得した様子で対応してくれる。

「この度はこの宿をご利用頂きありがとうございます。代金の方は21250ポケになります。御荷物を御持ち致します」

ハヤシガメは四分の一にまで下がった宿泊料金をカードで払って荷物を渡すと鍵を貰って部屋の方へ歩いていく。

「なあ、ハヤシガメ。さっきの何なんだ？」

「さっきのはウッドグループの重役のポケモン達が持っているカードだよ。殆どの宿では宿泊料金が四分の一になる。四分の三はウッドグループの方へ請求が行くけど」

「さすが金持ち」

「5312ポケづつ払ってもらおうよ」

「やっぱりそこはちゃんとするのか」

「そりゃあね。あ、ここだ」

ハヤシガメは部屋の鍵を解除して扉を開ける。

ハヤシガメ達は部屋の中へ入ると荷物持ちのポケモンは荷物を置いてさがって行った。

アリゲイツはやはりベッドの上で跳ねる。

「アリゲイツ、跳ねるのやめろよ。怪我するぞ」

「ここまで跳ねるベッドなんてそんなにねえぞ!!」

そう言っただけで思いっきり跳ねる。そして天井で頭を打って落ちてくる。
「痛〜」

「言ったそばから……」

「とりあえず今日はこのままここに泊まって、明後日くらいに海水浴に行こうよ」

「そうだな。明日はアリゲイツに料理を作って貰うか?」

「え〜なんで俺が……」

「作ってくれよ」

「仕方ねえな〜……」

第四十八話：海辺の一時（前書き）

今回はのほほんとした感じ？にしてみました。

第四十八話：海辺の一時

マグマラシ達はアリゲイツの料理を堪能した次の日、アクアタウンに隣接する海辺に来た。白い砂浜に底が見えるほど綺麗な遠浅の海。サニーゴやメノクラゲ達が見える。

近くには白いスカーフのようなものを頭に付けているゴーリキーが営む、海の家もある。

「夏だ！海だ！泥遊びだ！」

「何で！？そこは砂遊びか水遊びだよな！？」

「気にしたら負けだ！」

「何に負けるんだ〜！！」

「ナニカニ」

「そこでカタコトになるな！」

「じゃあ」

「じゃあは無し！」

「なら」

「ならも無し！」

「……マグマラシちゃんが虐める……」

「アリゲイツ、ちょっと向こうで話そう」

「マグマラシ、穩便にな？」

「なにが？ただ話してくるだけだけど？」

「逃げる！」

「あつ！アリゲイツ待て！」

逃げるアリゲイツを追うマグマラシ。マグマラシの性別を知らない者が見たら羨む光景だろう。

本人達はそんなことは微塵も考えていないが。

「とりあえず何か食べようよ」

「そうだな。ガバイトは？」

「……なんでもいい」

あの後、マグマラシとアリゲイツが中心になってしつこく話しかけていたら折れたガバイト。話しかけたら最低限の返事を返すくらいにはなった。

「なら定番のカキ氷とスイカと……焼きそばでいいよね」

そう言ったハヤシガメは海の家に向かって行った。もちろんガバイトもその後をついていく。

「ゼーゼー」

「アリゲイツおかえり。でも後ろにいるぞ？」

「……」

ゆっくりと振り返るアリゲイツ。そのとき、アリゲイツの視界はクリーム色一色だった。

「うげっ！ぶっ！がはっ！」ゲシッ！ズザッ！ズザザザー。

マグマラシの蹴りで身体が宙に浮いたアリゲイツは一度地面で跳ねた後、地面に頬擦りしてそのまま滑っていた。滑りが止まった時、アリゲイツは「がはっ！」と言って倒れた。

「うぐぐぐ。たとえ俺が倒れてもマグマラシファンクラブ公認マグマラシ写真同好会のうち三十匹程がマグマラシの写真を撮りに来るだろう……」

「何それ！？初耳なんだけど！アリゲイツ、説明しろ！！」

マグマラシは倒れたままのアリゲイツを思いつき揺さぶる。

「オイ！アリゲイツ！聞いているのか！」

「ま、マグマラシ？アリゲイツが泡吹いてるぞ」

マグマラシはアリゲイツの顔が見える位置まで来て確認する。

「え？あ、ほんとだ……アリゲイツ？燃やされたくないならその演技を止める」

「わかった！わかったから口の中に炎を溜めるな！！」

「演技かよ……」

「で、“マグマラシファンクラブ公認マグマラシ写真同好会のうち三十匹ほどがマグマラシの写真を撮りに来るだろう”ってのを説明

しろ」

「もう解散したけどよ。将来写真家やあっち系の仕事に就きたいやつらと、マグマラシの写真を撮って興奮しているやつらが写真を撮るといふ事のみにおいて結託して出来た同好会。ちなみに、体育のゴリ先生ゴリキも加入している」

「ゴリ先生……いや、ゴリも！？体育の授業の時、良く分からん対応をしてきたのはそれですか！」

「ちなみに、ゴリ先生の中ではマグマラシは高嶺の花のようなもの。変態とかそういう系のじゃなくてただ高貴なポケには接しづらいつていうやつ。写真同好会に入ってた理由はマグマラシに慣れる為の写真を手に入れるため。結局変わらんかったけど」

「良かった……」

「なあ、アリゲイツ」

「何か？写真を売って欲しいなら後でな。今は持ってない」

「いや！そうじゃなくて！！」
マグマラシが不吉な空気を醸し出しているのを感じて即座に否定したレントラー。

「マグマラシのファンは一体何匹居たんだ？」

「正確な数は分からんけど……大体全校生徒の五割には達したと思うぞちなみにファン会員番号000000000は俺だ。ま、ファンクラブ立ち上げたのも俺だし」

「……アリゲイツ……右」

「ん？……あ」

自分の首を自分で絞めたアリゲイツ。“あ”と言った瞬間その場から消えたように逃走する。

「アリゲイツ。ちょっと話そうか？大丈夫。命の心配は一切要らないから。ただ、ちよつと痛いだけ」

それを聞いたアリゲイツは龍の舞を使い始める。それを見たマグマラシは敬語で言う。

「すいませ〜ん！そこにいる方、そこにいるアリゲイツを捕まえて

くれませんか？」

すると、そこに居た ポケモン達が我先にとアリゲイツを捕らえる。

「ギャー！重い！つぶれる！死ぬー！！」

「皆さん、ありがとうございます！」

マグマラシは笑顔ではないが、礼を言う。それだけでアリゲイツを捕まえに行った ポケモン達の大半は大きな満足感を味わって、笑顔になる。

だが、少数はそれだけの事なのにマグマラシに惚れてしまう。もし、マグマラシが笑顔を向けていたら六割以上が惚れてしまっていただろう。

ただ、厄介なのがマグマラシがこのことを自分が敬語でお願いするようお願いを聞いてくれる優しいポケモン達がいっぱいいるというようにしか認識していない事だ。

今まで、マグマラシに惚れた者はアリゲイツが写真を渡したり、ファンクラブに誘ってマグマラシに告白しにくくしたりしていた。そしてファンクラブではマグマラシを恋の相手から憧れの相手へと知らず知らずのうちに見方を変えてしまふといった事がアリゲイツの知らない所で繰り返されていく。この難関を抜けたのがニドキングやルクシオ等のポケモン達だ。（第八話等に登場）

マグマラシがそういう認識しか持って居ないのはアリゲイツのせいだとも言える。アリゲイツは“幼馴染の親友がそういうった厄介な奴等に捕まって自分がマグマラシを弄ることが出来なくなるのが嫌だ”というような事を言っているらしいが。

ファンクラブを創った点ではある意味マグマラシを守っていると言えるのかもしれない。

「アーリーゲイター？」

マグマラシから逃げられないと悟っているアリゲイツは何の抵抗も無くマグマラシの後に付いていこうとしたが……マグマラシがアリ

ゲイツから眼を話した瞬間、周りの 達の嫉妬の攻撃を受けた。ちなみに口はふさがれている。何かと思つてマグマラシが振り返つてもそこには地面に顔が埋まっているアリゲイツのみ。取り押さえていた 達は周りに散らばって行つていた。

「何やってんの？」

「……………」ズボツ！

「なあ、何やって「訊くな……………」……………」

「……………」ハハハ……………」

苦笑いしながらもアリゲイツは凄いのかもしれないと思うレントラーだった。

「おいレントラー、マグマラシー、アリゲイツー」

「ハヤシガメ！と、ガバイトー！」

「スイカとカキ氷と焼きそば買ってきたよ」

「美味そうだな」

「さつさと食おうぜ！」

「……………」じーーーーー

「……………」

マグマラシはアリゲイツの事を睨む。

「……………」じーーーーー

「マグマラシ、どうしたの？」

「それが……………かくかくしかじか……………という訳なんだよ」

「あはは……………」

これには苦笑いをするしかないハヤシガメ。

ガバイトもそばで聞いていたが、何もしなかった。マグマラシがだと勘違いしたままだが。

「食べようか」

「……………」そうだな」

ハヤシガメ達は先に食べ始め、それに気付いたマグマラシもアリゲイツを睨むのを止めて食べ始める。

マグマラシはカキ氷を食べている。炎タイプだからか、一口食べる

たびに手を止め、“うゝ！”とその冷たさで顔を変えている。

それを見ているレントラー達は何か幸せな気分になる。ガバイトは無意識で素早くマグマラシから目を逸らしている。

「?…何か付いてる?」

「付いてないよ」

「?」

マグマラシはまたかき氷を食べ始める。そしてまた“うゝ！”とその冷たさで顔を変える。

やはりそれを見ていたハヤシガメ達はまた幸せな気分になる。

夏の日差しが煌く、白い砂浜で食べるかき氷はやっぱり特別なのかもしれない。

第四十八話：海辺の一時（後書き）

カキ氷で顔を変えるマグマラシが書きたかったから書いた。

反省と後悔はしていない！ただ……アリゲイツとファンクラブの関係？をうまく表現できたかどうか心配です。

そういえばもうすぐ五十話です。まだ、ジムを二つくらいしか巡っていないのに……。物凄い長編になりそうな予感が……。することもしないことも無いかもしれない。何を言いたいんだか。

第四十九話：海だ！遊びだ！〜？〜

マグマラシ達は食事を終えた。と言っても焼きそばは三匹前くらいしか買って来ていなかったたので軽い食事だが。

マグマラシが食事を終えてその場から移動し始めた時、誰かから声をかけられた。

「そこのお譲ちゃん、ちよつと俺等と遊ばねえ？」

「そーそー。そいつ等よりも俺等と一緒にの方がたのしーぜ？」

「……………」

「無視か？」

「え？声かけてた？」

マグマラシはやつと自分に声をかけられていると気付いて振り返る。声をかけていたのはゴルダックとニョロボン。

「うおっしゃあ！！やつぱり上玉だあ！！」

「俺等と遊ばねえか？そいつ等よりもたのしーぜ？」

「え？ちよ、ちよつと！何するんだよ！」

ナンパ二匹組はマグマラシを強制的に連れて行こうとした時、

『すまないが、俺達はこのいつ等に用事が出来たんだ。連れて行ってもいいか？』

という声が聞こえた。

そう言ったのはマグマラシに惚れたであろうポケモン達と正義感の強いポケモンだ。

マグマラシはどういう関係なのか知らない為、友達だろうと思って頷く。

「へ！？お前等何なんだよ！！」

「ちよつ！何するんだよ！」

ナンパした二匹はそのポケモン達により問答無用で海の家裏よりもさらに遠い所へ引き摺られて逝った。

もちろんマグマラシ達はそんな二匹の事などすぐに忘れた。

「さて、泳ぐか？」

「僕は波打ち際までにしておくよ。塩は苦手だし」

「俺もそうしようかな？」

「なら俺は泳いでくるわ」

上から順にアリゲイツ、ハヤシガメ、マグマラシ、レントラーだ。

「定番の砂の城でも作るかな？」

「マグマラシは砂の城の御姫様。誰か素敵な王子様が来てくれないの？」

アリゲイツはそう言いながら逃げる。

「アリゲイツ？こんがり焼いてやるからちよつと待て！」

「美味しくないぞ？」

「炭になれ！！」

そう言つて青みがかつた火炎放射をするも避けられる。

「アリゲイツも懲りないよな」

「そうだね。つて！マグマラシ！！」

ハヤシガメはあわてた様子で叫ぶ。

レントラーがその方向を見ると海に向かって宙を飛んでいるマグマラシの姿。

「え！？」

バシャーン！マグマラシは海に落ちた。

「マグマラシ！！」

レントラーとハヤシガメはあわててマグマラシのところへ駆け寄る。だが、アリゲイツは駆け寄っていない。

「アリゲイツ！！何故マグマラシを海に投げたの！？」

「助けに行けよ！！」

「何で？」

「何でつて……………」

レントラーはマグマラシの方を見て固まった。

ハヤシガメも見て固まる。

「……………泳いでるし」

「……………泳いでるね」
「マグマラシはレントラー達が固まっている間に浜へ辿り着き、軽く水気を飛ばしている。」
「投げるなよ!!」
「丁度、うまい具合に飛び掛ってきたから……………つい」
「……………ねえ、マグマラシ」
「ん？何か？」
「何で泳げてるんだ？」
「え？普通だよな？」
「マグマラシに対してレントラー達は首を横にぶんぶん振る。」
「……………」
「えっ!?!」
「えっ!?!」
「何でレントラー達が驚いてるんだよ」
「マグマラシが常識に対して驚いたから」
「……………俺、非常識？」
「レントラーとハヤシガメは頷く。アリゲイツはこっそりと放れて行っている。」
「アリゲイツ？ワニノコの頃、言ってたよな？炎タイプでも泳げて当たり前だったって」
「さ、さあ〜？」
「それを真に受けて必死で泳ぐ練習した俺は何？」
『アリゲイツに唆されて練習したんだ……………』
「あの練習、必要無かったよな？あの時の時間と努力と勇気とかを返せ!!」
「ちょ、ちょっとマグマラシ落ち着け！」
「アリゲイツも逃げようとしなくて説明するなり謝るなりしてよ？」
「あの時は出来心で……………」

【過去回想】

「（もし、ヒノアラシが泳げたら水の中で一緒に遊べるんじゃないかね？）

「なあ、ヒノアラシ、今の時代、殆どの炎タイプのポケモンは泳げるらしいぜ？」

「本当！？」

「だからヒノアラシも泳ぐ練習しようぜ！！」

「わ、わかった。でも、溺れそうになったら助けてよ？」

「分かってるって。ちゃんと助けるから心配すんな！」

「ありがとう！じゃ、じゃあ、早速……」

……簡単に説明するとこんな感じだったはず

「何と云うか、マグマラシも常識に疎すぎるし、アリゲイツの言っただことをすぐに信用してるし、アリゲイツは悪気があって嘘ついた訳じゃないし……」

「どっちもどっち？」

「はあ。悪気が無いから許す」

「ありがとな！マグマラシも泳ぐか？」

「そうだな。濡れてしまったしな」

「なら行こうぜ！！」

「待てよ！」

「ブベツ！」

こけるアリゲイツ。

『お先に』

レントラーとマグマラシは海に入ろうとするが、マグマラシは戻ってきてガバイトに話しかける。

「ガバイトも泳ぐ？」

「いや、いい」

「そう？」

マグマラシは再び海へ行く。

砂浜からジャンプしてアリゲイツを踏みつけてもう一度ジャンプして宙返りの後、着水という事をしながら。

「……ねえ。これからどうするつもり？」

「……しばらくはお前達のそばで様子を見るつもりだ」

「僕のお父さんの情報網使わなくていいの？」

「使っても使わなくてもグランドは出てくる」

「タルミさんの起こした事柄については？」

「訊く気は無い。俺が訊いても教えてはくれないだろうから……」

「そう……。……復讐の相手は誰？」

「……お前が知らなくてもいいことだ。だが……これだけは教えてやる。奴は自分が力を入れるためならば世界などどうでもいいと思うような奴だ」

「……そうなんだ……。……教えてくれてありがとう」

「……」

それからハヤシガメとガバイトは何も言わずに泳いでいるマグマラシ達を見続けた。

第四十九話：海だ！遊びだ！〜？〜（後書き）

マグマラシが泳げることだけを書きたかったので書いた（時間稼ぎ）

第五十話：海だ！遊びだ！〜？〜（前書き）

ストーリーが思いつかないっ！！
なので再び時間稼ぎ。

第五十話：海だ！遊びだ！〜？

アリゲイツ達はマグマラシが身体の冷えによって海から上がったのを切欠に、今は砂浜で遊んでいる。

「うおりゃー！！スクリユアアタック！！」

「なんの！ジャイロアタック！」

「ぶへっ！」

アリゲイツの撃ったビーチボールはマグマラシのアタックでそのまま返され、レントラーの顔にぶち当たる。ちなみに、技のように言っているが投げただけである。

今マグマラシ達は何故かビーチボールをぶつけ合っている。主な標的はレントラーだ。

「俺ばかり狙うな！」

「俺はマグマラシに向かってアタックしただけだぜ？」

「一回だけだろ！その前は明らかに俺を狙ってた！！」

「何のことだか」

「くそっ！アリゲイツめ！うおりゃー！」

「アリゲイツ！！覚悟ー！！」

「御姫様のボールなんて効くかよっ！」

レントラーはアリゲイツにボールを投げる。それをマグマラシが蹴ってさらにスピードを早くする。だが、フレイ達に鍛えてもらったおかげでこの程度のスピードだったら対処できるアリゲイツはボールの軌道を変える。ボールはハヤシガメ達の方に飛んでいく。

「……………アイアンテール」

ボールはガバイトのアイアンテールで見事なほど、真っ二つに割られる。

「……………」

「ボールが……………」

「は！？真っ二つ！？（アリゲイツ、さっき御姫様って言ったな！）」

「オイオイ……一体どれだけのスピードだよ……」

「……」
「ふあゝあ……皆？ボール遊び終わったの？」

さつきまで寝ていたハヤシガメ。

「スイカも冷えたし、食べる？」

「あ、ああ」

「ボール……ま、いつか。スイカー!!」

「（切り替え早っ!）……食べるか」

ガバイトはスイカを持って宙に投げる。

「……切り裂く」

スイカは丁度五分の一切り取られて落ちてくる。それをガバイトは自分の分だけ取ると残りをアリゲイツに投げる。

「……」
アリゲイツがスイカをキャッチした瞬間、スイカに切れ目が入り、残りが丁度四分等分される。

「うおっ!!」

「凄い……」

「すげー!どうやったんだ今の!!」

「切った」

「……いや、それはそうだけどな、何て言うか……」

「アホゲイツ、食べないなら貰っていいのか？」

「駄目だ!!……マグマラシ、今アホゲイツって言ったよな!!」

「気のせいだろ」

「そうか？気のせいじゃない気がするんだけど……って!スイカ盗ろうとするな!」

「自分の食べ終えてないけど、アリゲイツのスイカだから」

「どういつ理屈だよ!それ!」

「さつき俺の事を御姫様と言ってたよな？」

「それはそれ!これはこれだあ!」

アリゲイツはマグマラシからスイカを奪い返すとすぐに齧り付いた。
「これでどうだ!」

アリゲイツがマグマラシにスイカを盗られないようにするもマグマラシはそんなアリゲイツの事を放っておき、自分のスイカをシャクシャクと食べていた。

「……………何か惨め……………」

それを見たアリゲイツは砂浜に手をつけていた。

【ブースター】

今はマグマラシ達がビーチボールを投げる事を始めた時。

「……………あいつ等何処行つたんだっけ?」

「自分に訊いても意味が無いよーな……………」

「まあ、それもそうなんだけど、たまゝに誰かが覚えている事もあ
るだろうし」

「俺らの中で覚えている奴いるのか?」

「覚えているような覚えていないような……………」

「スカイタウンだっけ?」

「今は大会が開かれているから誰もいないと思う」

「なら……………ストーンタウン? アクアタウン?」

『アクアタウンだ!!』

会話を繰り返しているのはブースターやグラエナ、シャワーズやボスゴドラ、それに背中 of 蕾がキノココに変わっているフシギソウだ。ブースターはナイトタウンに近めの所にある遺跡のフシギソウの石像を気に入って、それを身代わりで創っているようだ。

……………色が付いているので気味が悪いが。

だが、ブースターもそれを見てはニヤニヤとしている気味悪いポケモンになっている。

【フェラル&ポケモンB】

「……………アリゲイツ達がセレビィと接触してたらしい」

「まじで!?!」

「嘘ついてどうするよ」

「いや、信じられなくて。もうセレビィと接触してたのか…………」

「ちなみに、数分前にタルミがアリゲイツ達 エレメント と接触して、魔法を使った」

「タルミが魔法を使った? あいつはあれでも結構強いのに?」

「タルミが戦ったポケモンの種族はガバイトだ。結構素早く、速い攻撃をしてきたのはまだ対処出来たけれど、そこにアリゲイツ達が居たから技だけでは守りきれないと思って使ったらしい」

「…………俺達が今ここに存在すること、マグマラシ達がリーダーに会う事、それぞれが必然の歴史なのかな」

「どうした。また急に…………」

「ふと思ったんだ、俺達が目指した現在いまをこうして存在させる為にマグマラシ達の運命みちいを決め付け、その方向へ向かわせていると思うとな…………」

「…………そうだな。だが、そうしなければ現在いまが消える。皆が望んだ未来が消え、あの時代ときの世界の延長 殺し合いの世界になる」

「そう…………だ…な。あの時代ときの事は絶対に繰り返させない。心が無いとはいえ、数多のポケモン達を殺し、殺され、仲間同士で殺し合ったあの時代ときだけは絶対に!」

「ああ。あの時代ときだけは」

「…………なあ」

「何だ」

「マグマラシ達がああの時代……………何でもない」

「……………そう…か」

「ああ」

第五十話：海だ！遊びだ！〜？〜（後書き）

何か違和感があるような気がする……。ま、いつか。

皆さん、僕の小説に誤字脱字又は日本語としておかしい所があったら教えてください。

第五十一話・怪奇現象？奴の仕業だ！（前書き）

ガバイトの思考を書いてみたけれど、どこか合っていない感じが…。

第五十一話：怪奇現象？奴の仕業だ！

【ブースター】

「アクアタウンってこんなにも水路が多いのか……」

「お客さん、目的地は何処で？」

「ああ……海岸に行ってくれ」

【次元の狭間】

「あの世界が感じられない……」

「パルキアは閉じていた目を開けると、考え始めた。」

「あの世界が消滅したか？いや、世界の消滅は世界の滅亡より起き難い筈だから……それともこの世界と融合してしまっただか？でもそれならこの世界に変化があるはず。なら、あの世界とこの世界との間が離れているのか？いや、それなら一度世界同士が繋がったからそこまで距離が無い筈……」

「そこへディアルガが現れた。」

「パルキア空間の神、あの世界との接触は出来たのか？」

「いいや。何故か知らねえけどあの世界と空間を繋げる事はおるかあの世界の存在すら掴めねえんだ」

「……ふむ。我は空間の事に関してはそのままで詳しいわけではないが……考えを聴かせてくれぬか？パルキア空間の神」

「ああ。かくかくしかじかで」

「パルキアはディアルガに自分の考えを伝えた。」

「？世界同士が近づいたり離れたりする事は無いのか？」

「……そんな事は“無い”と言っている」

「そうか……伝え忘れていたが、あの世界とこの世界の時の流れは違うらしいな」

「……はあ！？そういう事はさっさと言えよ！！」

「こつちで一年経つと向こうでもほぼ一年経つていると言うくらい
僅かなズレになるようにこの世界の時の流れを変えておいた」

「……ありがとな」

「礼を言われる為にやったのでは無い。我も……興味があっただけ
だ」

【ガバイト視点】

「……」シャクッ

タルミとか言う奴が使ったものは“技”ではなさそうだが……それでも強力な守り……。

あいつが言うには藍色の珠等を創った力と同一の力だったか……あの力は体力を削るのか……？

俺との戦闘の時、あいつは殆ど動いていないのに肩で息をするほど体力が無くなっていったしな……やはり体力を削って使う力なのだろうな。

「……」シャクシャクシャクシャク……

「さっき俺の事を御姫様と言ったよな？」

「それはそれ！これはこれだあ！」

「これでどうだ！」ガブリ

「……何か惨め……」

アリゲイツが地を手をつけているな。あいつの行動は馬鹿と言ってもいいと思う。

「……」シャクシャクシャク……

……？何か厄介な事と望んでいる事が同時に起こりそうな気がする。……！……後ろから狙うような探るような視線？何者？グランドの員か？

「……ハヤシガメ、後ろを振り返るな。何者かが見ている」

「!?.....数は？」

「五か六」

「近づいてきている」

「うわ！何なんだてめえ！気色悪い！」

「わひひひやひやきえきやひひひはひひひ！」

「ダチが狂ったあ!？」

「ブヒヒヒヒヒ！ひひゆひよひやひえひゆ！」

『はははははひはひっひっひいひひあはっは』

「なにっ!? 伝染しただと!? 奴は一体何なんだ!! 皆! 気をしっかり持て! 決して奴を見るな! 感染するぞ!!」

「..... 嫌な感じの言葉が飛び交っているんだけど..... 後ろを振り返りたいんだけど、振り返ったら最後、後悔しそうな気がするのは何で？」

「や、やめろ!! 奴を見るな!! 見たら最後、悪夢にうなされるか腹に大ダメージをくらうぞ!! やめろ!! 見るな! 見るなあ!!」

「止めるな! 俺にはこの珍事を伝えるというテレビ局員としての使命があるんだ! 止めてくれるな! たとえどういことになろうとも俺にはこのよく分からない事を全国に伝える使命がある!! それを止められる奴は何処にもいない!! どけ! 俺は見るっ..... ぶはあっ!!」

「ゴルダック! ゴルダック!!! テレビ局員としての使命は何処へ行った! 意識をしっかり持て! たとえアレがオマエのツボの真ん中だったとしてもテレビ局員としての使命はそれを凌駕するんだろ!!」

「そうだッ! このゴルダック、アレをカメラに収めるまでは死んでも死にきれん!」

「ゴルダック.....!」

「録れた.....これで.....俺に悔いは無い。もう限界だ..... ぐはっ! バタッ!

「ゴルダック.....!」

「……………どこかのドラマみたいな台詞も飛び交ってるし、アレを見たアリゲイツが声も出さずに御腹を押さえて転げまわってるし……」

「ハヤシガメ、ガバイト、あれは絶対ブースターだ。あんな気色悪い奇妙なポケモンなんていて欲しくないし！絶対にブースターだ！と言うかブースターであつて欲しい！」

俺はグランドの一員であるブースターだと知り、後ろを振り返る。ハヤシガメも同時に振り返った。そこで俺達が見たのは

「……………ツ！？」

一瞬、意識がとんだ。あんな気色悪くてグロデスクで面白くて奇妙で見たくもなくて見ていたくて……言い表せない。とりあえず言えることはあれは存在してはいけない。見るだけでこんなにもたくさんのポケモンを戦闘不能にして、阿鼻叫喚の地獄絵図を作ったアレは絶対に消さなければいけない。そう本能で思った。ハヤシガメは……今にも倒れるのではないかと思えるくらい真っ青になっている。俺もこんな感じだろうか。このときばかりはガバイトの種族が青系色でよかったと思えた。

第五十一話：怪奇現象？奴の仕業だ！（後書き）

奴の感性がとても狂っているということを書きたくて、書きました。

……最近、ストーリーが一個も思いつきません。

話の流れは決まっているのに……

第五十二話：怪奇現象？奴はブースター（前書き）

ギリギリ書けました。ガバイトをとて強くしてしまったのでガバイトが負ける要因を作ることが出来ない……なので苦肉の策として今回のような物語に……。

第五十二話：怪奇現象？奴はブースター

「やつ！久しぶりー！日照り石頂戴？」

「……………」ガクガクふるふる

「ハラガ……………」！「ヒクヒクヒクヒク

「……………オエツ！気色悪ー！」

マグマラシが目の前にいるポケモン達に向かって言う。

『……………何が気色悪いつて？』

そう言ったのはブースターと、青と緑の縞々模様のシャワーズ、一鼻が顔にくっついていてる《パグのような》と思うくらい鼻先の短いグラエナ、ニドクインの身体を持ったボスゴドラ、それと前回紹介したフシギソウ。

「あんたの身代わりで創った奴ー！」

「えー、こんなに面白いのに……………まったく……………わかってないなあ」

『（わかってないのはあんたじゃねえの！？）』

ブースターの身代わり達を見たポケモンの心が一つになった瞬間だった。

「俺にとってそのグラエナは面白いけどそれ以外は気色悪い……………」

「そうなの？俺としてはグラエナが一番面白くないと思うんだけどな〜」

「とりあえずそいつら消してくれ！」

「やだ。それより日照り石渡してくれ。これは御願いじゃなくて…

…警告だ」

ブースターの身代わり達は一齐に破壊光線やソーラービーム、ハイドロポンプ等をいつでも放てるようにしていた。

「貴様がグランドの幹部で間違いないな？」

「ん？そうだけど…誰……………でもいつか」

「いいのかよ！」

周りの観客からの突っ込みが入る。

「悪いが……貴様のボスの下まで嫌でも案内してもらおうぞ!!」
ガバイトはここ数日間、マグマラシ達と一緒に行動していて多少は心を許していたのか、鈍い輝きのあった眼がこの一瞬で底のない冷たさを秘めた眼に戻る。

「燕返し!切り裂く!ドラゴンクロー!」

「撃!ハイドロポンプ!」て「ソーラービーム!」え『破壊光線!』
「!!!」

ブースター達はガバイトが接近してきたので多少のずれがあるものの、一斉に技を放つ。

ガバイトは燕返しの大要領で、ブースターに向かっていきながら身体を横に倒し、そのまま左足を軸に身体をひねって回避してそのままブースターに走り寄る。

ブースターはガバイトを迎撃せずにまともに技をくらう。そして光の粒になって消える。

「え、なにそれ。ひどい」

ブースター達の放った技はガバイトに避けられ、その後ろに突っ立っていたアリゲイツに向かう。

「だが避けぶ!?」

避けようとしたアリゲイツは砂浜に足を取られてそのまま転倒し、技の全てが直撃する。

「……アリゲイツはほつといて俺達も戦おう!」

「あ、ああ。そうだな!充電!」

「アリゲイツ、たーまやー!さて、エナジーボール!」

仲間にほつとかれ、海に飛ばされたアリゲイツ。避けると言いながら避けれずに吹っ飛んだからか、アリゲイツは多少落ち込んで戻ってきた。

「くそっ!」

ガバイトは自分が攻撃したブースターが身代わりだと知るとすぐに

ボックスステップで後ろに下がってボスゴドラ（？）が掴みにかかった腕を避ける。

そこにエナジーボールが飛んできて、ボスゴドラ（？）の腹に当たる。

「……何タイプなんだろ？噴火！」

「とりあえずチャージビーム！」

「……………影分身、燕返し、アイアンテール、龍の波動」

「ハイドロポンプ！冷凍ビーム！」

「大地の力！瓦割り！」

「葉っぱカッター！痺れ粉！」

「噛み付く！」

マグマラシの噴火をハイドロポンプで相殺し、チャージビームは大地の力で防ぎ、影分身をしながら燕返しで迫ってきたガバイトに冷凍ビームと葉っぱカッターを当て、ガバイトの影分身を全て消した。アイアンテールは瓦割りで相殺した所に痺れ粉を放つも、避けられない。そこにグラエナが噛み付こうとするが、鼻が短いので噛み付けなかった。

「鼻が短い事忘れてた！！面白さをとった結果がこれ……………やめよっかな……………」

グラエナは独り言を言う。

「龍の舞四連続！アイステール！」

アリゲイツは龍の舞をした後、アイスクローの要領でアクアテールを凍り付かせるオリジナル技で突撃する。

「身代わり！身代わりの俺、身代わりよろしくな！スピードスター！」

マグマラシは自分の身代わりにたくさんの身代わりをさせ、一斉にスピードスターを放つ。

「ソーラービームと光合成のエネルギーを上乗せしてエナジーボールの要領で……………エナジースファイア！！！」

ハヤシガメはオリジナル技のエネルギーを放つ。

「充電！十万ボルト！」

レントラーはオリジナル技が出来ないのでそのまま普通の技を放つ。

「種マシンガン！蔓の鞭！」

「大地の力！アイアンヘッド！」

「悪の波動！シャドーボール！不意打ち！」

「濁流！炎の渦！」

マグマラシ達が技を放とうとしているのを見ると、ガバイトはマグマラシ達のいる所まで下がった。

そこにすれ違うようにアリゲイツが突っ込んできて、種マシンガンを破壊していく。しかし、蔓の鞭で受け止められ、投げ返される。

そこにマグマラシ群のスピードスター群と十万ボルトが迫る。それを大地の力と濁流と悪の波動で打ち破っている所にボスゴドラが身を盾にして突っ込み、そこに飛んで来たエネルギーを耐え切つて、消してしまった。そしてその後ろを走ってきていたグラエナがシャドーボールでレントラーに不意打ちをあてる。急所に当たったのか、レントラーは倒れる。

そしてその後放った炎の渦はスピードスターの隙間を縫うようにして技を放った後のハヤシガメに当たった。

「？……強くなってる？それにそのガバイトは厄介だし……オーバーヒート！」

シャワーズはオーバーヒートを放つ。

『なら！破壊光線！』

「蔓の鞭！ソーラービーム！…宿木の種！」

「ア、アイスクロー！」

「燕返し！切り裂く！ドラゴンクロー！龍の波動！」

破壊光線はたくさんいたマグマラシ本体を含む、身代わりを一斉に吹き飛ばし、海に当たって水しぶきを上げる。フシギソウはアリゲイツのほうに走って、蔓の鞭で捕まえ、至近距離でソーラービームを放つ。アリゲイツもアイスクローで多少は威力を弱めるも、直撃

し、海へと吹っ飛んでいく。

シャワーズのオーバーヒートはハヤシガメに向かうも、フレイ達ので鍛えた回避力でギリギリ回避する。

ガバイトはアリゲイツを吹き飛ばしたフシギソウを燕返しで移動しながら切り裂くで攻撃した時に宿木の種をくらってしまっただが、消滅させる。そしてそのままドラゴンクローで動けないグラエナを消滅させてボスゴドラに龍の波動を当てるが、ボスゴドラの硬い頭に当たっていたので消滅には至らなかった。

そして今、マグマラシ達は宿木の種を受けたガバイトとどこかへ飛ばされてたつた今戻ってきた手負いのマグマラシと潮の所為せいで沖に流されそうになっているアリゲイツしか戦えるものがないのに対し、ブースター側にはシャワーズと手負いのボスゴドラがいる。

どちらかと言うとややブースターの方が有利だろうと思われる。ちなみに、海水浴をしていたほかのポケモン達はもう既に避難している。ただ、観戦している者もいたが、技に巻き込まれ、気絶したりしている。

相手の出方を伺うようにガバイトの周りを回るシャワーズ。

「ボスゴドラ、さがってて」

「おう……」

頭が痛むのか、手で擦りながらシャワーズの後ろに下がったボスゴドラ。

「波乗り！」

シャワーズの波乗りがガバイトたちに迫る。

「くっ！ストーンエッジ！燕返し！アイアンテール！」

ガバイトは波に対してストーンエッジを使って壁を作り、多少威力を弱めた後、高速のアイアンテールで波を割る。マグマラシもその後が続く。

「地震！」

波を通つたばかりのガバイトとマグマラシはボスゴドラの地震でダメージをくらう。

「このっ！フレアドライブ！」

マグマラシはフレアドライブを自身が耐え切れないような炎を火炎車のように身に纏って攻撃するものだと思っただけなので本当のフレアドライブではない。そもそも、フレアドライブはマグマラシもバクフーンも覚えられない。

マグマラシはフレアドライブもどきで地震を起こしたばかりのボスゴドラに攻撃してボスゴドラを消滅させた。と同時に力尽きたのか地面に倒れこむ。

「燕返し！ドラゴンクロー！切り裂く！」

「っ！水鉄砲！水の波動！火炎放射！炎の渦！」

ガバイトは燕返しで速度でシャワーズめがけて突っ込む。シャワーズは迫ってきたガバイトを狙って技を連発する。だが、ガバイトは技に当たる直前、地面にドラゴンクローで爪を立てて、急激な方向転換をしてシャワーズの攻撃を避け、シャワーズを切り裂くで攻撃した。

シャワーズは他の身代わりたちと同様に消えてしまった。

「何っ！！」

「……ここまでやるとは思わなかった。君は厄介だ」

「出て来い！」

「そう言われて出て行く奴はいないと思うよ……それじゃあ退散させて貰うよ」

「何処だ！！何処なんだ！」

ブースターの居なくなった砂浜にいるガバイトの叫びは……強い怒りと憎しみのこもったものだった。

第五十二話：怪奇現象？奴はブースター（後書き）

矛盾した部分があったので修正しました。

第五十三話：祭りの前（前書き）

続きが思いつかないです。誰か…助けて…。

第五十三話：祭りの前

ブースターの身代わり達と戦った次の日、チームエレメント（とガバイト）は特訓をしていた。

「ヴァイケリヤス アイミ身代わり軍団！！」

マグマラシは身代わりの質を上げる為に、何度か身代わりの特訓をしていた。ブースター戦の後、技としての名前も決めたので気合が入っている。

……ある意味、一騎当千だろう。

「エナジースファイア！」

ハヤシガメはウィードジムのメガニウムが使った技の強化の仕方をさらに応用して作り、ブースター戦でぶっつけ本番で使ったエナジースファイアをちゃんとした形にするために鍛えていた。

……ブースター戦で技が上手く発動したのは奇跡だったりする。

「くろかせほくさ黒風縛砂！」

ガバイトはガバイトで砂地獄と竜巻で相手を捕縛するような特訓をしている。

砂地獄で相手を砂の中に沈めつつ、竜巻で砂地獄の砂を巻き上げて“砂かけ”と、局地的な“砂嵐”を擬似的に再現し、相手の体力や命中率を少なくし、行動を縛る嫌な技だ。

「アイステール！」

アリゲイツはアイステールをうまく使いこなすように練習をしている。

ちなみに、ハヤシガメやガバイトやアリゲイツの技の標的はマグマラシの身代わりだったりする。

マグマラシ達がそういうことをしている間、レントラーは……

「……いいよな……」

マグマラシ達の特訓を見て、暗い雰囲気醸し出しながらそう呟い

ていた。

「……皆はオリジナルの技を作ってるのに……俺は何も思いつかないんだからな……ハア」

レントラーは砂浜に“の”の字を書いていく。

「俺の使える技は……チャージビーム、充電、放電、雷、威張る、雷の牙、スパーク等か？……オリジナル技が出来る要素が無いし！」

【グランド】

「……ボルト、組織を嗅ぎ回っていた奴の始末は終えたか？」

「はい。心臓を貫いた後、首を切り落としました」

「そうか。……ブースターファミアは日照り石を手に入れられたか？」

「二度襲撃しましたが、一度目は逃走され、二度目には幹部……あるいはボスに匹敵するほどの強さを持つ者が居たので撤退しました……」

「そうか。次は手下かボルトを連れて行け」

「……ッ！……分かりました」

「それと、ボルト、ファミアの気色悪い身代わりを処分しろ」

「はっ！アイアンテール！」

ブースターもとい、ファミア（コードネーム）の身代わりをアイアンテールで切り裂き、消す。

「ファミア、二度と身代わりを使って入ってくるな。分かったな？」

「はい」

「二匹とも、下がれ」

『はっ！』

ブースターがボスの目の前で身代わりを使っていたのは嫌がらせだったりする。自分のセンスの悪さは自覚しているが、それを直す気は一切無い。

ボスの部屋を出た後

「ファムア……じゃなかった。ブースター」

「何だ」

「俺を連れてつてくんね？」

「何故だ？」

「殺し……じゃなかった。つい口癖が……。さつさとボスの悲願を達成する為だよ」

「……分かった。ただ、殺すなよ」

「……はいはい。ブースターは殺しに否定的ですもんね！」

「念のためにポイズンの薬を持っていくか……」

「え……あんなまずい薬なんか持って行くのかよ！」

「あくまで念のためだ」

【タルミ&フローゼル】

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

タルミは今、仰向けに寝転んでいた。そしてフローゼルはタルミが視線を向ければ同じ様に仰向けに寝転がりながらタルミの方を見ていた。それに、二匹は全身から汗をかいていた。

「い、意外と疲れるわね」

「コレ……想像してたよりもずっと疲れた」

「やる前はそんなに疲れるとは思わなかったけどやってみたら分かったわ」

「凄く……疲れた」

「ええ……」

【オーシャン】

「くっ！何てトラップの多い場所なのよ此処は！」

「仕方ありません。此処が紅色の珠の対となる藍色の珠の在り処だからでしょう」

「旋鋼せんこうの翼！」

ボスは上下左右から飛んできたり、落ちてきたりする矢や剣、大きな岩等を破壊しながら進んでいる。

「ボス、計算ではもうそろそろ辿り着くはずですよ」

「解ったわ。で、次の扉はどんな仕掛け？」

ボス エンペルトは今までの扉に仕掛けがあつたのでこの扉にも仕掛けがあると思ひ、カブトカブトプスに訊く。

「その扉には何の仕掛けもありません。ダミーですよ」

「何の為の扉なのよ……」

「入った者を入り口まで戻すような滑る坂？らしいですよ」

「はあ。で、本当の道は？」

「書かれていませんでした……と言うより描いてあることを解読できなかったららしいですよ」

「見せて」

エンペルトは部下（カブトプスではない）から問題の解読できなかった部分を見る。

「……本当にこれが解読できなかったの？」

「らしいですよ」

「……」

エンペルトは再び解読できなかった壁画の写し絵に目をやる。

「これ、上下左右が逆になっただけじゃないの……何でこんなのを解読できないのよ……」

「単純に、今まで難しい解読をしていたのでまさか簡単なものが出てくると思わなかつたのでしょうか」

「……はあ……解読して頂戴」

「はい。三十分ほどお時間をとらせていただきます」

エンペルトとはある島の洞窟の中で溜息をついた。

【タルミ&フローゼル】

「まさか海岸で追いかけてこをするだけでこんなに疲れるなんて……」
「本気になりすぎちゃったわね……あ、あそこにマグマラシ君達発見〜！」

タルミは身体を起こしながら言う。

「ほんとだ。今日は花火大会の日だし、マグマラシ達を誘う？それとも二人で一緒に過ごす？」

フローゼルもタルミの様に身体を起こしながら提案する。

「二人で一緒に過ごすのも捨てがたいけどアリゲイツ君達を誘って皆ではしやぎましょ！」

「そうと決まればマグマラシ達誘うか！」

マグマラシ達を誘うことに決めたタルミ達はマグマラシ達に声をかける。

「おーいアリゲイツ！マグマラシ！ハヤシガメ！レントラー！ガバイトー！」

【マグマラシ達】

「おーいアリゲイツ！マグマラシ！ハヤシガメ！レントラー！ガバイトー！」

何処からか聞こえてきたフローゼルの声に、驚いたハヤシガメは集中力を乱し、目の前に形成していたエナジースフィアを大爆発させる。

その爆発音に驚いたレントラーはつい、雷を撃ってしまい、雷はアリゲイツに命中する。アリゲイツは不意打ちだったからか、気絶し

た。

そしてその数秒後、爆煙が消えると……

ハヤシガメは口から煙を出しながら、気絶していた。もちろんマグマラシの身代わりは全て消えている。

「……声、掛けなかったほうがよかった？」

「だろうな」

タルミとマグマラシは言葉を交わす。

「……うわぁ……」

レントラーはアリゲイツとハヤシガメが気絶しているのを見て、苦笑いをする。

「とりあえず……運ぼうか」

誰かがそう言った。

「で、アリゲイツ達も起きたことだし、ねえ、一緒に花火大会見に行かない？」

「え？フローゼルと一緒に静かな所で甘いキスをしながら花火を見るんじゃないかったのか？」

「それは冬のナイトタウン花火大会ですわよ。あっちの方が二人きりになりやすいしね」

「そっか。じゃぁおれらも一緒に行動しようと思っただけど、どう？」

「別にいい……」

「いいよ」

「大人数のほうが楽しいしな！」

「俺も賛成だ」

「じゃぁ決まりね！午後八時位に集合よ！場所は此処！」

「よし！じゃぁそれまで自由！解散！」

マグマラシ達は花火大会と一緒に行く事にして、それまでは各自が自由にするようにした。

マグマラシとハヤシガメは約束の時間までは特訓の疲れを取るため、昼寝をしたりした。

レントラーとアリゲイツはこれと言ってやることも思いつかないので海に遊びに行った。

ガバイトはふらりとどこかへ行ってしまった。

タルミとフローゼルはやっぱり二人でどこかへ行っていた。

第五十三話：祭りの前（後書き）

レントラーの新技を募集します。

思いついたらどのような方法でもいいので解るように教えていただきたいのですが……誰か思いつくのか？

第五十四話：祭り（前書き）

ニャンパラスとかエーネとかメイトとかガットとか適当です。
曲の内容も、リズムも何もかも適当です。

第五十四話：祭り

「わあ〜…凄い……」

マグマラシ達は今、アクアタウンの夏の名物、花火大会に来ていた。ちなみに、冬の名物はどこから流れてくる流氷。

ただ、今年一番の特大花火が盗まれそうになった事以外は順調に準備できたらしく、何の支障も無く開催された。

「寄つてらっしゃい！見てらっしゃい！ヒメリ飴にオレン飴！綿菓子もあるよー！！」

ヒメリ飴やオレン飴はりんご飴のような物だ。

「お客さん！あいつのところは信用しちゃ何ネエよ！あいつはああ見えて腹黒いんだから！きつと悪い木の実でも使つてンダよ！あいつのとこよりも私の所ノを！！」

「ちよつと…！！そのあなたー！！いい身体してるじゃナイー！ちよつとこれヤラナイカ〜？今なら参加料1000ポケ！あいつらに勝利できたらなんと10000ポケ！ジャンケン大会五連勝で10000ポケだよ！！四足歩行ポケモン…ハアハア…一息キツ…も参加できるよ〜！！」

マグマラシ達は店のある所を通りながら食べ物や記念品などを買って行く。

そして何かのステージの前を通りかかる。

「この祭りの為に来てくれた人気急上昇中の歌手グループ！ニャンパラアース！！」

「はい！皆〜！やつほー！」（エネコ）

『エーネちゃーん！！』

「下らん愛想を振りまくな」（チヨロネコ）

『俺（私）に言えないことを言つてのける、ガットちゃん！そこに痺れる憧れるう〜！！』

「ええい！ちゃんを着けるなちゃんを！！恥ずかしいだろうが！！」
『クールであるうとしてるけど、つい本音を言ってしまう！そこに心を掴まれる！！』

『そこに萌えの一端が！』

「くっ！萌えの一端とか言った奴！覚えてるよ！！」

『もうとつくに忘れた。乙』

「覚えてるだろ！！忘れたって言えるから覚えてるはずだ！！」

「はいはい。そこまでにしといてね〜」（ザンゲース）

『うおおおおー！！ナイトさーん！！』

「三匹の登場が終わりだったので、早速、歌を紹介しましょう！！
今日歌つてもらう曲は“想い、届け”と“命の調和”と“迷惑な貴^{あなた}方”です！」

「聴いていくか？」

「いいわね。夜まではまだ時間があるし……それに……」

それ以上は言わないタルミ。実際、太陽は45度くらいにしか傾いていない。

「賛成！」

「その前に飴買って来る！」

アリゲイツは近くの飴屋に走っていった。アリゲイツが何か言つと店のポケモンは驚いている。

「ちょ、ちょっと心配だから行つてくる」

「席、取つとくわね〜」

「うわっ！ちょっと！首が！フローゼルが！」

タルミはそう言つてハヤシガメの首を脇に抱えて連れて行く。もちろんフローゼルも

レントラーとガバイトはマグマラシ達が帰ってきたのを見ると、タルミ達の後を追う。

「で、何？その大量の飴……」

「これでも十分の一にまで減らさせたんだけど……」
「十分の一!？」

アリゲイツの持っている飴は全部で四十〜六十個くらいはあるだろう。

「……アホみたいに買ったのかよ……」

「そう言うんだったらあげねえぞ？」

「すまんすまん」

意外と飴好きなレントラー。半秒もしないうちに謝る。

「で、席は……ガバイト、見える？」

「前の方にタルミ達がいるように見える」

「……何をした」

とりあえずタルミらしきミルタンクとハヤシガメとフローゼルがいる前に行く。

「席、取つといたわ」

「観客が大量にいたと思うんだけど……なんで前の席を取れたんだ
よ」

「ふふふふ……」

「いや、怪しい笑いをせずに答えるよ……」

「ふふふ……それはね……ハヤシガメよ」

「ハヤシガメ？」

「この大会に資金を出資していて、あの歌手グループさえも雇っているのは何処でしょう?」

「……! “ウッドグループ”!」

「正解!すぐそこにウッドグループの幹部がいたからハヤシガメの
顔パス」

「……なんか悪どい……」

「いいじゃない。使えるんだから」

「それは使えるんだけど……ハヤシガメがへこんでるし」

「……僕はカードやパスポートじゃない……」

「ハヤシガメー、オーイ。ハヤシガメー」

「……………（ぶつぶつ）」

「なあ、ハヤシガメの父親ってこの大会に来てんのか？」

「！！……………多分、来てるよ」

「会わなくていいのか？」

「うん。どうせそんなに経たないうちに会うことになるだろうし」

「何故？」

「気にしなくてもいいよ……………それと、五年前の事件は僕のお父さんも関わってた」

「五年前？……………アトリユートポケ校立てこもり・殺ポケ事件のことか！」

「そう。あ、歌が始まるからこの話はまた後でね……………」

「ああ」

想い、届け

「私ーの想いー」

「私ーの想いー」

「私ーの想いー」

『君に届けー。私、君を想ってるー』

「君を見るだけでー、ドキドキする心ー」

「君が女の子と話すと嫉妬してしまうー」

「君がいないと悲しくなる日常ー」

『君は、私の、想いポケー。気付いてよ、私の想いー』

命の調和
ハーモニー

「母がいてー」

「父がいてー」

「友がいるー」

『この今』

『みんないたから私がいる』

「変わらぬ」

「絆」

「変わらぬ」

「心」

「奏でる曲は」

『命の調和』
ハモニー

迷惑な貴方あなたツンデレVer.

「迷惑な貴方」

「私の心を掻き乱す」

「貴方の所為で、私、夜も眠れないのよ」

『だから、責任とって、私を嫁に貰いなさい』

「貴方の所為よ」

『私を貰いなさい』

「（貴方が私を惚れさせたんだから）」

「（私が貴方に惚れたんじゃないから!）」

『ありがたくー想いーなさいー』

「ありがとうございました!」

「皆ーこれからも応援よろしくねー」

『うおおおおー!!! エーネちゃんガットちゃん! ネイ

トさん!』

「以上、ニャンパラスの皆さんでした。次は飛び入り参加自由のバトルです」

「バトルだってよ!」

「参加してみる？」

「やってみるか！」

「フレイ達の所での特訓と新しい技で何処まで強くなったか知りた
いしー！」

「よっしゃ！参加するぞー！」

第五十四話：祭り（後書き）

ニャンパラーズは猫の鳴き声とレオパルドと英語の複数形sを適当にただけです。浅い意味も無いです。

あと、ツンデレとかそこに痺れる憧れるうゝとかは僕がそういうのにはまってるとかオタクってわけじゃないですよ！他の人が書いている小説に多く出てきたので使ってみているだけで！

マグマラシ「ほんとに？」

ほんともほんと！

アリゲイツ「どちらかというとおタクって言われそうだけだな」

……僕はポケモンだけならオタクと言えるかも。

第五十五話：花火大会？バトル？（前書き）

長らくお待ちせしました。バトルの展開とかが一切思いつかずに投稿をしませんでしたが、やっと出来ます！

アリゲイツ「作者、アホだしな」

アホゲイツにアホって！！

アホゲイツ「俺をアホ呼ばわりするな！」

マグマラシ「アリゲイツ、ほっというて始めるよ？」

『どうぞ！』

第五十五話：花火大会とバトル？

ニャンパラスが歌っていたステージはいつの間にか片付けられ、コロッセウムを半分に切ったような形をした本来の建物の形に戻っていた。

……決して野球場やサッカー場などの観客席の形ではない……等。

「さあさあ始まりました！飛び入り参加自由のバトル！前回までは基本ルールだけだったが、今回は趣向を変えて特別ルールの追加があるぞ！今回加えられる特別ルールは“一撃で息切れ”だ！俺の合図で一撃だけ技を発動し、気絶せずに立っていることが勝利条件だ！技の制約は“まもる”“みきり”“ワイドガード”等の身を守る技だ！“身代わり”は例外だ！道具の制限は“気合のはちまき”“気合のたすき”の二つだ！そして生き残ったものが多い場合は四名になるまで繰り返す！此処に簡単な選考を通ってきた三十四のポケモン達がいる！こいつ等に勝てるという者、自分の力を試す者、想い人にかっこ良く見せたい者！どんな理由でもかまわない！此処に集え！」

『うおおおおー！！』

司会の熱のこもった言葉を切欠に、いろいろな者達が我先にと観客席から戦闘場へと飛び込んでいく。

ちなみに、この大会の参加者の殆どは水タイプだったりする。

「準備は出来たかー！と訊いているが返答は受け付けない！ぱつと見て百匹！この中で誰が息残るか！それでは、ファーストアタックスタート第一攻撃開始っ！」司会のフタチマルの合図と同時に会場にさまざまな技が放たれる。

「えー、一撃だけかよ……。なら火炎放射！」

「なら俺はハイドロポンプ！」

「僕はエナジーボール！」

「……放電……」
「砂地獄……」

ガバイトは自分の下や周囲を砂地獄でやわらかい砂に変え、その身体を沈ませていく。

『破壊光線！ドラゴンクロー！ウッドハンマー！滅びの歌！呪い！癒しの鈴！ギアソーサー！フリーフォール！大・爆・発！フウハハ！きゃああ痴漢！メガトンキック！雷！撒き菱！穴を掘る！吹雪！ドリルライナー！岩落とし！ボルトチェンジ！ハードプラント！流星群！ラスターカノン！怒り！ミラクルアーク！銀色の風！オーバリアクションキック《ブレイズキック》！跳び膝蹴り！悪の波動！』

くだらないものも混じっているが、あらゆる技が一斉に出された為、一斉に放たれた技は、あらゆる場所でぶつかり合い、爆発を連鎖的に引き起こしていき、出場者全員に襲いかかった。地震がガバイト達に当たったが、柔らかい砂のおかげで地震は殆どダメージが無かった。

もうもうと立ち込める煙。司会のフタチマルは煙が残っている間に何かを言う。

「すさまじい爆発だったぞ！煙が晴れた時、一体何匹のポケモンが立っているのか！この大会と賭けの勝者は一体誰だ！」

「ピンポンパンポン！只今のレートは0匹56・78倍1匹99・7倍2匹40・2倍3匹23・7倍4匹9・56倍5匹3・98倍6匹24・12倍7匹37・34倍8匹14・65倍9匹2・17倍10匹0・99倍11匹2・01倍12匹7・26倍13匹0・07倍14匹0・83倍15匹0・72倍16匹0・69倍17匹3・29倍18匹5・05倍19匹7・19倍20匹以上83・95倍となっています。……只今を持って、締め切らせていただきます。尚、購入していただいた賭博用の券は破ったり無くしたりしないでください。また、賭博が原因で起こった怪我については一切の

責任を取りかねますのでお気を付けください。換金は券をお買い求めになったカウンターの方で行います。予想の外れた方は券を出口に設置してあるゴミ箱の中にお捨てになって下さい。尚、お帰りの方は二番通路を通らずにお帰りください……ガチャ ピーンポーン
パーンポーン

風が吹き込んできて煙が流されていき、うつすらと見えるようになった。

「さあ、一体何匹のポケモンが立っているのか!？」
そして煙が消えていった。

「立っていたのは十三匹だぁー!!……おや?なんと!他のポケモンの下敷きになっていたポケモン達が這い出してきました!!これで十六匹!十六匹です!レート0.69の十六匹です!息残り(誤字で無い)の選手はそのまま、何もせず*セカンドアタック*にいてください。息絶えたポケモン達の退場が終わり次第、第二攻撃になりますのでそのままお待ちください」

「すげー爆発だな」

「旅のガイドに載っていたバトルとは違いましたが、私にとっては嬉しいルールですね」

「重かった盾にしたカメックスが俺の上に倒れてきた時はどうしようかと思っただし、息残れてよかった」

「え、あ、お、お前等は!!あの時のアリゲイツとレントラーとハヤシガメとマギユマラシ!」

「マギユマラシ言うなあ!!って誰!？」

後ろから聞こえた声に振り返るマグマラシ。居たのはいつかのラムパルド。それとトリデプスとアーマルドとボスゴドラとアバゴーラ。
「俺だ俺。マギユマラシについては噛んだ」

「対面した状態では俺俺詐欺には引っかけなくてくれんど、ラムパルド」

「そんな事しようとも思ってたねえし！ボスゴドラ、俺は馬鹿じゃねえよ」

「何だ？知り合いか？」

「……………」

「ラムパン……………いつの間にそんなかわいい彼女作ったの？」

「ラムパン言うな！それと彼女じゃねえ！！ていうか写真見ただろーが！！」

「面白い物が無いかと思ってラムパンの荷物探したらパラって出てきたからちよーつと拝借して皆と見たあの写真の娘かあ」

「お前かあ！俺の荷物漁って、写真持ってたの！！」

「ラムパンやったね！いつの間に知り合ったの？ハッ！もしかして……………」

「何妄想してるか知んねーけど！お前が考えてるようなことは一切無い！」

「え〜と！ラムパン、ナイトタウンで行方不明になってたことあるじゃん、そこで知り合って、最初は初々しい感じだったけど、徐々に距離が縮まって、あんな事やあっちの要求を！！そして私たちの前では恥ずかしいから、付き合っていることを否定して、それで傷付いた彼女が涙を流しながらラムパンから離れていって、でもラムパンは彼女から離れられなくて彼女を追いかけて誠心誠意謝ってそれで許して貰って、私たちの目の前でも砂糖を吐くくらい甘々なバカップル振りを発揮して！それからそれから……………ペキャッ！」ベシンッ！

「そんな訳あるかあー！！それとさっき俺が言った事聴いてねえよな！」

「尻尾で打たなくてもいいじゃない。ほんの少し想像が未来の事までいつちやっただからって」

「その前にそれは妄想だ！それに過去の事すら合っていない！ていうかあっちの要求って何だよ！！いや、言うな！知りたくない！」

「大丈夫。ラムパンはラムパンなりのこだわりのプレイがあるんだ

よね。たとえそれが私の想像をはるかに上回ってたとしても……うん。友達であるのやめてくれる？」

「オイオイオイオイ！！どういう妄想したのか知りたくも無いけど、俺はノーマルだ！アブノーマルじゃねえ！それに俺にはそんな性癖は無いから友達でいてくれ！」

「岩タイプの癖にノーマル気取り？」

「まさかのタイプ違い！？」

「それに一線を越えられる友達が欲しいなんて……！！いやー不潔ー！ボスちゃんもそつちの関係者だったなんて！」

「ラムパルドと一緒にするな！！変態はラムパルドだけだ！！俺もロクトもウオーガも変態では無い！！」

「そつかー！ごめんねーボスちゃん、ロクちゃん、ウオーちゃん」

「何でアルマアイマルドはそんなあつさりとボスゴドラアハゴラとロクトトリデフスとウオーガが変態じゃ無いと考えを変えるんだ！？それと俺は変態じゃねえ！」

「うん、分かった。ラムパンは変態じゃないよね」

「分かってくれたか……」

「だって変態の領域をもうとつくに通り過ぎてるもんね！」

「分かってなかったー！！」

「それを私が知ったのは……そう、今から三十年前の事だった……」

「何昔話を始めてんだよ！しかも俺もお前も生まれて無いだろうが……」

「あの時私でも“ビビーン！こいつ、変態だ！”と即座に分かるよ
うなそんな雰囲気纏ったラムパンが私の七百八十二メートル九十
四センチ先の道を横切って行ったのが一番最初の目撃だった」

「オイイー！！俺そんな雰囲気出してるわけねえし、七百八十二メ
ートル九十四センチって何で測ってもなさそうなのにそんな詳しい
んだよ！それに目撃って！俺は珍獣じゃねえよ！？それにさつき俺
が言った事また聴いてねえし！……ギユムッ！

「町行くポケモン達がラムパンの事を見るたびにポケモンの波がひ

いていき、ラムパンの周りには誰もいなかった。もちろんそんなラムパンには親も友達もひいていき、ラムパンは独りだった。そんなラムパンはある日一匹のアーマルドに救いの手を差し伸べられ、頑張って変態の雰囲気隠すことが出来るようになって、そしてある程度の強さを持った時、ラムパンは“俺、ジムを全て制覇する！”と言って旅に出た。ラムパンに救いの手を差し伸べたアーマルドはラムパンのジム制覇という建前の裏に潜んだ“世界中の物は俺の”という野望を阻止して、世界に平和を取り戻そうとラムパンの旅に付いて行き、事あるごとにラムパンの計画を阻止し続け、身も心も磨り減っていく旅を続けていくのだった。

「おえっ！ゲホッ！ゴホッ！ガホッ！ハーーー！ハーーー！自分の話を途中で区切られそうだからって首を絞めるな！」

「そこにいるかわいい子を嘗め回す様な目で見てたから、その子が穢される前にその子を護ってあげようとしただけだっ！それにラムパンは気付いてないようだけど変態オーラ出まくりだっ！」

「そんな目で見るわけねえ！というかマグマラシの方に眼を向けてすらいなかっただろうが！俺はそんな野望なんて持ってねえし、お前が俺に救いの手を差し伸べたとか、自分を慈悲深い善良な感じに語るな！それに俺は変態じゃねえからそんなオーラなんてあるわけねえ！そもそもこんな話を捏造ねつぞうしたって誰も信じるわけねえ！」

「ごめん、間違いだっ！ラムパンはさっきこの子を見た時に子のこの姿を鮮明に記憶してそれでこの子があんな事やこんな事をしてるのを妄想してっ……！マグちゃん！安心して！マグちゃんの事はこの私が……何があってもラムパンの毒牙から護ってあげるから！」

「マグマラシ！！お前もこいつに言ってくれ！俺は変態じゃないって！」

「……………」

「何でそこで無言なんだよ！そこは俺の味方をするところだろ！」

「ラムパルド……………ごめん……………（楽しそうだから弄られ続けて！）」

「何で謝るの!?」

「俺は……(アーマルドの味方をする!)」

「何なんだ!そこで区切るなよ!」

「え……もしかして……」

「アルマ!今すぐその妄想をやめろ!そして記憶から消せ!」

「もうラムパンの毒牙に……?ごめんね、マグちゃん……ひぐつ!
えぐつ!私がラムパンを見失ったばかりに……!!」

「マグマラシ、ラムパルドなんかの毒牙になんてかかって無いだろ
!」

「え、俺、アリゲイツにも販された?」

「え?そうなの?何も言わないから……」

「あ、ああ。毒牙にかかってないから」

「良かった……。と、言うことは……これから毒牙にかけるつもり!?」

「そんなつもりなんかねえ!」

「……まさか……ね」

「だから妄想するなあ!先に言うておくが俺はマグマラシをどうとも思っただけ!」

「マグちゃんを奴隷のようにこき使うのが目的だったなんて!」

「俺の馬鹿!アルマに更なる妄想をさせる言葉を発するなんて!」

「やっぱりマグちゃんの事どうとも思っただけなのは自分の身の回りの世話をさせたり玩具として使ったりする為のただの道具だからマグちゃんの意思なんてどうでもいいってこと!」

「違う!そんなことほんの少したりとも考えてねえ!」

「な……まさかの観賞用?」

「どこをどうすればそんな考えに行き着くんだ!」

「否定しない所を見るとマグちゃんは観賞用!?あんな事やこんなことをさせたり、アレな事やソレな事を……!!」

「なわけねえ!!マグマラシには手をださねえし、だそうとも思わねえよ!」

「マグちゃん、変態のラムパンなんかマグちゃんの良さなんて分かる分けなないよねー！」

「分かるし！それくらい誰でもわかるし！」

「やっぱり手をだそうと思ってる！」

「ださねえって……！」

「……ラムパンにマグちゃんの魅力が否定されたよう……マグちゃん！あなたの代わりに私がラムパンにマグちゃんの魅力がどれだけあるか教え込むから！」

「否定なんかしてねえ！だから言ってるんだろ！マグマラシに魅力を感じるけど手を出さないって……！」

「そう……っ！ラムパンが変態からまともになろうと階段を一步上がった……！」

「俺がお前の中でまともになるのは後何段だよ……！」

「えーと……あと二千三百六十四段？」

「何故に疑問系！？しかも長い！」

「あれ？さっきのラムパンの言葉をよく考えると“マグマラシに手を出さない”って……！」

「思い出すな！そしてそれ以上妄想を「アリちゃんやマグちゃんの仲間が獲物だったなんて！」遅かった……！」

「ラムパン、ホの字のモの字！？同性愛者！？BL！？まさか“世界中の は俺の物”ですら裏の建前で本当は“世界中の は俺の物”だったなんて……！」

「違う！俺は同性愛者じゃねえ……！」

「顔が青くなってる……！凶星だったからそれが回りにばれるのを恐れて青くなってるの……！」

「ちげーよ！お前が同性愛者とか言うからそんな俺を想像して気持ち悪くなっただけだ……！」

「そんな必死にばれた事を隠さなくてもいいのに……！」

「ちっ、違う……！俺は普通に女の子が好きだ……！」

「なっ！裏の建前と裏の本音が合わさった“世界中のポケモンは俺

の物”が真の本音！？……ラムパンが裏の建前を本音のように思わせておいてその実は裏の本音があつて、でも真の本音が裏の建前と裏の本音が合わさったものなんていう高等テクを使うなんて……”
「そんな技術俺にはねえよ！お前が勝手にそう思ってるだけだろうが！」

「はっ！まだ他にも私の知らない本音が！？」

「ねえよ！！俺が　どっちでもイケルとか勝手に性癖を付け加えるな！！」

「ラムパンは　どっちでもいける両刀使いだから……」

「両刀とか言うな！俺はが好きなんだ！　は好きじゃねえ！」

「……ということは私もラムパンの攻略対象！？」

「絶対に無い！！」

「絶対にする？嫌ー！穢される！陵辱される！甚振られる！犯されるー！！」

「今の俺の言葉絶対に聞いてたよな！！“無い”の部分だけ他の言葉で聴こえるとか無いだろ！！特に“無い”が“する”に聞こえるわけが無い！！」

「こつちこないで！！こつち見ないで！視線だけで孕まされる！！」

「ありえねえ！！俺は普通だ！！視線だけで孕むとがありえねえ！！」

「ごめんマグちゃん……ひっぐ！…私はもうとくにラムパンの毒牙に気付かない間にかかっていたみたい。ごめん。マグちゃんたちを護るとかいつてたけど……えぐっ！……自分すら護れないんじゃないマジちゃんたちを護れるわけ無いよね……あつたばかりだけど……来世があつたらまた会えるといいね。さよなら……」ガシッ！

「待てよ！俺がいつお前を毒牙にかけた！！そもそも俺は毒牙なんて持ってねえ！！」

「触られたー！！因子が！ラムパンの因子が！植えつけられたー！！」
「何だよ因子って！！」

「通称、ラムパン菌。ラムパン目ラムパン科。学名は“なにこの菌、死なないんですけど”。感染経路はラムパンと接触することで関係なく感染する。この菌の幸運な所はラムパン本体に触られなければラムパン菌感染者が他のポケモンに触れても感染することが無い事。この菌の最悪な所はこの菌に感染すると知らず知らずのうちにラムパンにいいように扱われるようになり、感染者の自覚が無いまま、ラムパンのいいようにされている事」

「俺そんな菌持ってねえ！ありもしないこと言うな！」

「今から三千年前にも一度流行したが、そのときはホウオウの聖なる炎のおかげで菌は絶滅。以後ずっと絶滅したと考えられていた」

「もう否定することにも疲れた……」

うつ伏せに倒れるラムパルド。

「……………」

「アルマ、そろそろやめてあげてください。ラムパルドが可哀相です」

「……………わかった。ウォーガトリデフスがそういうなら……………」

「ありがとうウォーガトリデフス……………ガクッ」

ラムパルドの口から白い半透明のものが出てきているのは気のせいでは無かったりする。

第五十五話：花火大会？バトル？（後書き）

久々登場、ラムパルド。

他にもアーマルドのアルマ、トリデプスのウォーガ、アバゴラのロクト、そしてボスゴドラが出ました！チーム名は次の話で……ではでは！

- 基本ルール -

- ・ 殺傷、致命傷を与えてはならない。
- ・ 道具は大会の定めた物のみの使用となる。
- ・ 気絶又は戦闘の意志が無い場合、戦闘できる者、戦闘意欲のあるものの勝利とする。

- ・ 審判の勝利決定には戦闘者以外の口出し、手出しを禁ずる。

- ・ 審判を盾にした場合、その時点で負けとなる。

……かな？

第五十六話：祭り〜バトル？〜（前書き）

バトル大会で起こりうるであろう事を書いてみました。

地震地震地震地震！地震の連発には気をつける！

それと、投稿遅れてごめんなさい。

マグマラシ「作者ほっというて始めよ」

アリゲイツ「そーだなー」

『どっぞー！』

第五十六話：祭り〜バトル？

（前回の粗筋）

マグマラシ達はアクアタウンの花火大会の日に開催されるバトルに参加して一回目の攻撃を息残った。

煙が晴れるとそこに居たのはナイトタウンのそばの鍾乳洞で四日間も埋まっていたラムパルドだった。

ラムパルドはそばに居たアルマアルマ、トリデプストリデプス、ボスゴドラ、アバアバゴラゴラと親しげに話し、アルマアルマによってとことん弄られていたのであった。

（本編・前回からの続き）

「アルマ、そろそろやめてあげてください。ラムパルドが可哀相です」

「……わかった。ウォーガトリデプスがそういうなら……」

「ありがとうウォーガトリデプス……ガクッ」

ラムパルドの口から白い半透明のものが出てきているのは気のせいでは無かったりする。実際は泡を吹いているだけだ。

「撮れたか！？おう！よっしゃ！今の画像、俺にも焼き増ししてくれ！」

「は……………はあ！？」

「え？二百匹以上先約が居るって？一週間待ち？待ってられるか！」

「おいおいどういう事だよ！！」

「あー、うるさい！黙ってる！」

「その扱いどうなんだよ！」

「今俺はさっきの撮らせてもらった画像を交渉するのに忙しいんだ。黙れ」

「お、おお…何か恐えー…」

「だから……一回……御願いだ！……なんて……凄い……だから……
……そう……もっと……そう、そこ！……そうそう！……その間が……
……よっしゃ……ハフ…」

「ハフ…ってなんだよ！それよりもさっきの断片的に聞こえた会話、
エロいぞ！」

「ただ、ちよつともめただけだから安心して？エロく聞こえた点に
ついては……アーマルド選手、後よろしく」

「まさかのバトンパス！」

「しっかたないな」

「受けるのかよ！」

「ラムパンがエロい嗜好を持っているからそう聞こえたということ
で！」

「え！？エロい思考じゃなくてエロい嗜好って聞こえた気がするん
だけど！」

「気のせいじゃないよ？それと……ラムパン、自分がエロい事否定
しなかったね！」

「ああ！？しまった！！俺はエロくない！！！」

「むふふ～そんなこと言って～ラムパンは」

「アルマ、また弄ってますよ。止めてからほんの数秒しか経ってい
ませんよ」

「あり？そうだったね」

『……………』 (主にラムパルドとレントラーとロクト)

「説明してくれたらつばいな。俺としても誤解されたままじゃあかな
わないから俺からも説明するぜ」

「アルマにパスした意味無いし！」

「さっき放送されていた？言葉をちゃんと聞こえるように言うと、
“だからさっき撮った映像を一回だけ見せてくれ！御願いだ！おお
う、なんてもの凄い面白さ。これくれ！いや、だからくれって！そ
うその映像！金？もっと出すから編集もよろしく！そう、そこ！そ

の言葉から、そうそう！そこからそこまでのその間が一番のお気に入りに入るんだよ！よっしゃ！サンキュー！……ハフ」が放送されていた声の全容だ！」

「売買の内容！？……何を……売買してたんだ？」

「ん、ラムパンの弄られている映像」

「んな！？その映像消せ！すぐ消せ！今消せ！」

「無理」

「誰？っていうかお前も持ってたら消せ！」

「誰であろうと何であろうと言わなければ知る由も無く……ってか？削除完了！」

「いや、確かに言わなければ分からないが……消したのか？」

「俺が今持つてる映像は消したぜ？」

「よかつ……良くねえ！お前が今、持つて無い映像も消せ！司会の持つてる映像も！」

「それだけでいいのか？」

「え、他にもあるのか？」

「どうだろうな。そんなことよりも、セカンドアタック第二攻撃そろそろするぞ。

ちなみに、映像はインターネット上で有料で乗せていくつもりだから、って司会の仕事盗るな！盗ってないぜ？執っただけだからくっ……」

「おい！全ての映像とかを消せ！」

「こんな面白いもの手放さないって」それでは！バトルを再開するぜ！セカンドアタックスタート第二攻撃開始！！」

「うわひでえ！ストーンエッジ！」

「ラムパンどんまい！元始の力！」

「いつにも増して弄られているな。ラスターカノン」

「ラムパルドだからだろう？岩雪崩れなだ！」

「ラムパルド、いつもこんな感じなの？葉っぱカッター！」

「面白かったぜ！アイスクロー！」

「ラムパルド、ファイト！ニトロチャージ！」

「ドラゴンダイブ」

「ラムパ……スパーク！」

ラムパルドに何か言おうとして途中でやめたレントラー。

「……………メタルバースト！」

再びの爆発。だが、第一攻撃よりも小規模だった。

「今回も賭けがあるぞ！」

「賭けの参加を締め切りました。それぞれの倍率は一匹3.79倍、二匹2.00倍、三匹93.16倍、四匹4.15倍、五匹0.489倍、六匹4.96倍、七匹2.03倍、八匹3.15倍、九匹5.60倍、十匹0.19倍、十一匹1.11倍、十二匹2.03倍、十三匹8.06倍、十四匹0.07倍、十五匹99.8倍です」

「！？何故か知らないが、三匹息残る事が物凄く高倍率だー！つと、煙がいつの間にか消えていたあ！息残ったのは……八匹、八匹だ！倍率は4.96倍！」

「何で俺、息残ってたんだ？あの時はアルマとボスゴドラとウォーガとロクトに集中攻撃されたはずなのに……？というか、向かってくるのは見えただけで当たらなかったよな？」

「くっ！まさかラムパンがそんな回避テクを持っていたなんて！」

「アル魔が息残ってたし！うわ……」

「アル魔っていった？ねえ、アル魔って！」

「い、いいや？言ってるだけ？」

「ちえ……。魔法使いみたいに言われるの面白そうだったのに……」

「な……まさかの御所望だった！？」

「ラムパルド、また弄られ続けるつもり？」

「おお！ハヤシガメも息残ってたか！」

「俺もだ」

「ロクト！」

「俺は俺は？あと、ガバイトも！」

アリゲイツはマグマラシに向けていた眼をラムパルドに向けてアピ

ールする。

「アリゲイツもか！」

「私もですよ」

「ウォーガ！」

「あと、ボスゴドラも息残っています」

『……………』

ちなみに、マグマラシとレントラーは気絶している。

「で、何でボスゴドラは無言？」

『……………』

「すみませんボスゴドラ、私が言ってしまったって」

「どういうこと？」

「自分で言えなかつたので拗ねているだけですよ」

「ボスゴドラが！？拗ねてる！？子供みたいに拗ねてる！？」

「……………黙れ」ドゴオ！

「ぐはっ！……………ボスゴドラ、今のパンチは痛かった……………」

ラムパルドはただのパンチで地面に沈んだ。

「ガバイトも言えなかつたから拗ねてるのか？」

『……………』

ガバイトはアリゲイツを見た後、眼を瞑った。

「今、絶対ガバイトが笑った！俺の事馬鹿にして笑いやがった！」

『わかる（の）（んてすかのか）—！？』

『……………』

ガバイトはいつもより少しだけ大きく目を開けてアリゲイツを見ている。

「わかるだろ」

『わか（らない）（りません）』

「そうか？結構、表情変えただろ？」

『何処が？』

「頬の部分と息遣い」

「はあ！？変わってないだろ！？」

「なんと……」

「ほんとに変わったのか!？」

「俺たちも無表情……ボスゴドラクラスだったら表情がわかるんだけど……笑った時に口角がややつり上がってるとか怒ると眼を少し細めるとか!」

「ラムパン、ボスゴドラの事そんなに観察しつ……!?……ムグー!」

「変な妄想するな……よ?」

「ム、ムググー……」

「アリゲイツ、何気に凄いね」

「ハヤシガメに馬鹿に思われてた!？」

「ううん。アリゲイツは細かい所なんて見ていないのかとずっと思ってたから」

「俺がそんなに細かい所見てたら可笑しいのか!？」

『ああ(うん)——!』

「さっきまで弄られてたラムパルドにまで……」

「賭けは次で最後だ! サイドアタック 第三攻撃の準備はいいな? 返事は聞かない! サイドアタック 第三攻撃開始!」

「いきなりの第三攻撃だな! 先手必勝……だよな? 地震!」 (ラムパルド)

「ラムパルドは地震か……。真似するか。俺も地震!」 (ロクト)

「ロクトが真似するなら私もしますね。…地震!」 (ウオーガ)

「私もラムパンの真似してあげるね! 地震!」 (アルマ)

「皆ラムパルドの真似したし…地震!」 (ボスゴドラ)

「……………ふ……………地震」 (ガバイト)

「ガバイトが笑った!? 吹雪!」

「ええ!? 皆全体攻撃!? ええと、えつと! はっばかったー!」

アリゲイツ、ガバイト、ラムパルド、アルマ、ウオーガ、ロクト、ボスゴドラ、ハヤシガメ達は全員、全体攻撃を使った。

ラムパルドの地震がロクトの地震で強くなり、その地震がウオーガの地震でさらに強くなった。さらにアルマの地震で強くなって、そ

れにボスゴドラの地震が加わり、止めを刺すようにガバイトの地震で強くなり、会場だけでなく、町をも襲う。そしてアリゲイツの吹雪が葉っぱカッターを凍らせながらさまざまな方向へ飛んでいった。ドゴゴゴゴゴゴゴゴ……

そんな音がいたるところで聞こえたかと思うと、会場の観客席の一部が崩れ去った。そして凍りついた葉っぱカッターは会場を飾っていた装飾品や風船を留めていたロープを切り、大破壊になっていた。「…今の地震は想定外だったぞ！それよりも！誰か！津波が起きてないか確認してくれ！あと、今回のバトルは引き分け！勝者無しとする！」

そしてマイクからバタバタと走っていく足音が聞こえた。ガバイトを含むアリゲイツ達は自分達の起こした大規模地震の震源地にいたため、全員が気絶したり、呻いたりしている。

「ふう……まったく……アリゲイツ達は……」

「アリゲイツめ、タルミに何かあったらどうするつもりだったんだ」「まあまあ、私に当てようとしたんじゃないし、地震だってアリゲイツの起こしたものじゃないわ」

「でもタルミの横を凍りついた葉っぱカッターが……」

「今私が元気なんだからそれでいいじゃない」

「そうだね。タルミ……」

「フローゼル……」

二匹の顔が近づいていく。

「フローゼル、叩き起こされた直後にそういうの見せつけられてどう反応すりゃいいんだ？」

「あら」

「……アリゲイツ……」

「俺等を起こしたばかりなの忘れてキスしようとしたのお前達

「だろ！」

「アリゲイツ！」

「怒るなよ！見せさせようとしたのお前らじゃねえか！」

アリゲイツは起きたばかりなのにもう走り出してフローゼルから逃げ始めている。

「タルミのキスの顔を見ていいのは俺だけだ！アリゲイツ達に見せられるほど安くねえよ！俺らの幸せは見せ付けてやりたいがタルミがそういう顔を見せていいのは俺だけだ！」

そういいながらフローゼルはアリゲイツを追いかけていく。

タルミはアリゲイツ達とラムパルド達に向き直る。

ガバイトはタルミに回復される前に姿を晦ませていた。

「で、私がミルクのみで回復させて目覚ましビンタで叩き起こしたけど、その被害状況言いますしょうか？」

「被害状況ってどういうこと？」

「俺らが気絶してる間になんかあったのか！？」

「あなた達は関係ないわね。関係あるのはそこにいるハヤシガメ君とアリゲイツ君、それとその五匹」

「俺らはチーム“ビクトロク”だ。アーマルドとボスゴドラ、アバゴーラとトリデプスとリーダーの俺、ラムパルドで構成されるチームだ」

「紹介に預かったアバゴーラのロクトだ」

「ラムパルドに紹介されたボスゴドラだ」

「ラムパルドのことよろしくね？友達的な意味だけで。アーマルドのアルマでっす！」

「トリデプスのウォーガです。以後よろしく御願います」

「私はミルタンのタルミ。こっちが私の彼氏のフローゼル」

「で俺らがチーム“エレメント”のマグマラシとレントラーとハヤシガメと俺、アリゲイツだ」

「自己紹介は終わったからさっきの話の続きをいうわね？」

「ああ」

「簡潔に言つとあなた達が放つた地震と凍つた葉っぱカッターの被害総額が一億ということね」

第五十六話：祭り〜バトル？〜（後書き）

一億 W とだけ書かせていただきます。

第五十七話：一億ポケ（前書き）

何かもう……やる気が……

マグマラシ「作者！せめてきりのいいところまで！」

ふ……フフ……フフフフハハハハ！五十八話など消えてしまえ！

アリゲイツ「作者！！書いてる途中の五十八話消すな！」

なんかね、MHP3手に入れてからやる気が……少し増えてたり。

レントラー「普通は減るんじゃない？」

なんかMHP3するためにはこつちを先に仕上げておかないと！って思っ

て……

やる気出た分いいじゃん！

アリゲイツ「そんな事より！第五十七話を……」

『どっぞー！』

第五十七話：一億ポケ

『ええ！？い、一億！？』

「詳細は…会場の修理代二千六百五万ポケ。地震で発生した津波の町やポケモンへの被害三千五百八十七万ポケ。対岸にあつた花火の一部への被害二千三百九十一万ポケ。対策へ動員したポケモン達への給料千四百十四万ポケ…葉っぱカッターでの被害三万ポケ。これで丁度一億よ」

「は、はは…九千九百九十七万ポケの借金…」

「あ、あはは…地震なんてしなれば良かった…」

「…ほんのちよつとした気持ちで…してしまった事がここまで大きな事になるなんて思いませんでした」

「俺とハヤシガメの出した被害は三万ポケ？」

「そうだけど…ガバイトも一応僕等の仲間だからその分…え〜と…約千六百六十六万ポケは払わなくちゃいけないし…」

「俺ら一匹づつ千六百六十六万ポケか…チームを解散して働かなきゃいけないし、何年かかるだろうな…俺が最初に地震をしなればこんな事にはならなかっただろうし、俺がその借金を返す」

「ラムパルド！？正気か？一億だぞ？一億ポケ！」

「ラムパン！？頭大丈夫！？頭だけじゃなかったりするかも知れないけど大丈夫！？」

「俺がリーダーだ。反対は認めない」

「ラムパルド…」

「ラムパン…」

「ラムパルド、やっぱお前は凄いな。俺は臆病者だ。俺にはそんなこと出来ない」

「俺もだ。俺もロクトと同じ、臆病者だ。ラムパルドのような事は到底出来ない」

「…ラムパルド…私はあなたの事をアルマに弄られている馬鹿

だと思つてました。ですが、今はあなたの事が凄いとえます」

「……………僕が……………僕の父が払います。一時的な対策だけど、将来、僕が父の会社を継いだ時に父に少しづつでも返していくつもりです。なので全額僕が負担します」

「いやいやいやいや！そんな事させられないって！！」

「それは俺等が払わなければいけない分だから！」

「ふあゝあ……………」

「あら。フローゼル、ちょっと退屈だった？」

「いや、タルミとはしゃぎすぎて少し疲れてるだけだよ」

「ふふつ。私が枕代わりになる？」

「いや、いい。今晚しつかり眠れば明日に影響は無い程度だから」

「私の枕が欲しかったら言つてね」

「……………で、ソレはいつまで続けるんだ？」

「もうちよつとやりたかつたけど……………」

「やりたかつたけど？」

「やめるわね。……………ハヤシガメ君、それとビクトロクの皆、謝るわね。一億は嘘よ」

「……………」

「……………ええゝ！？」

「実際は会場の修理代が六百五万ポケ。地震で発生した津波の町やポケモンへの被害十七万ポケ。対策へ動員したポケモン達への給料十四万ポケ……………葉っぱカッターでの被害三万ポケ。合計六百三十九万ポケが本当の金額よ」

「……………！？」

「嘘！？」

「…嘘！？」

「何で嘘！？」

「何故に嘘！？」

「どうして嘘！？」

「え……………う、嘘！？」

「そう。一億は嘘よ」

「だからどうして嘘!？」

「同じ技を対消滅させたりするのはいいんだけど、皆が相互に強めあうようなタイミングで地震を出してたから、これからは注意してもらおう為についた嘘よ。それと、勘なんだけど……あなた達、学校では技の組み合わせでの強化は習ったけれど、その危険な組み合わせについては習ってないような気がするのよ」

「……あーそーいやそーうだな」

「俺の先公は大雑把だった」

「私の先生はうっかりや!」

「俺の師匠は……ボケてたな」

「私の先生はいつも寝惚けてました」

「……皆違う学校出身だったの?」

「いいや、俺とボスゴドラは一緒の学校だったし、アルマとウォーガとロクトは別の学校だった……よな?」

「違うよ!私とウォーガとロクトは同じ学校だよ!」

「何匹の戦闘指導の先生がいたのよ……」

「え〜と、俺等のところは一匹だよな」

「ああ」

「アルマたちのところは?」

「私達のところも一匹だよな?」

「ええ。一匹しかいませんでしたよ。昼は……」

「昼は?……じゃあ……それ以外……は?」

「私達の学校の七不思議のひとつに夜に戦闘指導員の幽霊が出るといわれています。たま〜に見る方がいるらしいです」

「ええ!?!いたの!?!幽霊!?!ゴースト!?!」

「アルマも視たことがあるかもしれませんよ。夜に学校に忍び込んだことがあるでしょう?」

「何でそのことを?!」

「それよりも、今回の事、わかってくれた?分からなかったらとこ

とん身体に叩き込むだけだけどね」

『分かった！—（分かりました！）』

「マグマラシ君たちもよ？」

「……！！」ブンブン！

マグマラシ達は何も言うことなく、かなりの速さで顔を縦に振っている。

「分かったようね。じゃ、陽ひもいいくらいに沈ひんできたし、お金も払い終えたことだし、花火見るわよ！」

「…え？」

「どうしたの？」

「お金を払い終えたって……タルミさんが払ったの!？」

「そうよ。ま、このくらいのお金なんて大した金額じゃないしね」

「へ？タルミ、そんなにお金持ってたっけ？」

「知らなかったの？卒業式が終わった後、暫くの間どこかへ行つてたでしょう？」

「うん。僕が告白した後に五日程どこか行ってたね」

「口調が元に戻ってるわよ？その五日間の間に稼いだのよ。マグマラシ君とアリゲイツ君とフローゼル君はどうやって手に入れたか分かるはずよ？ヒントはサンちゃん。」

「？サン？……サンの呪シユ!？」

「このことは秘密よ？分かった？」

『分かった』

「秘密？」

「教えてくれよ」

「だめよ。あなた達はそのままで首を突っ込むことは無いんだから。

……でも、レントラー君とハヤシガメ君は嫌でも首を突っ込むことになるわよ？あなた達がマグマラシ君達と出会ってしまったからにはね

「……何？」

「ま、それはそうと、花火の場所取りに行きましょ！」

「ねえ、どづいうこと!?!」

「行くわよ!?!」

タルミはハヤシガメとレントラーの声を聞きつつもそれを無視して花火の場所取りへ行く。フローゼルしか見えなかったその顔は唇を噛み締め、眉間にしわを寄せた沈痛な面持ちだった。

第五十七話：一億ポケ（後書き）

時間稼ぎのようにはしてみた。…が、アクアタウンで時間稼ぎしすぎて、アクアタウンだけで十三話……。ま、いつか。

第五十八話：闇夜の輝き（前書き）

今回は投稿間に合いました！！

そして会話が無い！！零とは言わないが無いに等しい！！

第五十八話：闇夜の輝き

「ピンポンパンポーン！これから花火を打ち上げます。周りの皆様
の迷惑になりますので緊急時以外での技の使用を禁止いたします。
もし、技をお使いになられた方が居られましたら、アクアウン警
察へご連絡ください。なお、打ち上げに伴い、アクアウンの海側
の照明の一部を消させていただきます。警察が巡回していますが、
怪我や犯罪には特にお気をつけください。 以上の事を

ご了承頂きますよう、御願いたします」

「お！そろそろ打ち上がるみたいだぞ！！」

「そうね。フローゼル、もう少し寄って」

「う、うん」

「…しっかし、ガバイトはどこ行ったんだろな」

「ここにいる」

「うおっ！？何時から後ろに！？」

「ついさっきだ」

「只今から三十秒を持ちまして照明を消させていただきますので、
技の使用、落し物、犯罪、事故、怪我、キスの現場を目撃する事な
どにご注意ください。なお、目撃された方の気まずい空気に関して
は一切の関わりを拒否させていただきます」

「今までにそういうことが何度もあったのか！？」

「そう…なんだろうね。こういう事が放送される理由がそれしか思
いつかないよ……」

「……只今を持ちまして一斉に照明を消させていただきます」

フツ…

あたりが一瞬にして真っ暗になる。

そして眼が暗闇に慣れてきた頃、それは闇を引き裂く光の線となっ
て宙へ上がっていく。

ヒューーーーーー

そしてそれが昇るところまで昇った瞬間

…ドーン

闇夜の中で閃光を放ち、轟音を響かせてここに居ると言わんばかりの存在感を見せて輝いた。

一番目の輝きが現れたとき、周りのポケモンが一斉に息を呑んだ。

そしてその存在も薄れていき消えかかった時、それを合図にしたかと思うタイミングで一斉に他の花火が己を主張するかのように打ち上がり、そして夜空にその身の内から大輪の花を想わせる輝きを爆音と共に解き放つ。

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

闇夜を鮮やかに光り輝く花火から現れるいろいろなポケモンの顔や、マーク。そして昔ながらの大輪の丸花火。

それを観るポケモン達の眼は花火の光を反射して色とりどりに輝く。

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ヒューーーーー…ドーン

ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン

打ちあがり続ける花火の中、寄り添う者、抱き合う者、息を呑んでいた者、音に驚いて転んでいた者など、さまざまなかげもん達が止めていた足を動かし始めた。

花火の良く見える位置に行く者、祭りの屋台へ突っ走る者、両手に荷物を持ちすぎて前の見えていない者もいろいろな道へ歩いていく。
ピューーーーー……ドーン

ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン

ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン

ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン

ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン

ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン

ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン

ピューーーーー……ドーン
ピューーーーー……ドーン

そしてたくさんの花火が撃ちあがった後……

「次が花火大会の見所、最後で最大の花火です。心して御覧下さい」
そんな放送があつてから数十秒後……特大花火は宙そらへ打ち上げられ
た。

大会最後の締めの特大花火は闇の中に光の軌跡を残しながら宙そらへ宙そら
へと昇つていく。

ポケモン達はその花火をよく見ようと、心する。

その花火を写真にしようとカメラを向ける。

花火の行く末を追い見つめる眼

特大花火は高く高く昇つた後、そこで大きく咲いた。特大輪の丸花
火は翠や青、黄や紅、紫に白、己が内からいくつもの色の輝きを放
つ。輝きはアクアタウンの全てのポケモンを照らさんとばかりに輝
いて、色はポケモン達を己が色に染め上げんと降り注ぐ。その後
に光に遅れて花火の産声が届く。水を揺らがす轟音は己が誕生を、己
の存在を周りに知らしめる。

そしてポケモン達はその花火に魅了される。その花火の生まれた輝
きをその身に浴びて、花火の生み出した色にその身を染められ、花
火の産声を耳にして身体を震わせて、呼吸するのを一瞬でも忘れて
しまうほど花火に魅せられる。

そして特大花火はその役目を終えたと言わんばかりに中心から輝き
が失せていき、外側へ広がっていく。輝きも色も轟音も小さく、薄
く、かすれていき、消え失せた。後に残るのは消えた花火を幻視し
ているポケモン達。少ししてポケモン達は終わったのだと知る。そ
してそこから散つて行く。そしてそこで名残惜しむ。そしてそこで
放心する。

アクアタウン最大イベント、花火大会は特大花火によって締め括ら
れた。

アクアタウンに住んでいてもまともに見たら毎年心奪われてしまう
花火大会。

アクアタウンのポケモン達や花火職ポケモンなどが毎年工夫を凝ら
し、心を込める大会は成功で終わった。

そしてこれを観たナイトタウンのポケモン達はこの大会に負けられないようにと工夫を凝らし、花火に心を込める。

そしてアクアタウンとナイトタウンは毎年、夏はアクアタウン、冬はナイトタウンで花火を打ち上げ、競い合う。アクアタウンでは水面に反射するW^{ダブル}花火、通称“対の違^い姿”が。ナイトタウンでは高い崖で切り取られた空にみえる一棒の花火、通称、“一棒の輝^き奥”がかなりの人気を集めている。

ただ、この大会が始まったきっかけが何なのかは長い年月の埋もれて分からないと言われている。このきっかけを知るポケモンがいるのかどうかさえも分からない。

唯一つ伝えられているのは大会の始案者が言ったとされる一言だけ。

“この感動を絶対に忘れるな。忘れしとき、我等は我等で無くなる”
何故この一言が残ったのか、その真意は定かではない

「皆の魂が平穏と安息の時、穏やかで安らかなる場所に在ります様に……」

第五十八話：闇夜の輝き（後書き）

最後の声は誰のものか分かってしまうよね？

まあ、最後の声が誰か当てたい人は当ててみて〜。

それと、始案者の言葉は予定している話まで進むと意味のある言葉になるんですけど、今はまだ意味のないただの言葉です。

……はたして僕はそこまで書き続けているのだろうか？

第五十九話：グラント幹部とミルタンク

「それじゃあ皆、また今度会いましょ？」

「じゃーなー！タルミ！フローゼル！」

「ん。……また今度」

「タルミさんとフローゼル！いろいろ教えてくれてありがとう！」

「サンキュー？フローゼルとタルミさん」

ハヤシガメとレントラーはタルミの事を呼び捨てにする事が出来ずにいる。

言わずもがなフローゼルが原因である。

マグマラシとアリゲイツは呼び捨てでもいいとタルミが言っていたのをフローゼルが聞いていた為、呼び捨てを許されている。レントラーとハヤシガメにも一応許されていたのだが、何故か、さん付けするようになった。

【グラント幹部二匹】

マグマラシ達とタルミ達が分かれた後

「で？アクアタウンでは日照り石の所持者……えーっと……緑亀だっけ？見つけることも出来なかつたし、ましてや何も土産無しで帰るのかよ」

「緑亀じゃなくてハヤシガメだ」

ブースターは組織の下へ帰った後、今度は手下を連れて行くつもりでいた。ボルトはそれを見て、手下よりも自分の方が強いと言って無理矢理ブースターに付いてきていた。そして今は二匹での探索行動中だ。

ちなみに、ブースターはボルトのことが嫌いである。なので言葉遣いも高圧的になっている。

ちなみに、今は町の中心へと進んでいる。

「いいや。ただの勘だが……そろそろ出てきたらどうだ？俺の後方百メートルくらいにいるんだろ？」

「は？何言ってるんだ？頭が変になったか？」

「……………出ないならこっちから攻撃するまでだ！電光石火！」

ブースターは自分の後ろだった方向へ跳び、自分の勘が告げたほうへ向く。

「……………」

「頭大丈夫か？」

「誰かがいた気がしたが…気のせいか？」

「おーい。馬鹿ー。頭の無いブースター。デユラハン。アホー……趣味悪変態しゅみわる」

ボルトのほうへギギギと擬音が付きそうなくらいカクカクした動きで振り向いたブースター。顔は笑みを浮かべているが、眼が笑っていない。

「悪趣味の変態だと？」

「ちよーつと違う！悪趣味の変態でもあるけど、俺が言ったのは趣味悪変態ゆみわるだぜ？」

「何処が違う！火炎放射！」

ブースターは火炎放射をボルトへ放ちながら町の外へと走っていく。「趣味が悪い変態と悪い趣味の変態という部分が違う！」

ボルトは火炎放射を跳んで避けながら答える。そしてブースターに並んで走っている。

「お前が言いたいのは自覚してるかしていないか。とイウ事力？」

ブースターは口に炎を溜めながら言う。

「ちよっ！火炎放射とかオーバーヒートとか溜めるな！威力が半端無くなる！」

「大丈夫だ。ニトロチャージ三連続からの噴煙だ」

「お前は噴煙で空気爆発を起こすんだからその組み合わせはやめろ……」

「大丈夫だ。ニトロチャージでスピードを上げているから逃げるこ

とは出来ない。俺はそのスピードで爆発範囲から逃れるがな」

「俺が大丈夫じゃねえって！俺が殺すのはいいけど殺されるのは御免だ！それに俺は戦闘狂やマゾヒストじゃねえからくらのも御免だ！」

ブースターは技を放ち、ボルトはそれを避けながら町の外側へと走っていたが、森に近く、少し開けた場所に来ると足を止めた。

「ブースター。何かを追ってきたような気がするんだけど」

「何者かは知らないが……気配を隠すのがとてもうまいみたいだな。それに……俺達の走りについてこれていたから大型や鈍間ではなさそうだな。……で、その木の上から聴いている奴、出てこないのか？」

ブースターが一本の木の方向を見ながら言う。

ブースターの呼びかけに答えたのか定かではないが、その木の上から一つの影が飛び降りてきた。

「勘が良いわね。まさか町の中で気付かれるとは思いませんでしたけど……私も腕が鈍ったのかしらね」

「……ミルタンクだと？」

「まじで！？あんた、体重が結構ありそうなのにあんな細い木の上に乗ってたのか！？」

そう言っただけでボルトは木の幹が直径三十センチほどの木を指差す。

「乗り方次第よ。それはそうと、あなた達が組織・グランドの幹部？」

「そうだけど、オバサンは？」

「……オバサンじゃなくてミルタンクと呼びなさい。いいわね？」

そう言うミルタンクからはボルトですら後退してしまうほどの気迫が放たれていた。

「お、おう」

「俺達をつけていた目的は？」

「組織・グランドの目的と藍色の珠とかの再封印のためよ。さあ、目的を喋ってもらいましょうか」

「藍色の珠の再封印だってよ。再封印って何なのか知らないけどそ

んな事される前に、こいつ殺しちゃおーぜ？」

「……お前は藍色の珠の在り処を知っているのか？」

「さあ？私が知っている時と場所が変わってなければ知っているかもしれないわね」

「なら決まりだな！半殺しだ！！」

「あら、物騒ね。目的を言ってくれば見逃したのに……」

「アイアンテール！十万ボルト！光の凝壁（ひょうへき）！」

「目覚ましビンタ！…シャドーボール！」

ボルトはミルタンクに走っていきながらアイアンテールを発動し、一撃をくらわせようとしたが、ミルタンクに目覚ましビンタで弾かれる。

そしてアイアンテールが弾かれた途端に十万ボルトを、特殊技を反射する位に凝縮した光の壁で反射させてミルタンクへ攻撃するもミルタンクはシャドーボールでそれを打ち消す。

「身代わり。……マグマラシの奴がやった方法をするか……」

「身代わり」身代わり「身代わり」身代わり「身代わり」身代わり

「身代わり」「……」

ブースターはミルタンクがボルトの相手をしている間にマグマラシがしたのと同じ様に自分の身代わりを百二十八匹作り出した。

「ボルト！離れろ！」

「オーバーヒート！」

ブースターはボルトがミルタンクから離れた途端に百二十八ものオーバーヒートを一斉に打ち出す。

「……！！」

ミルタンクはよく分からない言葉を素早く、小声で呟き、全てのオーバーヒートを防ぎきり、しかも、全ての炎をブースター達に跳ね返し、身代わりを全滅させた。

「ミルクのみ！」

肩で息をしているミルタンクは攻撃されないうちにすぐさまミルク

のみで体力の回復を行い、息を整える。

「やるな！高速移動！十万ボルト！電磁波！電磁波！電磁波！十万ボルト！
… ツ電磁波！エレキボール！」

「守る！転がる！思念の頭突き！電磁波！シャドーボール！ツ…癒しの鈴！」

ボルトは高速移動で自分を素早くした後、十万ボルトを放つが、守るで防がれる。すぐさま電磁波を使い、麻痺にしようしたが、転がるで避けられる。

そしてまた電磁波を使うが、それも転がるのまま避けられ、思念の頭突きで反撃されそうになる。

それを素早いフットワークで避けると反撃せんと十万ボルトを放つが、ミルタンクはそれを電磁波を放つことで電磁波の方向へ誘導し、自分はそこからボルトの方へ遠ざかることで自分への被害を避ける。そして即座にミルタンクの技の防ぎ方で驚いたボルトの懐ふところへ入り、ほぼ零距离から放ったシャドーボールを直撃させる。直撃をくらったボルトは自分でも驚くほどの大ダメージにもかかわらず、電磁波を撃つ。それは横に転がって避けられる。

続けて放たれたエレキボールは直撃しそうになるが、ミルタンクは守るでは間に合わない判断したのか当たる寸前で癒しの鈴を発動し、エレキボールのダメージを癒しの鈴で弱めつつ、身体の表面だけにしかダメージが届かなくするというかなり変則的な技の使い方をして体力の消耗を最小限にした。

「転がる！ジャイロボール！」

ミルタンクは転がるとジャイロボールを同時に使い、ボルトに急接近すると、ダメージで反応の鈍っているボルトに一撃を加え、気絶させる。

「…ハア…ハア…で、片方がやられたけれど、まだ続ける？それとも目的を話す？」

「ボルトがやられるほどか…お前は体力を回復できるようだし…
…分が悪いな」

「ミルクのみ。…ふう。あなた達グランドの目的を教えてくださいわね」

ミルトankは気絶しているボルトを抱えあげると、ボルトの額に手を当てて何かぼそぼそとかなり長く呟く。

するとミルトankの手が当たっている部分が鈍く、淡く、弱く光った。

「!? 火炎放射! 電光石火!」

ブースターはミルトankの手が当たっている部分から光が放たれたのを見ると、すぐさまミルトankに攻撃した。

「ッ!」

そしてボルトを助け出し、背負ったかと思うとすぐさまその場から逃げていった。

…… かに見えたが、ミルトankは少しも焦らず、ブースターに追いついた。

「たったあれだけの事で逃がすと思う?」

「!」

ミルトankがブースターの後を追いかけてながら何事か呟いた。

「ガアッ!?!」

その瞬間、駆けていたブースターは自分の体重の何倍もの重圧に襲われ、ボルトと共に地に落とされてしまった。

ブースターは何度も動こうとしてみるが、ボルトが上に乗っており、しかも自分の体重の何倍もの重圧がかかっていたので身動きが取れなかった。

「ハー…ハー…ハア…ハア…。ミルクのみ…!…さあ、グランドの目的と…あなた自身が何故グランドに所属しているのかの理由を聞かせてもらいましょうか」

ブースターは技ではない何かの力で自分を無力化させたこのミルトankの事が恐ろしいと感じながらも何故かそれが嬉しいとも感じていた。

第五十九話：グラント幹部とミルタンク（後書き）

彼の身への戒めとなりて地に縛れ！地縛の重伏！

μ

！

！

炎よ！我が意に従い弾き返れ！

！

！

それぞれこんな意味です！

もう一度書きますが、文字の並びとか記号に意味はありません。

第六十話：ミルタンクへのプースターの告白（前書き）

恋愛的な告白じゃありませんよ？

もちろん、秘密にしていたことを打ち明ける方の告白です。

フローゼル「そ、そそそんなこととと、わわ、わわかってててるるるー！」

アリゲイツ「顔を真っ赤にしながら言ってるし」

ハヤシガメ「しっぽがピンってなってるよ」

レントラー「思いつきり仰け反りながらな」

マグマラシ「動揺しすぎー！」

フローゼルのように誤解した人はどれくらいいるのか……少しばかり興味か。

それよりも、第六十話……

『どござー！』

第六十話：ミルタンクへのブースターの告白

ミルタンクはブースターの手足を拘束すると、かけていた魔法を解いた。

「……俺達、グランドの目的は……」

「……………」

「大地の化身、大地の造形者……グラードンの力を手に入れ、世界を変えることだ」

「世界を…変える？」

「そう。世界の改変。世界を望む形へ変えるための力」

「……望む世界……今の世界の何処が気に入らないの？」

「ボスは……世界を支配することで争いの無い世界を創ろうとしている。ただ、俺はそのために協力させられているだけだ」

「無理ね。皆の心を操り、統一しない限り争いは起こり続けるわ。

たとえどんなに強大な力で脅されようと……ね」

「グランドのしていることは無駄だと？」

「ええ。力による屈伏は戦争の火種になるだけよ」

「……まるで経験した事のあるような言い方だな」

「それよりも、何故あなたは協力させられているの？」

「……昂が…弟がボスに囚われているんだ」

「助け出せば？幹部なんだからそれくらいの実力があるんでしょ
う？」

「心が囚われているんだ」

「心が？それはまたどうして？」

「何故こうなったのか知らないが、弟はボスに心酔している」

「……面倒ね」

「ああ。弟にとってボスの命令は絶対らしい」

「それであなはボスが弟に死ぬと命令しないかわりに従っているわけ？」

「…………」コクッ

ブースターは声に出さずに頷いた。

「いつから心酔するようになったの？」

「大体……三年前からだ」

「三年前？」

「何か心当たりがあるのか？」

「オーシャンのボス、エンペルトも三年前より前の記憶が無いらしいのよ」

「！？……偶然にしては一致しすぎている……弟、^{コウ}オーシャンのボスの記憶、グランドの創立……」

「グランドは三年前に作られた組織なのね？」

「ああ。ボスが言った事だから間違いないと思う」

「……三年前……コウ、エンペルトの記憶、グランドの創立……全て三年前が共通しているし、オーシャンとグランド求める力が海と大地……」

「何かまだ知っているのか？」

「良く知らないけれど……私の予想が合っていれば、オーシャンも三年前に創立されているはず」

「！？」

「オーシャンとグランドの創立がほぼ同時だと仮定すると……オーシャンのボス、グランドのボスはお互いに知り合い、もしくは誰か一、二匹が間にいる関係……」

「……ボスは何が目的で反対の力を求めるオーシャンと同時期にグランドを作ったんだ？オーシャンのボスと……知り合いなのか？」

「ねえ、あなた」

「何？」

「私の^{スパイ}諜報員になつてみない？」

「^{スパイ}諜報員？」

「ええ。あなたがグランドの情報を流して、それを私が推理したり弟さん^{コウ}を助ける？ための手伝いをしたりするわ」

「……そういえばお前は何者なのか訊いてなかったな」

「私？私はミルタンク。日照り石の所持者でもあるハヤシガメ君達の知り合いよ。マグマラシ君とアリゲイツ君は……友達……かしらね？そして藍色の珠とかを封印出来る者。あなたにとって私の情報はこれくらいでいいんじゃない？」

「ああ。情報の受け渡しの方法は？」

「これよ」

ミルタンクは携帯電話ポケテレを取り出す。

「それは町の周辺じゃなきゃ電波が届きにくいんだろ？」

「大丈夫よ。はい、これ」

ミルタンクはブースターポケテレに携帯電話を手渡した。

「あなたに渡したのは私の番号しか入ってないわ。でも、私にだけ（・・）はどんなに電波が届きにくい場所でも伝わるようにしておいたから」

「どういう原理だよ。まるで魔法だよな」

「ふふふ。まあ、そこらへんの原理なんてどうでもいいのよ。とにかく、諜報活動スパイ頑張ってるね。弟さんの為コウなんでしょ？じゃーねー」

「じゃーねー！……って！最後とかシリアスな空気無くなったよね！？シリアス返せー！」

とりあえず無理矢理に気分を上げてミルタンクに別れを告げたブースター。

「ん？ここは……」

「ボルト、起きたか（あぶな！あと少しで話の内容を聞かれてたし！）」

「あのミルタンクは？」

「とりあえず撤退させた」

「あー……くそっ！あのミルタンク、次会ったら絶対殺す！」

ミルタンクにやられたことを思い出したのか、殺すと宣言したボルト。

「ボルト、次はあの技を使うつもりか？」

「当たり前だ！！あのミルタンクは殺しつくす！！」
ボルトは多少ふらふらとしながら、アジトへと歩いていく。
ブースターはボルトが馬鹿でよかったと内心安堵していた。
ボルトを無力化したミルタンクと争ったにしては怪我も何もしてないことと、ブースターが行きは持っていなかった携帯電話ポケテレを持っていることに気付かないことに。
そしてブースターもアジトへ……戻る為でなく、スパイ諜報員として歩いて行った。

第六十話：ミルトンクへのプースターの告白（後書き）

弟思いのプースター！だったり。

何々？シスコンザングースの時と同じ様にこいつもブラコンなのか
って？

そうかもしれない（笑

弟が心酔するようになった理由は今までの話で登場した、とあるポケモンのせい。

探す？探す気が出てきた？でも、探すな。探さずに思い出せ！そのポケモンの一タイプだけは分かるはずだから。

第六十一話：スカイタウンへの道での会話（前書き）

秘技！時間稼ぎ！

今回は物語は進みませんが、マグマラシ達の会話です。

それでは、第六十二話……

『どっぞー！』

第六十一話：スカイタウンへの道での会話

スカイタウンのポケモン達が帰ってきたことを知ったマグマラシ達は今、アクアタウンを出てスカイタウンへと向かっている。

「タルミとフローゼルと分かれた後に一時間も経たずにフローゼルが追って来るとは思わなかったな！」

「そうそう。タルミさんが突然目の前から消えたって物凄く不安げな顔で知らないかって訊いてきたしな」

「そう訊いてきた直後にタルミさんから電話があつたしね」

「タルミは探し物をしているブースターとピカチュウの二匹と出会って、そのブースターを手伝っているって話だしな！」

「でもさあ、それだけの事でタルミがフローゼルに何も言わずに目の前から急に消えるか？」

「確かにそうだよな。それだったらフローゼルと協力した方がいいのにな」

「フローゼルに何も言わなかったのは知られなくなかったか、手伝って欲しくなかった……どちらにしてもフローゼルを遠ざけたかったからか？」

「フローゼルに知られなくなかった？……ハッ！タルミの浮気相手！？」ゲシッ！

「アホか！いや、アホだよな。アホでしかないよな。アホで出来ているよな」

「俺はアホじゃねえ！天才だ！」

「馬鹿と天才は紙一重だけど、持ち前の馬鹿さでその紙一重を測り間違えてどうする！」

「たかが紙一重じゃねえか！そんな小さな事に拘るな！」

「紙一重自体は小さいけれど馬鹿と天才の間の紙一重は小さくない！」

「いや、小さいー！」

「小さくない！」

「小さい！」

「小さくない！」

「小さい！」

「つて！話が逸れてる！アリゲイツはほつといて……」

「マグマラシが相手してたのに？」

「うっ。それはそれ、これはこれ」

「フローゼルに知られたくなかったのは浮気相手以外にいったいどんな^{オス}が？」

「浮気から離れる！」

「フローゼルに知られたくない相手なら……フローゼルもしくはタルミさん自身が危険だから関わって欲しくない相手、フローゼルに秘密にしなければならぬ相手、フローゼルの情報を知られてはいけない相手、知られてはいけない情報を持った相手……今思いつくのはこの四つくらいかな？」

「まだあるぜ？……タルミの元彼氏！」ゲシッ！ゲシゲシゲシゲシ！
マグマラシの前足による四連続パンチ。アリゲイツはいつの間にか持ったのか、カメラを向けていたり。

「そこから離れる！アホゲイツ！」

「アホゲイツつて！失礼だろ！主に俺以外のアリゲイツに！」

「そうだな。馬鹿に言われるほど「話逸れてるよ」……」

「ハヤシガメの言ったように危険だから、情報を知られてはいけない、情報を知ってはいけないからの三つの理由があるけれど、タルミさんならどうするか、俺等よりも付き合いの長いマグマラシとアリゲイツなら多少は分かるよな？」

「タルミなら……怪我をする可能性があれば何も知らせないな」

「結局四つ全て当てはまるよな」

「タルミさん自身に訊いても答えてくれないよな？」

「答えないだろ」

「そういえばタルミは古代から生きてるって言ってたよな」

「ああ。確かに言ってた」

「なら、その古代から生きている友達とかを見つけたとか？」

「ありえそうだけどブースターとピカチュウの二匹の探し物を手伝ってたんだろ？」

「うーん。フローゼルを連れて行かなかったし、タルミさんの行動理由としては微妙かな」

「本当の事はタルミしか知らないか」
「だね」

このとき、タルミはフローゼルと合流した後、次の遺跡目指して出発していた。そして今度はオーシャンの手下と戦闘して、創立がグランドと同じということを聞き出していたり。

第六十一話：スカイタウンへの道での会話（後書き）

フローゼル「タルミィ〜！何で置いていったんだよ〜…心配で心配で…堪らなかつたんだよ？」

タルミィ「フローゼル…心配してくれてありがとう。嬉しいわ！」

そしてタルミィはフローゼルを抱きしめる。

フローゼル「タルミィ…」

タルミィ「フローゼル…」

二匹は…口付けを交わす。そして道行くポケモン達に見せ付けるように甘い雰囲気を撒き散らす。

二匹はそのまま道を進んでいく。たま〜にキスしながら。

第六十二話：スカイタウン到着（前書き）

いけっ！ろくじゅうにわめ！

アリゲイツ「ポケモンをボールから出すときの掛け声みたいにな！」

では…何かな？アリゲイツは我よりも良いやり方がある？

アリゲイツ「ああ！やってやる！」

ほほう。じっくり見させてもらうとしよう。

アリゲイツ「六十二話目！君に決めた！」

ぐはあっ！アリゲイツが主人公のサ○シの賭け声をつかうだと！ま、負けた。

マグマラシ「アホが二匹居るけど気にせずに…」

あ、ま、待て！

マグマラシ「どうぞ！」

言われた！抜け駆けで言われた！

第六十二話：スカイタウン到着

【町長を見る四匹】

「あわわわわわわわわわわっ！」

慌てたようすで高速で飛びながらキョロキョロと周りを見渡している一匹のポケモンがいる。スカイタウンの町長、トゲチックだ。

そんな町長を見ながら話をする飛行ポケモン達。そしてこの光景は一月に一回は見ているので慣れたらしい。

「ありゃ？また町長が探してるよ」

「今度は何処に行ったのかねえ？」

「この前なんかこの山の麓だろ？」

「前々回は崖から転落途中だし？」

「その前は雷が近くに落ちたよな？」

「更に前はカビゴンの口の中よ」

「もっと前は毒キノコを食べようとしてたしね」

「ほかにもバトルしてるところに歩いてったり」

「泉でぶかぶか浮いてたり」

「滝から落ちていってたり」

「どこかから撃たれた破壊光線の爆発で空を飛んでたり」

「風で転がされていったり」

「岩雪崩いわなだれに巻き込まれてたり」

「強盗の足元で寝ていたり」

「岩の隙間にはまっていたり」

「木の枝に引っかかっていたり」

「誰かが閉めたドアの間に挟まっていたり」

「短気で有名な寝ているオニドリルの上で遊んでたり」

「“指を振る”で滅びの歌を途中まで歌ってたし」

「“指を振る”でレポートして火にかけたフライパンの上に出たり」

「見ず知らずのブラッキーに“指を振る”で“どくどく”をかけてシンクロの特性で移されてたり」

「“指を振る”で大爆発を使おうとしたところをたまたま通りかかったデリバードが“猫騙し”で防いでくれたり」

「この前のポケリンガーの大会ではなぜか聖火台の中にいたし」

「そういえばポケリンガー出場者の背中に気付かないうちに乗ってたらしいぞ？しかも飛行中に」

「どうやったんだろねえ。今並べただけでも多すぎるほどの厄介事になってるよねえ」

「今言っただけでもう十四回も命の危機に瀕してるぞ？多すぎだろ」

「ま、それが名物になってきてるんだけどねえ」

「そりゃそうだ！というか町長、そのうち心労で倒れたりしないよな？」

「あーあのトゲチックの事だから倒れちまうだろ」

「あわわわわわわわわわわわっ！」「ヒュン！

再び町長のトゲチックが話している四匹の近くを凄いスピードで通りすぎていった。

「……探すか？」

「……あ、ああ」

「……トゲチックってあんなに早く飛べたか？俺より速いんだけど」
「落下してからの水平飛行だからだろうねえ。毎回探している時に早く見つけようとしてたから練習になってたんじゃないのかねえ」

「ほー。ポケリンガーに町長が出てたらかなり上位になってたかもしれないな」

「そうだねえ。三位くらいだろうねえ」

「おーい、探すぞー」

「分かった」

「さて、探しますか」

そういって四匹は別々の方向へ飛び、探し始めた。

【マグマラシ達】

「あわわわわわわわわわわわわっ！」「ヒュン！

スカイタウンに到着したマグマラシ達の横を物凄いスピードの白い何かが通り過ぎて行った。

「……何、今の」

「見たことあるような無いような」

「えーと……名前は知らないけどノーマルタウンに居たような居なかつたような」

「町士の友好を深めるといふ名目の町長御食事会？」

「居たな」

「うん、居たね」

「あの時もあわわわとか言ってたよな」

「酔ったカビゴンノーマル町長の口にケーキと間違えて入ってた時にな」

「ああ、トゲチック町長か！」

「トゲチック町長は何故、空をあっちに行ったりこっちに行ったりしてるのかなあ？」

「さあ。結構慌ててるみたいだが……」

その声に答えるかのように空から大声が聞こえる。

「トゲピーー！！何処おー！！」

「あっさりとチゲチックの口から答えが出たな」

「トゲピーーを探してるのか」

「俺達も探そうぜ！」

「ちょっと待って！」

そう言つてハヤシガメがアリゲイツの尻尾を踏んで動きを止める。

「ぎゃっ！」

「トゲピーーを知らないのにどうやって探すの？」

「勘で」

「ハアー……」

「さすがアリゲイツ。探すのはトゲピーの特徴とかを訊いてからだな」

「誰に？」

「そりゃあ、町長に訊くかそこら辺の誰かに訊き込みをするかだろ」「おっしや！行くぞ！」

アリゲイツはマグマラシ達を引き連れて近くのポケモン目指して行った。

足の裏にやや尖った部分を向けてくる小石を越え、さらさらとして滑ってしまいそうな砂利を越え、身体を擦くすくるような微風そよかぜのなかを突き抜けて、無事にポケモンに話しかけることに成功したのだった。

第六十二話・スカイタウン到着（後書き）

最後の部分で、ちょっとしたアリゲイツハイパーイジーモード冒険物語を書いてみました。
…というより、これを書きたかっただけの六十二話だったり。

第六十三話・探し者・秘めた過去（前書き）

花火大会の最後の声が誰のものなのか、書いていないようなのでここに書きます。

あの声の主はタルミです！

それじゃあ、マグマラシ！アリゲイツ！ついでにレントラー！ハヤシガメ！！

せーの！

『どろぞー！』

第六十三話：探し者・秘めた過去

「町長が探してるのは自分の子供だよ。トゲピーって言う種族で見た目は卵の殻を身に纏っていて、殻には町長の身体にある模様と同じ模様がある。これくらい知ってれば見つけられるよ。……と言
うか、またトゲピーは何処が行ったのかい。私も探すとしますかね
それじゃ、サイナラ！」

「ありがとうございます！」

ハヤシガメが礼を言うのとどちらが早いか、そのピジヨットは飛び去って行った。

「早速探すぞ！」

「見つけた時は？」

「大声で叫べばいいんじゃない？じゃっ！」

アリゲイツはそう言うのとトゲピーを探しに走って行った。

「えーと…今から四時間経っても見つからない場合は此処に集合してね。それじゃあ、僕等も探そう！」

『了解！』

ハヤシガメ達もトゲピーを探しにばらばらに歩いて行った。

【アリゲイツ】

「トゲピー！何処おー！！」

トゲチックの声は何処からか聞こえて来る。

「トゲピーは何処にいるんだよ」

俺が探し始めてからもう一時間五十分位は経ってるだろ。

…ん？あれは？

トゲチックの柄に似た柄がある！もしかしてトゲピーか！？

「って！あれは沈んでる！湖の底に沈んでる！」

死んでないよな！？

死んでないよな!?

……あれ?これ、トゲピーじゃねえ。

生きてもない石だし。

こんな模様の石とかなんであるんだよ。

しかもよく見てみたらそこら辺にごろごろゴロゴロと!

どう見たって自然現象とは思えねえー!!

誰がこんなことしたんだ!まったく……。

ま、いつか。そんなことよりもトゲピーを見つけなきゃな。

【ハヤシガメ】

えーっと、あつちは探したから、今度はこっちを探してみよ。

でも……何で木や石にトゲチックの模様が書かれてるのかな?

誰かの悪戯?アート?……とりあえず、これをやったのは飛行ポケモンじゃないね。

毛のようなものを使って描いてあるし、羽は一切落ちてないしね。

それと、一定以上の高さより上には描かれてないし。

それはそうと、トゲピーは何処にいるんだろ?そこらじゅう似たような模様があるから捜しづらいよ。

「トゲピー!居るー?」

……返事はなしと。トゲピーと町長ってどういう関係なんだろ?あとで町長に聞いてみようかな?

それと、植物の成長を妨げるから消すように言わないとね。

【レントラー】

おかしいだろ!

木々が模様だらけって!

何かしていた奴に声をかけようと近づいた瞬間、白色のペンキっぽい液体を浴びせてきたからあいつの仕業だろ!

……声をかけた瞬間、目の前が真っ白になったから咄嗟に右に避けたんだよ。
それを避けた時には白いペンキの二撃目が迫ってきていて体勢も整えられていなかったから直撃して体中が真っ白にされて、逃げられた。

仕方無しに近くにあった水場で身体を洗った……んだが、どうにも黒毛の部分だけが白く染まってしまってた。落ちない。
絶対にあいつを許さねえ！

【マグマラシ】

とりあえず川沿いを探しているんだけど……何か上流から白い液体インク？が流れてきた。

なんで？レントラーの行った方向だとは思っけど……関係無いか？それよりもトゲピーを探さなきゃな。

でも、二時間さがして見つからないって……トゲピーどれだけ見つかりにくい所へ行ったんだ？

……え？なんで俺の方向に川を流れてたのと同じ白い液体が飛んで来てるんだ？

そ、それよりも！

「フレアドライブ（もどき）！」

七連続とか……防ぎきれないって！うわっ！川に落ちる！落ちたー！流れが速いから泳げない！わぷっ！流され……

【通常】

レントラー、アリゲイツ、ハヤシガメは

「皆！トゲピーは見つかった？」

「いいや。アリゲイツは？」

「全然。……誰！？」

「レントラーだ！」

「ええ！？」

「レントラーは黒毛だ！」

「ハヤシガメは分かるよな？」

「毛が濡れてるけど乾ききつてはいないから水を浴びてからそんなに経ってないって事と、滴り落ちる水が白く濁ったりしてないから白く塗ったわけでもないことくらいかな？」

「やっぱりレントラーとは別ポケじゃね？」

「トゲピーを探している途中、森に居た奴に声をかけた瞬間、白いペンキのようなものを浴びせられたんだ！近くにあった川で身体を洗ったけれど黒毛の部分だけは何故か白色が落ちなかつたんだよ！」

「じゃあ、レントラーならこの質問に答えられるはず。……俺が今までに売ったマグマラシの写真の枚数は！」

「知るか！分かるわけねえだろ！」

「正解！次の質問！レントラーの恋人だったスイの毛の本数は何本！」

「それを知ってたら、もう変態だろ！」

「正解！ちなみに、マグマラシの毛の本数は8兆5492億1778万5039本±二十万本！「変態がここに居た！」……だと思っちなみに勘だ！」

「ややこしいわ！」

「レントラーだな」

「どこで判断してるの！？」

「分かってくれたならいいが、アリゲイツにとって俺は何なんだ？」

「白いけどレントラーだな。白いレントラーだな。白虎しろとらだな」

「省略するな！」

「……………あれ？」

「省略が駄目なら……………白毛うしろけのレントラーは？」

「レントラーだけにしろ。それより、ハヤシガメどうした？」

「ねえ。マグマラシは？」

「……居ないな」
「町長もまだ飛び回ってるし、見つけたわけでもなさそうだな」
「……はっ！迷子!？」
「いや、それはないだろ」
「迷子だったとしても、トゲピーと一緒にマグマラシも探そうよ」
「そうだな」
「マグマラシの探してたのって向こうか？」
「あっちだ」
「どっち？」
「アリゲイツ、置いて行くぞ？」
「置いて行くの？」
「置いて行ったとしても追いかけるけどな」
「お前は装備したら外せないのろいの道具か！」
「仲間になったら逃げられないのろいのアリゲイツとでも言いたいのか！」
「違うのか!？」
「違う！俺は寝てる間に傍に近づいていくようなろいのアイテムじゃねえ！」
「逃げたとしても寝て、起きたら傍に居るの!？怖いよ!」
「……確かに」
「ふざけてないで探るか。マグマラシ！何処だ！トゲピー！何処だ！」
「マグマラシ！トゲピー！」
アリゲイツはレントラーの示した方向に竜の舞を使って走って行った。
「……？アリゲイツが…焦ってる？」
「焦ってる？ふざけてたのに？」
「ふざけてたけど、そのときのアリゲイツは眼だけはマグマラシの行った森の方向を見てたから。それと、普通に走って行けばいいのに竜の舞を使って素早さを上げてまで走ってるから、焦ってるのか

なつて思った」

「そう言われれば焦っているようにも見えるが……どうして焦っているんだ？」

「最初から焦つてたわけじゃないからトゲピーは関係ない。だから、マグマラシが関係してるからじゃない？」

「マグマラシか。アリゲイツが焦るつてマグマラシとアリゲイツになにかあつたのか？」

「アリゲイツは自分だけの過去は話すけどマグマラシとの過去は殆ど話さないよね。それに、マグマラシもアリゲイツの過去は三年前からの事しか話さないし、マグマラシ自身の過去は三年より前は聞いたことないよね」

「そういえばそうだな。そういうことを訊いた時、いつもアリゲイツがふざけていつの間にか話が變わつてているから聞けてないよな」

「……何かあつたのかな？」

「さあな。だが、話したくない過去があるつてだけだろ」

「レントラーはスイの事は話したくなかつたんじゃないの？」

「いいや。スイの事は話したくないなんて事はない。スイが居たということを知つて欲しいからな。でも、訊かれなかつたら話さないな。ハヤシガメは話したくない過去はあるか？」

レントラーがそう訊くと、ハヤシガメは俯いて暗い雰囲気を纏いながら話す。

「……あるよ……正確には、知られたくない過去……かな」

ハヤシガメの暗い雰囲気レントラーもばつの悪そうに言う。

「そう……か。なら、話そうと思つたときに話してくれればいい。秘密や隠し事なんて誰にでもあるからな。たとえ、それがどんなに大きいとしてもな」

「……うん」

「まあ、今の時点で分かるのはハヤシガメが“ウッド”の御曹司だという事よりも重大であるか、それよりも話したくない事だという事だけだからな。話す気が起きるまで、気長に待てばいいだろ」

「……いつか、話すよ」

ハヤシガメはそう言っておリゲイツの居る方向へ走って行った。

「……俺だって……スイにしか言わなかった過去だってあるからな

……」

レントラーはそう呟きながらハヤシガメ達の後を歩いていった。

第六十三話：探し者・秘めた過去（後書き）

過去です。隠してます。秘密です。いつか出そうですが、まだ秘密です。

マグマラシもハヤシガメもレントラーも暗い過去があります。アリゲイツは別だけれど。

第六十四話：流れ流され、とある町（前書き）

川に落ちて流れてしまったマグマラシ。さてさて、どこへいくのでしょうか。

アリゲイツ「何なんだ！？気色悪い？」

気色悪いって言うな！というか、何で疑問系？

マグマラシ「適当に言ったんだろ？」

アリゲイツ「そうだ！」

…ハア…。…気を取り直して、第六十四話、

『どうぞぞー！』

第六十四話：流れ流され、とある町

トゲピーとマグマラシを探していたアリゲイツ達はその後、マグマラシを一晩中探し続けたが見つからなかった。

そして、トゲチックと共に警察へ来ている所だ。ちなみに、ガバイトは警察署に行けないので別行動中だ。

「トゲピー……」

「マグマラシ……」

トゲチックとアリゲイツは何かに取り付かれたかのように身体をゆらゆらと揺らし、風に吹き飛ばされそうなほど軽いと思わせるほどのやつれ具合だが、纏っている空気はかなり重い。

「あ、アリゲイツ……だ、大丈夫？」

「トゲチック町長、大丈夫ですか？」

「大丈夫でも大丈夫でもないです」

「トゲピートゲピートゲピートゲチックゲピートゲチックトピト

ー……ふフふフ……」

「アリゲイツが敬語を使った!？」

「町長! しっかりっ! そんなんだとトゲピーも戻ってきませんよ!

!」

「はっ!……トゲピートゲピートゲピートゲピー!」町長!」はっ!」

「まあ、冗談は置いて、マグマラシとトゲピーはどこに行ったんだ?」

アリゲイツは重い空気と軽いと思わせるやつれ具合を一瞬でどこかへやると、レントラーに訊く。

「だからそれを捜査してもらおう為に警察に来たんだろうが。それと、さっきまでのやつれ具合とか演技かよ!」

「町長、警察署へ来ましたよ!」

「というか……誰ですか?」

「あ、申し遅れました。私はスカイタウン町長の護衛を務めます、

ウッドグループ防衛局の守護部、護衛一課のエアームドです。社長直々に仰せになられた任務はトゲチック様の護衛の他、警察に協力し、トゲピー様の捜索にも加わる事ですので、それを優先しますが、そのついででよろしければマグマラシ様の捜索に協力しますが、如何でしょうか」

「ぜひ！」

「では、町長も行きますよ」

「チョゲピー……テヨグウェピー」

「……町長、失礼します」

エアームドはトゲチックを引き摺るようにして警察署の中に入っていく。

「今の、いいのか？」

「はい。護衛対象が錯乱していたり恐慌していたりする場合、身の安全を図る為に多少の手荒なことをしても良いという規則がありますので」

「危険があつたのか？なければ規則違反だろ？」

「アリゲイツ様ですね。あの場での危険は錯乱した町長による想定外の事態が起こる危険が在りました」

「……規則ルルの抜け穴？」

「いいえ、規則ルルの活用です。さて、警察に事情を話しますよ」
『……………』

【普通視点・マグマラシ側】

マグマラシが何者かに襲われた後、意識を失って川を流れていたとき……。

「は！？誰かが流れてる！？」

マグマラシに気付いたのは貝の殻を纏った青い身体を持ち、白いひげを生やしているポケモンだ。

「俺は泳げないけど……あーもう！」

ザパーン！

「ウツプ！ぶはっ！うえっぷ！がぼっお！ガフツ！ゲヒツ、ごほっ
！げほっ！」バチャバチャ・ガボガボ、バチャバチャ・ガボガボ

「捕、まえゴフツ！」

「げほッ！グハッ！ウペツ！ぐへっ！ゴフツ！ゲフツ！ブヘッ！お
えっ！ごふえっ！」パチャパチャパチャパチャ……

……ザバ……ザブツ！

「もう駄目……バタツ………！」

【ダイケンキ】

それから半日後……つまり、トゲピー搜索開始の翌日の朝。

「う……腹減ったー」

「あー気が付いたー！」

「（可愛いッ！！）……名前は？（川で流れてたポケモンだよな！）

」

「俺はマグマラシ、あなたは？」

「俺はダイケンキ。で、ここはポケモンセンター？」

ダイケンキはポケモンセンターのベッドの上に居る。そして隣には
同じ様にベッドの上に居るマグマラシ。

「そ。川の傍で並んで気を失ってたらしいんだけど……何故か分か
る？」

「あー……それは俺が川を流れてたマグマラシを川から引き上げた
から……」

「助けてくれたんだ！ありがとう！でも、何でダイケンキも気絶し
てたの？」

「そ……それは……」

「……それは？」じー

「お、およ、い、い、よ」

「ごめん。聞こえなかった。何を言ったんだ？」

「俺は泳げないんだよ！」

「え？泳げない？」

「水タイプだからって皆が泳げるとか思うなよ！」

「そんな事思つてないって。泳げないのに俺を助けてくれた事に驚いてただけ。それと、泳げないのに助けてくれてありがとう！」

マグマラシは精一杯の感謝の気持ちを笑顔でダイケンキに伝える。

「ツー！（かわいいすぎっ！）」

ダイケンキはマグマラシの笑顔に悶える。

「どこか痛いのか!？」

他から見たら痛みで声を漏らしたように見えるダイケンキを心配するマグマラシ。

「いや、大丈夫。（それにしても可愛い!）…：そういうば…：今、何時？」

「ん」と…朝の八時頃だと思つ

「あゝ…：スカイタウンの友達の家へ行くつもりだったんだがな…

…

「え？此処、スカイタウンのポケモンセンターじゃないのか？」

「え？此処ってアクアタウンのポケモンセンターだろ？」

「……………」

「……………」

カラカラ…パタン

病室の戸を開けて入ってきたのはうさぎ耳に丸い尻尾、卵形の青い身体に白い模様を持ったポケモン。

…………マリルリだ。

「あ、ダイケンキさん起きました。この後の検査で異常が見当たらなければダイケンキさんもマグマラシさんも、退院しますです」

「分かった。それと、此処ってアクアタウンのポケモンセンターだよな」

「ええ。そうです」

「なっ！」

「ええ〜！アクアタウン！？スカイタウンで川に落ちたのに！？驚くマグマラシ。」

「まじで！？スカイタウンから！？」

「スカイタウンから流れて来ました！？それに、炎タイプがあんな長い距離を流されました！？殆ど健康って何をしますです！」

マグマラシの言葉に驚くダイケンキとマリルリ。

「え〜と？最後何が言いたいんだ？」

「殆ど健康って何をしますです！」

「だから何を言いたいんだ」

「川に流されたのに殆ど健康って何をするです！」

「……川に流されたのに殆ど健康って何をしたらそうなるのかって言いたいのか？」

「そうなのか！」

「そう言ってますです！」

「健康って……何したんだろ？特にこれといった事はしてない筈……」

「生まれつきの健康を手に入れてますですか……」

「…何かあったのか？」

「いえ、別に私が冬になると必ず風邪を引きます事とは、関係ないと思っただけじゃないんです。その原因も私が寒中水泳します事とは全く関係ないと思いますです」

「それって自業自得じゃねえか！ナスなのにそれはどうなんだよ！」

「どうもしないと思いますです、と言ってみますです。私はこれを止めるつもりは無いと断言しますです？と何故か確認してみますです。と無駄なことを言ってみますです。返答は期待していませんです」

『…………』

わけの分からない喋りを始めたマリルリ。マグマラシとダイケンキはマリルリの喋りにつき合わされ、検査の時間までずっと聞き続けていた。

第六十四話：流れ流され、とある町（後書き）

遅くなってすみません！

ほんのちよつとの文が思いつかなくてズルズルと此処まで伸びて投稿することになりました。

第六十五話：赤青模様の白球（前書き）

スランプと用事が続く中、やっと一話分かけました！

：結局、スランプは抜け出せないままですが。

感想の方で、

49話では、マグマラシは泳げたのになんで、64話では泳げないようになっているのでしょうか。

という指摘で変だと気付いたので、六十三話の一文を下記のように修正しました。

七連続とか：防ぎきれないって！うわっ！川に落ちる！落ちたー！
流れが速いから泳げない！わぶっ！流され……………

第六十五話：赤青模様の白球

マグマラシ達は検査が異常もなく終わったので、ポケモンセンターを出た。

「マグマラシはまたスカイタウンに行くのか？」

「ああ。仲間が待つてるからな」

「遅れてるけど俺も友達の所に行かなきゃならないし、一緒に行ってもいいか？（川で溺れるという事があったけれど可愛いマグマラシと一緒に行ける！！）」

「いいけど、ダイケンキの友達って？」

タタタタタ…ウイーン

「マグマラシさん、ダイケンキさん、あなた達が気絶していた所から二、三百メートル下流でトゲピーという種族が保護されましたが……知り合いですか？」

どのポケモンセンターにもいるポケモン、ハピナスがマグマラシ達を追ってきて言った。

「トゲピー！？」

「知り合いなのか？」

「知り合いなんですな」

「知り合いじゃないけどそのトゲピー、スカイタウン町長の探してたトゲピーだと思う」

「なら電話で確認を取ってスカイタウン町長の探しているトゲピーさんかどうか確認しますね。それと、もし探しているトゲピーさんだった場合、スカイタウン町長から手配される方が来るまでポケモンセンターの方で保護します。なのであなた方には確認が取れるまでの間だけ、トゲピーさんの相手をして頂きたいのですが、了承していただけますか？」

「俺はいいぜ、マグマラシは？」

「俺もいい。確認が取れるまでどれくらい？」

「大体……二、三時間ですね。トゲピーさんは眼を離すとすぐにどこかへ行こうとしますので絶対に眼を離さないでください。また、ドアに近くなっても一瞬でどこかへ行っていることもありしますのでそれも注意してください。それではトゲピーさんのところへ案内いたします」

「トゲピーの行動力半端ねえな」

「もしかしてこの頼み引き受けたのって無謀？」

「トゲピーさんのいるお部屋は此処ですのでくれぐれも眼を離さないでください」

カラツタツポスツ

ハピナスがドアを開けた瞬間、中からトゲピーらしき白い球が飛んできてそれはハピナスによってしっかりと捕まえられていた。

「全く…なんでも行動力があるのでしょうか…」

トゲピーはハピナスの言った事を気にせずにかつきゃと笑っている。

「すみません。眼は離さないで見ましたが、こうも一瞬で移動されると私には対処できませんです」

中にいたマリルリがそう言って出てくる。

「トゲピーさん、今度こそおとなしくしてくださいね」

ハピナスはそう言うとトゲピーをマリルリに渡してどこかへ行った。

「ああ、マグマラシさん達がトゲピーさんの相手をしてくれますですね。私だけだとまったくと言っていいほど止められませんですからありがたく思いますです」

「え、そんなに？」

「ますです」

「あ！またどこかへ行こうとしますです！」

そういつてトゲピーを捕まえるマリルリ。

「こんな感じですか！どこかへ行こうとしますですから気をつけますです」

「あっ！マグマラシ！トゲピーが！」

いつの間にも移動したのかトゲピーはマリルリの手の中から逃げ出して窓から飛び降りようとしていた。鍵が閉まっていたのにいつの間にか開けてもいる。

「捕まえますです！ていつ！」

「うわっ！」

マグマラシはマリルリに投げられて窓の外に飛び出る。だが、トゲピーはしっかりと抱えているあたり意外と焦っていないようだ。

「落ちっ！」

「マグマラシさん、トゲピーだけでも投げ渡しますです！」

伝え忘れていたが、ここはポケモンセンターの三階だ。普通のポケモンなら頭から落ちない限り怪我をしないが、トゲピーのような幼いポケモンだと身体が弱いのですぐに死んでしまう高さだ。

「うりゃっ！」

マグマラシはトゲピーをマリルリの方へ投げ渡そうと、開いている窓に向かって投げる。そしてその反作用でマグマラシはさらに遠くへ離れて行く。

「捕まえますっです！？」

が、何をどうしたのか、マリルリはトゲピーをキャッチすることが出来ずに落とす。

「トゲピーが落ちますです！！」

そしてマグマラシから離れ、マリルリからも離れて落ちていくトゲピー。地面に当たれば死は確定だろう。

「このっ！！アクアジェットオ！！！」

その時、ダイケンキが窓からアクアジェットを使って飛び出す。ダイケンキの身体の周りに何処からか水が集まって加速し、落下中なのに笑っているトゲピーを追い抜く速さで地面に向かう。

「届い……！！アクアテール！」

トゲピーのすぐ傍まで追いついたダイケンキは身体を一回転させると、アクアテールでトゲピーをマリルリのいる方へ打ち上げた。…三メートルくらいずれているが。

「ああっ！またです！捕まえられませんですっ！」

そしてトゲピーの飛んできているところの窓に追いついたマリルリは再びトゲピーを落とす。

「ハイド…ぐえっ！」

ダイケンキはハイドロポンプを使おうとした瞬間に地面に叩きつけられる。

マグマラシがトゲピーに向かって飛び込む。

しかし、悲しいことにトゲピーが地面に落ちるまで後一メートル。

そしてマグマラシからトゲピーまであと六メートル。

前足を伸ばすマグマラシ。

「落ちまするくなりるなです！」

通常の言葉で表すと“落ちないでっ！”だ。

「間に合わな」

その時、トゲピーがその場から消えた。

「え？」ゴツッ

マグマラシはポケモンセンターの壁に茫然とした顔を打ち付ける。

そしてマグマラシより一拍遅れて、ダイケンキと言葉が更におかしくなっていたマリルリが驚く。

「「は？」」

「痛ってー！」

「き、消えた？」

「はっ！今のはテレポートの気がしますです！」

「トゲピーさん何処行きますですかー!？」

そう言うともりりは部屋を出て行った。

「トゲピーの行動力半端ねえ……」

「ダイケンキ、俺達も探そうぜ。またトゲピーがどっかから落ちたりカビゴンとかに食われたりしない内に見つけ出さないと！」

「ああ……って！トゲピーってカビゴンに食われたりしたのか!？」

「スカイタウンでそういう話をしていた四匹の子供のポツポがいたから話しかけてみたら聞いた。ほかには……」

マグマラシはダイケンキにトゲピーのトラブルを走りながら話した。トゲピーは岩がどうだとか、犯罪者がどうだとか、大爆発がどうだとか。

その話を聞いたダイケンキは、精神的に疲れたように言った。

「トゲピーの両親、辛^ひ労とかで倒れてない……と思いたいなあ」

「その倒れてるってどういう意味で？」

「いろんな意味で」

そんな会話をしながらトゲピーを探すマグマラシ達。

マリルリはマリルリで探しているのだが、探しているのだが、探す所が主に扉の上とカーテンの中なのは何故だろうか。そしてたまに、しろたま……しろたま……と呟いていたりする。

第六十五話：赤青模様の白球（後書き）

アリゲイツ「作者ー、すっかりしろよ。だらしねえなー」

マグマラシ「あの作者に代わりまして謝罪させていただきます。ごめんなさい」

真横にいるのにあの作者とか言うな！言葉だったとしても距離をあけようとしないで！

マグマラシ「あの方にいる作者が何か言っておりますが、気にしないでください」

アリゲイツ「耳が腐るしな」

ガバイト「……………」

第六十六話：ハピナスの説教・マリルリの涙（前書き）

今回はあえてマグマラシ達ではなく、ハピナスとマリルリで書いてみました。

マグマラシ、アリゲイツ、ハヤシガメ、レントラー、それと忘れられそうなガバイト達はほぼ脇役です！

今回の物語は説教ばかりなのでつまらないと思えるが、楽しい要素は……やっぱりつまらないだけだと思います。

第六十六話：ハピナスの説教・マリルリの涙

トゲピーはスカイタウンと連絡を取っていたハピナスが確保していたようで、ハピナスが連絡を取るために部屋を出て行った後にトゲピーに起こった事を聞いたハピナスはマリルリを前に激怒し、説教しているところだ。

「で、でもそれはトゲピーさんが…」

「マリルリさん？」

「すみませんと思っっていますです。だからそれだけは！」

「あー……すまん」

「ごめん」

「マグマラシさんとダイケンキさんは謝る必要はありませんよ。ここにいるマリルリさんがトゲピーさんを掴むことが出来なかったのが悪いんですから。それ以前に、トゲピーさんを逃がした事が悪いんです。そもそも、マリルリさんはナースとしての自覚はあるんですか？真冬に熱を出しているときに寒中水泳をしたり、入院中のポケモンに恥ずかしいことを言われたら患者の傷口を何度も叩いて傷口を広げたり、注射を失敗して何度もやり直して患者の方を注射恐怖症にしたり！傷口を消毒する時にもなぜかハイドロポンプを使って患者を殺しそうになるし、子供の相手をしてたら必ず怪我をさせるし……今回は怪我はしなかったみたいですが、もう少しで死ぬ所だったのでしょう？患者の命を預かるナースとして看護学校で習ったはずですよ。患者と接する時は細心の注意を持って笑顔で対応するようにと。なのにあなたときたら」

「そ、それはつい、やってしまっただけ」

「つい、じゃありません！あなたはつい、で殺すのですか！命は一度きり！それなのにあなたはつい、で相手を殺し、家族や友達に悲しみだけでなく、その未来さえも駄目にしようと言うのですか！そんな覚悟でいるならナースを辞めなさいと何度も何度も言ったは

ずです！あなたに殺されかけた方や傷口を広げた方などがナースを辞めさせないでと言ったからナースを続けられているのですよ！なのにあなたは同じ様な事を何度も何度も繰り返して！」

「たまに生き返る方が居ますで、何を言っているのですか！」

「あなたは相手が必ず生き返ると思っっているのですか！身体を失っ
ていても奇跡的に生き返る方も居ますが、それは極稀です！生き返
る方は一つの種族の内、一匹でも居たら良い方なんですよ！それな
のにあなたはその奇跡が起きると思っっているのですか！そんなこと
を思っっているのなら、あなたは命に携わる仕事をする権利も、覚悟
もありません！あなたの夢は患者に元気になつて笑つていてもらい
たいでしたっけ。そのようなことを思っっている時点でその夢を捨て
なさい！考えを改め、失敗をしないようにしなければその夢を想う
事すら止めなさい！そのような夢があるというのに看護学校での成
績は過去最低、此処に来てからも包帯一つの巻き方さえ習得できな
いってどうということですか！看護学校での意欲は誰よりも高かつた
ようですけど、それだけです。心があつたとしても結果がこれだ
は意味がありません！」

「そんな事「それと！」」

「勉強が苦手だからつてそれから逃げてどうするのですか！夢があ
るといふのにそれを達成する為の努力をしなくて達成しようと思っ
つてどうということですか！手足を失い、夢を諦めた方や病気の所為
で夢半ばで亡くなつた方も居るのですよ！五体満足でこれといった
病気もない、その夢の達成には自分のできる範囲の事をすれば達成
できる。それなのに大した努力もせず、夢に向かうことをしていな
いでしょう！それだけでなく、夢とは逆の事をして居るではありま
せんか！」

「……………」

「それくらいで止め「ダイケンキさん、止めないでください。もし
止めるようなら……………わかりますね？」……………ハイ」

「な「マグマラシさんもですよ？マグマラシさんもダイケンキさん

も、ポケモンセンターの中でスカイタウンからの迎えの方がこられるまで待つていてくださいね?」……」

マグマラシ達は怒っているハピナスの気迫にそれ以上何も言えずにポケモンセンターの中へ入っていった。

それを見たハピナスはマリルリに向き直って言った。

「マリルリさん、何か言うことはありますか?」

「私だってそんな事は分かっていますです!それに私はそんな奇跡が起きるなんて信じてませんです!」

「私の話の最中に生き返る方が居ますですと言いましたよね?」

「言っただけで信じるつもりなんて全くありませんです!それに同じ様な間違いをしているだけで同じ間違いはしませんです!それに私の夢を否定するのをやめますです!」

「で?同じ様な間違いをしているのは分かったけれど、結局はそれの殆どがあなたの不注意。気を付けていれば絶対と行っていいほど防げたことでしょうか?だからこそあなたをこうやって叱っているのです!それが分からないでも言うのですか!私の夢を否定するなと言っています、そんな事はあなたが注意していて、その覚悟もあって、患者をあなたの夢のように元気にさせてあげられた上で言いなさい!言う以前に!知識や練習で未然に防げた事を防がなかったあなたに言い張ることが出来ると思っっているのですか!」

「……」じわっ

マリルリは涙目になっている。

「……うう。うううう……」ポタツ、ポタツ。

「涙?……マリルリさん。その涙は何の涙ですか?何を思っ流した涙ですか?」

「ううう……うううう……」ポタポタ

「何か言いなさい!その涙は何を思っ流したものですか!」

「……か……悲し……くて……」ポタポタポタポタ

「悲しいですか?今までしてきた事を悔やむのではなくて叱られたから涙を流しているのですか!あなたは!あなたは……!!こんな

叱られているのに後悔や改心することなく、他の方の事を思うのでもなく、自分の事で涙を流すのですかっ!!改心しないあなたにはナースの仕事をさせることは出来ません!!手続きはこちらがしておきますから出て行きなさい!!」

「ごめんなさい!!ごめんなさい!!」

「!!まだ分からないのですか!私は出て行きなさいと言った筈です!それに!あなたは出て行くのが嫌だから謝っているに過ぎません!これで最後です。出て行きなさい!」

「ご、ごめんなさい……」

「・・・突進!」

「よく考えなさい」

ハピナスは突進でマリルリを当たり飛ばすと、一言言ってポケモンセンターの中に入っていった。

「うううううう…うううううう……」

マリルリはそのまま暫くの間、泣き続けた。

第六十六話：ハピナスの説教・マリルリの涙（後書き）

説教だけで此処まで書けたの初めてやー！

当たり前なんですけどね。

この説教、二時間ほどかけて書きましたが……よくもまあこんなに
もと自分で驚いています。

だーれかー！呪文の参考になりそうなの知りませんかー！

氷だったら……って！それを読者の方々に聞いたら楽しみが減るし……！
如何しようか……。

第六十七話・電話連絡（前書き）

続きが思い浮かばない！いままでこんな事なんて無かったのに！
如何しようか……。とりあえず、四六時中考えるようにしますかね。

第六十七話：電話連絡

「町長、確認したいことがあるとアクアタウンのポケモンセンターからお電話です」

「テヨグエプイー……「町長！」はっ！何!？」

「アクアタウンポケモンセンターから確認したいことがあるとお電話です」

「えー…そんな事よりトゲピーは……チュヲゲブイー……」

「……そのトゲピー様のことでお電話でしたが、出られないと伝えておきますね」

「テよゲ!？ちょ、ちよつと！それを先に言つてよ!」

「町長がどうでもいいように言われたので、この対応をさせていたかったです」

トゲチック町長はもう既に電話へ向かっており、もう既に秘書の言葉は聞こえるか聞こえないくらいの距離だ。(大声ではない。いたって普通の音量)

「……………ストレス解消?」

「…秘書は腹黒だった!」

「トゲピーの騒動に巻き込まれた仕返しっぱいのは何故?」

「何か言いましたか?」

アリゲイツ達が小声で話していると秘書のポケモンがそう言ってきたのでアリゲイツ達はすぐになんでもないと返す。

【ハピナス&トゲチック電話】

ポケモンセンターや町長室等の場所にある固定電話は相手の顔も見えないようにモニターが付いている。所謂テレビ電話だ。

「スカイタウン町長のトゲチック様ですね?」

「はい!トゲピーは、トゲピーは!」

「ご安心ください。こちらのポケモンセンターで保護しています。そちらで行方不明となっている、トゲピーさんはこの方ですか？」
ハピナスはトゲピーの映像を映し出す。

「はいっ！そうです！そのトゲピーです！よかったです。今度こそ死んでしまったんじゃないかと思って……ぐすっぐすっ…ポタポタポタポタ

「泣かなくなっ！？ちょっと失礼します！」
ダダダダダダダダダダ…
ポタッポタッ…え？

「……………っ！うえ！？」

「？？」

「……………ハアハア…………トゲピーさんが逃げ出していたので捕まえました」

「トゲピー！？」

ハピナスはトゲピーの顔をモニターに映るようにする。

「トゲピー！」

トゲチックを見たトゲピーはトゲピーでのんきに笑っている。

「トゲピー……………」

「トゲピーさんをそちらへお返しするに当たって、こちらが送るか、そちらが迎えに来へ迎え！……………分かりました。一応言っておきませんが、町長、あなた自身が迎えに来られるといろいろと厄介なことになりますので代理の方で御願います」

「あああ……………ポチッ！」

ハピナスの手から身を乗り出したトゲピーが通話終了のボタンを押す。

「あっ！」
ブツツ…ツーツーツーツー

ハピナスはこの後、電話を掛けなおしたがトゲチック町長はもう既にどこかへ行って出なかった。

そしてこの後、マリルリが怒られたのだ。

【マグマラシ】

「あっ！」

「如何した？」

「アリゲイツ達にアクアタウンに居ること伝え忘れてた！電話は…」

【アリゲイツ】

「トゲピーがアクアタウンに居たらしいよ！」

「トゲピーがアクアタウン！？」

「行動力が町を越えた！」

「……………」

「マグマラシもトゲピーといるのかな？」

「なら確認しようぜ！電話電話！」

【マグマラシ&アリゲイツ電話】

『もしもし…ってマリマイシ！？』

「アクアタウンに居たのか！」

「びびくりしたー。まさか同じタイミングで電話してたなんて……」

「あれ？ガバイトいつの間に戻ってきたの？」

「え？ガバイト？おお！？いつの間に！？」

「……………電話し始めたとき」

「へー俺が？それとも町長が？…マグマラシ、そっちをいつ出発するんだ？」

「…町長だ」

「そっちからトゲピーの迎えが来るはずだからそのときにこっちを出發するつもり」

「分かった。それと、マグマラシの後ろにいるのは？」

「種族はダイケンキ。俺が川で溺れて意識が無いところを助けてくれた恩人」

「川？マグマラシは泳げたよね？」

「流れが速くて…溺れた。というか、アリゲイツの方こそ後ろのレントラーは何で毛が白くなってんの？」

「マグマラシも右目の所がほんの少しだけ白いぞ？多分、マグマラシも俺と同じ様に白いペンキのようなものを浴びせられたんだろ？」

「あれか！？確かに白いペンキのようなものが飛んで来たけど防ぎきれなくて川に落ちたから右目の所が少し白いくらいで済んだのか？だけど、レントラーは…：…全身に浴びたんだな？」

「ああ、そうだよ！絶対にあいつを許さねえ！」

「やっぱり白いレントラーって…：…うん。何か新鮮といえは良いのか何と言えはいいのか…？」

「あはは…マグマラシが帰ってくるまで、レントラーとマグマラシを白くした相手を探してみる？白を落とす方法を聞かなきゃレントラーがずっと白いままになるしね」

「賛成！白いレントラーは気味が悪いしな！」

「気味が悪い言うな！」

「俺はスカイタウンに戻ることを第一に頑張るから、頑張れ！白のレントラー！」

「マグマラシ！」

「ばいばい！」

「逃げるな！」

「ブツッ…：…：…」

「さっそく探しに行こうぜ！白のレントラー！」

「白を付けるな！白を！」

「のレントラー。これでいいか？」

「レントラーだけで良い！レントラーだけで！」

第六十七話・電話連絡（後書き）

中途半端なようですが、一応投稿
だれか。続きをください。

第六十八話：今更の登場ポケ紹介（前書き）

とりあえず書いてて驚いたのが自分でもキャラの詳細を分かっていないという事。

体重、年齢、身長等は良く分かんないので省きます！

今回はアトリユートタウンからエレクトタウンまでの登場ポケ紹介になります。

第六十八話：今更の登場ポケ紹介

チームエレメント

【マグマラシ】

お腹にはクリーム色の毛、背中には深緑のような色の毛を持つ。
ピンとした耳はアリゲイツの悪口を聞いている事が多い。

- ・主人公の一匹。
- ・顔や体つきが物凄く雌っぽい。声は中性的。
- ・マグマラシ自身は鈍感。愛情や好意を友情として取ってしまう。
- ・最近の悩みは異世界以降続けてきた特訓で身体が引き締まって余計に雌っぽくなってきている事。
スリムにな

【アリゲイツ】

水色の身体。丸っこいと言えるクリーム色の腹に水玉がある。眼は普通に赤。

- ・主人公の一匹。料理が凄い。
- ・かっこ良い容姿。（上の下）だが、ふざけたりする為、評価は下降している。
- ・ファンクラブを作ってマグマラシを守っている部分もあるため、意外と頭は良い？
- ・最近の悩みはマグマラシが料理を作れと言ってくる事。

【レントラー】

黒の毛に包まれ、星形の尻尾を持つ。

- ・主人公に限りなく近い脇役。
- ・二枚目に限りなく近いが、それとはどこか離れているような不思議な容姿。
- ・スイにしか話さなかった過去があるようだが…？
- ・最近、新技を作れないのがむしろに電気の細かいコントロー

ルをやりまくっている。

【ハヤシガメ】

腹側は明るい緑で、背には緑の植物がある。

- ・主人公に限りなく近い脇役。
- ・普通の容姿だが、雰囲気で全然普通の容姿に見えず、頼もしく見える。が、口調の所為せいでそれも薄れていて頼れそうと思わせる程度。口調が変わればかなりのカリスマとなる。
- ・話したくないトラウマの過去があるらしい。
- ・最近の悩みはアリゲイツがいるいろな物を食べさせようとする事。エナジーボールとかソーラービームとか、ハイドロポンプとか、マグマラシの身代わりとか、雷とか、火炎放射とか……。たまに、よく分からない物も食べせられそうになる。

アトリユートタウン

【フローゼル・元ブイゼル】

- ・タルミの彼氏。それなりにかっこいい。タルミに対する独占欲が強い。
- ・魔法をタルミに教わっている。かなり初心者。魔法の才能が無い。
- ・タルミが自分の事を本当に好きなのかと、思う事がある。
- ・最近の悩みはタルミが何か隠していて傷ついているのに無力という事。特訓中。

【タルミ】 ミルタンク

- ・フローゼルの彼女。物語の中で唯一大まかな年齢が分かる一匹。アラフォー。
- ・古代から生きるポケモンの一匹。現代のポケモン達よりかなり身体が弱い。現代のポケモンは気絶で済む破壊光線でも確実に死ぬ。
- ・最近、フローゼルが特訓していて身体を壊しそうなので心配して

いる。

【メタモン】

- ・メタモンとしては不細工な容姿。
- ・エロスライム。セルシーフのメタモンとは一応血縁。
- ・忘れ去られてそうなスライム。今は風俗などで働こうと考えている馬鹿。

【グラエナ】双子。

- ・オルトロスの弟。かなりの嗜好きで、嗜が立つ前に情報を仕入れている事が多い。
- ・現在の職業は情報屋兼ハッカー。
- ・セキリユティイーが世界最高のウッドグループのスパコンに市販のパソコンで侵入できる腕を持つ。だが、あまり使わない。

【オルトロス】双子。

- ・グラエナの兄。ピアノが弾ける。どうやって弾いているのかは不明。最近ではスカウトが煩い。
- ・現在はナイトジムの一員となっている。
- ・トラップを弄って鬼畜仕様にしている事も。弟の手伝いハッキングの方をしていたりする。

【ザンゲース】

- ・サンの兄。水晶をサンが触ることでタルミから魔法を知らされた。
- ・シスコン。サンの為なら腕の一つくらいは犠牲に出来る。彼氏が出来たら……。
- ・過去に恥ずかしい思いをしたことがいろいろとある。サンがいるいろ知っているので興味があつたらサンに訊けばいい。

【サン】 ザンゲース

- ・ザングースの妹。
- ・水晶を触った所為で呪にかかったが、タルミによって解呪された。
- ・水晶のエネルギーが身体に入ってしまったので数十倍の寿命となっている。フェラル達によって魔法を教えられる事となる。

【トノロ】 ニョロトノ

- ・アトリユートポケ校の教師。
- ・どこことなく不思議な雰囲気を持っている。もう出てこないかも知れない一匹。

【ノクタス・元サボネア】

- ・無口なナイトジムの一員。オルトロスとは友。もう出てこないかも知れない一匹。

【マツスグマ】

- ・グラエナの嫁。もとい彼女。グラエナに心も身体も何度も救われたので好きに。

【カメール】

- ・アリゲイツの事が好きなポケ。だが、もともとはマグマラシ狙いだった。
- ・今はアクアタウンで看護の勉強をしている。ナース志望。マリルリの後輩。
- ・マリルリがナースを辞めて帰ってきていたので慰めている。

【ハブネーク】

- ・ザングースの彼女。ザングースに敵対心を抱いてザングースの命を付け狙っている内にザングースの事が好きになっていた。ザングースの事だとデレる。
- ・ザングースから魔法について知らさせた。

【ニドキング】

- ・マグマラシを好きな一匹。マグマラシが雌だったらと何度思ったことか。
- ・今は諦めて新しい恋に走っている。彼女はどこかマグマラシに似ている。

【ドゴーム】

- ・ダンス大会などの司会をつとめるイベント好き。毎回司会の役を奪い取る。

【ルクシオ】

- ・マグマラシを愛するヤンデレ。作中にも書かないが、いろいろとやらかしている。

【ズバット】

- ・タルミとフローゼルの間に吹っ飛んでくる為だけに生み出された。二度と出ない。

【オーダイル】

- ・アリゲイツの母。

【バクフーン】

- ・マグマラシの母。だが、存在だけしか出ず、名前や呼び方すら出ていない。
- ・マグマラシに命が危機にさらされた時に使えとお守りを渡している。中身は不明。

エレクトタウン

【サンダース】

・ロリコン。ペドフィリア。YESロリータNOタッチを地で行っている。犯罪経歴0。

【ウインディ・ドンファン・ピジョット・ハリテヤマ・イーブイ】

・エレクトタウンの大会の選手。地味にピジョットが。

【ロトム】

・エレクトタウンの司会。任されたわけでもないのにいつの間にか司会席に現れて司会役を掻っ攫っていた。

【マタドガス、カモネギ、パッチール】

・地味にカモネギが。全員三つ子。末っ子グループ。

第六十八話：今更の登場ポケ紹介（後書き）

どうでしょうか？こんな感じでもいいのでしょうか？

第六十九話：今更の登場ポケ紹介2（前書き）

前回の続きです。

もちろん、スイの事も紹介してます。

死んだからって紹介無しとかしませんよ。

『どつぞ』

第六十九話：今更の登場ポケ紹介2

別れの森

- 【エネコロロ・ヤルキモノ（元ナマケロ）・メタモン】
- ・盗賊セルシーフ。捕まった事など一度もなかった。作戦とかは凄くあほらしいが、逃げる技量だけはそこらの盗賊よりも凄い。
- ・マグマラシ達からは何故か逃げれなかった。三匹ともその日の占いで運がかなり悪かったらしいが。
- ・解散した後はエネコロロとヤルキモノは夫婦に。メタモンはどこかへ行った。

ウィードタウン

- 【マタドガス、カモネギ、パッチール】
- ・地味にカモネギが。全員三つ子。次男次女のグループ。
- 【スイ】 リーフニア
- ・レントラーの彼女。レントラーの事をレン君と呼ぶ。今はもう亡くなっている。
- ・ヘルガーからの好意を最初は嬉しがっていたが、だんだんとヘルガーが変わっていくのを感じたのか嫌いになっていた。周りに相談したが、どうも出来なかった。
- ・ヘルガーに危険を感じていたのでもしもの時、レントラーに殺しをして欲しくないので復讐しないように約束した。

【ヘルガー】

- ・スイを愛していたがそれが狂った方に行ってしまった。始めは心が好きだったが、スイを好きでいるうちになぜか心ではなく軀があればいいと思うように。

- ・スイを殺した後はレントラーの手にかかって死のうとしていた。警察に行った後は森での行動と正反対と言っていいくらいに行動が一変した。

【ベイリーフ】

・スイの親友。ヘルガーを危険視してレントラーに何が何でも守れと言っていた。

・スイが死んだ後、スイの本の間に挟まっていた手紙を見つけ、それを呼んで立ち直った。その手紙にはレントラーが旅に出るようにも書かれていた。

【ユキノオー、ワタツコ、ルンパツパ、キノガッサ、ジュカイン】

・ウイードジムの一員。

・動きや技で相手の動きを妨害することの多い戦闘方法。

【メガニウム】

・ウイードジムのリーダー。

・体力と耐久力が非常に高い。固定砲台のような戦闘をする。

・ハードプラントを使える。ソーラービームの力を上乗せとか言っているが、実際はその溜めた力の殆どは動けなくなるといふ反動をなくす為に使っているので威力はあまり変わらない。ようは技の後に動けなくなるか技の前に動かないかの違い。

・バッチを四つ手に入れたら再戦するとアリゲイツに約束している。

【ハンテイ】 テツカニン

・ウイードジムの審判。

・殆どのジムは審判にテツカニンを選ぶことが多い。

【フェラル】

・電話の相手は。

・古代から生きるポケモンの一匹。魔法を使いこなせる。タルミを知る者。

・アリゲイツに魔法をかけたようだが？

【ポケモンB】

・電話の相手は。

・魔法を知るポケモン。タルミを知る者。フェラルとは古代からの唯一無二の親友。

【トロピウス】

- ・ 何故かおばちゃんと呼ばれて喜ぶ。
- ・ ハヤシガメの知り合いでよくハヤシガメを大木の頂上付近へ運んでいた。

【セレビィ】

- ・ 猛毒の赤い木の実を食べたポケモン。
- ・ 赤い木の実映画“セレビィ時を越えた出会い”で出てきたものだが、ポケモンがたくさん取り過ぎて木を枯らす事があったので毒を持った。
- ・ 地味に親友を売っている。
- ・ 毒の実を食べ続けてある程度の抗体が出来ていたのでポケモンセンターの治療で完全に治った。今度はもっと抗体をつけてから食べようと本人は思っている。

- ・ エレメントを知っている。エレメントに貸しがある。

【キマワリ】

- ・ ウィードタウンのポケモンセンター所属のナース。
- ・ 検死を主な仕事としている。

【リーフィア】

- ・ キマワリをよく気絶させている。
- ・ スイとは関係がない。

【ダーテング】

- ・ ナルシスト。とにかくナルシスト。
- ・ コノハナに止められるまでいつまでもナルシスト振りを見せ続けられる。

【コノハナ】

- ・ ダーテングの弟。ハリセンがないと不安になるほど。兄が不安の原因。

- ・ 友達に知られなくなかった兄をもつ。^{ダーテング}同情より兄を止める仲間を求めている。

ナイトタウン

【ルガー】 ヘルガー

- ・ナイトタウン町長秘書兼ナイトジムの一員。
- ・ナイトタウン町長の独断で作った役職、亡霊をしている。嫌がっているのになぜか続けている。
- ・町長と恋仲では？という噂がある。

【ラムパルド】

- ・岩の中から登場した。四日も埋まっていた。
- ・アリゲイツからマグマラシの写真を購入。計十一枚。三千ポケの支払い。

・後で書くが、チームリーダー。

【ゾロアーク】 ナイトタウン町長

- ・ナイトタウンの年間犯罪の五割はこいつの痴漢のせい。
- ・三千二百八十四回も連続で痴漢をしていた。（マグマラシはよって連続としない）
- ・痴漢ではなく、愛でる行為だと言い張っている。

次元の狭間

【ディアルガ】

- ・時間の神。時が狂うとディアルガも狂う。狂うと世界が大変なことになる。
- ・時の歯車をどこかへ隠している。
- ・たまに世界のどこかへ出現するらしいが見たものはいない。
- ・ギラティナの反転世界に出入りできても力が使えなくなる。

【パルキア】

- ・空間の神。狂って暴走することがある。狂うと世界が大変なことになる。
- ・亜空間に技、“流星群”を大量に保管してたりする。もちろん、亜空間の中はディアルガの力で時の流れはかなり遅い。
- ・たまに世界のどこかへ出現するらしいが見たものはいない。
- ・ギラティナの反転世界に出入りできても力が使えなくなる。

【ギラティナ】

- ・反転世界の神。

・世界を守るためなら自分の消滅も受け入れる覚悟がある。しかし、ギリテイナがいなくなると世界が崩れていくので受け入れない。

・最近は何も心もすり減らして世界を守ってきた。今はそれをディアルガとパルキアに任せて眠りに付いている。

第六十九話：今更の登場ポケ紹介2（後書き）

スイとベイリーフの間の裏話は気分が乗れば奇運のポケモン達【余談】の方に書きます。

それと、今まで出てきたポケモンにこういう事を質問したい！
こういうのをやってみて欲しい！とかの要望がありましたら感想や
メッセージにてお知らせください。
出来るだけしてみますので。

次の投稿は、いつになるか分かりません。

第七十話：今更の登場ポケ紹介3（前書き）

三つ目！

…小説書く気すら起きない。スランプより酷いし…

第七十話：今更の登場ポケ紹介3

グラント基地

【ボルト】 ピカチュウ

- ・グラントの幹部。
- ・殺戮快楽者。殺すことで快楽を感じる異常者。一応、マグマラシよりも年下。

・アイスタウンで四十四匹も殺した奴。戦闘ではなく戦争経験が豊富なタルミにダメージを与えることが出来る程強い。世界でもかなりの力を持つ。

【ポイズン】 ベトベトン

・グラントの幹部。

- ・マルノームと恋人だった。マルノームが死んだと思っている。
- ・今はグラントでボスの為に薬品を研究している。研究と拷問はしているが犯罪はギリギリしていない。

・反動で一日技が使えなくなるが一時的に技を強くする薬、身体を動かした分だけ反動が来るが身体のリミッターを強制解除する薬がある。

・ポイズンタウン町長護衛のマルノームが恋人。マルノームが生き返るかもしれないという奇跡を心のどこかで強く望んでいる。

【ファムア】 ブースター

・グラントの幹部。

・昂コウがボスに心酔していて命令一つで命を絶ちかねないのでグラントにいる。

- ・ブースター自身は基本善人。
- ・虚実トウルフェルスの我を使って戦う。趣味が悪いのは自覚しているが、好きなのでやめない。

・ガバイトより少し弱いくらい。アリゲイツの二倍の強さ。

・昔、アリゲイツと遊ぶことがあった。マグマラシと遊んだのは一度きり。

【BOSS】 ??? ???

・組織、グランドのボス。

・ブースターの弟の昂コウに心酔されている。

・昂コウがブースターの弟という事は知っている。

・ブースターが従う理由が昂コウの為だとは思っていない。ブースターが従う理由を金の為だと思わせているので金の為だと思っている。

【昂】 エーフィー

・ブースターの弟。

・グランドのボスに心酔している。何が切欠で心酔しているのか明かされていない。

ナイトタウン

【バンギラス】

・ナイトタウンジムのリーダー。すこしかっこつけている。

・幼少の頃から父親のスパルタ特訓があったため、半端な攻撃ではダメージを与えることも怯ませることも出来ない。どくどくをただの毒状態に変えるほど毒に抗体がある。どくどく以外の毒は基本効かないと言える。

・夢は忍者だったため、それがジムに表れている。

【クロバット】

・ナイトタウンジム審判。

・暗闇の為、超音波によって判断をする。

【ゾロアーク】 ナイトタウン町長 (再登場)

・マグマラシを だと思っている。

・マグマラシが だと言うと毎回記憶を消す。マグマラシにプロポーズしているようだ、返事はかえってきていない。

・ルガーがマグマラシの事を諦めるように言っているが、一切聞かない頑固者。

・酒を飲むと下心丸出しの発言をする。

ノーマルタウン

【ピクシー】

- ・ノーマルタウンの女医、兼ナース。
- ・プクリンに付きまとわれている。
- ・昔、倒れていたプクリンを看病したのがきっかけで匂い続けられている。（誤字でもなかったり）

【プクリン】

- ・ピクシーを想い続…もとい追い続けている。ニオイフェチ。
- ・昔、倒れていたところをピクシーに看病されたのがきっかけで好きになり、それ以降ずっとピクシー一直線。

【エテボース】

- ・自称：もうすぐ七十を迎えようとするヨボヨボの腐るのが早くて耳が遠く、頭も悪いクソジジイ。
- ・家族に付けられた二つ名は健爺。
- ・ノーマルタウンの町長の友でもある。
- ・アリゲイツの料理で花畑が見えた（良い意味で）。
- ・花畑はエテボースの思い込んだ想像だったり。

【メイド達】 種族様々 のみ

- ・色恋沙汰が好きな一団。マグマラシとゾロアークを応援する一団でもある。
- ・甘いものが大好き。色恋沙汰よりも好き。
- ・ドラピオンとゾロアークが中心となって選んだメイドたち。

【カビゴン】 ノーマルタウン町長

- ・大食い。アリゲイツが料理を作るならば協力を惜しまない（私財のみ）

・酒を飲むといろんなものが食べ物に見える。

【フシギバナ】 ウィードタウン町長

・五年前の事件にバンギラスが関わっていると知っている。

・酒を飲むと攻撃的になる。

【リザードン】 ヒートタウン町長

・色違いの黒色リザードン。

・単純に、バトルとかが出来るのでその妬みから虐めになった。色違いというのはただの口実だったりする。

・ポケモンの種族は多いので少しくらいの違いだと差別は起きない。

【ドラピオン】 ポイズンタウン町長

・アリゲイツの料理に一番早くを出した。所謂つまみ食い。

・宴会とかの騒ぎが大好き。

【ムウマージ】 ソウルタウン町長

・酒を飲むと泣き上戸になる。

【エレキブル】 エレクトタウン町長

・酒を飲むと暴れやすくなるがその程度。泥酔にはならない。

【メタグロス】 メタルタウン町長

・酒を飲むと笑い上戸となる。

【ミロカロス】 アクアタウン町長

・酒を飲まなかった一匹。

【ルカリオ】 ファイトタウン町長

・マグマラシの異常性に気付いたポケモン。

・現代では波導はルカリオ一族とミュウ以外、ほとんどの者は何も出来ない。

・ルカリオの中では波動の強さは三番目。実戦は二番目だった。学校の成績は…何故町長になれたのか誰も^{頭の長さ}が頭を悩ませるほど。

・マグマラシの波動の強さを自分の中で弱く感じるような自己暗示を気付かぬうちにかけている。

・マグマラシの波動の強さを越える為に特訓している。

・酒を飲まなかった一匹。

【フーディン】 ミラージュシティ町長

・酒を飲まなかった一匹。飲むとサイコパワーが使えなくなり、自分の頭を支えられない為。

- ・マグマラシに注意している。
- ・ゾロアークを見ると呆れと諦めの感情が毎回湧き上がってくる。
- 【カイリユウ】 ドラゴンタウン町長
- ・ルカリオを観察して楽しんでた。
- ・マグマラシとその仲間達には並々ならぬ興味を持っている。
- ・ガバイトを引き取ったのがカイリユウの父親。ガバイトとは義兄弟。
- ・酒を飲まなかった一匹。
- ・ドサイドンのキスの餌食になりかけた。間一髪でドサイドンをボコボコにして逃れた。
- 【アーマルド】 バグタウン町長
- ・アルマの叔父だったりする。(父の弟)
- ・酒を飲んでも変わらない。
- ・誰かを弄^{いじ}つたりして、困っているのを見るのが好き。
- 【バンギラス】 ストーンタウン町長
- ・五年前のアトリユートポケ校立てこもり・殺ポケ事件の関係者。
- 【ドサイドン】 ノームタウン町長
- ・酒を飲むと誰彼かまわず抱きついてキスをする、キス魔。
- ・キスをする際、かなりの力で抱きついてくる為、危険。
- 【トゲチック】 スカイタウン町長
- ・酒を飲まなかった一匹。
- 【マニユウラ】 アイスタウン町長
- ・酒を飲むとムキユ……うにゃ……となる。いつもはクールさがある。
- 【ベロベルト】 ノーマルタウン町長護衛
- ・町長のカビゴンとは友。
- ・アリゲイツを監禁したポケモン。
- ・料理の為に犯罪を犯している。主に誘拐とか監禁とか逃げるのならば追い続けるとか。建物の壁を壊すなど。
- ・建物の壁を壊す時、普段出せる力の六割り増しで殴っている。

・悪を倒した時は正義の台詞を、誰かに倒されたときは悪役の台詞を言ってみたいと言っている。ヒーロー物の影響。

【マルノーム】 ポイズンタウン町長護衛

・グランドの幹部のポイズン（ベトベトン）が恋人。

・ベトベトンは今もどこかで生きていると信じ、探し続けている。

・ニドキングに腹を貫かれて大量出血 & a m p ; 心配停止 & a m p ;

三十分放置。なのに生きていたというGよりもしぶといかもしれないポケモン。

第七十話：今更の登場ポケ紹介3（後書き）

色々な用事の所為で数ヶ月の間、投稿できなくなります。

また、ここは変だという部分がありましたら、教えてください。

…現在、スイヤエメントの皆の過去について考えていたりします。
進んでいないという現状ですが…。

第七十一話：今更の登場ポケ紹介4（前書き）

久々の投稿です。

自分が惨めに思えるっス。

アリゲイツ「作者どうした!？」

マグマラシ「今日、資格試験だったらしいけど…」

レントラー「けど？」

ハヤシガメ「原因不明の不運なことに遭ったらしいよ」

アリゲイツ「その不運なことって？」

マグマラシ「…目覚ましが今日だけ止まっていたらしい」

アリゲイツ「電池切れ？」

ハヤシガメ「ううん。電池は満タンに近かったって。それでも原因

不明なんだよ」

そうなんです。原因不明なんです。

そしてここに書いているのは同情・共感が欲しかったからです…最低だ。

それでは気を取り直して！紹介スタート。

第七十一話：今更の登場ポケ紹介4

オーシャン

【エンペルト】

- ・組織、オーシャンのボス。
- ・強い。数多の種族の中で結構素早い部類のガバイトに対抗できるほどの力を持っている。
- ・オーシャンは犯罪行為は殆どしていない。資金はエンペルトのへそくりと協力者からの援助。

【カブトプス】

- ・オーシャンの幹部。
- ・実力の程は不明。
- ・鎌の一部が欠けている。

【ヌオー】

- ・オーシャンの一員。
- ・エンペルトに世界を平和にする為と言われたので従っている。善良なポケモン。
- ・グランドのパッチール達より二倍強い。そして二倍遅い。

異世界（運命に導かれしポケモンたち）

【フレイ】 バクフーン

- ・運命に導かれしポケモンたちに登場する主人公。
- ・チーム・ブレイブのリーダー的存在。
- ・マグマラシに一目惚れするなんて・・・俺、終わったかな・・・と思っている。

- ・マグマラシとアリゲイツを軽くあしらえる実力を持つ。
- ・ブラストトルネードと言う名の技を持つ。
- ・マグマラシ達を鍛えた。

【レクト】 ピカチュウ

- ・運命に導かれしポケモンたちの登場ポケ。
- ・マグマラシの第一印象がパシリ。
- ・チーム・ブレイブの一員。
- ・マグマラシ達を鍛えた。

【カイル】 ルカリオ

- ・運命に導かれしポケモンたちの登場ポケ。
- ・チーム・ブレイブの一員。
- ・レントラーを引き摺った。首元を掴んで家に着くまで延々と引き摺った。

・ハヤシガメとレントラーに勝った。クリティカルバーストという技を持つ。

- ・マグマラシ達を鍛えた。

【フレア】 バクフーン

- ・運命に導かれしポケモンたちの登場ポケ。フレイの母
- ・マグマラシを初見で と見抜いた。
- ・かなりの実力を持つと思われる。
- ・マグマラシ達を鍛えた。

元の世界

【サンド】 パルキアの擬態

- ・世界が繋がった事に驚いたが、世界の為に頑張ってくれているポケモン。
- ・色々と訳が分からない現象が起きたので現在は調べている最中。
- ・マグマラシ達から向こうの世界の事を聞いた。

スカイタウンへの道のり

【欲深き者】 ??????

- ・二年十一ヶ月前に龍の遺跡からもえぎ色の珠を奪ったポケモン。
- ・世界を手に入れようとしている。
- ・ガバイトの復讐対象。

・遺跡の守護者であるガバイトの家族と他の守護者を殺したポケモン。

アクアタウン

アウエンジャー

【復讐者】 ガバイト

・タルミ曰く、悲しい復讐の眼。実際は眼を見たからではなく経験から判断。

・ヌオーを血だらけにしても特に何も思わない。殺しはしない。

・オーシャンのボス、エンペルトとほぼ互角に戦える実力を持つ。

・タルミの力が強いことを見抜いた。

・基本無口。愛想が悪い。興味があるもの意外基本無視。

・日照り石を奪うわけでもなく、ウツドの情報網を使うこともなく、タルミの力を知る為でもなく、何故かマグマラシ達と一緒にいる。ときどきふらつと消えてはふらつと現れる。

・アリゲイツの料理を食べて涙を流した。

【ギャラドス】

・静かな場所を愛する穏やかな性格のギャラドス。

・何処を如何したのか、性格が凶暴ではない。

【ゴルダック】

・アクアタウンの海辺でマグマラシの事をナンパする為に生まれたポケモン¹。

【ニョロボン】

・アクアタウンの海辺でマグマラシの事をナンパする為に生まれたポケモン²。

【ニャンパラス】 エネコ・チヨロネコ・ザンゲース

・エネコはエーネ。チヨロネコはガット。ザンゲースはネイトという名前。

・ネコっぽいポケモン達で構成された急速に力をつけてきている歌手グループ。

・今までに発売した曲は“想い、届け”と“命の調和”^{ハモニー}と“迷惑な

貴方^{あなた}”の三つしかなかったりする。

ビクトロク

【ラムパルド】

・チーム・ビクトロクのリーダー。
・ナイトタウンの洞窟の中で鍾乳石に覆われて身動きが取れなくなっているマグマラシ達を通りかかったことによって九死に一生を得た。

・アルマに良く弄られる。主にエロで。
・マグマラシの事が好き。一目惚れ。

【ボスゴドラ】

・チーム・ビクトロクの一員。
・ラムパルドの幼馴染。同学校出身。ラムパルドとは同年齢。

【ロクト】 アバゴーラ

・チーム・ビクトロクの一員。
・ラムパルドに助けられてチームの一員に。
・これでもビクトロクの中で一番若い。マグマラシ達より年下だったりする。

・幽霊、嫌い。

【アルマ】 アーマルド

・チーム・ビクトロクの一員。
・ラムパルドをエロで弄りまくる。こいつの頭はエロとラムパルドを弄ることで出来ているかもしれない。

・ラムパルドの幼馴染っぽい位置に居る。ビクトロクの中で三番目に若い。

・幽霊、好き。たまに夜中にふらふらと当てもなく歩いていることも有る。

【ウォーガ】 トリデプス

・チーム・ビクトロクの一員。

・アルマとロクトとは同じ学校の出身。ビクトロクの中で一番の年長者。

アクアタウン・夕闇の刻

【ファムア】 ブースター

・ グランド幹部。

・ 空気爆発を起こすことが出来る。噴煙を一瞬にして高温にし、一気に放出することで空気を膨張させる。このとき空気の膨張が半端無いので、爆発しているように見える。隙が大きいので基本、使わない。

・ タルミに負けて、悲しくも嬉しい気持ちになっていた。（ボルトには絶対見せない）

【ボルト】 ピカチュウ

・ 殺戮快楽者。まだ少年と青年の間の年齢であるのにかなり強い。

・ 誰も気付かないが、右耳の後ろに切り傷がある。誰かを殺した後にこの傷を触ることがある。

スカイタウン

【スカイタウン町長】 トゲチック

・ よくどこかへ行くトゲピーを探してスカイタウンのあちこちを飛び回る姿を見ることが出来るかもしれない。三十回目。

【トゲピー】

・ 幼いが、行動力旺盛という言葉では収まらないほどの行動力を持つ。

・ 命の危機に瀕すること十五回以上。

・ 三十回を超えるほど行方不明になり、そのたびにトゲチックが飛び回る。

・ 今回は川に流されてスカイタウンからアクアタウンまで流れてきた。

・ 幼い（4才まで）ポケモンは身体がまだ弱いので川に流されたら死ぬ。しかし、トゲピーは怪我をしないほど運が良かった。

【ピジヨット】

・トゲピーが居なくなつたときに良く探すのを手伝ってくれる一匹。

【エアームド】

・スカイタウン町長の護衛。

・ウツドグループ防衛局の守護部、護衛一課に所属している。

・規則ルルの抜け穴ルルもとい、規則ルルの活用をしてトゲチック町長を引き摺っていった。たまにこういうのが見られる。

【ダイケンキ】

・貝の殻を纏つた青い身体を持ち、白いひげを生やしているポケモン。

・泳げない。

・マグマラシを泳げないながらも助けた。

・マグマラシと性別の話をしていないのでマグマラシが だと思つている。

・スカイタウンの友達の家へいこうとしている。

【マリルリ】

・ゝますです。が口癖。

・アクアタウンのポケモンセンターに勤務。

・冬になると必ず寒中水泳して風邪を引く。

・ドジ。というか、ミスの連発をする。看護学校を卒業できてポケモンセンターで働いていることが不思議。アクアポケモンセンター七不思議のひとつ。

・ポケモンナースには基本的に四つの道がある。

(例外は診療。診療は覚えることが多すぎるため。)

看護(行動介助・薬剤投与・リハビリ・入院した子供の世話)

治療(内科・体質改善・バトル後の回復)

医療(外科・技での療法・バトル後の回復) 技療法は加減がかなり難しい。

診療(診察・心療・大会でのバトル中止禁止判断)

薬剤(薬剤調合・栄養改善・麻酔)

このうち、マリルリは看護を選択した。

・看護学校での意欲は誰よりも高かったが、成績は過去最低。包帯すら満足に巻けないほど。

【子供ポッポ四匹】 ポッポ

・トゲピーがどっかから落ちたりカビゴンとかに食われたりしたことをマグマラシに話してくれた四匹。それ以外の登場は無い？

【アクアタウン町長秘書】

・トゲピーがいなくなった時に馬鹿なる町長に嫌気がしている。

第七十一話：今更の登場ポケ紹介4（後書き）

前書きに書いてあったことは活動報告に詳しく書いていたり。

第七十二話：途中経過（前書き）

続きが思いつかない…割とマジでW

笑ってる場合じゃないけれどW

マリルリをどう始末しようか思いつかない！

第七十二話：途中経過

タルミとフローゼルは、空に雷鳴轟く暗雲、少し荒れている海とある島に向かつている最中だ。

そしてここはその島に向かう船の中の一室。二つの寢床が隣りあわせで並んでおり、どこかのホテルの一室みたいに絨毯じゅうたんが敷いてある。その部屋の中、フローゼルはタルミに背中合わせになるように寢床に座り、タルミに話しかけた。

「…ねえ、タルミ」

「なに？フローゼル」

「タルミはさ、過去で何があったのか知らないけれど、もっと俺の事頼ってくれよ」

「…頼っているじゃない。急にどうしたのよそんなこと言って」

「タルミは俺の事を頼ってない。アクアタウンの時だって、さっきのアクアタウンの港のそばでだって俺の事、遠ざけてたろ？」

「そんな事無いわ。そのときはどちらも偶然。探し物を手伝っていたり、ぶつかってしまった時に散らかった荷物を拾うのに時間がかったただけよ」

「違う。町の中で探し物をしていたら毛に焦げ痕が付くわけ無い。

それに港の時だって不自然に水浸しの場所があったし、そこからタルミの毛を見つけた」

「…気のせいよ？」

「違うっ！俺がタルミの事見てないわけがない！タルミが最近誰かと連絡取り合っているし、何も言わずに急にどこかへ行って探し物だとかぶつかったとか変だろっ！」

「……気付いてたの？」

「ああ。だってタルミが何か背負っているように見えるんだ…それでタルミが古代での記憶を思い起こしているような、そんな気がするんだ。だから心配になって……それで……タルミの事、細かく見

てたら……」

「…フローゼル…ありがとう。でも、これはあなたに関わって欲しくないの」

「俺が足手纏いだから？それとも邪魔だから？」

「……そうよ」

「足手纏いだったとしても邪魔だとしても、タルミが傷ついたり危険な事に関わっていたりしているのは心配で、居ても立っても居られないんだ！俺が弱いのなら鍛えてくれ！俺が邪魔ならせめて何をしているのかくらい教えてくれ！傷ついたり考え込んでいたり暗い顔をしていたりするのを、何も知らないまま、ただ指を銜えて見ているのは嫌なんだ！タルミを失いたくない。五体満足で二匹で笑っていられるかけがえの無い幸せを失いたくない……」

「………フローゼル………」

数時間の間、タルミは下を向いて何も言わずにそのまま座っていた。

【マグマラシ+ダイケンキ+チルタリス】

マグマラシ達はスカイタウンからトゲピーの迎えが来たので共にアクアタウンを出発し、スカイタウンまでの道を歩いている最中だ。

「もしかして…トゲピーさん寝ました？」

「ああ。背中の上でぐっすり寝てるぜ」

「ああ良かった。これでしばらくは何事も無く進めますね」

そう話しているのはダイケンキとトゲピーを迎えに来たチルタリス。トゲチックとは仲がいいらしい。

そしてウッドグループ防衛局の守護部、護衛二課だったりする。

トゲピーの護衛なのだが…トゲピーが一瞬でどこかへ行ってしまうので、護衛として

の任務をあまりこなせていなかったりする。

「チルタリスさん」

「さんは要りませんよ。それで…何か？」

「チルタリスは今までもトゲピーのこと護衛してたよな」

「はい。そうです。大体：トゲピーさんの失踪が三回目を過ぎた辺りからトゲピーさんの護衛をするようにと上から何故か言われまして、それからの護衛ですね」

「チルタリスの分かる範囲でトゲピーには何匹の護衛が付いてるんだ？」

「昔、そういう事を訊いてから襲撃してくるといった事件がありましたのでそれは言えませんが……トゲピーさんがどこかへ行こうとするのを止めるのは三匹が交代しながらでギリギリ止められる。とだけ言っておきます」

それを聞いたダイケンキはチルタリスの背中の上ですやすやと寝ているトゲピーを見る。

「トゲピー…：凄いな」

「…：はい。連日追いかけてっごです」

「…：大変だな」

「……」

気落ちするチルタリスを慰めるダイケンキ。

「マグマラシ？」

「……」

「マグマラシ？どうかしたか？」

「……」

「マグマラシ！！」

「え？あ、何？」

「さっきから呼んでるのに反応が無かったぞ？どうしたんだ？」

「ご、ごめん。考え事してて……」

マグマラシはアクアタウンを出てからというもの、口数が少なくなり、眼の輝きが薄くなってきた。

【スカイタウン】

今はポケモンセンターから森に向かっている最中。

「んで？レントラーの毛を白くした……もとい！白レントラーにしてくれた奴はどこだ！」

「いや、アリゲイツ、僕に向かって言っても分からないよ？」

「ならその白いの！」

「白いの言うなー！」

「何処にいるか分かるか？元・黒いの！」

「元・黒いのってなんだ！確かにともともと黒色で今は白色になっているけど！それ以前に！俺が居場所知ってたらもう向かってるだろ！」

「確力二」

アリゲイツはカタコトに言いながらハヤシガメの口の所に手を伸ばした後、何かをレントラーに見せる。

「何でそこでクラブの写真が出て来るんだ！そんなの何処に持ってたんだ！」

「ん〜ここらへん？」

「僕が口の中に入れてたって感じで僕の口を指さないでよ、ハヤシガメの口を指さすアリゲイツ。」

「食ってたる？」

「食べてないって！なんでさも食べていたかのように言つの！？」

「え…た、食べてないのか！？」

驚愕といった感じで言うアリゲイツ。

「だから何でー！？僕が食べてるのが当たり前なの！？」

「食べ〜」食べてない！」「分かった！食べてない！食べてないから！俺を潰そうとしないで！！白虎助けて！」

「白虎言うな！」

アリゲイツはハヤシガメに前両足で踏み潰されて地に伏せていた。そしてレントラーからも同じ様に踏まれている。

「まじで止めて！ちよっ！強くないで！止め……ぐふっ」

アリゲイツは たおれた！

ハヤシガメに 3の けいけんちが はいった！

ハヤシガメは レベルが あがった！

アリゲイツへの こうげきが 1あがった。

レントラーに 3の けいけんちが はいった！

レントラーは レベルが あがった！

アリゲイツへの こうげきが 1あがった。

ハヤシガメと レントラーは アリゲイツを ほっつて もりへ
はいった。

「あー潰れるかと思った…って待てよ！」

アリゲイツは たちあがった！

アリゲイツたちは もりに はいっていった。

第七十三話：マリルリと後輩（前書き）

かなり遅くなつてしまいましたが、投稿です。
遅れてごめんなさい。

今回はかなり短くなつてしまいました。

早く就職が決まらないと書こうにも書けない。

まあ、あと一週間とちよつと以内に試験あるんですけどね。多分。

そして声を大にして言いたい。

就職試験が今月にあつたとしてもそんな事知るか！と。

言いたいだけであつてそんなことしてたら就職できなさそうで怖い。

作者の事は放つておいて、物語に行きましようか。

それでは…

『びっぞー！』

第七十三話：マリルリと後輩

【マリルリの過去】

ハピナスに追い出されたマリルリ。

マリルリは自分のナースとしてのデータが消されているのを見て、打ちひしがれ、実家のあるアクアタウンに帰ってきていた。

看護（行動介助・薬剤投与・リハビリ・入院した子供の世話）の道を選択したマリルリにはもともと力いっぱい動かないと動けないような病弱さだった。そしてその頃、元気に笑って過ごすという目標があった。

時が経ち、元気になっていくに連れてそれは元気に笑って欲しいと変わり、いつしか、元気になって笑っていて欲しいという夢となった。

だからマリルリはポケモン看護学校に行ったのだ。

看護学校は多くの種類のポケモンに対応するため、膨大な知識を持たなければならなかった。

それ故、卒業する時にはその知識や技術にA、B、C、Dの四つのランクを付け、ナースとしての力量を区別した。

マリルリは、看護を選んだ者の中でDランクの落ちこぼれのナースであった。

意欲は誰よりも高く、知識はそこそこ、技術は誰よりも低いからだ。というよりも、技術は一切身につけていない。

卒業した時の成績は過去最低、包帯すらうまく巻けないマリルリが卒業できた事は家族すらも眼を疑った。マリルリを“賄賂”や“コネ”を使った卑怯者だと思ってしまうようになるほどに。

それほどまでに駄目なマリルリが卒業できた理由。

それは在学中の二年目に命をかけて守り、救い、治療（？）したポケモン達が居たからだ。

そのときにマリルリは頭に怪我をしてしまい、“記憶喪失”になっ

た。それ以外には何の支障も無かったため、そのまま看護学校で生活を続けた。

学校はポケモン達を命をかけて守った事と、そのときの治療（？）が適切に近かったため、高評価しAを与えた。

学校は知識に欠落が生じている事を知っていた。が、マリルリが守ったポケモン達の中には校長や当時の町長の子供もいた為に彼等は暴走した感謝の気持ちでマリルリのことを卒業させた。

そう。マリルリは自分の知らない所で起こった暴走によって卒業させられた。

付け加えるならばマリルリは看護科ではなく心療にだけ適正があったので、学校は子供の世話などに使えると思い、それでまあいいだろうと判断した部分もある。

【マリルリ・カメール】

マリルリは打ちひしがれて家に帰った。隣には清流が湧き出している1LDKのアパートの一階。スカイタウンの中では日当たりが少し悪い所だ。いつもの如く鍵の掛かっている家の扉を開けて中に入る。というよりも、鍵をかけても鍵を変えても勝手に開いているという物件なのだが。なぜかは不明だ。ガチャ、とドアを引き開けるとおかえりなさいと誰も居るはずのない家から聞こえた。マリルリはそれに気付かず、奥へ行く。そこにいたのはかつて自分が救ったらしいポケモン。カメール。（6と8話登場）あの事故からよく会いに来て今では親友と呼べるくらい仲良くなっている。

そこで始めてマリルリは驚く。

「ねあっ！るわのぼっ！い、一体いつからいますです！？？というよ
り、何で居ますです！？」

「今日、看護学校の最終試験の前に行く実地体験初日なんです。このポケモンセンターがいいか聞かれたので憧れの先輩の居ることに決めました！驚かしたかったので何も連絡せずに来ちゃいました」（カメールはマリルリに色々と教えてもらっていたおかげで看護学校の課程の殆どが意味を成さないものになっていたので飛び級し、最終学年に在籍している。ただし、技術の方は包帯や子供の世話などの日常でも学べる事以外のことが出来なかったたのでその技術獲得のために毎日夜遅くまで頑張って勉強するという条件付だが）

マリルリはそんな事もありましたねと自分の過去を振り返った。それも一瞬の事。そして憧れの先輩といわれた事は嬉しかったが、辞めさせられた事がさらに重くのしかかって来て表情が暗くなる。

「あ、あの…？先輩？やっぱりお邪魔でしたでしょうか」
表情の暗くなったマリルリをみてカメールは邪魔だったと思い、表情が暗くなった。

「違いますです。カメールが来てくれたことはとても嬉しいと思っ
てますですよ？」

マリルリはいくらか明るく言うが、カメールは邪魔してしまい、先輩が嘘をついているとさらに思ってしまう。

「ええ…と、先輩。今日は用事があるので…失礼します」

カメールがどう思っているか気付いたマリルリは隣を通って出て行くこうとするカメールの手を咄嗟に掴む。

「あ、ちょ、ちょっと待ちますです！カメールは邪魔ではないです
！」

「いえ。お邪魔しては悪いので…」

さらに帰ろうとするカメールを引き止める。

「邪魔ではないです！邪魔なんかじゃ…ない…です」

「先輩…？」

だんだん口調がつまり、小さくなっていくマリルリ。

「一緒に…居ますです……」

そう言っつて俯くマリルリの手は震え、カメールの手を掴む力も抜け

ていた。

「…御願いますですから…居ますです…」

そう言うマリルリを見たカメールは出て行くのを止め、何も聞くことなく落ち着くまでずっとマリルリの手を握り、開いた方の手はマリルリの背に回してマリルリを抱きしめていた。

第七十三話：マリルリと後輩（後書き）

余談だが、るわのぼっ！という驚き方は作者がした事のある驚き方である。

ある日、自転車に乗っていたときに三センチ以上の大きさのよくわからない黒光りする虫が死角から頬にぶつかってきた。

そのときに驚いて言ってしまった黒歴史の一つだったりする。

・・・Gじゃないよ？

違う時に言ったのだが、のわらぼっ！というのもあったりする。

大分更新遅くなりましたが、これからも楽しんでいただけると幸いです。

第七十四話：マリルリとカメール（前書き）

日曜に投稿するといっていましたでしたが今のようない日になったのには…。

…山よりも深く、海よりも高い理由がありました…。

はい。ぶっちゃけると

“執筆して満足したら投稿を忘れていた”

何を言っているのかは分からないと思いますが、

執筆してないとか投稿出来なかったとかそんなでかい理由じゃありません。

もっとアホらしいものの片鱗です。

…許してくださるよね？

第七十四話：マリルリとカメール

マリルリはカメールに抱きつき、声を小さくして泣いていた。

カメールはマリルリが落ち着いてきたと思える頃、マリルリに何故泣いているのか聞くことにした。

「先輩、一体どうしたんですか？」

「…きやめーるちゃん…私、センター辞めさせられちゃいました…いいえ、辞めたんです」

カメールはセンターを辞めさせられた…もとい、辞めたことをマリルリから聞いて頭が真っ白になった。

「私にはやっぱり看護を続けるなんて無理…だったのです。看護の知識に欠落があつて、今まで習ってきたことを復習しようとする頭が痛くなつて勉強どころではなくなりました。皆さんはその事を隠していますですが、在学中のあの事故のあと、勉強をしようとする頭が痛くなつて…そのときにしりました。私は知識を失っているという事に。もちろん、他の知識も無事かどうか調べました。…思い出せないのはその知識だけでなく、包帯の巻き方や手当での仕方、行動介助の仕方、薬剤投与の仕方…私が習ってきた事の殆どが思い出せなくなっています」

カメールはマリルリの話を驚きながら聞いていた。カメールには知識・記憶喪失だということ知らなかったためである。

「知識の方はまだ頭痛を我慢すれば勉強しなおすことが出来ました。ですが、包帯の巻き方や手当での仕方、行動介助の仕方、薬剤投与の仕方などの技術の方は何度やっても頭の中に霧があるような感じで自分が今何をして、次に何をしなければならぬのか掠れて分からなくなります。そうなったら慌ててしまつて、次にしなければならぬことを考えますが同じ事を繰り返したり、技を放つてしまつたりとさつきまで自分かやっていた事と全く関係のないことも次にならなければならぬと思つてしまいます。そ

して私はそれをして患者の方に迷惑をかけたたり、傷を悪化させたりと大変なことをしてしまいます…」

カメールはマリルリが知識・記憶喪失だということ以上に驚愕した。看護ポケとしてそれはあまりにも致命的な事だったからだ。

マリルリの独白は続く。

「私はハピナスセンター長に知識・記憶喪失がある事を言おうとして、でもその事を言うと言護ポケを辞めることになるからそれが嫌で隠そうとして、勉強が苦手だと嘘をついて、自分の不注意の所為だと言って、生き返る奇跡に頼っているように見せて、努力をしていなくて怠けて他のポケモンの命に接しているように見せかけて…」

…」
マリルリはカメールのほうを見ずに耳を抱えて床に座り込んで話を続ける。

「他の患者の方達に被害が行っている事を知りながらそれでも自分の夢を、看護ポケである事を諦めたくなくて…誤魔化して、嘘をついて、勘違いさせて、私の所為で被害にあっている患者の方達を見て見ぬふりをし続けて…そんな事をしてまで看護ポケであり続けたかったのです。ですが、そんな事をしていては夢を自分で壊しているのと同じだと辞めてから気付きました」

カメールは憧れだった先輩がそんな事をしてきたという事が信じられず、ただ床を見つめ、愕然としている。

「私はこうなつて初めて自分がどれだけ馬鹿で愚かな事をし続けてきたかに気付きます。こんなだから、私は夢を壊していることに気付けません。…やはり私は記憶喪失になった時に看護ポケを諦めればよかったのです。普通なら許されないことを無理を通して、結局は看護ポケを辞めるしかありません。それなのにここまで看護ポケでいたのは私のわがままです。諦めるしかないのにそれを否定して目をそむけ続けました…」

マリルリはそう言うと、部屋の隅の陰の場所に行き、まるで石像に

でもなつたかのように影を薄くしていた。
カメールは尊敬する先輩がしてきたこと、記憶喪失の後にどんな思いをしてきたかを聞いた。

尊敬してきた先輩がそんな事をしてきたと聞いた時はショックで頭が真っ白になつたが、先輩の話聞いているうちに本当に看護が好きなのだと思つた。ただ、やり方だけはどうにも納得できなかった。なので一発マリルリの頬を叩いた。

「マリルリ先輩、先輩が看護が好きなのは分かりました。そして記憶喪失で看護が出来ないことも知りました。そんな事をしてきた事も聞きました。正直言うと、今まで先輩に抱いていた憧れも尊敬も希望も全て壊されました…。私が憧れたのはあの時、私達を治療してくれた先輩の姿でした。この人のようにになりたい…。ですが先輩には失望しました！いつか語つてくれましたよね！先輩の夢は患者に元気になつて笑つていてもらう事だつて！何でこんなことしてたんですか！何で話してくれなかつたんですか！何で、何で頼つてくれなかつたんですか！そんなにも私は頼りなかつたんですか！私に話すのが怖かつたのですか！私に…私は先輩にとつて悩みを話す価値もないつて事ですか！尊敬できる先輩でなくても良かった！憧れない先輩でも頼りない先輩でも良かった！技術も知識もあまいな先輩のままでも良かった！だけど、悩みも相談してくれずに独りで抱え込んで勝手に職を辞めて、勝手に泣きついて、勝手に隠してきたことをそこから逃げたいがために言つて！先輩は自分勝手過ぎです！何で立ち向かおうとしなかつたんですか。記憶に向き合つて克服しようとしなかつたんですか。相談する事も話してくれる事も無くて、私は信頼できなかつたんですか。知つていたら先輩の助けになることも出来た！先輩の力になることが出来た！けれどもう…先輩には失望しました。…私は失望するために看護の道を進んできた訳ではありません。そして、先輩を憎む為に進んできたわけでもありません。だから、私に希望を持たせてください。私に先輩を憎ま

せないでください」

「……」

マリルリはカメールの目から涙が溢れているのを見ながら、呆然と
していた。

…カメール、ありがとうございます。自分の為なら頑張れませんでした
が、貴女あなたの為なら頑張れそうです。あの時は私が貴女あなたを助けま
したが今度は私が救われました。次は私が貴女あなたを助ける番ですから、
だから、記憶を取り戻していく時は助けてくださいね？

マリルリは自分が狂っていた事を認識し、自分の思っていた事をた
だ吐き出した、順序も何も無い言葉を言っていたと自嘲した。
そして、カメールの思いをただ叫んだだけのむちゃくちゃな言葉に
助けられた。

マリルリは一方的な暴言を吐いた自責の念に駆られながらもカメ
ールに感謝した。

マリルリは涙を流すことを止め、涙で顔がぐちゃぐちゃなカメ
ールに向きあった。

「……カメールちゃ…いえ、カメール」

「…何ですか先輩」

「ありがとうございます」

「……え？」

カメールはその言葉に拍子抜けしたかのように動きが止まる。

「カメールのあの思いをただ吐き出しただけの言葉に私は助けられ
ました。もうあんなことはしません。ハピナスナス長に
も叱られました。はつきり言うあまり実感が無くて、でも
辞めたという事実だけは分かっています…。今、カメールに思い
を思いつきりぶつけられて、初めてハピナスナス長に言葉も実感
が出てきました。カメールの為なら記憶喪失も向き合う覚悟が
もてます。記憶喪失を克服する為にカメールが手伝ってくれ
ますから」

「…酷いです先輩。そして自分勝手過ぎます」

「カメール達を助けたのも私の我侫わがままで、今回のことも私の我侫わがままですよ」

「そうですね。先輩、私は先輩を憎まないで済みますか？先輩が私の憧れでもいいですか？」

「もちろんです。記憶を取り戻すのは手伝ってくださいますか？」

「先輩は我侫わがままです。私はこれから先輩の我侫わがままに振り回されますからお菓子でも奢って下さいよ？」

カメールも憧れのマリルリに裏切られたのは精神的にかなり苦しかったようで、安心した途端、床に座りこむ。

そんなカメールの隣にマリルリは座る。

「……ありがとうございます」

「…どういたしまして。そしてありがとうございます先輩」

「……………」

「……………」

それから二匹は何も言わず、ただ傍にいた。

「……安心したら眠くなりました」

「……………そうですね。眠いです」

それだけ言うとマリルリとカメールはすぐに眠りに落ちた。

そして少し経つと夜が明け、窓から光が差し込んできて、顔には涙の筋をつけて僅かに微笑を浮かべたマリルリと目元に涙を浮かべたまま安心したように眠るカメールを照らしだしていた。

第七十四話：マリルリとカメール（後書き）

マグマラシ「久々の投稿かと思ったら出番ないし！」

アリゲイツ「そうそう！作者！さつさと次を投稿し……」

すみません。色々忙しくて執筆の時間が取れなかったもので。

アリゲイツ「作者の笑顔がキモチワルイ！ちょっとマグマラシ、癒させてくれ」

マグマラシ「え？あ、ああ。どうぞ」

アリゲイツはマグマラシに抱きついてほわわんとしている。

ちよつとー！就職試験とか自動車教習とか資格とか文化祭とか近々ある期末テストとかで忙しくて執筆できないからって笑顔が気持ち悪いとか言うのは無いでしょうが！

あ、皆さん言っておきます。

またしばらく執筆できなくなります。

大体：一月になるまで？です。

本当にごめんなさい。

第七十五話：白レントラーの原因とアリゲイツの思考（前書き）

久々の投稿です！

：久々すぎて創作意欲わかねーっス。
熱意が消えているのがわかるっスよ。
ああ、ほんと、どうしようっスかね？

第七十五話：白レントラーの原因とアリゲイツの思考

世界を巡り、様々なものを見てきた。そしてこれからも見ていく。その旅の途中で立ち寄ったのが此処、スカイタウン。

私がそこで出会ったのはあの白の上に赤や青の模様が付いていて華やかさがある。それでいながら模様と模様の間は高度に計算されているのかと思わせるほどに見事な距離を開けていて華やかさを殺さず、しかし派手すぎないという素晴らしさ。

もちろん、模様自体も一定の決まりごと無く、ただそこにあるだけのように見えてその実、統一しないことで自然な感じを出している。

そして何よりも素晴らしいのがあの白。

ざらざらするわけでもなく、さらさらする訳でもない、そしてつるつるもしないというのにあの白はつるつるとさらさらがまじったようなイメージを受ける。あの白はその質感だけをとっても素晴らしいが、その濃淡、ただの白ではなく、白に何色が混じっているのだが、それが白の冷たい無機質なイメージを起こさせない。

青や赤の模様にしても同様だ。

もちろん、その三つが合ってこそその統一感があるし、三つの芸術とも言うべきこの何とも言えない様な素晴らしさといったらもう言い表しようの無い気持ちになる。

三つがあってこそこれに価値が出来るし、そこに魅了されるものも出てくるというものだ。

私とその模様の中でも一番惹かれているのが青や赤の模様の輪郭だ。あの輪郭は筆を余計な力をいれずスツと動かして描いたようなドールほっふつの筆奥義を髣髴ほっふつとさせるような滑らかさがあり、あの粘りがあるってそれでいてさらっと描けて数日かけて乾かすことよって出るあの伝説の筆色を思い起こさせるあの質感、最高の質を持った筆先でそつと撫でたかのような均一でいてムラの無い線。ムラが無い筈

なのに色合いが少しづつ違っているように錯覚させるあのグラデー
ションとでも言えばいいのか…。
ほかにもまだまだある。

あの模様自体も躍動感を持ってそこに存在しているが、その躍動感
は実際に動くことでさらに強調されて実際に動いているのに模様が
動いているように見えるのだ。

そして模様自体の形も素晴らしいと言えるだろう。

三角形と認識できるあの形。それが角ばっていないのでそれが三角
形に見えるのは我々の認識だろうが、あの模様のような三角形は自
然界にはたくさんある。あの模様が角ばっていたら自然な感じは出
せず、無機質な物になっていただろうが、角ばっていないので自然
に思えるのだ。もちろん、角ばっていようとそこに芸術があること
は間違いないのだが、それは私の求めている所のものではない。

…そうそう。あの模様は進化後も同じ様に存在するようだが、私か
ら見てみればどこが同じだといわんばかりに違うではないか！あの
模様だってそうだ。あの素晴らしい距離は変わり、広くなったりし
てその比率を崩しているし、模様自体の質感だって変わっている。
殻にある模様が殻ではなくなるのだ。質感が変わって当然だろう。
模様だけでなく白の色合いも変わっている。

私に見れば同じなのはあの模様にある滑らかさと輪郭、三つが
合わさることで出来る自然な感じだけだ。

全く、何処が同じなのだ！こんなにも違うというのにこれを一緒に
して括る者達の感性が分からん。

…ふう。少しあの模様の素晴らしさから離れてしまったな。あの素
晴らしさについてもっと詳しく語っていいこうではないか。

以降、褒め続け。（半日）

そして私がああ模様について話し終えるといつの間にやら朝になっていた。ふむ。一体いつの間に……。時が経つのは早いものだな。

よし。あの模様を忘れないうちに再現して私の芸術を世に知らしめようではないか！

ふむ。描ける物が無いな。その岩にでも描くか。さて、早速。

違う。この質感ではないな。この色よりももう少し灰を混ぜるべきか。いや、灰だけでなくベージュもか。そして粘りをもう少し強くして……。近くはなったが水の量が調整が必要だな。減らしてみても……。

ふむ。そっくりになくなってきたのだがどこか違うな。ふむ。試しに水ではなく油や他の液体にしてみようか。

腹が減ったな。腹ごしらえをしてから描くか。でないの良い色がないからな。……。ん？周りがああの模様だらけだな。ふむ。夢中になっていて気付かなかったようだ。私だと知られると大変なことになりそうだから逃げようか。……。近くには誰もいないようだな。ならばまあいい。そんな事よりも腹ごしらえだ。太陽も頭上を通り過ぎていようだしな。

……。川に沿って町に行くか。

っ！誰か黒い影が飛び出してきたからつい反射的に色ペンキを浴びせてしまった。っと！それよりも……。逃げなければ。

ふう。逃げれたようだ。と思ったらまたか！さっきよりも影が小さい気がするけれど逃げさせてもらう！七連、色砲！……。色をただ七連続で飛ばすだけなんだけれども。逃げさせてもらう。フレアドライブ？炎タイプだったのか？まあ良い。それよりも逃げるだけだ。

【アリゲイツ】

マグマラシの安全は確認できたし、よかった。ほんとよかった。マグマラシがまだ行方不明のままだったら…考えたくも無いな。マグマラシの事を守れなくなるなんて…。

けど…そんな事が実際にあったら…俺は…………。

「アリゲイツ！」

「ぐげっ！」

いてえ。何なんだよ。

ん？七回も呼んでたのか？

すまん。聞く耳持ってなかった。

つて「ぎゃー！」

しびれびるれびる…すまん悪かった！

前言撤回！聞く耳持ってたけど聞いてなかった！

何も言っていないのに電撃を撃つんじゃないやねえ！

白虎！やめろつて！シロ！止めなさい！

ギャー！ふざけてたのは謝るからそろそろ電撃止めてくれ！

マジで死ぬ！アリゲイツの雷撃焼きが出来上がるから！料理になっ

ちまうから！

……………

シぬかと思った。

それはそうと、白虎！。犯人に遇った所に行ったけど会わなかったんだよな？

なら飯でも食べてからもう一度探してみようぜ？

出来ればあの模様がたくさん描いてあったところの近くで！

何故って言われてもな！。

面白そうだったからに決まっ冷てえー！氷の牙で頭を噛むな！地味

にガジガジガジガジと何度も！

ハヤシガメ！そこでボソツと言っても聞こえたぞ！

頭がとつても冷えそうだねー。って！どういう意味だ！

そしてガバイト！それに付け足すような感じで頭を冷やしてもどうにもならなんぞ。アリゲイツはそのテンションが普通だ。それに馬鹿は風をひかないと言っしな。

とか言ってるのもしっかり聞こえたからな！覚えてろ！

そういや…ガバイトも良く話すようになったよなー。最初の頃に比べたらだけどな。

最初の頃なんて情報のために言葉を発しているように思えたけど、今は少しならこうやってふざけてるしな。

何で俺らについてきたんだろ？ただ復讐の為だけなら日照り石…だっけ？を奪って行くなりすればよかったのに。何故だ？そう思うと…マジで何なんだろうな。ガバイトの復讐って。

それよりも飯ー！レントラー、ハヤシガメ、ガバイト！さっさと行くぞ！

遅れたら飯を食べた後の搜索の時は荷物持ちな！

「ちよっ！ちよっ！それって僕をターゲットにしてるよね！？僕が皆より足が遅いの分かってて言ってるよねアリゲイツ！」

大丈夫だ！ハヤシガメの事は信じてる！……………少し。

「大丈夫じゃない！信じてないでしょ！それに少して！ちよっ！アリゲイツ待ってよ！」

ん。んじゃちよっただけ。零、一と。一秒経ったのでじゃーな！

「一秒って！確かにちよっ！とって言ったけど、言葉通りに受け取らなくてもいいよね！？アリゲイツー！」

第七十五話：白レントラーの原因とアリゲイツの思考（後書き）

マグマラシ「久々の投稿だと思ったたら前書きでとんでもないこと書いてるし！やる気起こせよ！？」

アリゲイツ「え、俺等は此処で消されるのか！？」

レントラー「ちょッ！作者！？消すなよ！まだ書き続けてくれよ！？」

ハヤシガメ「此処で物語は終わるけれど、僕等の冒険は終わらない！とか言わなければならなくなるの！？そんなの嫌だ！…でも言うてみたい気も…」

レントラー「ハヤシガメッ！それをいうこと事態がフラグかもしれないぞ！」

ハヤシガメ「そうなのっ！？」

マグマラシ「フラグって？」

アリゲイツ「旗。目印や基点を示す為に使われる…って昔にオデイスが言ってたような？」

レントラー「フラグ違い！と言うかオデイスっ誰？」

アリゲイツ「俺の昔の友達だったナゾノクサ。マグマラシと出合った頃に絶交した」

マグマラシ「え……俺の…所為…？」

アリゲイツ「マグマラシの所為じゃないって。俺とオデイスの考え方が反対だっただけ」

ハヤシガメ「何でそこでマグマラシの所為って言葉が出てくるの？」

アリゲイツ「企業秘密です」

レントラー「うわっ！きしよくわる気色悪っ！」

マグマラシ「ちょっとそこには触れないで欲しいかな。そのころの事は俺、何も覚えてなくて」

ハヤシガメ「記憶喪失か何か？」

マグマラシ「ちょっと違うかな？アリゲイツと会う以前の事は何も

覚えてないって言った方が正しいかな」

ハイハイ。マグマラシの過去は気になるだろうけれどそこまでしてね。いつか本編で出すつもりなんだから。

それはそうとして、読者の皆様、作者の皆様、明けましておめでと
うございませう。

昨年に引き続き、今年もよろしく御願ひします。

それから、お知らせがあります。

マグマラシ達のクリスマスや正月の様子を書く予定はまだありません。御了承ください。

それでは、これにて。　　ダッ！

アリゲイツ「作者が何故か逃げたし！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5716j/>

数奇な運命のポケモン達

2012年1月6日00時50分発行